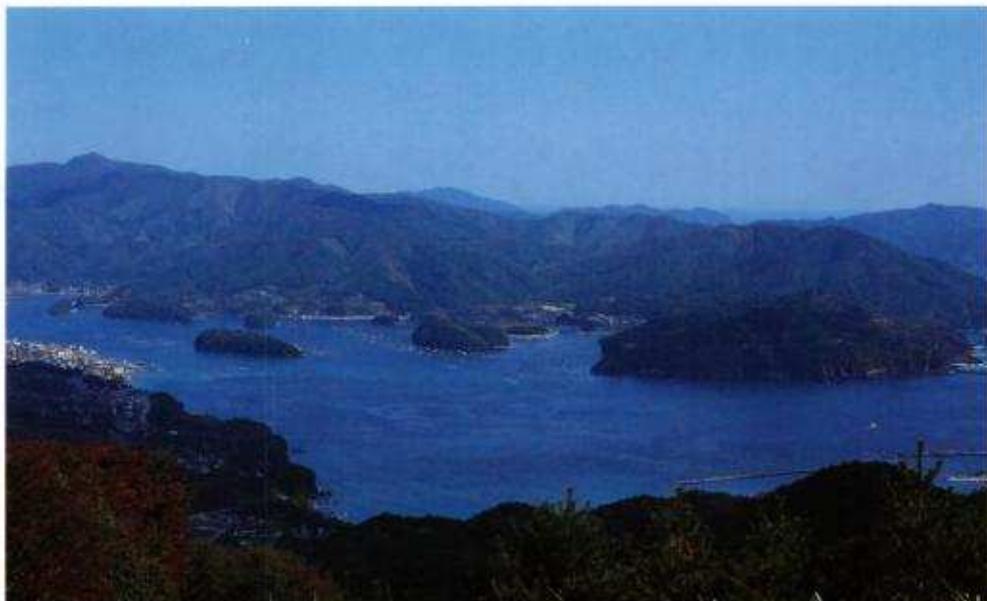


岩手の貝塚



平成 10 年 3 月

岩手県教育委員会

岩手の貝塚

平成10年3月

岩手県教育委員会

序 文

当教育委員会では、私達の祖先より受け継いできた貴重な歴史遺産である埋蔵文化財を保護するため、各種開発事業との調整を日常的に行っております。その過程では、事業者の協力を得ながら、埋蔵文化財を現状のまま保存することを第一義としていますが、やむを得ない場合には記録を保存することで代えております。

ところが、埋蔵文化財包蔵地の中には特殊な性格や意味・内容を持つものがあり、それらは、可能な限り現状で保存すべきであると考えております。したがって、その位置と範囲について十分に関係機関に周知しておく必要があります。

貝塚については、まずはじめにその必要性を認識し、平成7年度より3カ年計画で詳細分布調査を実施してまいりました。県内全体で100箇所を少し越える程度の数であることや、沿岸部の住宅立地と重複して分布することなどから、保護策が後手にまわると消滅の危機に瀕する可能性があります。同時に、貝塚の中に含まれる多くの人骨や動物遺存体は、過去の日常生活を復元するための有効なたがかりとして、きわめて重要な意味を持っております。早い段階で、気仙地区の3貝塚が国史跡として指定されているのは、十分理解されるところです。

本報告書は、3カ年の調査成果をまとめたもので、従来周知されていた貝塚の他に、今回新たに貝塚として認識したもの等を含んでおります。本報告書が活用されることで、文化財の保護に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり、関係各位からご協力ご指導を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げます。

平成10年3月

岩手県教育委員会

教育長 細屋 正勝

例　　言

1 本書は、岩手県教育委員会が平成7年度から9年度にかけて実施した県内貝塚調査事業に係る調査結果の報告である。なお、本事業は国庫補助金の交付を受けて実施したものである。事業額は以下のとおり。

平成7年度	1,365千円
平成8年度	1,220千円
平成9年度	1,910千円

計 4,495千円

2 本事業は、岩手県教育委員会が調査主体となり、県教育委員会が委嘱した貝塚調査員が主として現地調査を行い、関係市町村教育委員会の協力を得ながら実施している。委嘱した調査員は次のとおりである。

全県担当	熊谷 常正 (盛岡大学文学部)
	濱田 宏 (岩手県立博物館、財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
	日下 和寿 (岩手県立博物館、平成8~9年度)
気仙地区担当	佐藤 正彦 (陸前高田市立博物館)
	金野 良一 (大船渡市立博物館、大船渡市教育委員会)
上閉伊地区担当	花石 公夫 (新日鉄釜石)
下閉伊地区担当	高橋 憲太郎 (宮古市教育委員会)
	田鎖 康之 (岩泉町教育委員会)
九戸地区担当	千葉 啓藏 (久慈市教育委員会)
	佐々木 和久 (久慈琥珀博物館)
両磐地区担当	佐々木 繁喜 (宮城県立若柳高等学校)

3 貝塚位置図は国土地理院発行の1/50000地形図を原図として使用した。詳細範囲図は岩手県農政部の所有する奥羽・北上山系開発図を原図として使用し、1/7500で提示している。

4 本調査で対象とした貝塚は、おおむね古代までであるが、一部中・近世貝層を含んでいる。したがって、中・近世貝層については未周知のものが残されていると考えられる。

5 貝塚詳細範囲図中、埋蔵文化財の分布が認められる範囲についてアミで示し、貝層の範囲について斜線で示している。

6 貝塚の名称等については、基本的に岩手県遺跡基本台帳によっているが、一部変更した場合もある。その場合、本報告書記載の名称等を正しいものとし、岩手県遺跡基本台帳についてはおつて改訂することとする。

7 本事業の報告書編集等は、岩手県教育委員会事務局文化課の佐藤嘉広主任、佐々木務文化財調査員が担当し、佐々木勝主任文化財主査、鈴木徹文化財調査員が補佐した。本文中、第1章 岩手における貝塚研究史及び巻末の文献一覧については、熊谷常正調査員、第2章 各地域の概要及び各貝塚データについては各貝塚調査員の原稿により編集した。調査の全般にわたり、須藤隆氏（東北大学教授）、藤沼邦彦氏（東北歴史資料館）よりご指導いただいた。

なお、調査及び整理については下記の方々のご協力をいただいた。

県内各市町村教育委員会、財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、菅原絹子、浦田 希、平澤祐子、桑野真里、鈴木見誌、小沢達子、江藤 敦、赤沼和彦、柴内章子、岸川亜祐子、沢田 純明、門島知二、安藤稀環子、中村 光、大畠直人、江藤 崇、関 菜穂子、中田静子、和村恭子

8 本事業の記録及び出土品は、岩手県教育委員会事務局文化課が保管している。

目 次

序文	
例言	
第1章 岩手における貝塚研究史	1
第2章 岩手県内所在貝塚の概要	29
全体概要	29
気仙地区の概要	30
上閉伊地区の概要	64
下閉伊地区の概要	74
九戸地区の概要	93
両磐地区の概要	103
第3章 貝塚内容確認調査結果報告	112
陸前高田市鶴沢貝塚	112
陸前高田市太陽台貝塚	123
花泉町高倉貝塚	128
花泉町白浜貝塚	142
花泉町石崎貝塚	148
普代村堀内机遺跡	149
文献一覧	179

図版目次

第1図 岩手県内貝塚分布図	12
第2図 岩手県内貝塚分布図（詳細図1、種市・久慈西部）	13
第3図 岩手県内貝塚分布図（詳細図2、久慈・野田）	14
第4図 岩手県内貝塚分布図（詳細図3、野田・普代・田野畑・岩泉）	15
第5図 岩手県内貝塚分布図（詳細図4、田老・宮古北部）	16
第6図 岩手県内貝塚分布図（詳細図5、宮古）	17
第7図 岩手県内貝塚分布図（詳細図6、山田）	18
第8図 岩手県内貝塚分布図（詳細図7、宮古東部・山田東部・大槌）	19
第9図 岩手県内貝塚分布図（詳細図8、釜石北部）	20
第10図 岩手県内貝塚分布図（詳細図9、釜石南部）	21
第11図 岩手県内貝塚分布図（詳細図10、三陸北部）	22
第12図 岩手県内貝塚分布図（詳細図11、三陸南部・陸前高田中南部）	23
第13図 岩手県内貝塚分布図（詳細図12、大船渡）	24
第14図 岩手県内貝塚分布図（詳細図13、大船渡南部・陸前高田東部・浄法寺・岩手）	25
第15図 岩手県内貝塚分布図（詳細図14、滝沢・胆沢・衣川・花泉東部・藤沢）	26
第16図 岩手県内貝塚分布図（詳細図15、花泉）	27
第17図 陸前高田市鶴沢貝塚発掘区位置図及び層序断面図	114

第18~21図	陸前高田市鶴沢貝塚出土土器（1）～（4）	115~118	
第22~23図	同上	石器（1）～（2）	119~120
第24図	同上	骨角器類	122
第25図	陸前高田市大陽台貝塚平面図		124
第26~27図	同上	出土土器（1）～（2）	125~126
第28図	同上	石器・土製品	127
第29図	花泉町高倉貝塚周辺地形図		128
第30図	同上	平面図及び層序断面図（1）	129
第31図	同上	（2）	130
第32~35図	同上	出土土器（1）～（4）	131・133~135
第36図	同上	石器（1）	137
第37図	同上	石器（2）土製品	138
第38図	同上	骨角器類	141
第39図	花泉町白浜貝塚平面図及び層序断面図		142
第40~41図	同上	出土土器（1）～（2）	143~144
第42図	同上	石器	145
第43図	花泉町石崎貝塚平面図及び出土土器		148
第44図	普代村堀内机遺跡周辺地形図		149
第45図	同上	発掘区位置図及び地形測量図	150
第46図	同上	遺構検出状況及び層序断面図（1）	151
第47図	同上	遺構検出状況及び層序（2）	153
第48~49図	同上	出土土器（1）～（2）	154・156
第50~51図	同上	石器（1）～（2）	157・158

表目次

第1表	岩手県内貝塚一覧表	28
第2表	陸前高田市鶴沢貝塚出土土器集計表	120
第3表	陸前高田市鶴沢貝塚出土石器集計表	121
第4表	陸前高田市鶴沢貝塚出土動物遺存体一覧	121~122
第5表	花泉町高倉貝塚出土土器集計表	136
第6表	花泉町高倉貝塚出土石器集計表	139
第7表	花泉町高倉貝塚出土動物遺存体一覧	140~141
第8表	花泉町白浜貝塚出土土器集計表	146
第9表	花泉町白浜貝塚出土石器集計表	147
第10表	花泉町白浜貝塚出土動物遺存体一覧	147
第11表	普代村堀内机遺跡出土土器集計表	155
第12表	普代村堀内机遺跡出土石器集計表	158
写真図版		159

第1章 岩手における貝塚研究史

江戸時代、現在の岩手県域は盛岡藩と仙台藩それにそれぞれの支藩である八戸藩、一関藩の統治下にあった。盛岡藩では、大巻秀詮（1740～1801）による『邦内郷村誌』（1800頃）、また仙台領内には安永年間に各村ないし各知行所から提出された『風土記書出』など詳細な地誌が作成された。このなかには遺跡、遺物の発見記録は散見できるが、貝塚に関する記載はほとんどない。ただし、安永4（1775）年7月の日付を持つ『風土記書出』のひとつ、『磐井郡流郷鰐島村風土記御用書出』（現：西磐井郡花泉町油島）に次のような記載がある。

一、旧跡 壱ツ

海鳥

一、古寺跡 右ハ海比山平等寺と申寺跡ニ御座候由申伝候処 年号相知不申候事

これは淡水系貝塚として著名な花泉町貝鳥貝塚の所在する丘陵に平等寺なる寺院があったとの記録である。貝鳥貝塚はこれまでの発掘調査で90体以上もの人骨が発見されていることを考えると、この記録を作成する以前にも幾体かの人骨が出土し、墓地と当時の人々が推測し、そこから寺院と結びつけて、このような伝承が成立した可能性がある。

貝塚に関する記録は、続く明治期前半も少ない。明治13（1880）年に岩手県が編纂した『岩手県管轄地誌』でも遺跡への言及はほとんど見られない。

明治19（1886）年夏、東京人類学会の初代会長をつとめた元老院議官・神田孝平が奥羽地方を巡回し、各地の遺物を見学している。しかし、岩手県内では二戸の個人蔵の資料と盛岡の「博物館」（おそらく岩手県勧業場内の陳列館と思われる）で二、三の土器を見るだけで、神田自身が「古物家も当所にはない」と記している（文1）。

明治20年代には、岩手県中学校の多田綱宏が人類学会会員となっているが具体的な活動はわからない。遅れて水沢在住の青木楨二郎（1860～1931）、明治26（1893）年には、遠野出身の伊能嘉矩（1867～1925）が入会した。教員であった青木は県下の考古資料の収集を行った人物であるが、明治期に貝塚調査を実施した形跡はうかがえない。

明治26（1893）年夏、旧制第二高等学校生徒で人類学会会員でもあった嶋村孝三郎が盛岡を訪れ、「知己ニ問ヒ旧記ヲ探」って遺跡の所在を調査する。嶋村が直接踏査するのは盛岡の山王遺跡だけだが、「未知の友」へ書簡を出し、情報提供を依頼している。その結果を「岩手県下ノ古墳及ビ石器時代ノ遺跡」と題し人類学雑誌上に報告した（文2）。これは本県遺跡に関わる初の地名表で、海辺にある遺跡として三箇所が記載されている。そのうちひとつは北九戸郡軽米村（現：軽米町）の狄森塚とあり、貝塚ではない。残る二つは気仙郡唐丹村（現：釜石市唐丹町）と同郡猪川村（現：大船渡市猪川町）とする。両者とも石器の出土は記されるものの貝塚との注記はない。前者はおそらく本郷遺跡、後者は長谷堂貝塚に該当すると思われる。

岩手県の貝塚を本格的に紹介するのは、鳥羽源蔵（1872～1946）である。鳥羽は、気仙郡小友村（現：陸前高田市小友町）の出身、明治33（1900）年頃から地元の小学校教員のかたわら在京の研究者に師事し植物・岩石・貝類など博物学を学んだ。明治41（1908）年台湾にわたり総督府農事試験場などに勤務した。明治44（1911）年地元に戻り、大正11（1922）年からは岩手師範学校教諭と

して博物学等を講じた。

鳥羽は、明治29（1896）年人類学雑誌上に「陸前国氣仙郡ノ石器時代遺跡」と題した小論を執筆し、生家からほど近い小友村の沢辺・門前の二遺跡を紹介する（文3）。このうち門前に関して次のように述べる。

「掘起セシ土中ヲ見シニ中ニ鉈・牡蠣・淡菜・ツブ等ノ貝殻続々トシテ出テ骨片亦出タリ、農夫ノ言ニ下層ハ一面貝殻アリト・・・」

後の鳥羽の活動を彷彿させる貝層への注目である。

これにやや遅れ、明治30（1897）年近藤金次郎によって県内67箇所の遺跡地名表が作成された（文4）。これには西磐井郡花泉町高倉、同中神ドジャ森、陸前高田市門前、同泊浜（中沢浜）などが含まれているものの、貝塚という表記はなされてない。当時編集された『日本石器時代人民遺物発見地名表（第Ⅰ版）』（1897）、『同（第Ⅱ版）』（1898）にも、貝塚とするのは門前貝塚のみであった（文5、7）。

追って明治32（1899）年、当時東京帝国大学人類学教室嘱託の八木獎三郎が県内の遺跡を踏査する（文8）。この踏査には、青木・鳥羽らが協力している。八木の報告には岩手県下38箇所の遺跡が記載され、このうち門前と獺沢（陸前高田市小友町）に貝塚との表記がなされている。八木は鳥羽の案内で、門前・獺沢そして長谷堂の小発掘を試み、特に獺沢から燕形銛頭、シカ尺骨の刺突具など良好な骨角器を得ている。また、日本で初めて貝塚からウサギの骨の出土も記載する（文9）。八木の影響を受け、鳥羽はその後も調査を進め、資料の蓄積を図っていった（文10）。

この鳥羽や八木の紹介により気仙地方の貝塚が研究者から注目されるようになる。まず明治39（1906）年には、太古遺跡調査会と称して貝塚発掘採集家として著名だった高島多米治が小友村地内の貝塚（おそらく門前貝塚か獺沢貝塚）を発掘している。ついで翌年・翌々年には銅鉈坊陳列館の館員・野中完一が獺沢と中沢浜貝塚（陸前高田市広田町）を発掘している。銅鉈坊陳列館とは東京人類学会会員で考古資料のコレクターであった公爵二條基弘が創設した施設で、その収集活動の一環として実施したものであった。

野中は、明治40（1907）年に中沢浜で6体、獺沢で1体を、明治41（1908）年には中沢浜で17体の人骨を発見した。中沢浜の調査では小児甕棺墓を確認しているが、このような埋葬状態の人骨発見は、わが国最初の事例であった（文28）。

当時、貝塚からの人骨発見数は全国でも二十体程度を数えるだけだった。一遺跡から都合23体の出土は、画期的な発見といえよう。これらの調査にも鳥羽が関係したと思われる。

明治43（1910）年刊行の『氣仙郡誌』（文15）には「前住種族（石器時代・古墳時代）」と題した文と気仙郡内石器時代遺跡43箇所、古墳時代9遺跡の「地名表」が掲載されている。しかし、「知名表」に貝塚の名称が付されるのは、門前・細浦・獺沢の三箇所で、たとえば中沢浜などは貝塚との注記がない。また、地域的にも陸前高田市と大船渡湾西岸地域が主で、後年注目される蛸の浦貝塚・大洞貝塚などは漏れている。『氣仙郡誌』刊行時は、鳥羽は台湾総督府勤務時期であり、果たして鳥羽が直接「知名表」を作成したかは不詳である。もし台湾移住前に原稿を執筆したとしても、改めての現地踏査は行っていない可能性が高い。

一方、三陸海岸中部に位置する宮古市周辺では、中嶋吉兵衛（1880～1924）らの活動が始まる。この地域は旧区分では陸中国に相当する。坪井正五郎が明治38（1905）年にまとめた貝塚数の把握（文13）では、陸中国の貝塚は「0」と記載しており、気仙郡以北の貝塚に関する情報はほとんどなかった。

中嶋は宮古の出身で、宮古水産学校、岩手師範学校講習科修了後、宮古周辺で教鞭をとった。鍬ヶ崎町（現：宮古市鍬ヶ崎）の小学校に勤務していた明治36（1902）年、鍬ヶ崎館山の丘陵で鹿角製釣針を採集する。これが、鍬ヶ崎館山貝塚発見の契機であった。中嶋はその後も採集調査を続け、資料を蓄積していく。

中嶋は、その収集資料や図を坪井正五郎らに送付し、指導を受けている。また、江見忠巧（水陰）や佐藤伝蔵・柴田常恵らとも書簡を通じての交流があった。特に当時東京帝国大学農科大学で漁業基礎調査・漁業史の研究を行っていた岸上鎌吉（1867～1929）とは、資料提供や調査への協力を通じて親交をもった。

岸上は明治42（1909）年7月、その研究活動の一環として岩手を訪れ、まず細浦上ノ山貝塚を発掘し、その後宮古へ赴く。そして中嶋らの案内で鍬ヶ崎館山貝塚を調査した。さらに、岸上は翌年7月、翌々年11月にも宮古を訪ね、小発掘を含めた調査を行っている。岸上の名著『Prehistoric Fishing in Japan』（文16）には、この折の発掘資料や、中嶋が寄贈した鍬ヶ崎館山貝塚、大付貝塚出土資料などが多数掲載されている。

中嶋は明治末年（1912頃）『先史遺物帖』と題した鍬ヶ崎館山貝塚出土資料を中心とした図録（文17）を作成する。坪井正五郎・岸上鎌吉・新渡戸稻造や宮古水産学校地学教員の八重櫻七兵衛らが序を寄せたこの図録は、刊行には至らなかったが、岸上の薰陶を受け自然遺物に関して詳細な記述が見られ、魚類23種、海生哺乳類5種、貝類9種の出土を掲げている。また、釣針分類や対応魚種についても言及し、特に開窓式離頭銛頭の記載は注目できる。土器の図も文様展開図や断面を表現するなど、実測図手法を取り入れていることなど興味深い。中嶋は、採集資料の多くを岸上や坪井正五郎を通じ東京帝国大学に寄贈している。その資料は後年、大野雲外によって紹介されている（文27）。

中嶋は他にも日記や原稿類をいくつか残している。そのなかに明治45年頃、宮古市小山田から出土した丸木舟と櫂の略測図と計測値を記したものがある。小山田地区には、現在は工場用地となり消滅しているが、昭和12年頃までは縄文後晩期の大規模な遺跡があり、閉伊川河口部付近の南岸に発達した沖積部という立地を考えると、縄文期の丸木舟の可能性も考えられる（文264）。

明治末期には、内陸部淡水系の貝塚にも注意がはらわれ始めた。明治38（1905）年、当時東京帝国大学人類学教室に勤務していた柴田常恵は福島・山形・宮城をへて岩手に入りいくつかの遺跡を踏査する。その概要報告（文14）には西磐井郡永井村高鞍庄司屋敷（現：西磐井郡花泉町永井高倉貝塚）から出土した角器の図が掲載されている。

この資料を柴田に紹介したのは、県立一関中学の教師・川角寅吉であった。川角は茨城県竜ヶ崎の出身、人類学雑誌などに茨城県立木貝塚・福田貝塚などを紹介していた人物である。川角が大分県から一関に赴任したのは明治37（1904）年6月、その後明治39（1906）年4月に秋田県へ転出するまでの期間にどのような活動を進めていたかは把握していないが、川角の故郷竜ヶ崎や霞ヶ浦周辺によく似た広い平野部に丘陵の広がる岩手県南部・宮城県北部の貝塚や遺跡に興味を持ち活動していたことは疑いない。

大正時代になると気仙地方を主とする貝塚調査は一層活発になる。これは、坪井正五郎の急逝（1912）を契機としたコロボックル説後退とアイヌ説の台頭に加え、人骨標本の増加を受けた形質人類学を基礎とする研究確立が背景としてある。同時にそれは韓国併合など領土拡大政策の影響を受けた混合民族説発言の潮流とも微妙に関わっていた。

前述の野中完一による中沢浜の調査以降、気仙地方の貝塚は埋葬人骨を多数発掘できる遺跡であ

るとの見方が定着していたようである。たとえば大正5（1916）年に東北帝国大学医学部解剖学教室に着任し、その後貝塚調査に多大な業績をあげた長谷部言人（1882～1969）は、末崎（細浦上ノ山貝塚）、鶴沢貝塚、中沢（浜）貝塚そして里浜貝塚（宮城県鳴瀬町）をあげ、「陸前の貝塚には到る處人骨があるやうに思ふ」と述べることなどからも窺えよう（文35）。

まず、先住民族アイヌ説の主唱者であった小金井良精は、大正7（1918）年中沢浜貝塚出土の5体の人骨に関する論文を発表する（文29）。前年には東北帝国大学理学部の松本彦七郎が門前貝塚・鶴沢貝塚・中沢浜貝塚など五遺跡を踏査し、鶴沢貝塚を発掘している。松本の調査の端緒は、鳥羽源蔵が寄贈した鶴沢貝塚のシカ・イノシシ遺存体が現生のものに比べ大形であることに興味をもったからだという。特にシカに関してニホンジカの系譜にあるのか、あるいは「大陸より侵入した眞の赤鹿」との関連はないのかを解決することを調査の目的に掲げていた（文20）。

この折の鶴沢貝塚出土資料を中心に松本は多くの論文を発表する。なかでも「宮戸島里浜及気仙郡鶴沢貝塚の土器附特土器紋様論」は層位的発掘を踏まえ、土器の器形や紋様を進化論的に解釈し、その後の縄文土器型式研究に大きな影響を与えた（文40）。このほか、専門の古生物学分野から犬に関する論文（文24）や、鶴沢貝塚や陸前高田市広田町集貝塚などから出土した人骨に関する論文（文21, 25, 26）も著している。

大正7（1918）年には長谷部が宮城県石巻在住の毛利紹七郎や遠藤源七らと共に宮城県北沿岸から気仙沼を経て気仙郡に入り、小友・広田地区の貝塚（おそらく門前・鶴沢・中沢浜等）を調査している。さらに長谷部は大正8（1919）年に細浦上ノ山貝塚を発掘、人骨を得るとともに、その人骨のまわりを囲むように20センチ内外の川原石を10余個直径1メートルほどの環状に配した遺構を確認している。長谷部はこれを環状列石と呼ぶが、現在の見方からすればむしろ組石墓というべき遺構なのだろうか（文33）。長谷部の足跡はさらに北に及び、大正12（1920）年には宮古市磯鶴館山貝塚の発掘も行っている。

小金井や長谷部は、この後も人骨研究を進め、抜歯風習の存在（文32, 34, 49）、外耳道骨腫例の指摘（文53, 63）、赤色人骨の記載（文42）等を行っていく。

このほか大串菊太郎（1920）、金山龍重（1922）、曾根広（々）らも細浦貝塚を発掘している。また、人骨出土の情報は考古学・人類学ばかりでなくさまざまな方面的研究者にも興味関心を促した。例えば柳田国男は大正9（1920）年夏、慶應義塾の松本信広と遠野の佐々木喜善を同行し、鶴沢貝塚を訪問している（文80、177）。

県内研究者では鳥羽源蔵が長谷部の発掘にかかる細浦上ノ山貝塚の出土貝類目録を作成し、57種を記載した（文37, 38）。この中で鳥羽は陸産貝の存在、暖海産貝類の検出から「かかる貝類所産の石器時代の気仙地方の気候を追想すれば現時よりも温暖なりし事を想像し得られる」と述べている。これは嵯峨一郎が大正6年に発表した気仙地方貝塚出土貝類に関する論文（文19）で、北方型の傾向が強いと指摘したことや松本彦七郎の北方系統のシカ存在説と相違するような見解であった。鳥羽は、長谷部が調査に関わった山形県吹浦一本松貝塚の貝類も同定しており、鳥羽の貝類同定能力を長谷部が高く評価していたことが窺える。

大正8（1919）年4月、『史跡名勝天然記念物保存法』が公布された。岩手県では翌年、同法施行令に基づき調査会を組織する。発足当初の調査会メンバーは、会長に県の内務部長、委員には警察部長以下官吏5名と、県教育界・史学界の大御所であった新渡戸仙岳（1857～1949）、岩手県師範学校教諭・菅野義之助（1874～1943）、一関実科女学校校長・鈴木勝二郎（1874～1949）それに

盛岡高等農林教諭・柘植六郎（生没年不詳）であった。その後、大正10（1921）年には、伊能嘉矩・小笠原謙吉（1879～1942）が、翌年には小田島祿郎（1881～1953）、さらに12（1923）年には、柘植の秋田県鷹巣農林学校長への転出に伴い鳥羽源蔵が任命されている。

1920年代は、これら史跡名勝天然記念物調査会委員が地元の中核となって活動を進めていく時期である（文298）。

特に小田島は、鳥羽が博物学へ方向を転換していくなかで、この時期以降、本県を代表する研究者となっていく。小田島は、大正12（1923）年9月、岩手郡一方井から気仙郡広田の小学校へ転出する。これを契機に彼は貝塚調査へ深く関わっていくこととなった。

大正13（1924）年夏、小田島は菅野義之助・鳥羽源蔵らと共に、内務省考查員として来訪した柴田常恵を案内する。柴田の目的は史跡名勝天然記念物保存法に基づく指定史跡のノミネートであった。彼らの踏査行程には門前・獺沢・細浦上ノ山・長谷堂・中沢浜など旧知の貝塚にとどまらず、長部（二日市）・鬼沢・下船渡・舞良（大洞）・蛸ノ浦などが組み込まれている。大正4（1915）年刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表（第IV版）』（文18）には、県内約200カ所の遺跡が登載されているが、貝塚に関しては第II版と大差ない。このことから新しい貝塚の発見・確認は、おそらく地元の鳥羽や小田島らの精力的な踏査成果と見て差し支えなかろう。

柴田と小田島は、気仙地方踏査後その脚を宮古方面へ延ばし、中嶋吉兵衛の収集資料を見学、宮古市磯鶴貝塚、大付貝塚などを試掘し人骨を検出するなど遺跡の案内を受けている。柴田からこの地域のさらなる調査を期待された中嶋はこの二ヶ月後急逝した。

柴田のこの踏査により、翌14（1925）年、中沢浜・蛸ノ浦・下船渡の三貝塚それに関谷洞穴（大船渡市日頃市町）が国指定を前提とした県の仮指定を受けている。さらに昭和9（1934）年この三貝塚は国史跡に指定された。縄文貝塚としては全国で5番目、東北地方では福島県新地貝塚（1930年指定）に続き二番目で、気仙地方という小さなエリアで同時に三ヶ所の指定はその後もきわめて稀なことであった。

柴田は、獺沢や細浦上ノ山などは、これまでの発掘によってその主体部分、すなわち人骨を包蔵する貝層は破壊されてしまったと見なし、保存の重要性は認めていない。おそらく、門前貝塚も同様な評価を受けたのであろう。小田島は大船渡市赤崎町に所在する舞良貝塚（大洞貝塚）を本格的な発掘がなされておらず、貝層の保存状況も良好な遺跡として柴田に紹介した。残念ながら、日程の関係で発掘はできなかった。試掘により内容を確認し、それに基づき評価するという姿勢をとった柴田からは、当然良好な返答が得られなかった。

小田島は、新聞誌上に連載したこの踏査旅行に関する記事（文50）で、それを「痛恨事」と表現する。自信を持って柴田に推薦した貝塚であった。小田島は、その痛恨事を解消すべく、大正13年の暮れ東北帝国大学に長谷部を訪ねる。そしてこの貝塚に人骨埋存の可能性をのべ、発掘調査の協力を要請した。

翌年4月、小田島は、県当局の承認を受け、長谷部の命によって派遣された山内清男と共に舞良貝塚と細浦上ノ山貝塚を発掘する。この折りの調査は、人骨確認の試掘であることを長谷部から指示され、また小田島も簡単な調査を予定していたが、山内は小田島に要請し調査期間を延長している。舞良貝塚の発掘地点は、後の長谷部調査のA・C地点で、都合4坪ほどの面積ではあったが、人骨を4体検出するなどの成果を認め、また細浦からも3体の人骨を得ている。

周知のように、山内はこの際の出土資料、そして8月の長谷部らの発掘資料などをもとに、亀ヶ岡式土器の六型式細分を進めるのである（文82）。

さて、先の柴田の踏査により、柴田から県当局に対し貝塚保存の措置を構ずるよう指示がなされている。当時、貝塚は人骨を出土するため古墳に準じた遺跡として扱われていた。ところが柴田が指定示唆した貝塚以外、すなわち細浦や大洞（舞良）からも人骨が発見されたため県は、同年7月27日付けで新たに気仙郡を所轄する盛警察署および気仙郡長にあて貝塚発掘規制の通達を出した。

ところがその通達の直後、山内の復命を受け本格調査を計画した長谷部と小金井良精、さらに岩手県南部の石灰岩洞穴調査を企画していた大山柏らによる発掘計画が小田島を通じて県に打診されたのである。県当局はこの調査計画に対し、一旦は許可しない旨通知した。しかし、人骨収集に意欲を持っていた小金井・長谷部らは、内務省の柴田、東京帝国大学の松村瞭などを通じて働きかけ、結局梅木洞穴（陸前高田市矢作町）と長部（二日市）・大洞（舞良）両貝塚の発掘を実施できることとなった。

大正14（1925）年8月、小金井・長谷部・大山それに八幡一郎・池上啓介らは、二日市貝塚を8日間、大洞貝塚を10日間調査する。この調査にも小田島は参加し、案内をつとめた（文56,64）。

さて、この長谷部らの調査に至るまで、特に県当局の文書などによる限り、舞良貝塚と大洞貝塚とは貝塚の所在する尾根を境に区分されていたらしく、どちらかといえば舞良貝塚の名称の方が一般的であった。両地点を合わせ大洞貝塚と称するのは、長谷部の調査以後である。

この調査に前後して、長谷部は骨角器研究の基礎となる論文をいくつか発表している。門前貝塚の鹿角製腰飾りに言及したり（文54）、骨角匕（文65）、燕形鉢頭（文72,73）などの論攷には、県内貝塚出土資料が用いられている。

小金井・長谷部そして大山など、当時の人類学・考古学のエキスパートと交誼を深めた小田島は、その後も貝塚調査を進めていく。小田島の大正期の有終を飾る文献『岩手考古図集』（文71）にその成果は、表現されている。

この図集は、大正14（1925）年8月8～12日に岩手県教育会江刺郡教育部会が主催し江刺郡岩谷堂町（現：江刺市岩谷堂）で開催した史料展覧会の図録として刊行された。内容は、縄文時代から江戸時代にいたる二千点を超す出品資料のうち、県内出土の考古資料を中心に小田島による解説が付された写真集である。写真撮影は、地元の写真師を行い、印刷は当時東京帝室博物館の高橋健自の協力を得て東京の専門業者に発注するなど、この時期の地方出版物として素晴らしい出来映えである。小田島はこの年6月に岩谷堂の女学校へ転勤していた。この展覧会には小田島が広田在任当時発掘した中沢浜貝塚の埋葬人骨が展示され人気を博したという。この人骨は、後に小金井良精に寄贈したらしい。

昭和期になると、気仙地方への県外研究者の来訪は少なくなる。これは先の県当局の行政措置のため、貝塚調査は実質許可制となつたことが大きな原因であろう。そのなかで小田島は着実に活動を展開していく。その小田島の貝塚調査に関わる業績として、県北部の貝塚踏査と内陸南部の淡水系貝塚の調査があげられる。

前者に関しては、まず昭和2（1927）年5月、宮古から岩手県北端の種市まで踏査した。宮古周辺では、かつて中嶋に案内された鍬ヶ崎館山貝塚をはじめ崎山貝塚・大付貝塚などをまわり、次いで岩泉町小本・田野畠村・普代村・野田村そして久慈市の宇部・三崎地区、種市町の八木貝塚へとその足跡をたどることができる。この調査はほとんど徒步で行われている。道路も整備されておらず、急峻な地形を分け入り貝塚や洞穴遺跡を探索する行程であった。小田島自身その復命書などに歩行困難を極め、辛い調査であったとの感想を残している。

昭和4(1929)年には、田ノ浜貝塚(山田町)を発掘する。そして昭和6(1931)年6月、小田島は再び県北部の貝塚踏査にむかった。この折、彼は海岸線から急な山道を約4km辿り、標高230mの海岸段丘上に形成された貝塚を発見する。野田村根井貝塚である。小田島は、翌年11月にもこの根井貝塚を訪れている。

この根井で、縄文時代後期末の貝層を発掘し多くの骨角器・土器類を収集した。県北部初の本格的貝塚発掘であった。この発掘地点は、昭和58~60(1983~1985)年に岩手県立博物館が実施した発掘地点と近接するが、小田島発掘資料の注記をみると少なくとも二地点で貝層を検出しており、層位的にも上下に区分していたことがわかる。また、動物遺存体の採集にも配慮していたことが窺える。

一方、内陸南部の淡水系貝塚に関しては、まず大正14(1925)年の西磐井郡涌津村(現花泉町涌津)の白浜貝塚を皮切りに、昭和4(1929)年に蝦島(貝島)貝塚、高倉貝塚等を調査している。特に白浜貝塚は夏川・磯田川を挟んで対岸の貝島貝塚とほぼ同時期の重要な貝塚として把握していたようである。

昭和3(1928)年刊行の『日本石器時代遺物発見地名表(第V版)』(文78)には編集者の八幡一郎・中谷治宇二郎の依頼により小田島が情報を提供している。この時点における県内貝塚(同書に「貝塚」と記載されたもの)は、35箇所である。ただしこの中には、前述の田ノ浜や根井は貝塚とはまだ記載されていない。

このような小田島の活動は貝塚調査に留まらず、県内の縄文から古代にかけての遺跡に及んだ。彼自身、600箇所を越える遺跡を自ら踏査したと述べている(文83)。彼の残した膨大な資料は、当時の研究者との間に交わされた書簡類も含め現在岩手県立博物館に収蔵されている(文392)。確かに小田島の業績は岩手の考古学にとって欠くことはできないが、大正・昭和初期の日本考古学の研究水準で評価したとき、その論調は系統論や単純な伝播論に終始する傾向のあることは否めない。

小田島は、昭和11(1936)年出身地の浄法寺町に転居する。それ以降目立った活動は行っていない。貝塚調査も昭和10年代以降は、父・吉兵衛の遺志を継いだ中嶋隆氏による宮古崎山雲南前貝塚(1936)、菅野義之助の大船渡中井・長谷堂貝塚(1937)、県外研究者では角田文衛氏の大洞・宮古鍬ヶ崎館山貝塚(1935)、大山柏・藤岡謙二郎・清水潤三らによる宮野貝塚などの調査(1940)が行われた程度で、全体的に低調になる。

敗戦後の混乱の中、昭和21(1946)年文部省による国民学校初等科用『くにのあゆみ』、中等学校用『日本の歴史』などの教科書刊行、翌22(1947)年3月の教育基本法の公布を受けての社会科新設など、新たな歴史教育が開始された。静岡県登呂遺跡の発掘ニュースの報道とともに、建国神話ではなく石器時代からはじまる日本の歴史を学習する上で、一躍考古学は脚光を浴び、遺跡発掘がブームとなった。また、民主的、科学的研究推進のためとして研究者の組織化も図られた。

当時、岩手の歴史学・考古学界に大きな影響を与えたのは、昭和23(1948)年、平泉町中尊寺で開催された「東北文化史講演会」であろう。この講演会で伊東信雄は「考古学上より見たる古代東北文化」と題して講演し、多くの聴衆に感銘を与え、考古学に初めて興味を抱いた者も少なくなかつた。この年には岩手師範学校を中心に岩手史学会が、翌24(1949)年10月には在野の研究者を主体とする奥羽史談会が発足する。初期の岩手史学会では考古学に関わる研究発表・論文投稿が活発に行われた。岩手史学会会員の鈴木博氏による大船渡市中井貝塚の発掘(文114)や県立一関中学教員の佐伯敬紀・大島栄介氏に指導された生徒らによる花泉町中神貝塚の発掘などは、このような流

れの中に位置づけることができよう。

また、東登（1925～1967）や菊池啓治郎氏、吉田義昭氏など県内在住の新たな世代による貝塚調査も開始された。

東登は、陸前高田市の出身、明治大学で後藤守一、杉原莊介に師事し考古学を専攻した。昭和25年度第一回考古学専攻生としての卒業論文題目は『日本石器時代の漁撈—骨角器を中心として』であり、貝塚研究に意欲を持っていた。卒業後、地元での高校勤務の傍ら、気仙地方の貝塚出土資料を集成する。その研究成果は『気仙縄文式時代の骨角製漁撈器具考』（文143）として纏められた。この中で彼は、地域的な特徴を明らかにし、対象魚種を想定、さらに釣漁が個人的漁獲法であるとの把握に立ち、漁撈技術が非常な発達をみたと指摘する。また、彼は教育者としての立場から、一般向けの著作もいくつか執筆し、考古学研究の重要性と遺跡保存を訴えている。

東は菊池啓治郎氏・吉田義昭氏と共に昭和26（1951）年6月に大洞貝塚を発掘、引き続き慶應義塾大学の江坂輝弥氏らと共に、大船渡市清水貝塚（1952）、大洞貝塚（1956）、下船渡貝塚（1961）、陸前高田市門前貝塚（1954）、三陸町宮野貝塚（1961）などの調査にあたった。また、早稲田大学の西村正衛らも大船渡市長谷堂貝塚（1955）、清水貝塚（1955）、蛸ノ浦貝塚（1957）、大洞貝塚（1958）などの調査を行った。昭和30年代は、慶應義塾大学や早稲田大学など在京の大学による調査が主に行われた時期と位置づけられる。

これらの調査によって蛸ノ浦貝塚は三陸海岸地域を代表する大規模な馬蹄形を呈する貝塚であること、後期末以降の貝塚では東が指摘するように釣針や離頭鉗が発達することが確認できた。特に江坂氏はその後もこの地域の調査に関わり研究を進め、特に骨角器研究に関して多大な業績を築いていった。

吉田義昭氏は、勤務地が盛岡であったが、江坂輝弥氏の指導を受けながら東らと共に多くの貝塚調査に関わった。いち早く県内遺跡の概説を著し（文119）、文献目録（文136）、年譜（文160）、貝塚分布の集成（文142）など貴重な業績を残している。上記の貝塚の他にも山田町田の浜貝塚（文199）などの発掘にも携っている。なかでも文献目録は、藩政期の記録や新聞記事などを網羅した労作である。

吉田氏は、門前貝塚の報告（文163）で出土土器を三つに大別し、第二群土器に対して門前式と命名した。この門前式はその後、細分が進み、関東甲信越と東北地方を結ぶ広域編年研究上重要な土器型式と評価されている。

また、及川千代松（1907～1971）の地道な業績も見逃せない。及川は仕事のかたわら気仙地方の遺跡をつぶさに巡り、表面採集を行った。その成果をまとめた『遺跡を尋ねて』（文173）には、気仙地方二市二町全域で313ヶ所にのぼる遺跡が登載されている。これは昭和39（1964）年に岩手県教育委員会が行った遺跡確認調査報告（文182）に記載する遺跡数215ヶ所を大きく上回っている。また、貝塚数も50ヶ所を超える数が記録されている。現在、及川の採集資料は大船渡市立博物館に、記録ノート類は陸前高田市立博物館に収蔵され、近年その紹介が行われている（文354）。

昭和30年代以降は、岩手大学の草間俊一（1915～1997）も県内遺跡調査に関わっていく。草間は長野県松本市出身で、京都帝国大学文学部史学科へ進み西田直二郎に師事し、日本中世史を専攻した。京大卒業後、高知県女子師範学校等に勤務の後、昭和16（1941）年岩手県女子師範学校に着任する。以来、岩手大学、岩手県立盛岡短期大学でおよそ半世紀にわたって、板橋源（1907～1990）と共に本県の歴史学・考古学の指導にあたった。板橋が歴史考古学、草間は先史考古学と古代集落遺跡調査と自ずとその領域は棲み分けられた。草間が遺跡発掘に取り組むのは昭和28（1953）年の東磐

井郡大東町中野台遺跡からだが、1960年代までは、たとえば、原始文化と表現する論文をいくつか著したように、戦後歴史学の大きな潮流となった社会発展史とは一定の距離をおき、恩師・西田の文化史的把握を基礎としていたことが窺える。文化史を志向する草間であったからこそ文化把握に結びつく考古学研究に関わったとも考えられる。

草間の貝塚調査は、花泉町貝鳥貝塚から始まる。貝鳥貝塚は、昭和15(1940)年、吉田格や江坂輝弥氏らが訪れ資料紹介はなされていた(文103)。その後昭和22(1947)年には吉田格の小発掘、江坂氏による周辺貝塚の紹介(文115)が行われ、北上川流域最奥部の貝塚として注目されつつあった。昭和31(1956)年、草間による第一次調査(文162)、翌年東京大学などが中心となって行った第二次調査で、オオタニシ・イシガイなど淡水貝を主体とする良好な貝層の存在と土器・石器・骨角器・貝製品・土製品など多彩な遺物を出土する遺物包含層、さらに一・二次併せて57体を数える埋葬人骨が発見された。

このような調査成果を受け、岩手県教育委員会は昭和41(1966)年3月、埋葬人骨集中地区と貝層の最も良く保存されている部分を中心にその隣接地を若干加えた約60aを県史跡として指定した。ちなみにこの年には大船渡市大洞貝塚も県史跡となっている。

しかし、昭和38年頃からの食料増産計画は、電気揚水による灌漑施設の導入、農家の所得拡大意欲などにより、従来水田耕作が不可能であった丘陵地まで開田するブームを引き起こした。県下全域にわたっていくつもの遺跡が調査されることなく消滅していった。その波がこの貝鳥貝塚のある丘陵にも及んだのである。

まず、昭和39(1964)年、貝塚の一部が開田され夥しい遺物が出土した。指定直後にも指定地の一部を含む畠地が開田され、さらに開田要請は翌年にも提出された。ブルトーザーに押され地表に散乱する遺物は、採集されることすらなかった。

当時、岩手県文化財専門委員(現:文化財保護審議会委員)でもあった草間は県や地元の教育委員会とはかり、指定地を開田予定地から除外すること、指定地以外でも事前の発掘調査が必要なことを地主に説明・説得し、ようやく発掘調査の承諾を取り付けた。第三次調査はこのような状況で昭和42(1967)年2月末から3月上旬の11日間行われた。開田予定面積はおよそ100a、だが発掘できたのは狭いトレーンチで四地点、調査面積は250m²程度に過ぎなかった。当初、この調査は国と県の緊急発掘調査費補助を受けて実施する予定だった。しかし国庫補助の決定通知が遅れ、県費が支出できない事態を招いた。限られた日程と予算、弱体な事務体制、それがこのような調査となった大きな理由であった。

寒風のなかでの発掘が終了した直後、ブルトーザーの音が響き開田工事が行われた。

さらに昭和44(1969)年には指定地内での開田計画が持ち上がった。二人の地主と現状保存、買い上げ交渉を行うが不調に終わり、指定解除を前提とした第四次調査が実施されることとなった。同年11月15日から12月4日の20日間行われた調査には早稲田大学の金子浩昌氏と当時学生であった西本豊弘氏・土肥孝氏・柳沢清一氏らが参加している。昭和46(1971)年12月に刊行された第四次調査の報告書(文215)は多彩な出土遺物に加え、詳細な分析・記述と共に、本県の遺跡発掘報告書の画期をなした文献として高く評価されている。

草間は調査期間中、貝塚の保存を地主に要請する。宿舎を提供していた一人の地主はその熱意あふれる要請を受け入れ、開田計画を取り下げ、保存を図ることを約束した。

このように1960年代後半には、岩手県でもさまざまな開発事業による緊急調査が増加してきた。草間はその対応に精力を注ぎ、まさに発掘にあけくれる日々であった。この時期、貝塚では大船渡

市富沢貝塚、長谷堂貝塚、三陸町宮野貝塚、宮古市磯鶏蝦夷森貝塚、大槌町崎山弁天貝塚などを調査している。

また、気仙地方を主なフィールドとした及川洵氏は、陸前高田市牧田貝塚で縄文時代前期の貝層を検出（文211）、その後も長谷堂貝塚（文220）、陸前高田市堂の前貝塚（文218）、門前貝塚（文222）、大阳台貝塚（文239）、獺沢貝塚（文233）などを発掘し、門前貝塚、堂の前貝塚での門前式土器の層位的検出や気仙地域貝塚の総括（文277）を進めているほか、田野畠村羅賀弁天貝塚の記載（文295）なども行っている。及川氏の一連の調査で出土した骨角器・動物遺存体はその多くを早稲田大学の金子浩昌氏が担当し、同定・分析している。貝島貝塚の分析も含め金子氏によって明らかにされた県内貝塚の研究成果は大きいものがある。

1970年代には開発事業が本格化し、特に東北新幹線・縦貫自動車道などの大規模事業に伴う発掘調査が開始された。それに対応するには、草間ら大学教官や学校教員では困難であり、県教育委員会に文化課を新設（1973）、財団法人の県埋蔵文化財センターの設置（1976）など行政調査組織の整備が図られた。

文化課発足当時、担当者として調査体制確立、関係機関との協議調整にあたった林謙作氏は本県貝塚の重要性に鑑み、分布調査を実施すると共に緊急調査であったが大船渡市清水貝塚（文231）などの発掘にあたった。林氏は北海道大学へ移られた後も、三陸町宮野貝塚の調査を行っており、その発掘成果の一端は、赤沢威氏や百々幸雄氏らにより分析、報告されてきた。特に赤沢氏は、宮野貝塚出土のマダイ前上顎骨・歯骨を用いて体長復原を行い、宮野貝塚人が捕獲したマダイが体長40~50cmに集中することを明かにするなど、動物遺存体を通じて生業活動の具体的様相を明らかにした。

このような動物遺存体の分析は、鈴木公雄氏らによる東京都伊皿子貝塚の定量的分析、東北歴史資料館の宮城県里浜貝塚の調査成果と相まって、県内研究者にも少なからぬ影響を与えた。当時、陸前高田市立博物館（1979）、岩手県立博物館（1980）、大船渡市立博物館（1982）などの新設・新館開館、宮古市など沿岸部の自治体への埋蔵文化財担当者採用の中から、動物遺存体の分類・同定ができるだけ自分たちの手で行い、それを調査に還元していく方法が意識されるようになった。岩手県立博物館の野田村根井貝塚（文324）、陸前高田市博の佐藤正彦らによる中沢浜貝塚（文300,318,325,331）などの動物遺存体記載は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏、東北歴史資料館の岡村道雄・小井川和夫氏らの度重なる現地指導と協力を受けながら進められたものである。そのなかで貝層の廃棄単位による細分、動物遺存体の定量的記載など、明確な問題意識を持った調査が定着した。また、県北部の久慈市二子貝塚などの調査成果（文361）により、県南部・県中央部・県北部相互の比較検討も可能になった。

ところで三陸沿岸の貝塚からは釣針や鉛頭など多彩な漁撈具と共に、マグロなどの骨が出土することなどから、大形魚を中心とした漁撈活動の展開が主に語られてきた。しかし、門前貝塚や宮古市崎山貝塚でのフルイ選別による分析の結果、最も多いのはイワシ類などの地先の魚種であることが判明した。このことは、大形魚捕獲が威信的行為として行なわれたことを示し、社会組織論の検討へ結びついていく。また、貝層部分の発掘だけでなく、住居跡や土坑など遺構の検出例も増加し、遺跡の構造を検討する情報集積も進みつつある。

特に崎山貝塚は縄文前期・大木1式期から継続する層中に大量の魚骨・獸骨を含み、気仙地方以南の貝塚とは異なる生業活動が展開した可能性を引き出している。崎山貝塚は昭和57（1982）年度

から実施した遺跡詳細分布調査によって良好な保存状態であることが確認され、昭和61（1986）年度からの範囲確認調査によって丘陵上の集落・墓域、斜面に掲載された貝層さらにそれを取り囲む低湿地の存在など、周辺の景観を含めた貴重な遺跡として、平成7（1995）年国史跡に指定された。本県の貝塚指定として実に、60年ぶりのことであった（文326,333,334,341,359,371,381,391,395）。

しかし、その一方で沿岸部の貝塚は、宅地化、道路など社会資本の整備が進む中で大きな影響を受けてきた。国史跡の蛸ノ浦・下船渡両貝塚を有する大船渡市はその保存管理計画（文252）を策定するが、特に後者において市街化が進んでいる。また陸前高田市中沢浜貝塚では昭和33（1958）年のチリ地震津波による被災者の住宅移転などによってかつての景観は大きく変化した。史跡以外の貝塚や遺跡ではその傾向が一層顕著に現れ、消失した遺跡も少なくない。

開発事業に対応した行政発掘は、それでも70年代前半までは北上川流域地域が主であった。その後は県下全域に広がり、県内くまなくと表現できるほど発掘調査件数も増加の一途をたどった。また各自治体にとっても事業計画の円滑な進捗を図るため遺跡の確認が急務となった。釜石市周辺の遺跡の急激な消失に対する危機感から三留孝（1926～1993）は、ほとんど自力で分布調査を行い、遺跡保存のための基礎的資料として活用しようとした（文362）。しかしすでに個人的努力のみで遺跡を保存し、調査するのは限界に達していた。

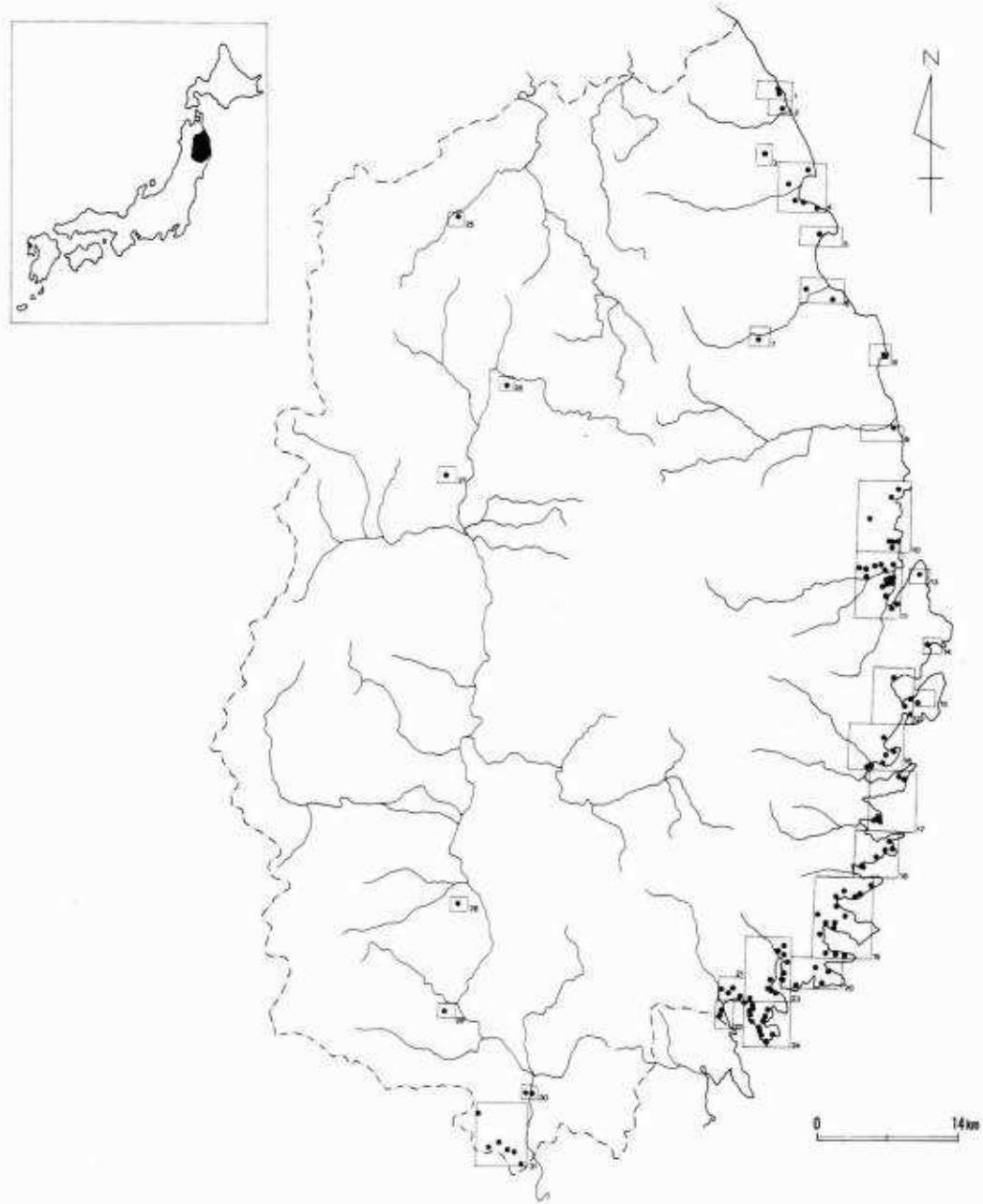
宮古市に続き、大槌町・久慈市・岩泉町などで行われた国庫補助導入の遺跡詳細分布調査事業は、その点で行政による組織的調査として実施されたものであった。これによって縄文遺跡に加え古代集落や製鉄関連遺跡の分布状況を明らかにしたことは大きな成果であったが、逆に貝塚は危機的な状態にあることを教えてくれた調査でもあった。

近年は、小規模ながら奈良・平安時代の貝層がいくつかの遺跡で確認されるようになった。特に上閉伊・下閉伊地域の古代貝塚は、海産資源利用という面のみならず、古代国家体制との関わりや製鉄技術者集団の移住そして製塩活動、さらに北方世界につながる生業などとも関わる課題として今後重要となろう。

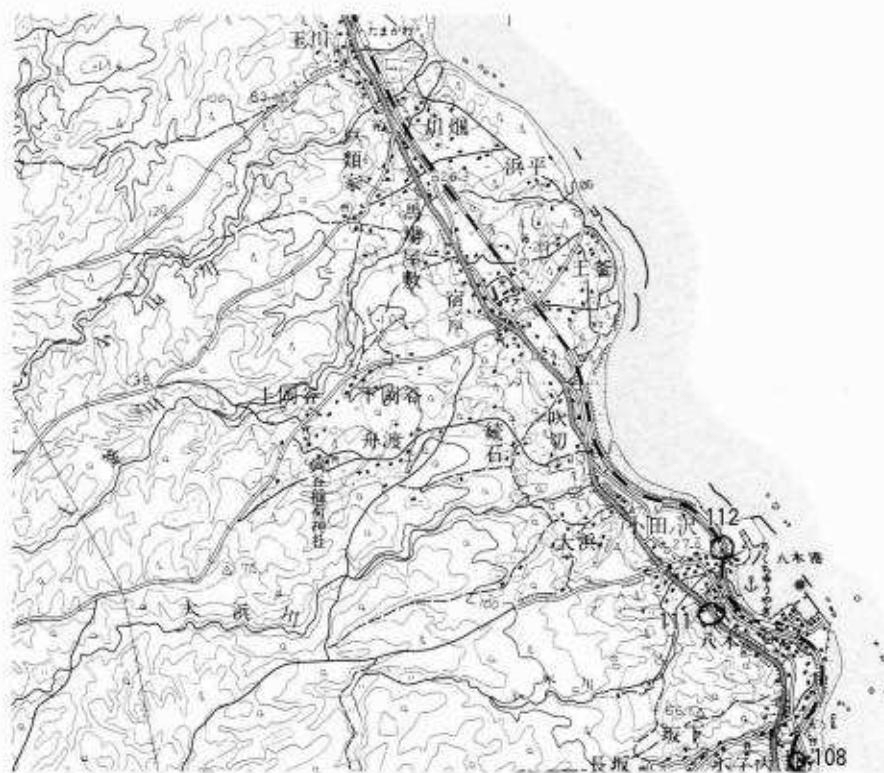
また、久慈市大尻遺跡（文329）をはじめ県内数カ所で発見されているアワビを主とした近世の貝層は、近世水産業の展開に貝塚分析を通じて実証的資料を提供でき、ひいてはアワビ突き漁など漁撈民具資料や漁法の問題へも関わっていくことは疑いない。

平成6（1994）年からは大船渡市大洞貝塚の範囲確認調査が行われている。国史跡の指定を受けた宮古市崎山貝塚では整備計画の検討が開始された。平成9年時点で岩手県内の遺跡数は一万ヶ所を越している。そのうち今回の調査で記載することができた貝塚は100ヶ所。本県遺跡全体の僅か1%にしか過ぎない。日本考古学とりわけ縄文時代研究の舞台で重要な役割を果してきた岩手の貝塚を今後の研究に生かし、広く活用していくためにも、適切かつ早急な保護措置を構ずるべきであろう。

以上、鳥羽源蔵の門前貝塚紹介から100年間におよぶ本県貝塚の研究史を概観した。本文ではあえて研究史の段階区分をせず年代順に事項を羅列するに留まった。確かにいくつかの画期の存在や研究課題の変遷を認めることはできる。大正期を中心とした民族論、戦後の生業論、そして近年の生態分析などが代表的なものといえる。しかし、それは全国的な研究動向のなかで位置づけられるべきで、同時にその把握と整理は歴史認識に関わる問題であることは言うまでもない。膨大な情報が複雑に飛び交う今こそ歴史認識・叙述に直結するものとして学史研究は一層重要性を増すであろうし、そこから地域考古学の特質が導き出されることを期待したい。



第1図 岩手県内貝塚分布図（数字は第2～16図1/50000地図と対応）



1

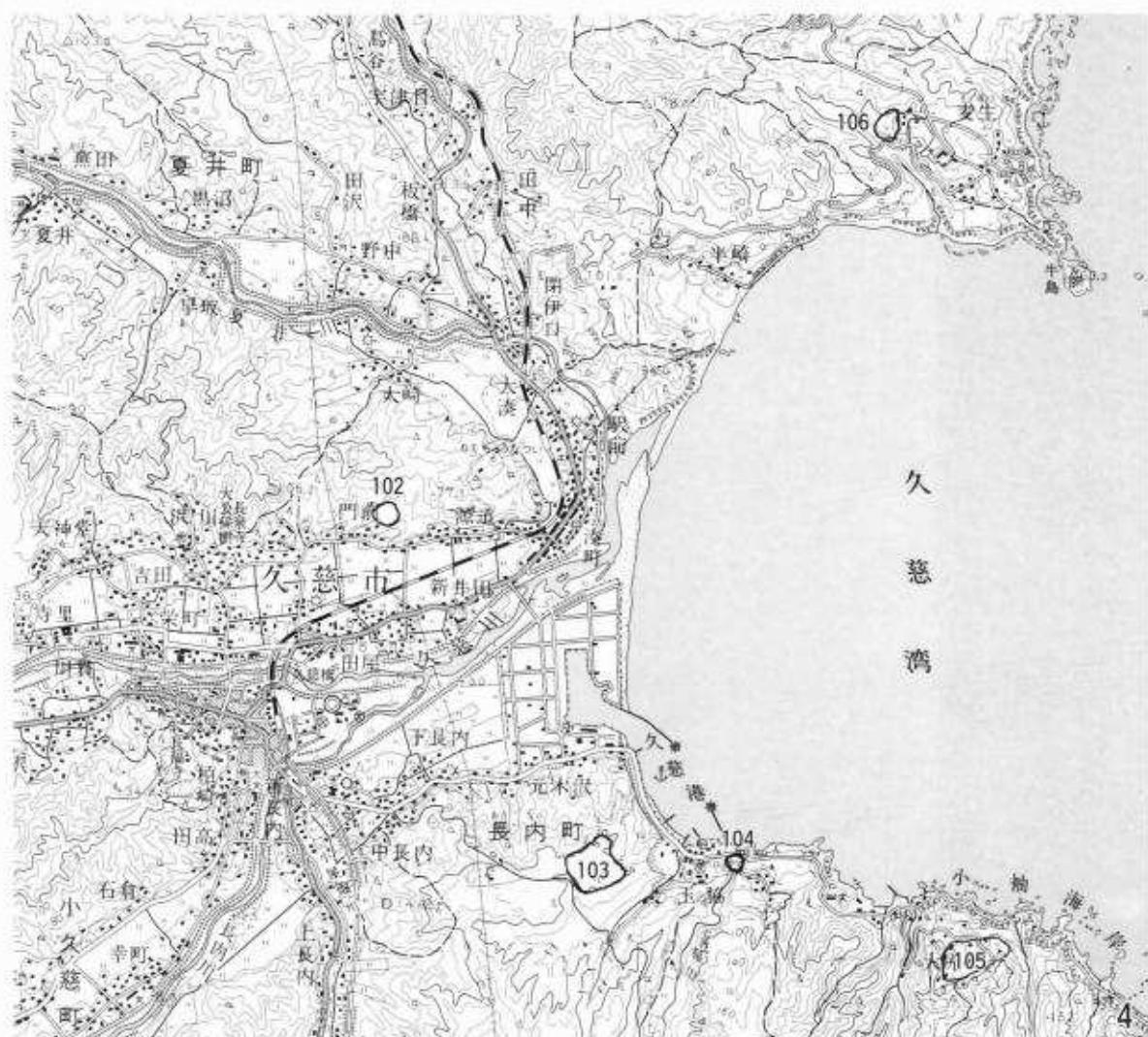


3

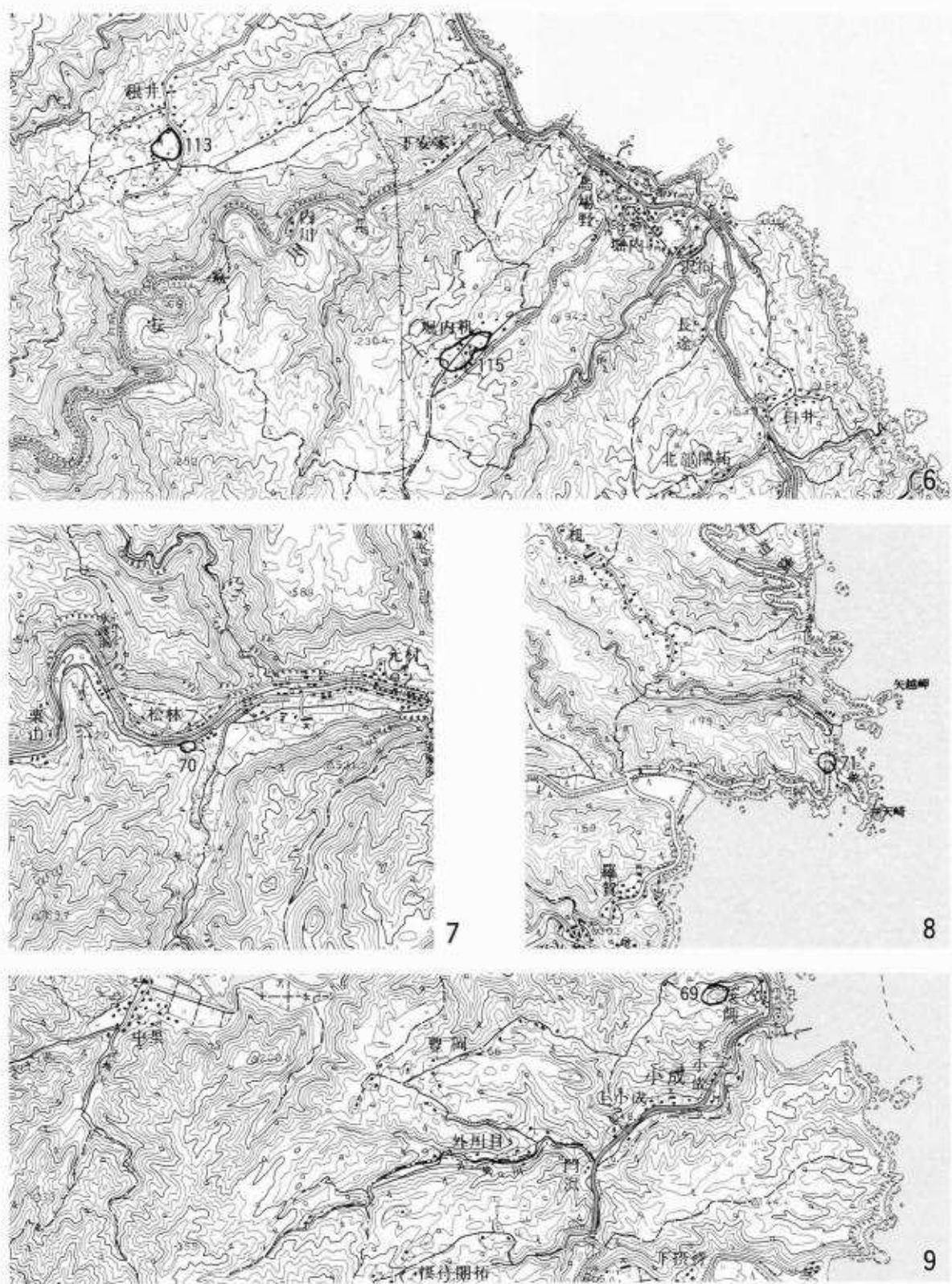


2

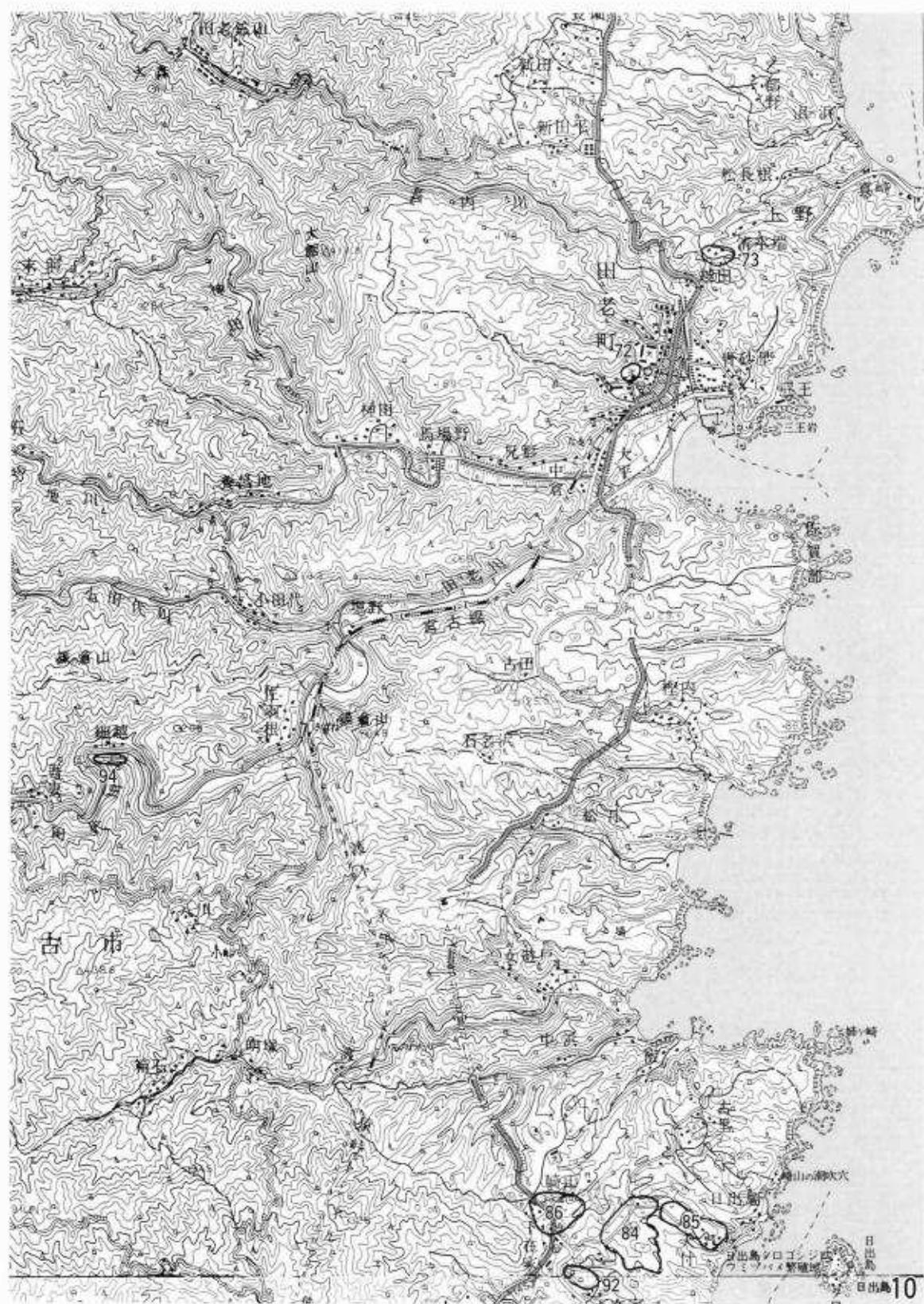
第2図 岩手県内貝塚分布図（詳細図1、種市・久慈西部）



第3図 岩手県内貝塚分布図（詳細図2、久慈・野田）



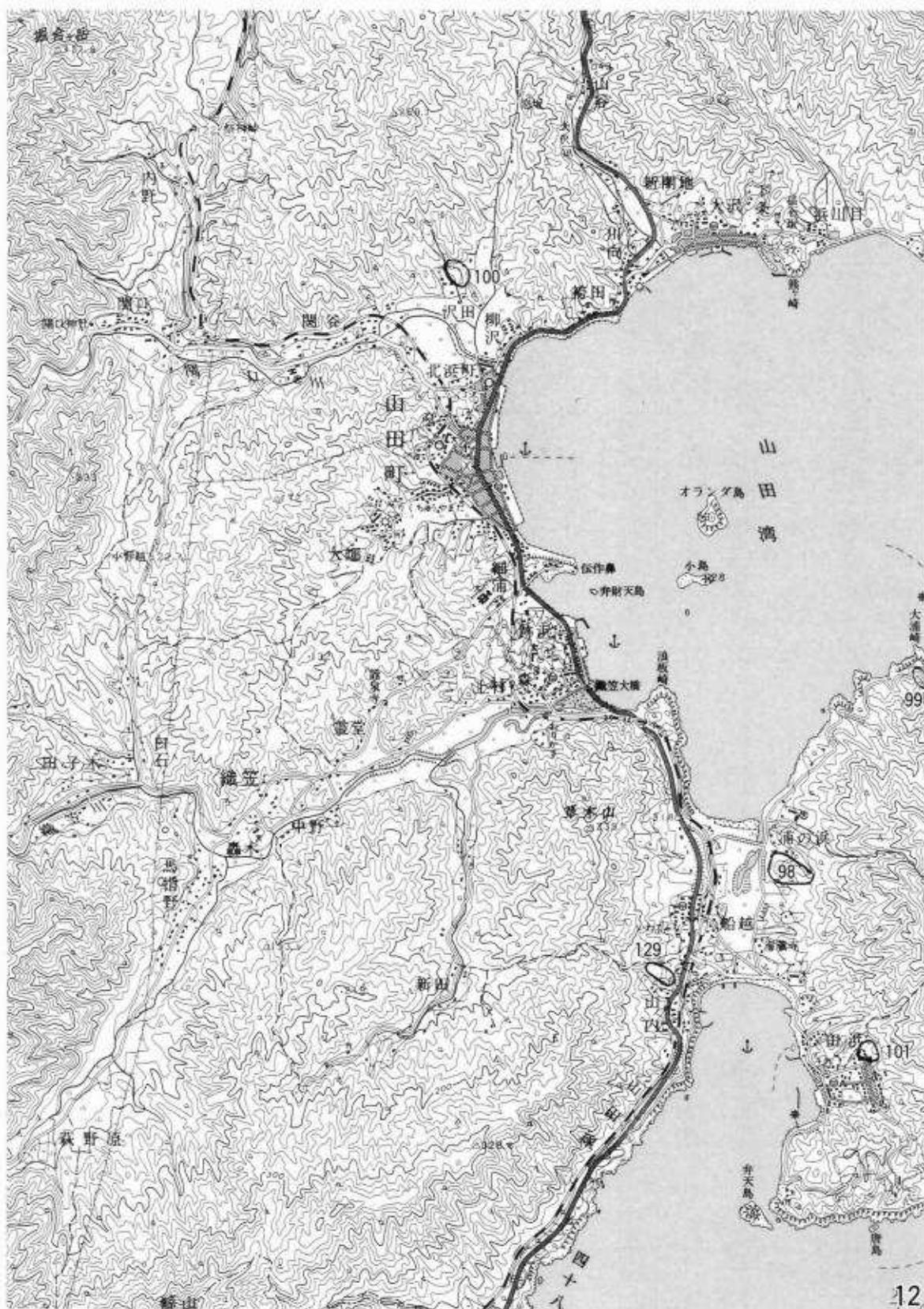
第4図 岩手県内貝塚分布図（詳細図3、野田・普代・田野畑・岩泉）



第5図 岩手県内貝塚分布図（詳細図4、田老・宮古北部）



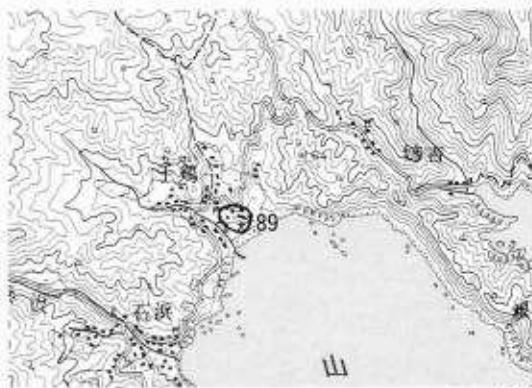
第6図 岩手県内貝塚分布図(詳細図5、宮古)



第7図 岩手県内貝塚分布図（詳細図6、山田）



13



14

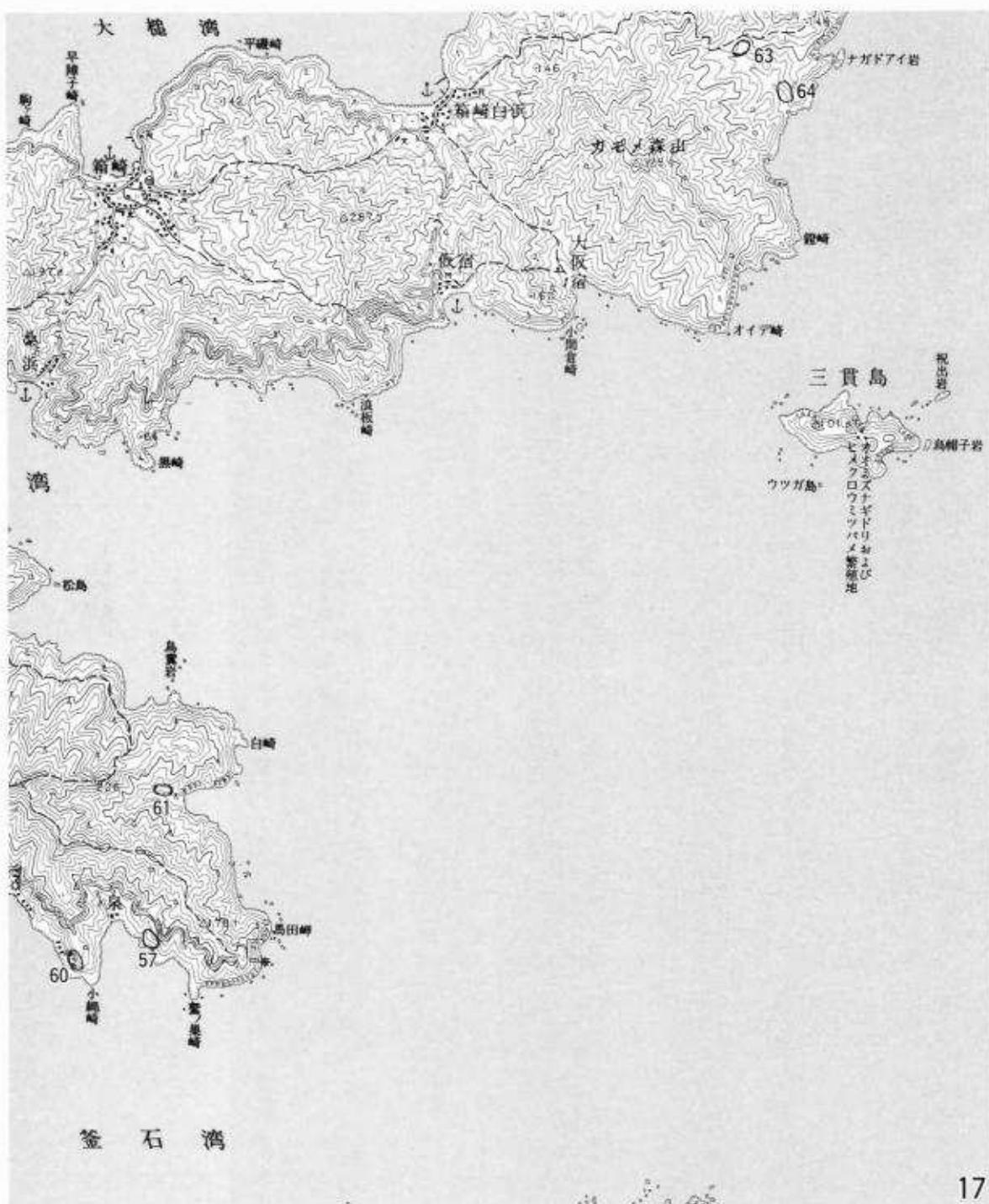


15

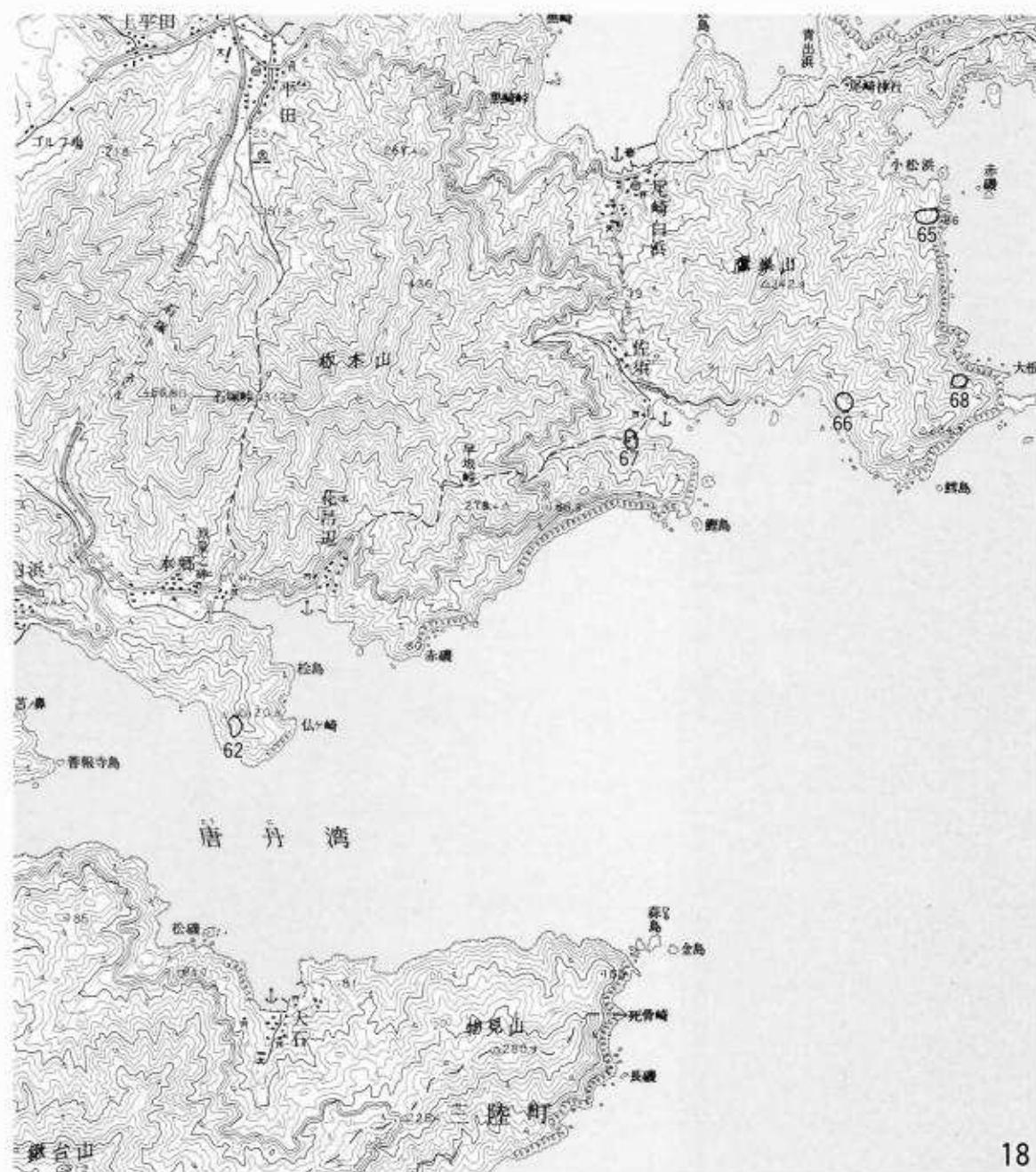


16

第8図 岩手県内貝塚分布図（詳細図7、宮古東部・山田東部・大槌）



第9図 岩手県内貝塚分布図（詳細図8、釜石北部）



第10図 岩手県内貝塚分布図（詳細図9、釜石南部）



第11図 岩手県内貝塚分布図（詳細図10、三陸北部）



20

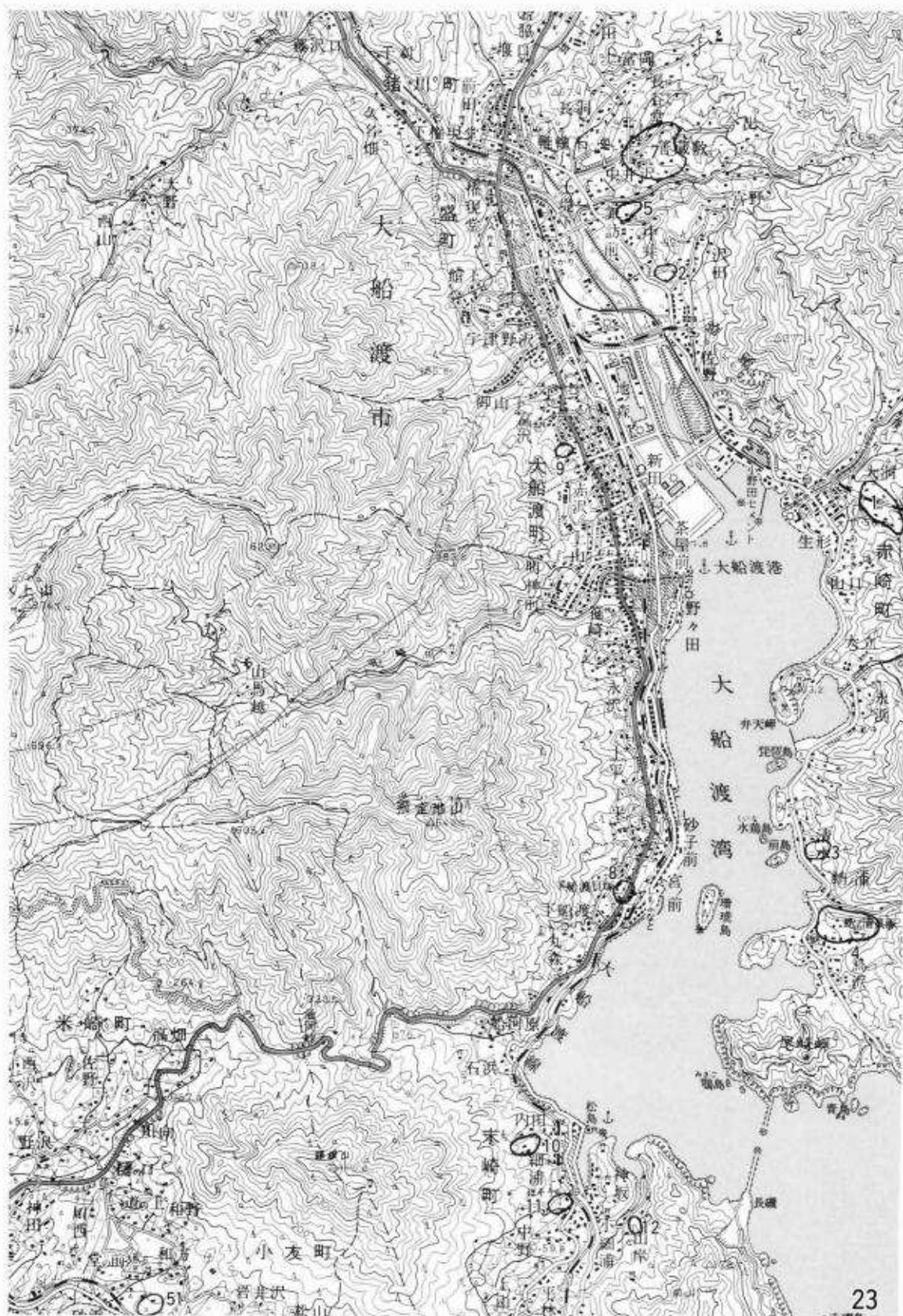


21



22

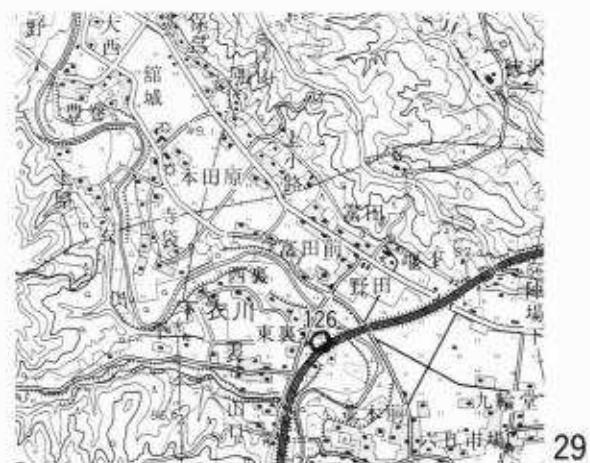
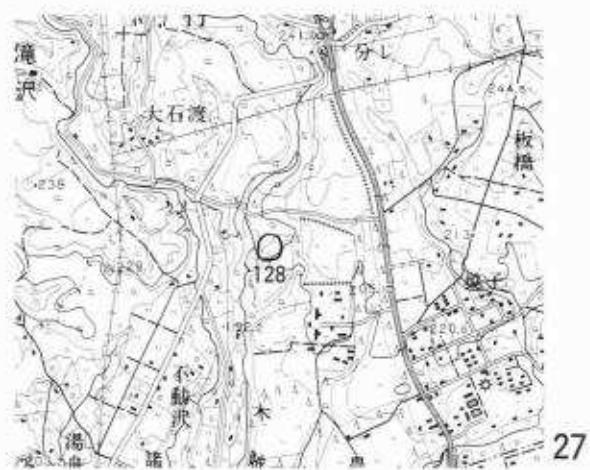
第12図 岩手県内貝塚分布図（詳細図11、三陸南部・陸前高田中南部）



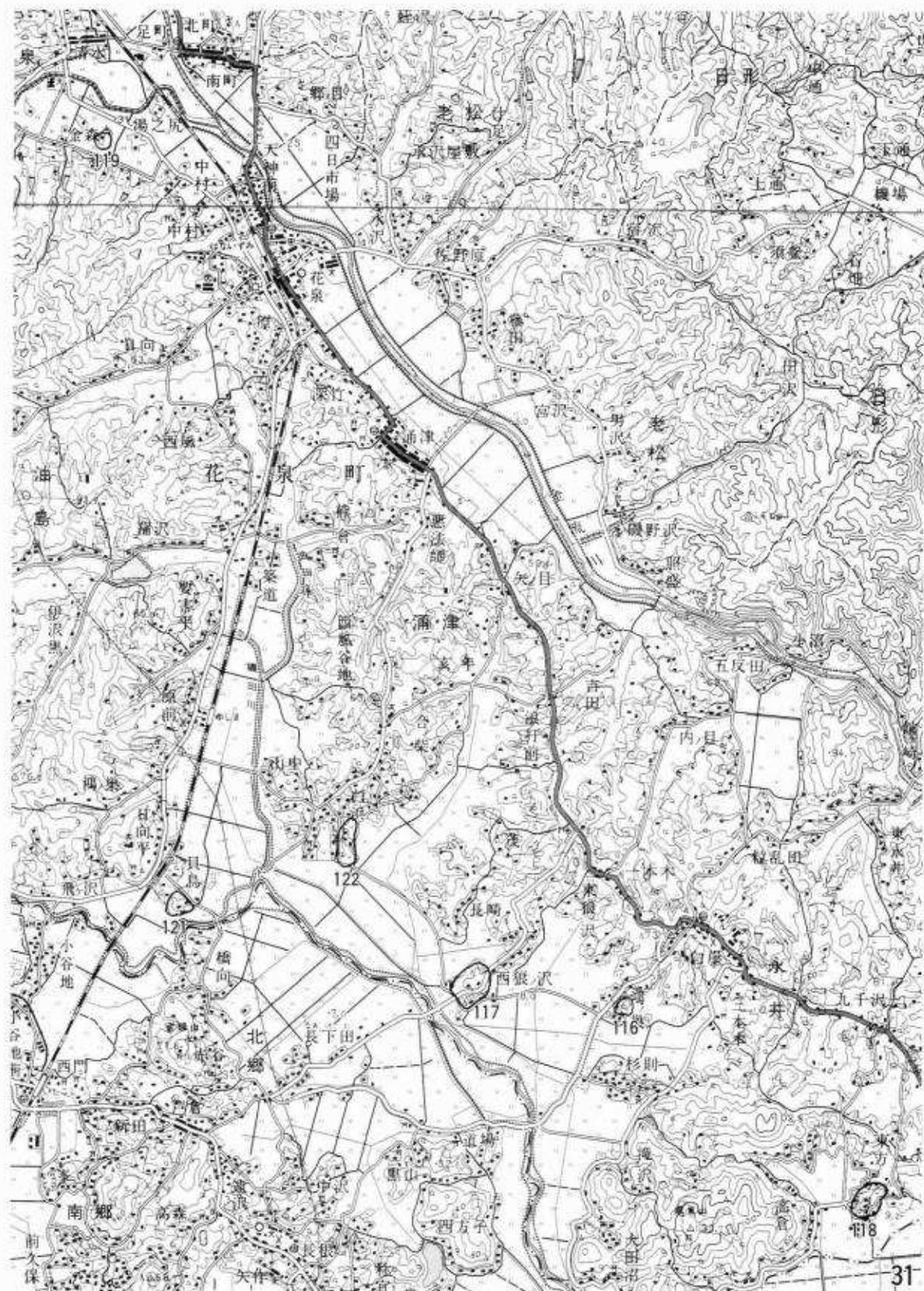
23

第13図 岩手県内貝塚分布図（詳細図12、大船渡）





第15図 岩手県内貝塚分布図（詳細図14、滝沢・胆沢・衣川・花泉東部・藤沢）



第16図 岩手県内貝塚分布図（詳細図15、花泉）

第1表 岩手県内貝塚一覧表

No.	遺跡名	種別	地区	遺跡の時代	貝層の時代	市町村	No.	遺跡名	種別	地区	遺跡の時代	貝層の時代	市町村
1	大河	貝塚	気仙	縄文	縄文(施)	大船渡市	66	法活	貝塚	上閉伊	縄文	不明	釜石市
2	沢原	貝塚	気仙	縄文	不明	大船渡市	67	鷺葉	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市
3	清水	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～中)	大船渡市	68	大根崎	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市
4	猪ノ瀬	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～中)	大船渡市	69	茂鎌	貝塚	下閉伊	縄文	縄文	岩泉町
5	中井	貝塚	気仙	縄文	縄文(中)	大船渡市	70	松井Ⅱ	遺跡	下閉伊	縄文	縄文(前)	岩泉町
6	長崎	貝塚	気仙	縄文	縄文(施)	大船渡市	71	羅賀牛瓦	貝塚	下閉伊	縄文	不明	田賀塙村
7	長谷堂	貝塚	気仙	縄文・弥生	縄文(中)	大船渡市	72	寺山	遺跡	下閉伊	縄文	不明	田老町
8	下船渡	貝塚	気仙	縄文・弥生	縄文(後～晩)	大船渡市	73	越田	遺跡	下閉伊	縄文・近世以降	近世以降	田老町
9	富吉Ⅰ・Ⅱ	貝塚	気仙	縄文	縄文(施)	大船渡市	74	赤坂Ⅱ・松田	遺跡	下閉伊	縄文・弥生・奈良平安	平安	宮古市
10	内田	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～中)	大船渡市	75	赤城V・柳沢	遺跡	下閉伊	平安	平安	宮古市
11	細瀬上の山	貝塚	気仙	縄文	縄文(中～晩)	大船渡市	76	小内田	貝塚	下閉伊	縄文・奈良・平安	不明	宮古市
12	鬼沢	貝塚	気仙	縄文	縄文(施)	大船渡市	77	鳥田	遺跡	下閉伊	平安	平安	宮古市
13	小出	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	78	上村	貝塚	下閉伊	縄文・弥生・奈良平安	縄文(中)	宮古市
14	泊	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	79	平坂	遺跡	下閉伊	縄文・弥生・奈良平安	縄文	宮古市
15	中村	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	80	魂島瓶森	貝塚	下閉伊	縄文	縄文	宮古市
16	藤野田	貝塚	気仙	縄文	縄文(中)	三陸町	81	魂島瓶山	遺跡	下閉伊	平安・中世・近世	古代以降	宮古市
17	浪板	貝塚	気仙	縄文	縄文(施)	三陸町	82	志なしが沢	遺跡	下閉伊	縄文	縄文	宮古市
18	沖田	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	83	金浜	遺跡	下閉伊	縄文・中世	縄文	宮古市
19	十二段	貝塚	気仙	縄文・弥生・平安	縄文(施)	三陸町	84	白石	遺跡	下閉伊	縄文	縄文	宮古市
20	千歳	遺跡	気仙	縄文	縄文	三陸町	85	大付	遺跡	下閉伊	縄文	縄文	宮古市
21	粗白	遺跡	気仙	縄文	縄文	三陸町	86	崎山	貝塚	下閉伊	縄文・弥生・平安	縄文(前～中)	宮古市
22	堆錐	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	87	亘内中村	遺跡	下閉伊	縄文・弥生・平安・中世・近世	縄文(後～晩)	宮古市
23	向野	貝塚	気仙	縄文	縄文?	三陸町	88	小沢	貝塚	下閉伊	縄文・奈良	不明	宮古市
24	刈添	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	89	千瀬	遺跡	下閉伊	縄文	縄文(前)	宮古市
25	新釜	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	90	黒森町1	遺跡	下閉伊	近世	近世	宮古市
26	妙子浜	遺跡	気仙	縄文	縄文(前～中)	三陸町	91	綱ヶ崎館山	段塚	下閉伊	縄文・弥生・平安・中世	縄文・平安	宮古市
27	慈ヶ森	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	92	下在家Ⅱ	遺跡	下閉伊	近世	古代以降	宮古市
28	道尻	貝塚	気仙	縄文	縄文	三陸町	93	場合館路	遺跡	下閉伊	中世	中世	宮古市
29	野々戻	貝塚	気仙	縄文	縄文(後～晩)	三陸町	94	通路1	遺跡	下閉伊	平安	平安	宮古市
30	萬野	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～中)	三陸町	95	亘内路	遺跡	下閉伊	平安・中世	古代	宮古市
31	馬鹿Ⅱ	遺跡	気仙	縄文	縄文	陸前高田市	96	横山	遺跡	下閉伊	奈良・平安・中世	古代?	宮古市
32	門前	貝塚	気仙	縄文	縄文(中～後)	陸前高田市	97	川半	貝塚	下閉伊	縄文	不明	山田町
33	矢の瀬1	遺跡	気仙	縄文・近世	縄文	陸前高田市	98	新通	貝塚	下閉伊	縄文	不明	山田町
34	二日市	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～晩)	陸前高田市	99	大浦崎	遺跡	下閉伊	不明	不明	山田町
35	牧田	遺跡	気仙	縄文・平安	縄文(前)	陸前高田市	100	沢田Ⅱ	遺跡	下閉伊	縄文・奈良	縄文・奈良	山田町
36	株ヶ沢	貝塚	気仙	不明	不明	陸前高田市	101	大湖	貝塚	下閉伊	不明	不明	山田町
37	貝塚	貝塚	不明	縄文	縄文(中)	陸前高田市	102	延岡崎	遺跡	九戸	奈良・平安	奈良	久慈市
38	洞の沢	遺跡	気仙	不明	不明	陸前高田市	103	平沢1	遺跡	九戸	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	平安	久慈市
39	金堀	貝塚	気仙	縄文	縄文(晚)	陸前高田市	104	二子	貝塚	九戸	縄文	縄文(後～晩)	久慈市
40	岩曾	遺跡	気仙	縄文・近世	近世?	陸前高田市	105	大民1	遺跡	九戸	縄文・近世	縄文・近世	久慈市
41	大陽	貝塚	気仙	縄文	縄文	陸前高田市	106	爰生1	遺跡	九戸	近世	近世以降	久慈市
42	丸陽台	貝塚	気仙	縄文	縄文(前～中)	陸前高田市	107	大戸	遺跡	九戸	縄文	縄文	久慈市
43	久保	貝塚	気仙	縄文	縄文	陸前高田市	108	小字内	貝塚	九戸	縄文・近世	近世以降	植木町
44	越田	遺跡	気仙	縄文	不明	陸前高田市	109	上内々々々	遺跡	九戸	縄文	不明	植木町
45	袖野Ⅰ	遺跡	気仙	縄文・平安	縄文(前)	陸前高田市	110	黒マッカ	貝塚	九戸	縄文	不明	植木町
46	中沢	貝塚	気仙	不明	不明	陸前高田市	111	八木	貝塚	九戸	縄文	不明	植木町
47	中沢浜	貝塚	気仙	縄文・弥生	縄文(早～晩)・平安	陸前高田市	112	ホックリ	貝塚	九戸	縄文(晚)	縄文(晚)	植木町
48	船免1	遺跡	気仙	縄文	縄文	陸前高田市	113	横井	貝塚	九戸	縄文	縄文(後)	野田村
49	斎沢	貝塚	気仙	縄文	縄文(晚)	陸前高田市	114	山内	遺跡	九戸	縄文・奈良・平安	縄文	野田村
50	鈴	貝塚	気仙	縄文	不明	陸前高田市	115	堤内机	遺跡	九戸	縄文	不明	普代村
51	糸の原	貝塚	気仙	縄文	縄文(中～後)	陸前高田市	116	溝ノ集	遺跡	同郡	縄文	不明	花巻町
52	松峯	遺跡	気仙	平安	近世?	陸前高田市	117	石崎	貝塚	同郡	縄文	不明	花巻町
53	赤浜Ⅱ	遺跡	上閉伊	縄文	縄文(中)	大槌町	118	高倉	貝塚	同郡	縄文	縄文(後)	花巻町
54	芦館	遺跡	上閉伊	中・近世	中世	大槌町	119	下余森	遺跡	同郡	縄文・古墳	不明	花巻町
55	佐賀	遺跡	上閉伊	縄文	縄文(前～中)	大槌町	120	中津	遺跡	同郡	縄文・弥生	縄文(後)～弥生	花巻町
56	崎山坪元	貝塚	上閉伊	縄文	縄文(中～後)	大槌町	121	貝島	貝塚	同郡	縄文・弥生	縄文(中～晩)	花巻町
57	ヤカタ浜	遺跡	上閉伊	縄文	縄文?	釜石市	122	白浜	貝塚	同郡	縄文	縄文(後)	花巻町
58	薪片岸1	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市	123	之上川橋	遺跡	同郡	縄文	縄文(早)	藤沢町
59	片岸	貝塚	上閉伊	縄文	不明	釜石市	124	鶴田1	遺跡	その他の	縄文	不明	藤沢町
60	小磯崎	貝塚	上閉伊	縄文	不明	釜石市	125	秋浦Ⅱ	遺跡	その他の	不明	岩手町	
61	ヤツギ浜	貝塚	上閉伊	縄文	不明	釜石市	126	東裏	遺跡	その他の	縄文(晚)	衣川村	
62	仏ヶ崎	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市	127	五庵1	遺跡	その他の	縄文(晚)	津法寺町	
63	大沢	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市	128	貝がら谷池	貝塚	その他の	不明	浦沢村	
64	シメノ浜	遺跡	上閉伊	縄文・平安	不明	釜石市	129	山之内Ⅱ	遺跡	下閉伊	縄文	縄文(中)	山田町
65	赤坂	遺跡	上閉伊	縄文	不明	釜石市							

第2章 岩手県内貝塚の概要

(1) 全体概要

本書で報告する岩手県内貝塚は全部で129箇所である。この数は、昭和61年度に岩手県立博物館で実施した岩手の貝塚展における約60箇所、平成9年度岩手県遺跡基本台帳による67箇所を大きく上回っている。これは、今回の調査によって新たに確認されて追加された貝塚があることにもよるが、「貝塚」をどのように定義し、調査対象をどの範囲まで広げているかによる部分が大きい。

今回は、まず、古代までの遺跡において貝層等が確認されている場合は調査の対象としている。中世以降については、貝層等がまとまって確認されている城館跡等について調査を実施している。また、所属時期が明らかでない貝層についても一部収録している。さらに、内陸部において貝塚と同様の性格を有すると考えられる、動物骨等を含む遺物包含層については、主に縄文時代の遺跡を調査の対象とした。

調査の項目は、33頁以下の表に掲げたものに加え、遺跡全体の規模及び個々の貝層の位置や規模とした。調査を実施した全ての貝塚について、それぞれA4版両面刷りの調査カードを作成したが、個々の貝塚による情報量の差が大きく、一律な報告形式が困難であることなどから、調査歴等が十分である程度貝塚の内容が把握されている貝塚と、それ以外の貝塚とを別形式で報告せざるをえなかつた。また、地形図に示した遺跡の範囲と貝層の位置及び範囲については、主に地表面調査に基づく推定の場合が多いことから、今後変更される可能性を有している。なお、現地踏査の結果、すでに遺跡が壊滅状態等の理由で遺跡範囲・貝層位置が不明確な貝塚が存在している。これらについては、地域における聞き取り調査や過去の調査を基に遺跡範囲等を復元した場合がある。

岩手県内の貝塚分布及び内容の特徴等については、次頁以下に示すとおりである。ここでは概略のみ記す。所属時期の明らかな貝塚のうち、縄文～弥生時代に属するものは107箇所である。このうち、約半数は広田湾・大船渡湾・綾里湾・越喜来湾等気仙地方に分布する。これらの地域の貝塚は、複雑な海岸線の入り江や丘陵上に立地する。貝層規模も大きく、貝塚として古い時代から知られているなど、地表から容易に確認される場合が多い。

一方、宮古以北では、2、3の大規模な貝塚を除いては、竪穴住居跡中に小規模な貝層が形成されているなど、発掘調査が実施されて明らかとなった貝塚も少なくない。特に、宮古湾以北から久慈湾にかけては発達した海岸段丘上に立地する貝塚が多く、気仙地区と大きく異なっている。この両地方の中間地域である釜石・山田方面では、山田湾・船越湾の貝塚が海岸に面する緩斜面など比較的低い立地を示すのに対し、釜石付近では御箱崎半島や尾崎半島の丘陵地帯に立地する場合が多いなど、三陸海岸全域の中でも特異な立地を示していることから、今後さらに調査を継続する必要がある。

また、花泉町を中心に形成されている貝塚群は宮城県北部より連続するもので、淡水系の貝塚である。これらの貝塚は、古湖沼に張り出す丘陵尾根先端を中心に形成される。北上川上流域にも從来縄文時代の淡水系の貝塚として報告してきたものがあるが、確実な時代比定は困難であった。

古代以降の貝塚は、発掘調査の増加とともに事例も増加傾向にある。古代の貝塚は、遺物包含層とともに形成されている例と竪穴住居跡等遺構内に形成されるものとが確認できる。中・近世貝層の場合は、貝層中に遺物を含まない場合が多いため、明確な時期を把握できない。城館跡内部に形

成されている場合は、位置関係などから中世の貝層として認識できる場合もある。また、単独の貝層で、周辺部に遺物等の散布が見られない場合は、主に近世以降と推定している。貝の種類も縄文時代に比較すると限定される傾向にある。

(2) 気仙地区の概要

岩手県の沿岸南部に位置する気仙地区は、旧気仙郡の、大船渡市・陸前高田市・住田町・三陸町の二市二町の範囲を示している。貝塚は、内陸部の住田町を除く太平洋沿岸の二市一町に分布し、岩手県内では最も多く所在しているエリアである。海岸線は、岬と奥深い入り江が交互に連続して屈曲し、さらに北上高地が海岸まで迫り断崖となる複雑化かつ変化に富んだリアス海岸地形の典型となっている。貝塚の多くは、海岸部に迫りてた丘陵上に形成されるが、湾の奥まった場所にも見られる場合もある。言うまでもなく、気仙地区を中心とする三陸海岸南部一帯は、仙台湾、東京湾や伊勢湾周辺とともに全国有数の縄文貝塚の密集地帯として知られている。しかし、この一帯は海浜での貝類の採取のほか、とくに釣針や鉛などの骨角製漁具が極めて高度に発達し、先進的かつ活発な漁撈活動が展開された様相を示している。

本地区的貝塚研究は、岩手の考古学研究の歩みとともにあり、明治時代に遡る。野中完一や八木樊三郎らの来訪や、地元陸前高田市出身の博物学者・鳥羽源蔵、浄法寺出身の小田島禄郎らの報告によって全国に紹介された。大正末年には内務省調査官・柴田常惠が本地区一帯を踏査し、これにより蛸ノ浦貝塚、下船渡貝塚、中沢浜貝塚が国の史跡に指定されている。また大正末年から昭和初年にかけては縄文人骨の研究のための調査地とされ、戦後は骨角製漁具の研究対象とされ、多くの重要な情報を学会に提供してきた。とくにも大洞貝塚での東北地方の縄文時代晚期土器の編年研究は、土器編年研究の基礎を築いた、日本考古学史上エポックメーリングの重要研究として有名である。

まず、本地区における縄文貝塚の立地・形成の動向を概観したい。縄文時代早期の貝塚は、気仙地方では確認されていない。早期の遺跡自体が少ないが、大船渡市日頃市町の県指定史跡・閑谷洞窟住居跡では、いわゆる貝層は伴っていないが、石灰岩洞窟のなかからハマグリなどの貝類の出土が確認されている。

縄文時代前期になると、海岸部での遺跡分布が多くなり、あたかも海の幸を目指すように集落が海岸部へ進出する。当然、水産資源を目当てとした貝塚が出現し、宮野貝塚、清水貝塚、蛸ノ浦貝塚、牧田貝塚などの貝塚が形成される。そして中期にかけては、全国的な趨勢とも合致するように、三陸海岸でも一部で巨大貝塚が形成される。この時期の巨大貝塚の代表的なものとして蛸ノ浦貝塚があげられ、貝層の分布範囲・層厚つまり貝の総量からしても岩手県では最大、日本でも屈指の巨大貝塚である。蛸ノ浦貝塚規模の貝塚は、岩手県では稀有な例である。

後期からは、それまでの海岸部に集中した集落形成に陰りが見えはじめ、山間部での遺跡分布が密になり、海岸部から山間部への集落の移動が始まる。それに伴い貝塚の数は減少し、規模的にも縮小化が見られてくる。

後期末から晩期に入ると、海岸部に立地する遺跡がほとんど見られなくなり、数箇所の貝塚が残されるのみとなる。遺跡の分布は、ほぼ山間部に集中していく。集落の形成は、標高の高い山間部に小規模に散在する。水産資源への魅力がなくなったのであろうか、狩猟採集経済のなかでもより安定した山の幸へ関心が移ったのであろうか。数箇所に残された貝塚も、中期頃のものと比べて小規模となる。反面、その時代の趨勢逆行するかたちで、大洞貝塚、下船渡貝塚などの漁撈集落が

海岸部に局部的に営まれ、そこでは骨角製漁具のバラエティーに見られるように漁撈技術の創意工夫と進歩が予想され、より専門的な漁撈集団の活躍を想起させている。

晩期においての貝塚の立地形成は、それ以前の貝塚とは異なって、遺跡の全体的な立地とは別に見られることから、今後の調査研究ではその特異性を意識しつつ、遺跡の性格つまり縄文晩期社会のなかでの貝塚集落のあり方を追究していく必要があると考えられる。

本地区に所在する縄文貝塚は、外洋性貝塚とも言われ、単なる貝類の採取のみならず、マグロやスズキなどの魚類が捕獲され、また骨角製漁具も豊富で、全国でも最も高度に発達した漁撈活動が営まれていたことが知られている。

漁獲と漁撈技術の傾向を見る。蛸ノ浦貝塚や中沢浜貝塚で見られるように縄文時代前期、中期の貝塚では、万遍なく貝層から魚骨を検出でき、かつ厚い魚骨層の形成も見られる。蛸ノ浦貝塚では、中期中葉の貝層で、厚さ5cm前後のマグロの魚骨層が貝層断面を横断するように細長く見られ、一時的に、極めて大量のマグロが捕獲されたことを示している。しかし、晩期の貝塚では魚骨が「層」にまで堆積することはほとんど見られず、魚骨の多くは貝層のなかに含まれ、貝層のシーピングで検出される。

さて、本地区から出土した骨角器の3割強は、釣針、鈎、ヤスなどの魚獲りの道具である。釣針は、前期以来の魚具の定番であり、本地区では漁具の5割強を占め、釣り漁の盛行を物語る。形態を見ると、針先に返しのない釣針から、針先の内外に返しを作るものへと形状的には複雑かつ巧妙化していくが、大きさとしては晩期には小型化する。鈎、ヤスなどの刺突具、漁法上の見突き漁用具は、中期末葉から次第に見られるようになる。中期末葉には南境型の離れ鈎が出現し、以後離れ鈎の工夫改良が進展する。晩期になると、鈎、ヤスの発達は最高潮に達し、骨角器は多種多様なものが創意工夫され、出土数も増加する。鈎では本地区を含む南三陸の貝塚群エリアで燕形離れ鈎が発明され、構造的にも機能的にも完成される。またヤスも量的に増大し、構造的にも単式ヤスのほか挟み込み式の組合せヤスなどが工夫される。

また、本地区の縄文貝塚から網漁（抄い網漁は除く）の存在を予想させる遺物（石錘、土錘など）の出土は見られない。釣針・鈎などは1個の道具で1個体の魚を獲るというある意味では非効率な魚具であるが、それに引き換え網は1個の道具で複数の獲物、大量捕獲を期待できるかなり効率的な漁具である。石錘などは川沿いの遺跡で発見される例が多く、それも急流に網を安定させるためか拳大以上の石錘が見られる。この地域における、縄文時代の網漁は河川で行われることがあっても、広く、底深い海洋に仕掛けるほど大きな網の製作やその設置が容易でなく、海浜では使用されなかったものと考えられる。

本地区的縄文貝塚における貝類の組成を見ると、巻貝のクボガイ・レイシガイ・スガイなどの岩礁性貝類と、二枚貝のアサリ・オオノガイ・ウチムラサキガイなどの砂泥底棲貝類のいずれかに主体貝類が偏る傾向が見られる。これは、貝塚の立地、つまりその周辺の貝類採取地の地形・生息環境を反映するものである。本地区的海岸線は、地形上、外洋に面したところは岩場で、湾奥に砂泥浜が発達する。中沢浜貝塚や大陽台貝塚など広田半島の貝塚はその多くが岩礁性貝類で構成され、大船渡湾奥の長谷堂貝塚や大洞貝塚は砂泥底性貝類で構成される。しかし大船渡湾口付近に立地する蛸ノ浦貝塚では、岩礁性と砂泥底性のいずれの貝類にもほぼ均等に依存していた折衷的な様相が見られている。このことは、貝類採取には最も好条件の立地であったことを示すものであり、それが岩手県では稀に見る巨大貝塚として形成される一因とも考えられる。また、三陸町の綾里湾奥に

立地する宮野貝塚では、後期末葉の貝層で見られた砂泥底性のアサリが、前期後半の岩礁性のイガイ主体貝層では検出されないことから、前期後半と後期末葉では綾里湾奥部の海岸に変化があり、前期には岩礁性の海岸のみであったものが、後期末には海岸線の後退に伴って一部にアサリなどが生息可能な砂泥底の干潟が出現したものと推定されている。リアス海岸の複雑な地形に立地する本地区の貝塚は、貝類組成の観点でも、立地環境の地形や形成期の気候変動を反映して、一様ではないことを示している。

弥生時代以降の貝塚は、生活基盤が漁撈採集生活から農耕社会へと移行し、大量の貝の消費・廃棄が行われなくなったことにより数を減じ、規模も小さくなる。弥生時代には、長谷堂貝塚や中沢浜貝塚より、縄文時代との複合遺跡として遺構や遺物包含層が検出されているが、未だ貝層は発見されていない。

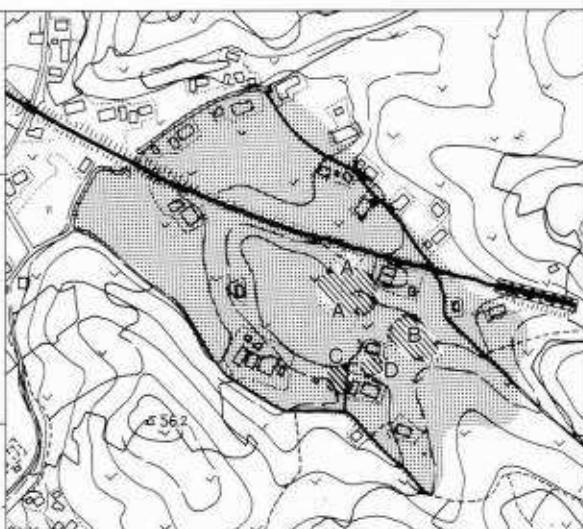
古代から近世にかけての貝塚は、陸前高田市で岩倉貝塚・館貝塚・矢の浦貝塚など数箇所が見つかっているが、伴出遺物がなく、詳細な時期はすべて不明である。この時期の貝塚を構成する貝種は、縄文期のものと比べ種類が限定される傾向がある。岩倉貝塚ではエゾアワビ、館貝塚ではマガキを主体とし、他にはイガイやレイシガイなど数種の貝が混入するのみである。それまでの時代に比して、より選択的な貝の採集が行なわれていたのであろう。

気仙地区での科学的な分析等を用いた貝塚研究は、まだ途についたばかりである。今後の研究が待たれる。

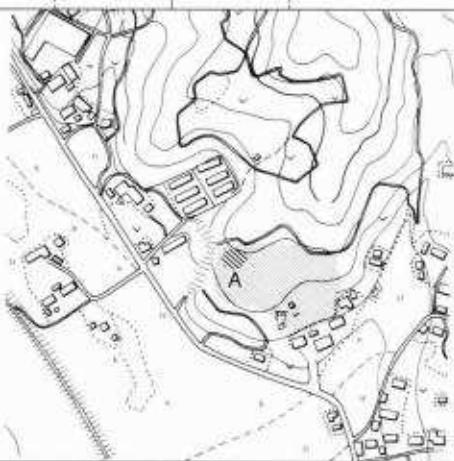
表 凡 例

33頁以下の表は、各地区の貝塚を個々にまとめたものである。各項目の記載内容は以下のとおりである。

No.	：岩手県内貝塚の通し番号
遺 蹤 名	：岩手県遺跡基本台帳に登録されている遺跡名（）内は別称
所 在 地	：遺跡の所在する市町村字名地番等（）内は詳細図No
図 幅	：国土地理院発行1/50000地形図番号
立 地	：自然堤防、微高地、段丘上（海岸・河岸）、台地、その他の立地に区分
標 高	：海拔高度
保 存 状 況	：良好、一部破壊、壊滅に区分
時 期	：遺跡の時代／貝層の形成時期とした。両者が同一と考えられるものは一括した 「規模」項目のない表の場合（）内に貝層規模等を示した
現 況	：遺跡及び貝層等の現状
規 模	：遺跡の規模／貝層の規模とした
調 査 歴	：過去の調査歴について主なものを記載した
遺 構	：過去の調査において確認された遺構を記載した。必ずしも貝層と関連しているものではない
人 工 遺 物	：過去の調査及び今回の調査によって確認された人工遺物を記載した。必ずしも貝層と関連しているものではない。
自 然 遺 物	：過去の調査及び今回の調査において確認されている自然遺物
資 料 保 管	：出土資料が保管されている機関等
文 献	：巻末の文献一覧の番号を記載した
備 考	：その他注意すべき事項について記載した
地 形 図	：1/5000を原図として使用しているが、提示した縮尺は1/7500である。遺跡範囲はアミで示し、貝層範囲は斜線で示した。それぞれの範囲について、一部不明なものがある
写 真	：遺跡の現況写真等

No.	I	遺跡名	大洞貝塚（舞良貝塚） (おおほら)	[N F 49-1341]	
所在地	大船渡市赤崎町字大洞	23	図幅	N J -54-14-6, 盛	
立地	段丘上(河岸)	標 高	15~25m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(中・後・晩)・弥生／縄文晩期	現 態	宅地・畠地		
規 模	200m×200m / (A・A' 地点25×30m晩期末, B 地点15×20m晩期前半, C 地点15×25m晩期中葉, D 地点10×20m晩期)				
調査歴	昭和元(1925)年-山内清男・小田島碌郎・小金井良精・大山柏・松本彦七郎・広瀬啓介・八幡一郎, 昭和31(1956)年、江坂輝弥・吉田義昭・東登, 昭和33(1958)年-西村正衛				
遺 構	配石遺構(D地点)				
人工遺物	土器(大木9, 十腰内Ⅲ・Ⅳ式, 大洞B・BC・C1・C2・A・A'式)・石器(石鎌・磨製石斧)・骨角器(釣針・鋸・彎形角製品・イノシシ牙製垂飾品ほか)				
自然遺物	アサリ・ホタテ・ウチムラサキ・オニアサリ・マグロ・マダイ・スズキ・シカ・イノシシ・タヌキ・キツネ・ニホンオオカミ				
資料保管	大船渡市立博物館・慶應大学・岩手県立博物館(小田島コレクション)・天理参考館				
文 献	64・94・131・132・171・173・176・195・238・354				
備 考	• 平成6年度より市教委による範囲確認調査を実施中 • 昭和41年 県指定史跡				
					
					

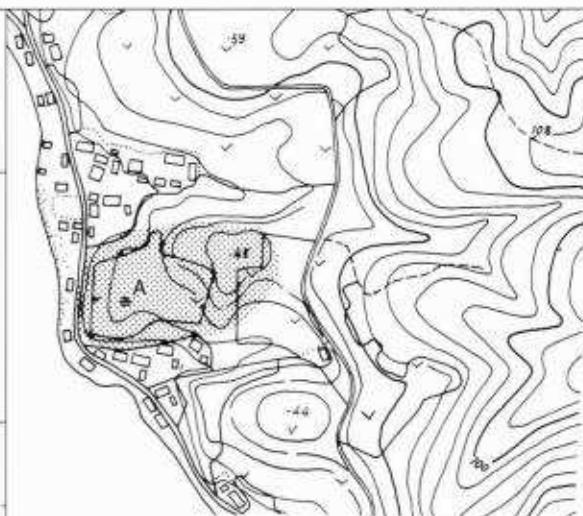
No.	2	遺跡名	沢田貝塚 (さわだ) [N F 39-2152]		
所在地	大船渡市赤崎町字沢田	(23)	図幅	N J - 54-14-6, 盛	
立地	丘陵	標 高	20~30m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (前・中) / (A地点5×5m時期不明)		現 態	宅地・畠地・荒蕪地	
文 献	173・ 354	遺 物	人工…土器, 自然…アサリ		[大船渡市立博物館]



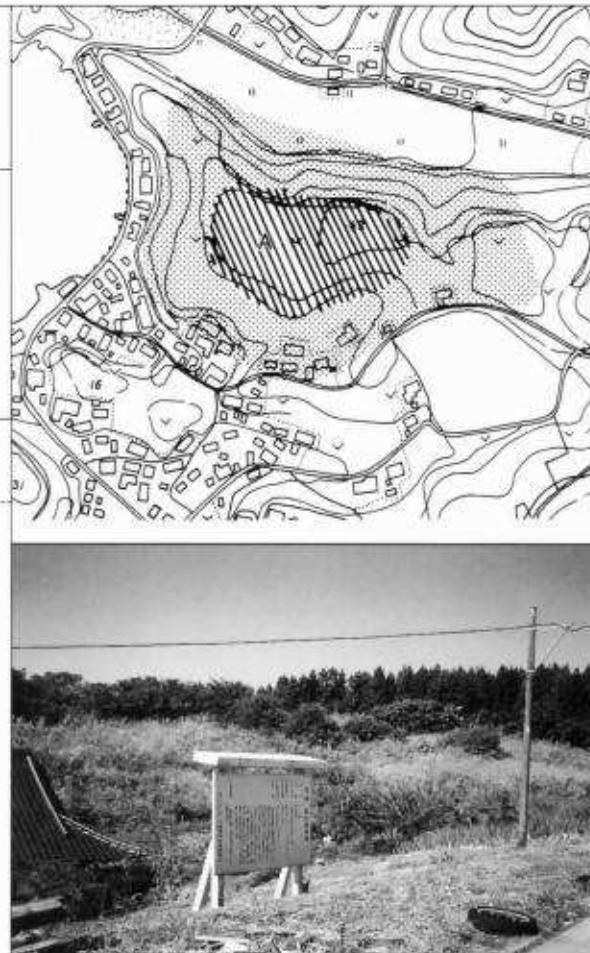
No.	5	遺跡名	中井貝塚 (なかい) [N F 39-1098]		
所在地	大船渡市赤崎町字中井	(23)	図幅	N J - 54-14-6, 盛	
立 地	丘陵	標 高	30~40m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (前・中・後), 平安 / 縄文 (中)		現 態	宅地・畠地	
文 献	173 242 354	遺 物	人工…土器, 自然…不明		[大船渡市立博物館]



No.	3	遺跡名	清水貝塚 (しず) [NF59-1235]	
所在地	大船渡市赤崎町字清水	23	図幅	N J - 54-14-6, 盛
立地	段丘上(河岸)	標高 40m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(前・中)／縄文(前～中)		現況	宅地・畠地・道路
規模	50m×50m／(A地点0.5m×0.5m)			
調査歴	昭和27(1952)年－江坂輝弥・東登, 昭和30(1955)年－早稲田大学, 昭和51(1976)年－岩手県教育委員会			
遺構				
人工遺物	土器(大木4～7式) 石器(石鎌・磨製石斧) 骨角器(釣針・骨ヘラ・角ヘラ・骨針・貝輪)			
自然遺物	ヒメエゾボラ, ミガキボラ, アカニシ, レイシ, イボニシ, ツメタガイ, エゾタマガイ, ウミニナ, タマキビ, フジツボ類, カニ, ウニ類, サメ類, マイワシ, マグロ, カツオ, ブリ, マダイ, スズキ, ガンカモ科, イノシシ, ニホンジカ, イルカ, クジラ, 他			
資料保管	大船渡市立博物館			
文献	138・157・173・231・354			
備考	・県道工事により貝層はほぼ壊滅			



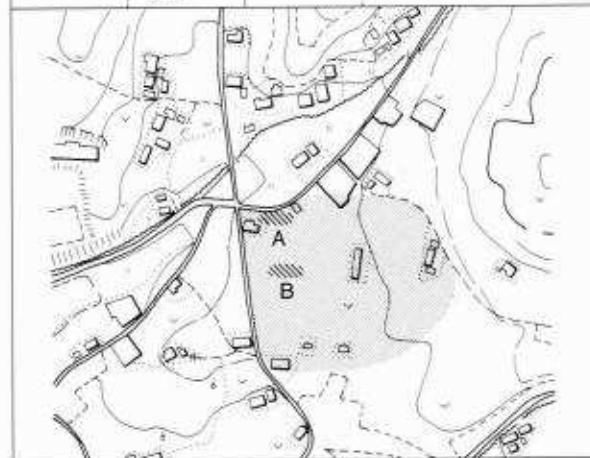
No.	4	遺跡名	蛸ノ浦貝塚 (たこのうら) [N F 59-1286]					
所在地	大船渡市赤崎町字蛸ノ浦	23	図幅	N J - 54-14-6, 盛				
立地	段丘上(河岸)	標 高	40m	保存状況	良好			
時 期	縄文 (前～中)		現 況	畠地・原野				
規 模	200m×200m／(A地点150m×100m, 縄文(前～中))							
調査歴	大正13(1924)年—菅野義之助, 同年—柴田常恵・小田島祿郎, 昭和32(1957)年—西村正衛, 昭和56(1981)年—及川洵・金子浩昌・金野良一							
遺構	竪穴住居跡							
人工遺物	土器(大木4・6・8a・8b・9・10式)・石器(石鎌・磨製石斧・石匙・搔器)・骨角器(骨ヘラ・釣針)							
自然遺物	マグロ・スガイ・ウミニナ・タマキビ・サザエ・チヂミボラ・レイシガイ・アカニシ・ホタテ・ウチムラサキ・アサリ・オニアサリ・カガミガイ・イノシシ・シカ							
資料保管	大船渡市立博物館・早稲田大学・岩手県立博物館(小田島コレクション)・天理参考館							
文 献	148・173・181・238・252・322・354							
備 考								
<ul style="list-style-type: none"> • 昭和9年 国指定史跡 • 昭和55年 保存管理計画策定 								



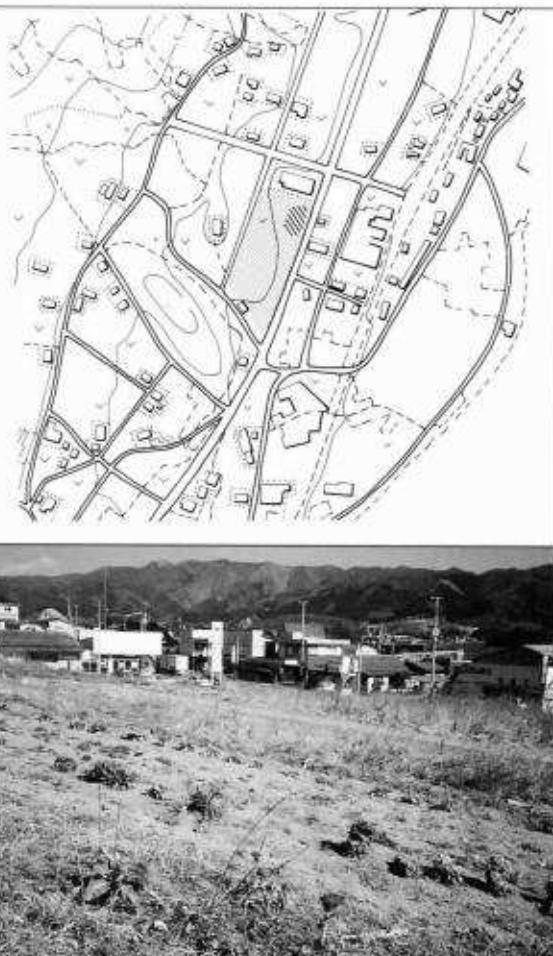
No.	6	遺跡名	長崎貝塚 (ながさき) [NG 60-0040]		
所在地	大船渡市赤崎町字長崎	(20)	図幅	N J -54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高	40m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (晩)			現況	宅地・畑地・道路
文献	173 354	遺物	人工…土器 (大洞C2式) 〔大船渡市立博物館〕		



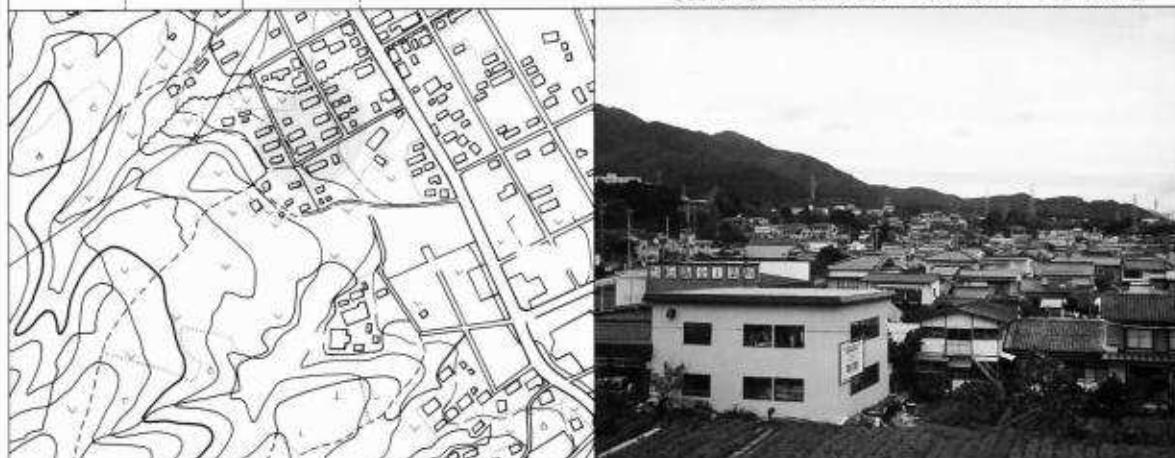
No.	7	遺跡名	長谷堂貝塚 (はせどう) [NF 39-1151]		
所在地	大船渡市猪川町字長谷堂ほか	(23)	図幅	N J -54-14-6, 盛	
立地	丘陵	標高	25~30m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (前一晩)・弥生 / (A 10×10m, B 10×30m 縄文中期)			現況	宅地・畑地
文献	158 173 220 354	遺物	人工…土器 (縄文中期中葉・後期中葉・晩期)・石器 (石鎌・石斧), 自然…アサリ・ウミニナ・マガキ 〔大船渡市教育委員会, 早稲田大学ほか〕		



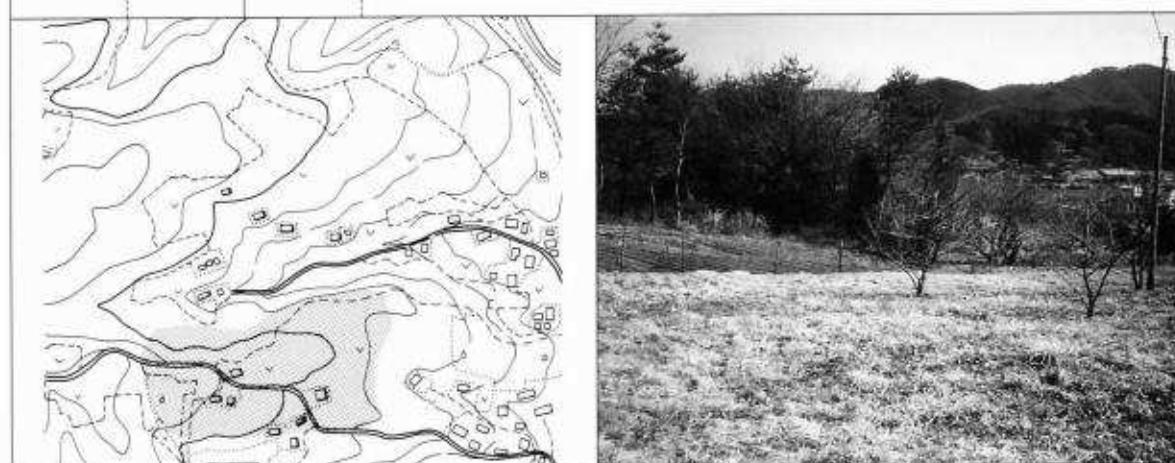
No.	8	遺跡名	下船渡貝塚（しもふなと） [NF 59-1068]										
所在地	大船渡市大船渡町字宮ノ前			23	図幅 N J - 54-14-6, 盛								
立地	丘陵	標高	20m	保存状況	一部破壊								
時期	縄文(後~晩)~弥生/縄文(後~晩)	現況	畠地・道路										
規模	60m×150m/20m×35m												
調査歴	大正13(1924)年-柴田常恵・小田島祿郎, 昭和36(1961)年-江坂輝弥・草間俊一・東登												
遺構													
人工遺物	土器(大洞式・谷起島式), 石器												
自然遺物	マグロ・マダイ・イルカ・シカ・イノシシ・アカニシ・レイシ・アサリ・ホタテ												
資料保管	大船渡市立博物館・岩手県立博物館(小田島コレクション)・天理参考館												
文献	167・173・190・354												
備考													
<ul style="list-style-type: none"> • 昭和9年 国指定史跡 • 昭和55年 保存管理画策定 													



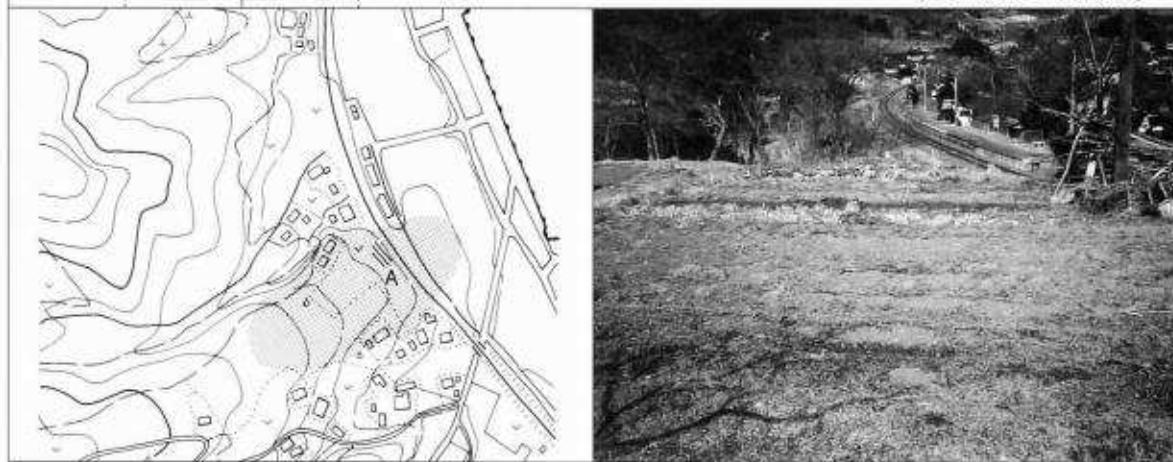
No.	9	遺跡名	富沢Ⅰ・Ⅱ貝塚 (とみざわ) [NF49-0093・NF49-0094]				
所在地	大船渡市大船渡町字地ノ森富沢				(23)	図幅	NJ-54-14-6, 盛
立地	段丘上(河岸)	標高	10m	保存状況		壊滅(貝層は2地点)	
時期	縄文(晩)				現況	宅地	
文献	354	遺物	人工…土器(縄文晩期)・石器(石鏃・石斧)・骨角器(鈴・ヤス)・貝輪、自然…ニホンジカ・イノシシ・鹿角・アサリ・ウチムラサキ・マガキ・アカニシ [岩手県立博物館, 大船渡市立博物館]				



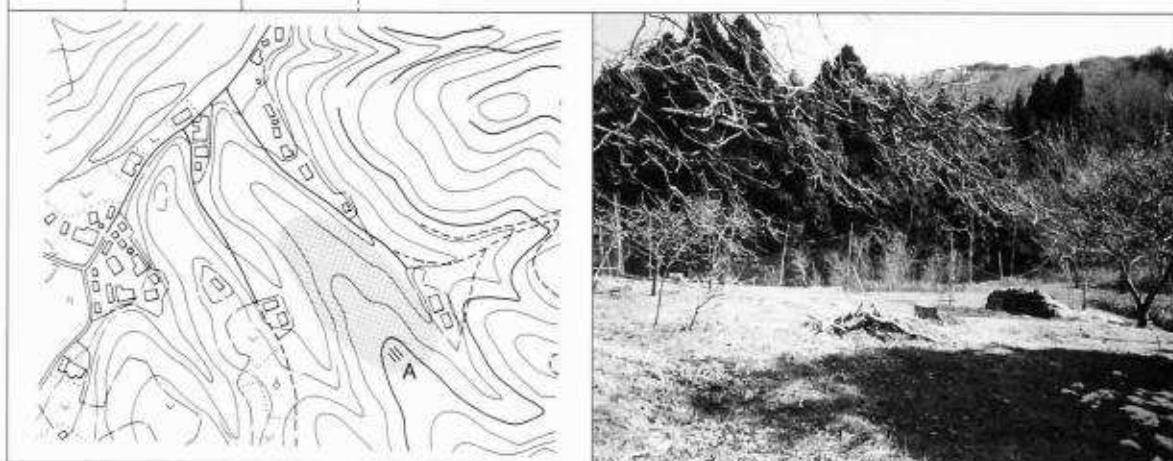
No.	10	遺跡名	内田貝塚 (うちだ) [NF69-0060]				
所在地	大船渡市末崎町字内田				(23)	図幅	NJ-54-14-6, 盛
立地	丘陵	標高	40~60m	保存状況		一部破壊	
時期	縄文(前・中)				現況	宅地・畠地・山林・荒蕪地	
文献	173 354	遺物	人工…土器・石器(石鏃・石匙・削器・石斧), 自然…シカ・マグロ・キンチャクガイ・アカザラガイ・チヂミボラ・レイシ・アサリ [大船渡市立博物館]				



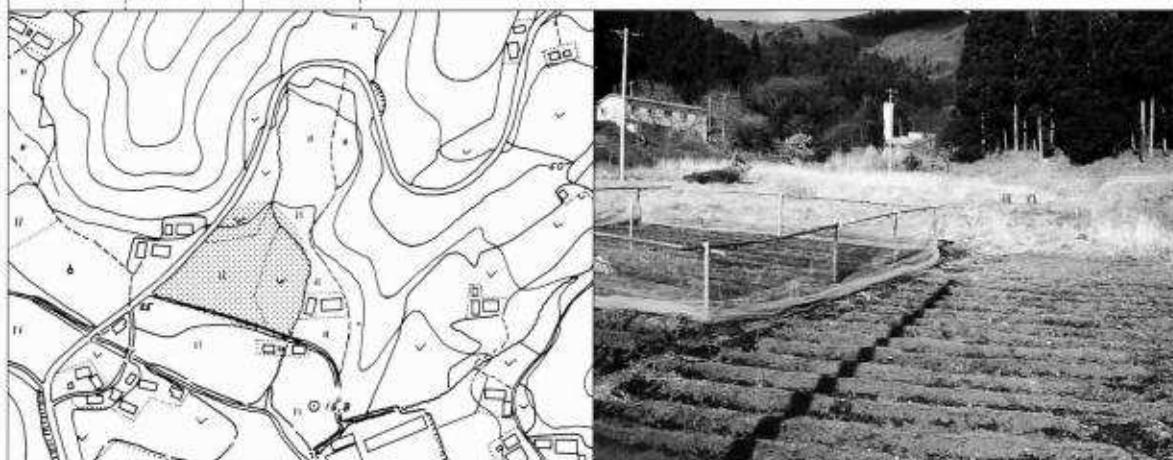
No.	11	遺跡名	細浦上ノ山貝塚 (はそらうえのやま) [NF69-1025]		
所在地	大船渡市末崎町字細浦			(23)	図幅 N J - 54-14-6, 盛
立地	丘陵	標高	15~30m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(中・後・晩)／(A地点15×15m, 縄文中～晩)			現況	畠地・荒蕪地・鉄道
文献	33・37・ 38・48 ほか	遺物	人工…土器・石器(石鎌・石槍・石斧)・骨角器(釣針・叉状角器・骨針・鱗骨製骨器・骨匙), 自然…シカ・イノシシ・マガキ・アワビ・ウチムラサキ・アサリ・ヒメシラトリ・ミガキボラ・チヂミボラ・ヒレガイ・ウミニナ・ツメタガイ・エゾタマガイ		[大船渡市立博物館]



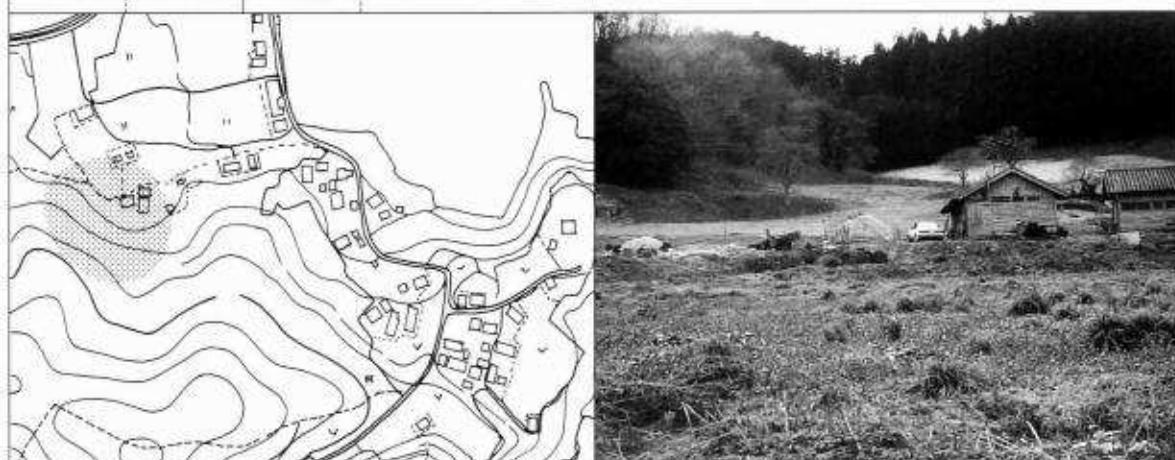
No.	12	遺跡名	鬼沢貝塚 (山岸貝塚) (おにざわ) [NF69-1151]		
所在地	大船渡市末崎町字山岸			(23)	図幅 N J - 54-14-6, 盛
立地	丘陵	標高	30~50m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(後)／(A地点10×10m, 縄文(後))			現況	宅地・畠地
文献	173 354	遺物	人工…土器・骨角器(貝輪), 自然…アサリ・シジミ・鹿角		[大船渡市立博物館]



No.	13	遺跡名	小出貝塚 (こいで)	[NG 21-1009]
所在地	気仙郡三陸町越喜来字小出	(19)	図幅	N J -54-14-2, 綾里
立地	台地	標 高	50m	保存状況
時 期	縄文 (中・後)			現 態
文 献	173 354	遺 物	人工…土器 (大木10式・門前式) ・石器 (搔器) [大船渡市立博物館]	



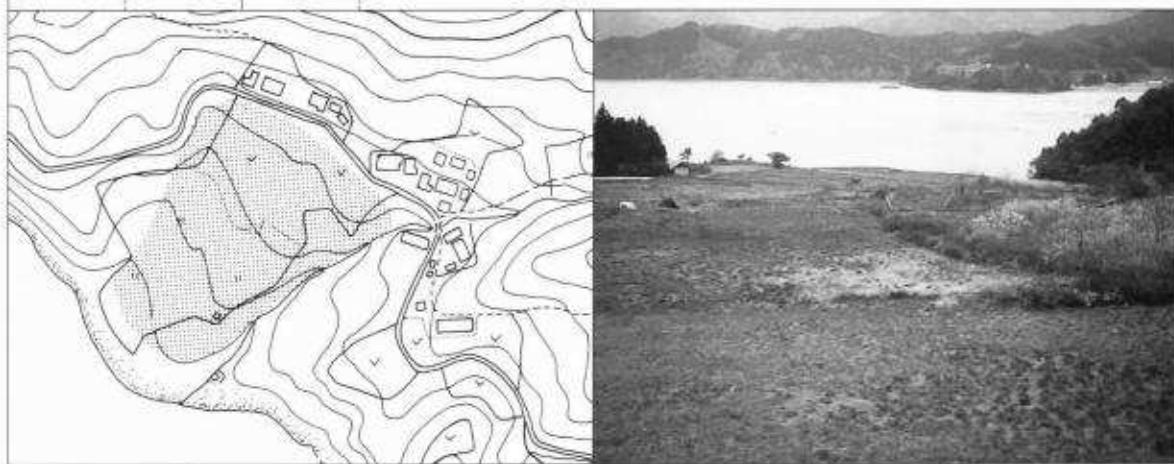
No.	14	遺跡名	泊貝塚 (とまり)	[NG 21-2094]
所在地	気仙郡三陸町越喜来字泊	(19)	図幅	N J -54-14-2, 綾里
立 地	台地	標 高	30m	保存状況
時 期	縄文 (後・晚)			現 態
文 献	173 354	遺 物	人工…土器 (加曾利B式・大洞A式) ・石器 (異形石製品・ 搔器), 自然…獸骨片 (種不明) [大船渡市立博物館]	



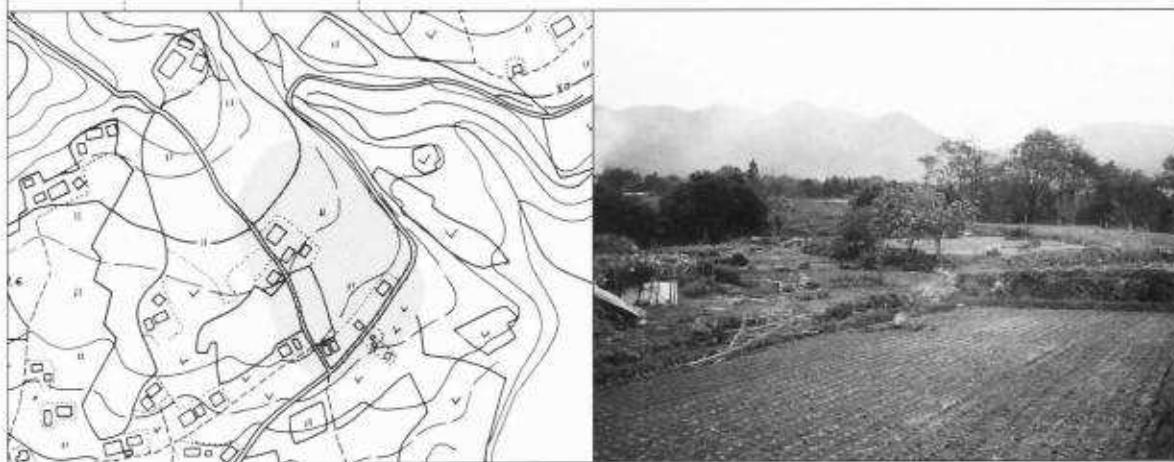
No.	15	遺跡名	中村貝塚 (なかむら) [NG 21-2104]		
所在地	気仙郡三陸町越喜来字中村	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標 高	40m	保存状況	一部破壊
時期	縄文			現 況	宅地・道路
文献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (大木8b式) ・石器 (石匙・搔器) [大船渡市立博物館]		

No.	16	遺跡名	藤野田貝塚 (ふじのだ) [NG 21-2222]		
所在地	気仙郡三陸町越喜来字浪板	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標 高	150m	保存状況	良好
時期	縄文 (中)			現 況	山林
文献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (大木7式) ・石器 (石鍬・石刀) [大船渡市立博物館]		

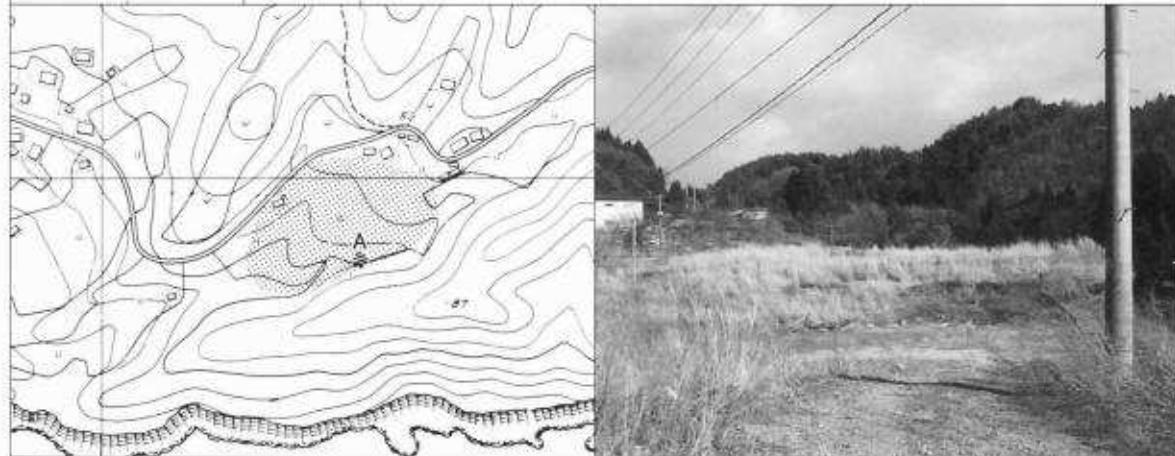
No.	17	遺跡名	浪板貝塚 (なみいた) [NG 21-2240・NG 21-2277]		
所在地	気仙郡三陸町越喜來字浪板	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高 40m	保存状況	一部破壊	
時期	縄文 (後)		現況	宅地・水田・畑地	
文献	173 344 354	遺物 人工…土器 (十腰内I式・加曾利B式)		[大船渡市立博物館]	



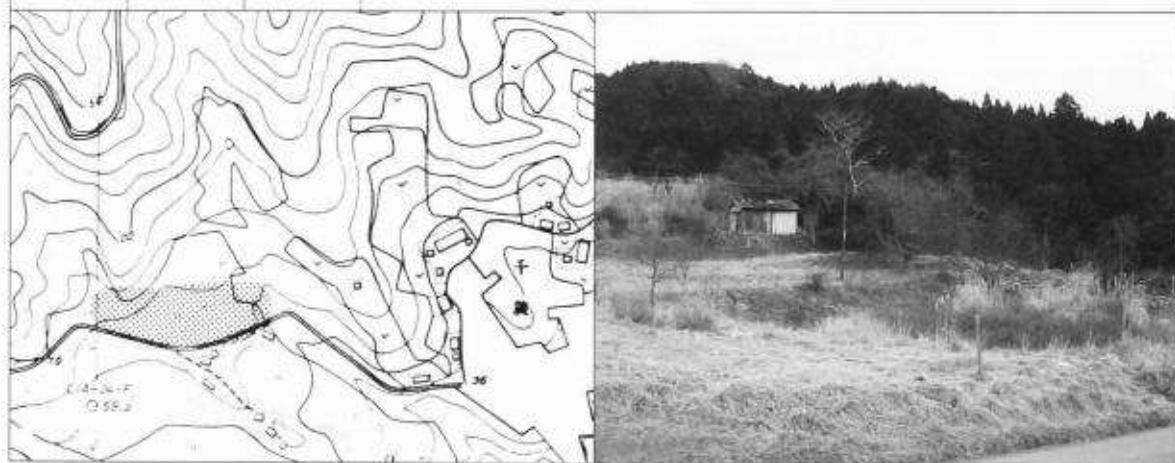
No.	18	遺跡名	沖田貝塚 (おきた) [NG 21-0391]		
所在地	気仙郡三陸町吉浜字沖田	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高 30m	保存状況	一部破壊	
時期	縄文 (前・中)		現況	宅地・水田	
文献	173 344 354	遺物 人工…土器 (大木5式) ・石器 (ビエス・エスキーユ)		[大船渡市立博物館]	



No.	19	遺跡名	十二役貝塚 (じゅうにやく) [NG12-0156]				
所在地	気仙郡三陸町吉浜字十二役			(19)	図幅 NJ-54-14-2, 縮尺		
立地	台地	標高	60m	保存状況	一部破壊		
時期	縄文(後・晩)・弥生・平安(A地点1.5 × 1.5m 晩期)		現況	宅地・水田・畑地			
文献	173 344 354	遺物	人工…土器(十腰内IV・V群, 大洞B C式・C2式), 石器(石 鏃)				
			[大船渡市立博物館]				



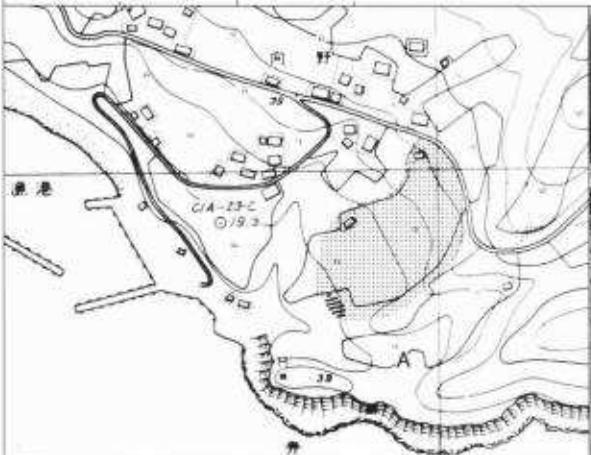
No.	20	遺跡名	千歳遺跡 (せんざい) [NG02-2376]				
所在地	気仙郡三陸町吉浜字千歳			(19)	図幅 NJ-54-14-2, 縮尺		
立地	台地	標高	40m	保存状況	一部破壊		
時期	縄文(中・後)		現況	宅地・水田			
文献	173 344 354	遺物	人工…土器(大木10式・門前式・加曾利B式), 石器(搔器)				
			[大船渡市立博物館]				



No.	21	遺跡名	根白遺跡 (こんぱく) [NG 12-0026]				
所在地	気仙郡三陸町吉浜字根白			(19)	図幅 N J - 54 - 14 - 2, 綾里		
立地	台地	標 高	50m	保存状況	一部破壊		
時 期	縄文 (中・後) / (A地点3×5m, 縄文)		現 態	宅地・水田・畑地・道路			
文 献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (縄文中・後期)・石器 (石鎌・石錐・石匙・磨製石斧)				
[大船渡市立博物館, 三陸町教育委員会]							

No.	22	遺跡名	増館貝塚 (ますだて) [NG 22-0000]				
所在地	気仙郡三陸町吉浜字増館			(19)	図幅 N J - 54 - 14 - 2, 綾里		
立地	台地	標 高	100m	保存状況	一部破壊		
時 期	縄文 (後・晩) / 縄文		現 態	宅地・水田・畑地			
文 献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (十腰内IV・V群, 大洞A式)・石器 (石鎌・石槍・石匙・石錐・搔器・石斧・石棒・垂飾品)				
[大船渡市立博物館]							

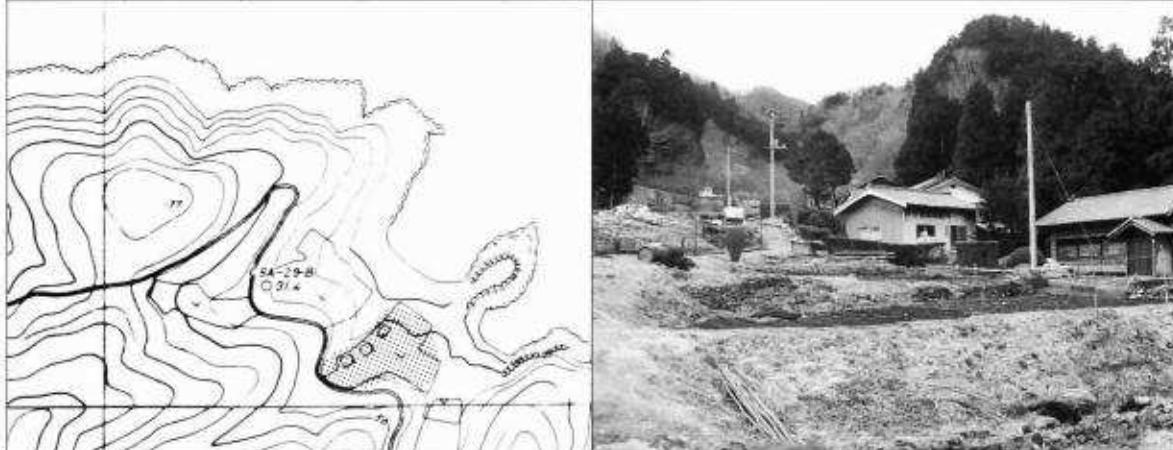
No.	23	遺跡名	向野貝塚 (むかいの) [NG 12-0164]		
所在地	気仙郡三陸町吉浜字向野	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高	30m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (前・中)・弥生/縄文?			現況	宅地・水田・畑地
文献	173 344	遺物	人工…土器 (大木1・10式)		[三陸町教育委員会]



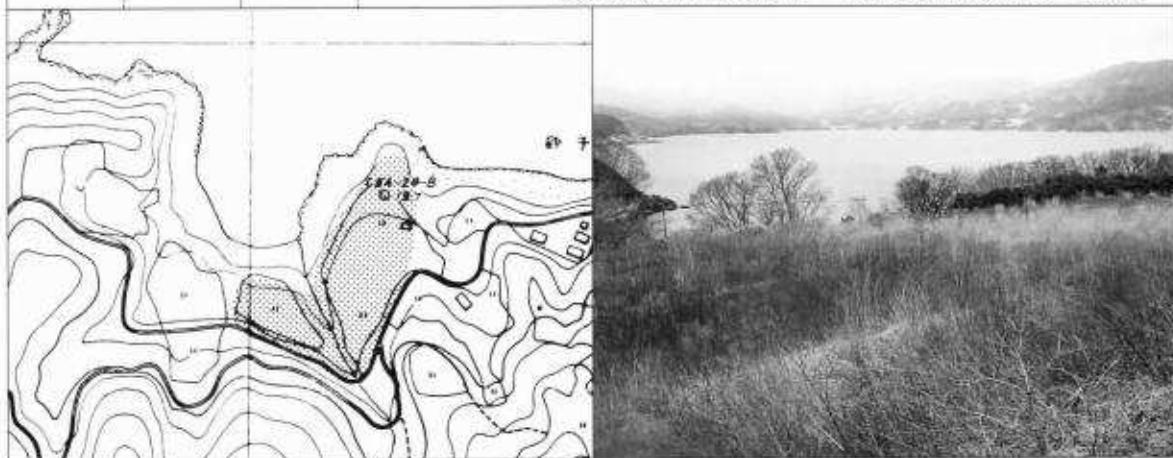

No.	24	遺跡名	向浜貝塚 (むかいはま) [NG 11-2209]		
所在地	気仙郡三陸町吉浜字横石	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高	30~50m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (中・後)/(A地点10×10m, 縄文)			現況	宅地・水田・道路
文献	173 344 354	遺物	人工…土器 (大木7式)・石器 (石鏃), 自然…イガイ・マガキ・クボガイ・チヂミボラ		[大船渡市立博物館]



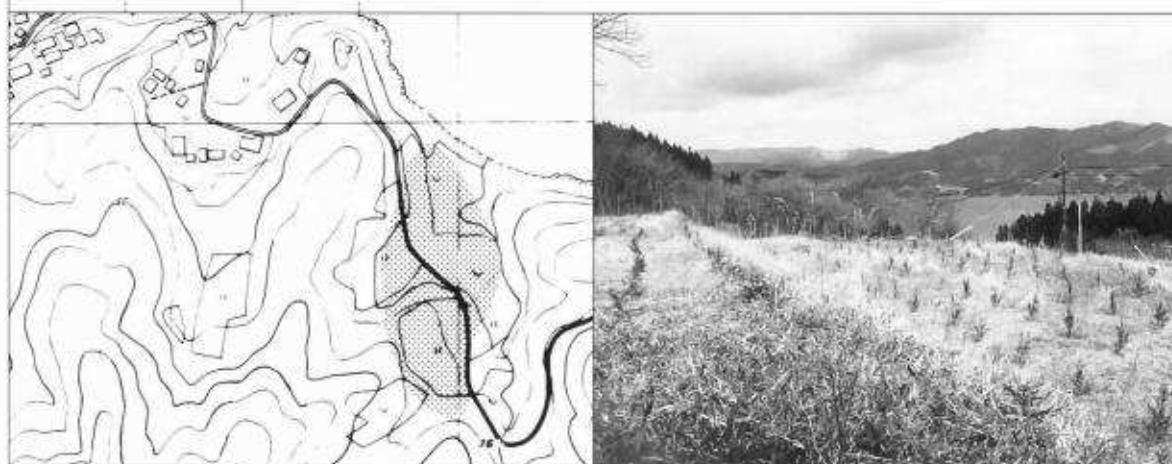
No.	25	遺跡名	新釜貝塚 (あらがま) [NG42-0097]		
所在地	気仙郡三陸町綾里字新釜			(19)	図幅 N J - 54-14-2, 綾里
立地	台地	標 高	40m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (中・後) / 縄文			現 態	宅地・水田・畑地
文 献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (大木8式・門前式) [大船渡市立博物館]		



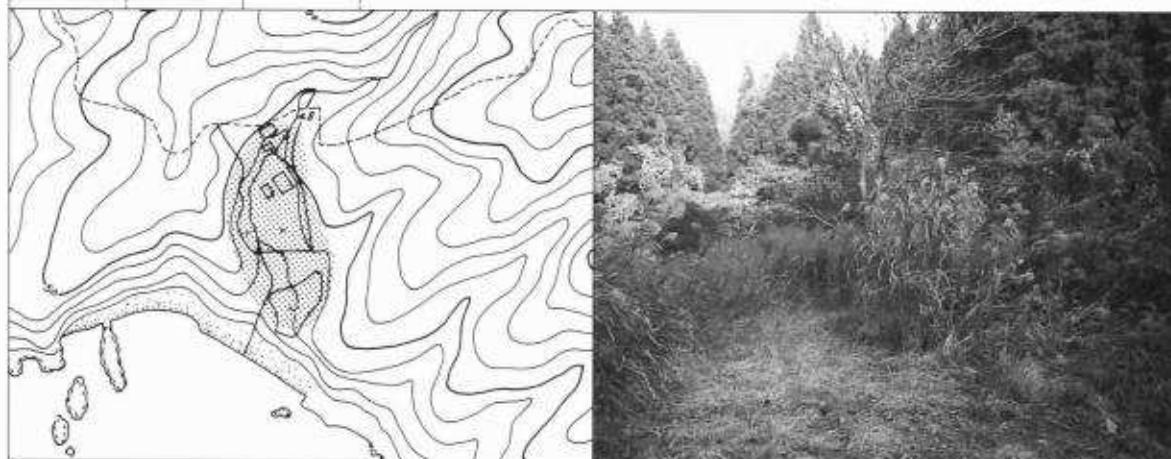
No.	26	遺跡名	砂子浜遺跡 (すなごはま) [NG41-0361]		
所在地	気仙郡三陸町綾里字砂子浜			(19)	図幅 N J - 54-14-2, 綾里
立地	台地	標 高	60m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (前～中)			現 態	宅地・水田・畑地
文 献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (大木6～9式)・石器 (石鍬・石槍・石匙・磨製石斧)・骨角器 (イノシシ牙製垂飾品)・自然…人骨・マグロ・マダイ・シカ・イノシシ・カメ・チヂミボラ・クボガイ・ウチムラサキ・ハマグリ・サビシラトリ・イガイ類・カキ [大船渡市立博物館, 三陸町教育委員会, 個人]		



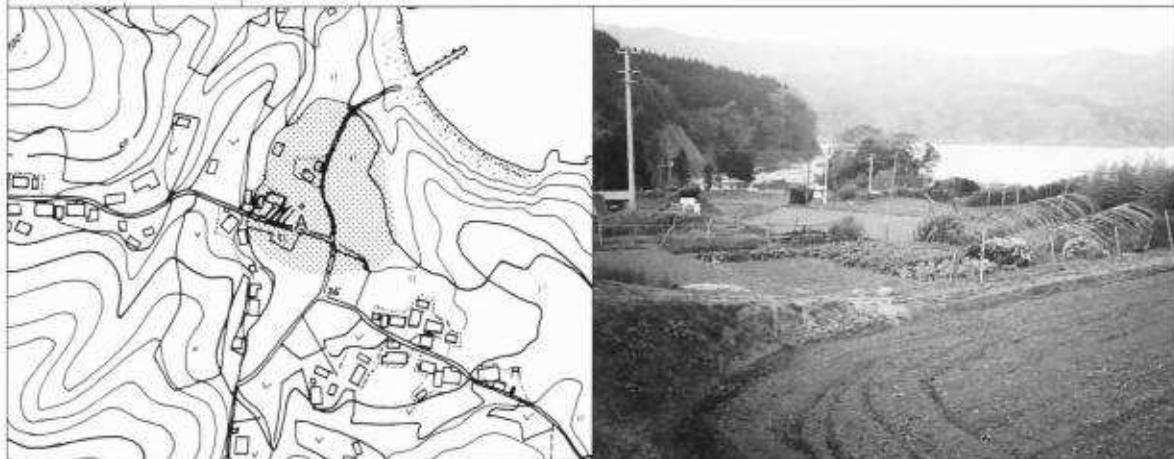
No.	27	遺跡名	館ヶ森貝塚 (たてがもり) [NG 41-0179]		
所在地	気仙郡三陸町綾里字館ヶ森	(19)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高	40m	保存状況	壊滅
時期	縄文 (後・晚) / 縄文			現況	水田
文献	173	遺物	不明		



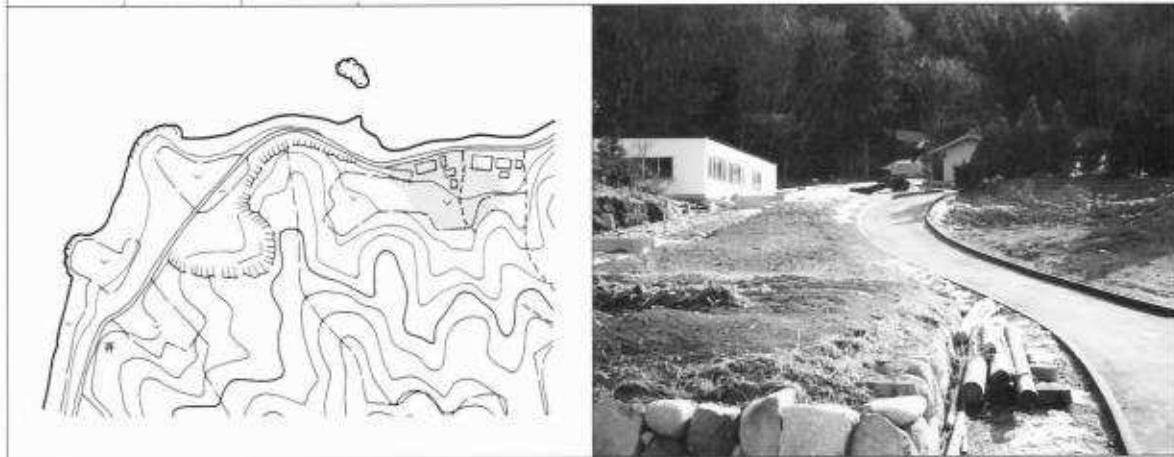
No.	28	遺跡名	道尻貝塚 (どうじり) [NG 51-2089]		
所在地	気仙郡三陸町綾里字垂水	(20)	図幅	N J - 54-14-2, 綾里	
立地	台地	標高	60m	保存状況	良好
時期	縄文 (中・後)			現況	畠地・荒蕪地
文献	173 344 354	遺物	人工…土器 (大木10式・門前式) ・骨角器 (骨ヘラ), 自然… イノシシ・シカ・マダイ		[大船渡市立博物館, 個人]

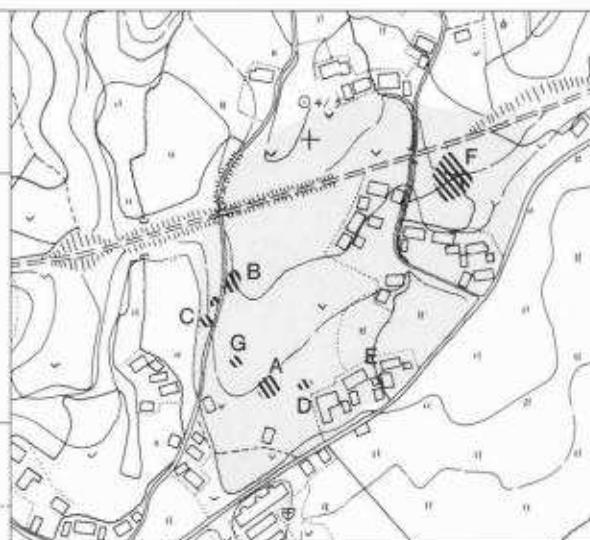


No.	29	遺跡名	野々前貝塚 (ののまえ)	[NG51-0152]
所在地	気仙郡三陸町綾里字野々前	20	図幅	N J - 54-14-2, 綾里
立地	台地	標 高 80m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (前・中・後・晩) / 縄文 (後~晩)	現 態	宅地・水田・畑地	
文 献	173 344 354	遺 物	人工…土器 (大木1・2・8式, 宮戸II, 大洞C2・A式)・石器 (石斧・石鎌・石匙・石棒)・骨角器 (垂飾品・骨ヘラ)	[大船渡市立博物館, 個人]



No.	31	遺跡名	鳥島II遺跡 (とりしま)	[NF78-0173]
所在地	陸前高田市小友町字鳥島	24	図幅	N J - 54-14-7, 気仙沼
立 地	丘陵	標 高 5~20m	保存状況	一部破壊 (貝層消滅)
時 期	縄文 (後)		現 態	宅地・水田・道路
文 献	173	遺 物	人工…土器・石器 (石鎌), 自然…ミガキボラ・ツメタガイ・クボガイ・アサリ	[大船渡市立博物館]

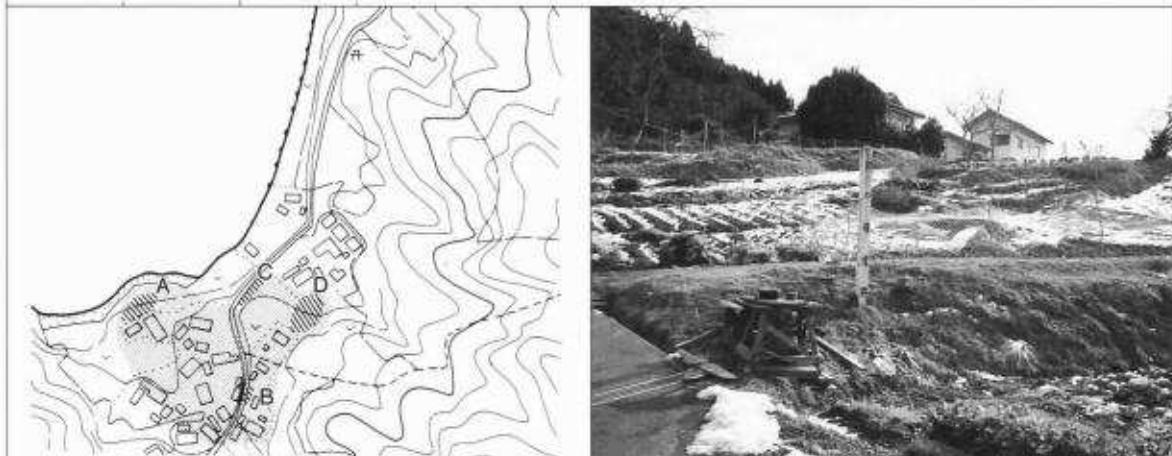


No.	30	遺跡名	宮野貝塚 (みやの) [NG40-2398]			
所在地	気仙郡三陸町字宮野	立地	台地	標高	20m	
				保存状況	一部破壊	
時期	縄文(前・中・後・晩)／縄文(前～中)	現況		宅地・水田・畑地・道路		
規模	200m×200m／(A地点20×20m後～晩期, B地点10×20m中～晩期, C地点7×15m中～晩期, D地点15×10m中～晩期, E地点15×15m中～晩期, F地点40×35m中期(大木8a・8b主体), G地点15×15m前期(大木4))					
調査歴	昭和9(1934)年一大山柏・藤岡謙二郎・清水潤三, 昭和36(1961)年一吉田義昭・東登, 昭和42(1967)年一江坂輝弥・草間俊一・吉田義昭, 昭和43・44・45(1968・69・70)一草間俊一・吉田義昭, 昭和50(1975)年一岩手県教育委員会, 昭和54(1979)年一林謙作, 平成8・9(1996・7)一三陸町教育委員会					
遺構	竪穴住居跡, 配石遺構					
人工遺物	土器(大木4～10式・門前式, 宮戸II・III式, 大洞式B～A'式), 石器(石斧・石鎌・石匙・石劍・玦状耳飾・勾玉), 骨角器(髪針・櫛・叉状角器・腕輪・骨ヘラ)					
自然遺物	イノシシ・シカ・レイシガイ・カキ					
資料保管	大船渡市立博物館・三陸町教育委員会・岩手大学・海山公夫氏					
文献	173・178・208・209・255・256・344・354					
備考	• 昭和53年 町指定史跡					
				 		

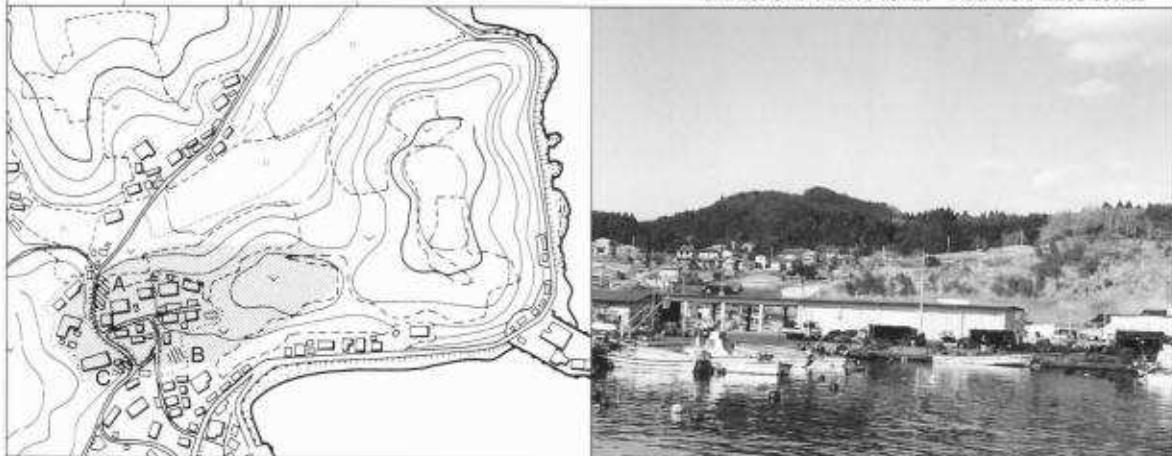
No.	32	遺跡名	門前貝塚 (もんぜん)	[NF78-1307]													
所在地	陸前高田市小友町字門前			24	図幅	N J - 54-14-6, 盛											
立地	丘陵	標 高	5~20m	保存状況	一部破壊												
時 期	縄文(中・後), 平安/縄文(中・後)		現 況	宅地・畠地・道路													
規 模	110m×120m / (A地点5×5m, C地点3×3m, D地点10×3m中期, G地点1×1m, H地点10×10m)																
調査歴	明治29(1896)年一八木榮三郎, 昭和29(1954)年一江坂輝弥・吉田義昭・東登, 昭和48(1973)年一陸前高田市教育委員会, 昭和55・56(1980・81)年一同教育委員会, 平成元~3(1989~1992)年一同教育委員会																
遺 構	土坑・配石																
人工遺物	土器・土偶・土製品・石器(石鏃・尖頭器・磨製石斧など)・骨角器(釣針・鉛頭・刺突具・骨針・鹿角棒・骨ヘラ・装身具)																
自然遺物	腔腸動物1種・環形動物1種・触手動物1種・軟体動物多板綱2種・腹足綱クロアワビ他64種・掘足綱1種・二枚貝綱コベルトフネガイ他38種・節足動物2種・棘皮動物1種・脊椎動物軟骨魚綱ネズミザメ目の一種他3種・硬骨魚綱ウルメイワシ他31種・両生綱2種・爬虫綱1種・鳥綱ウミウ他4種・哺乳綱ヒミズ他20種																
資料保管	陸前高田市立博物館・盛岡市中央公民館・岩手県立博物館(小田島コレクション)・天理参考館																
文 献	3・8・10・163・222・268・269・368																
備 考																	
• 平成元年 県道工事に伴う発掘調査により弓矢状に配された列石が出土																	



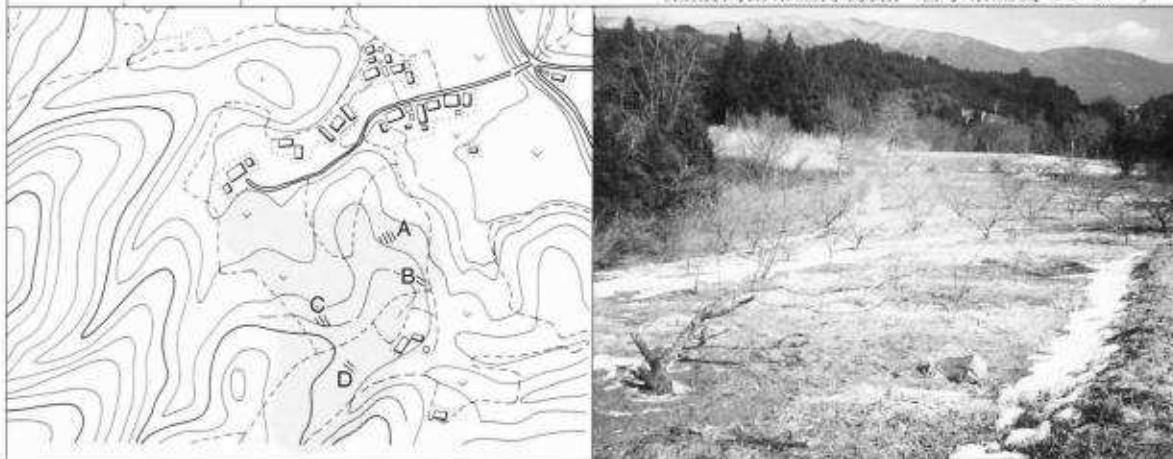
No.	33	遺跡名	矢の浦 I 遺跡 (やのうらいち) [NF78-1029]		
所在地	陸前高田市小友町字矢の浦	24	図幅	NJ-54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標高	3~20m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(前・中・後)・近世 (A地点・B地点2×2m, C地点5m, D地点, 縄文)			現況	宅地・畠地・道路
文献	173	遺物	人工…土器(大木4・6・7式)・石器(不定形石器・磨製石斧), 自然…アワビ・レイシ・エゾタマガイ・チヂミボラ・マガキ		[大船渡市立博物館]



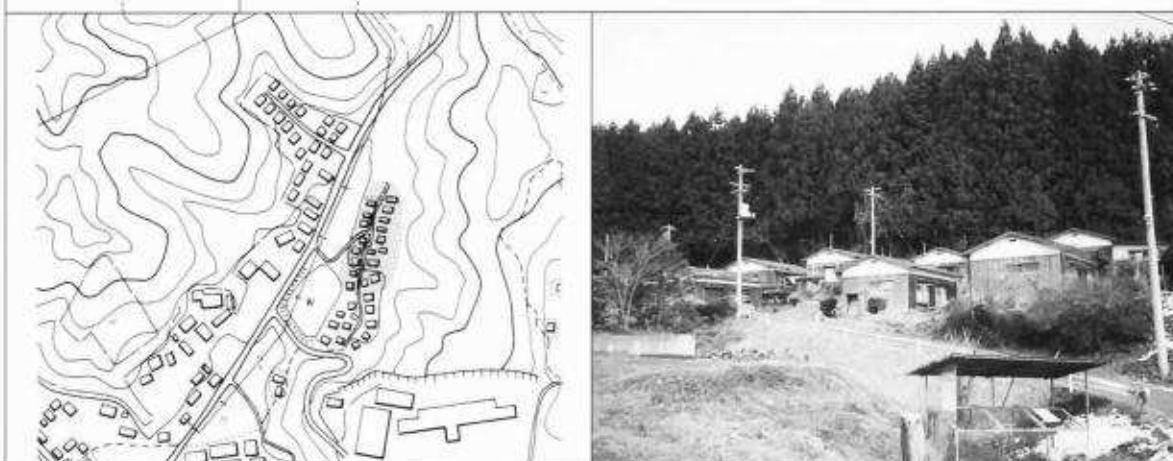
No.	34	遺跡名	二日市貝塚 (長部遺跡) (ふつかいち) [NF77-0054]		
所在地	陸前高田市気仙町字二日市	22	図幅	NJ-54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標高	20~40m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(前~晩) (A地点10×10m前~晩期, B地点5×5m時期不明, C地点0.5×0.5m時期不明)			現況	宅地・畠地・道路
文献	8・22・ 56・173・ 378	遺物	人工…土器・石器・骨角器(鉛頭・骨ヘラ・装身具), 自然…ウスヒザラガイ科の一種・クロアワビ・イシダクミ・クボガイ・コシダカガニガラ・スガイ・オオヘビガイ・ウミニナ・ツメタガイ・タカラガイ科の一種・アカニシ・オオウヨウラク・ムラサキインコ・イガイ・エゾイガイ・マガキ・イタボガキ・ヤマトシジミ・チリハギガイ・コタマガイ・アサリ・シオフキ・ウバガイ・イソジジミ・ニッコウガイ科の一種・人骨ほか		[陸前高田市立博物館, 大船渡市立博物館]



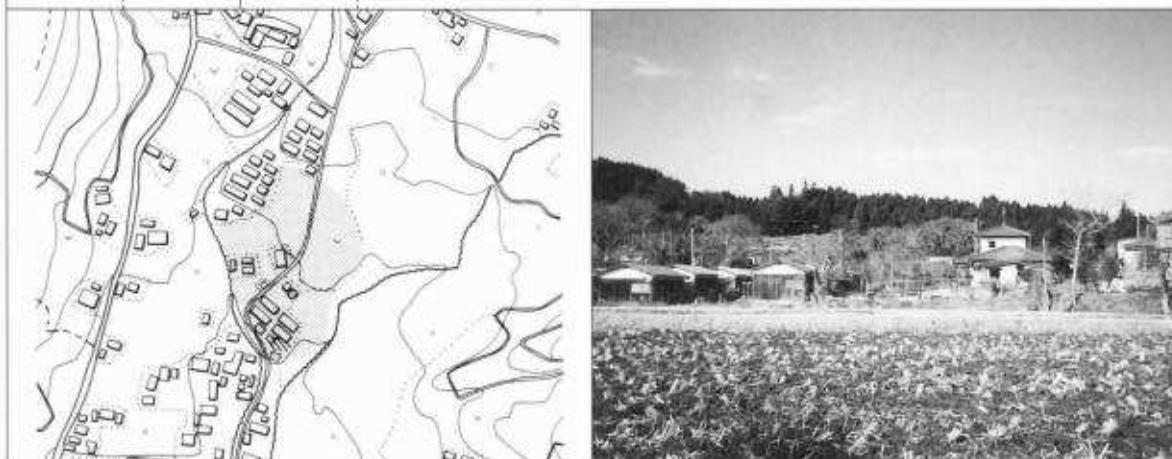
No.	35	遺跡名	牧田貝塚 (まきた) [NF76-1315]		
所在地	陸前高田市気仙町字牧田			(22)	図幅 N J - 54-14-7, 気仙沼
立地	丘陵	標 高	20~50m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(前)・平安/(A地点5×5m前期初頭・B地点5×5m不明・C地点5×5m不明・D地点5×5m前期)			現 況	畠地・道路
文 献	173 211 378	遺 物	人工…土器(大木1-7a式)・石器(石鏃・石匙・凹石・石皿・丸石)・骨角器(骨針)、自然…イシダタミガイ・ヘソアキクボガイ・スガイ・コシダカガニガラ・スガイ・アサリ・ハマグリ・レインガイ・ナデシコガイ・マイワシ・カタクチイワシ・スズキ・マアジ・マダイ・ウミタナゴ・マサバ・カツオ・マグロ属・アイナメ・ヒキガエル・キジ・タヌキ・キツネ・イノシシ・ほか		[陸前高田市立博物館、岩手県埋文センター]



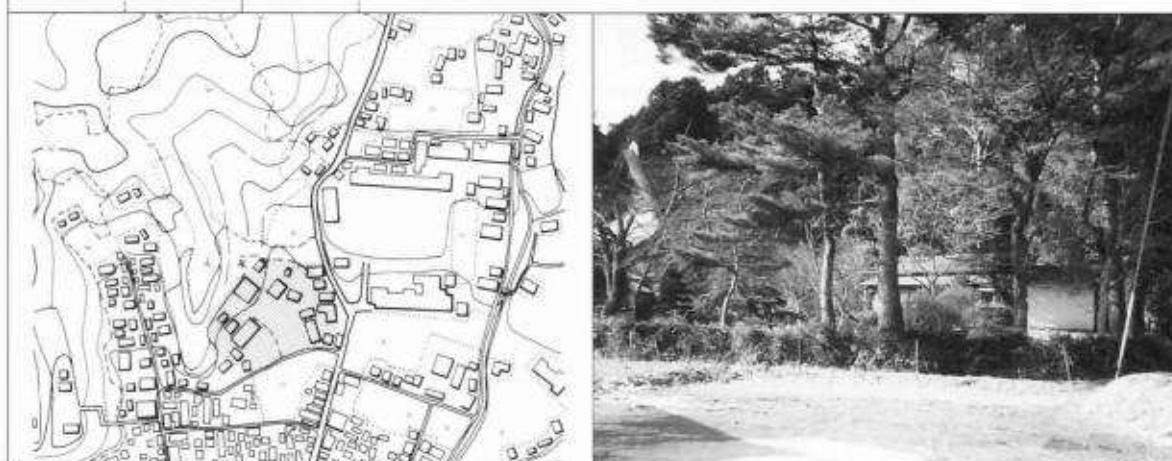
No.	36	遺跡名	柄ヶ沢貝塚 (とちがさわ) [NF67-0038]		
所在地	陸前高田市高田町字柄ヶ沢			(21)	図幅 N J - 54-14-6, 盛
立地	丘陵	標 高	20~30m	保存状況	壊滅?
時 期	不明			現 況	宅地
文 献	一	遺 物	不明		



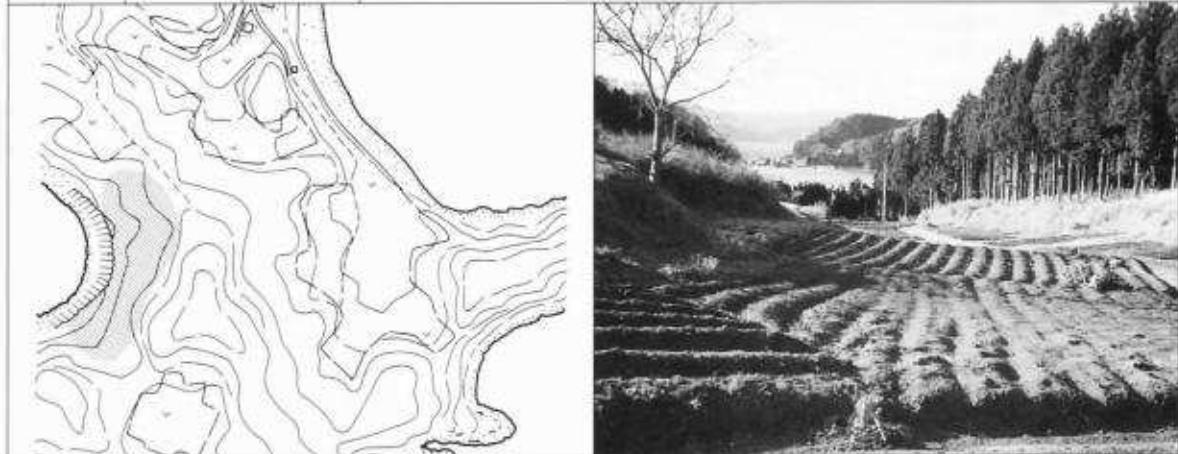
No.	37	遺跡名	貝畠貝塚（和野貝塚） (かいはた)	(かいはた)	[NF67-0147]
所在地	陸前高田市高田町字中和野	(21)	図幅	N J - 54-14-6, 盛	
立地	丘陵	標 高	25m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文（中）・平安／縄文（中）	現 態	宅地・水田・畑地・道路		
文 献	173	遺 物	人工…土器（大木10式）・石器（石鎌・石刀・磨製石斧），自然…ウバガイ・ヤマトシジミ・バカガイ		[陸前高田市立博物館，大船渡市立博物館]



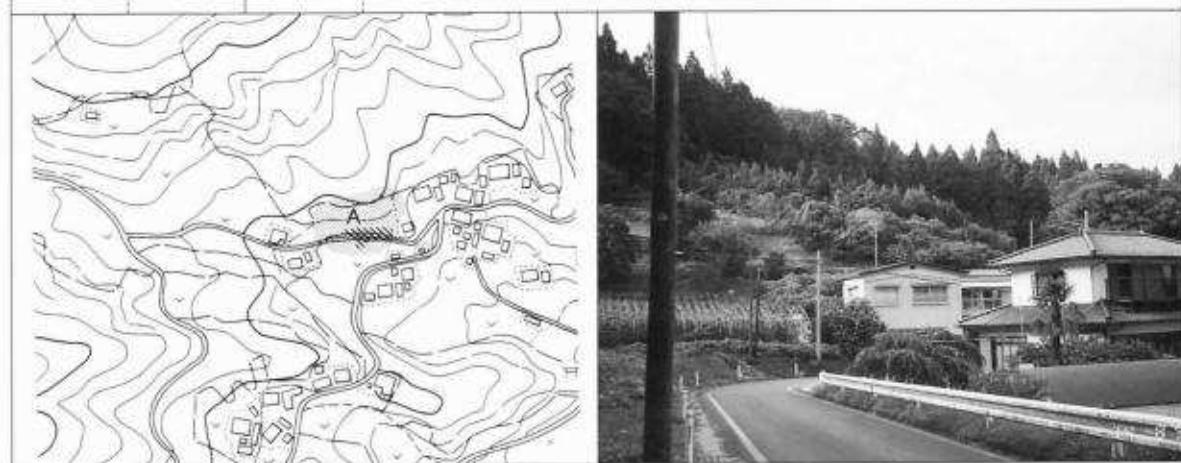
No.	38	遺跡名	洞の沢遺跡 (ほらのさわ)	(ほらのさわ)	[NF67-0163]
所在地	陸前高田市高田町字洞の沢	(21)	図幅	N J - 54-14-6, 盛	
立地	丘陵	標 高	10m	保存状況	壊滅
時 期	不明	現 態	宅地・道路・寺		
文 献	-	遺 物	不明		



No.	39	遺跡名	金室貝塚（集貝塚？） (かなむろ)	[N F 98-0303]
所在地	陸前高田市広田町字集		(24)	図幅 N J -54-14-7, 気仙沼
立地	丘陵	標 高	10~30m	保存状況 良好
時期	縄文（晩）			現 況 畑地
文献	25 30 173	遺 物	人工…土器, 自然…不明	



No.	40	遺跡名	岩倉遺跡 (いわくら)	[N F 89-2030]
所在地	陸前高田市広田町字岩倉		(24)	図幅 N J -54-14-7, 気仙沼
立地	丘陵	標 高	30m	保存状況 一部破壊
時期	縄文（後）・近世／近世？			現 況 宅地・畠地・道路
文献	173	遺 物	人工…土器, 自然…ユキノカサガイ・エゾアワビ・チヂミボラ・クボガイ・レイシ・ムラサキインコ・イガイ 〔陸前高田市立博物館, 大船渡市立博物館〕	

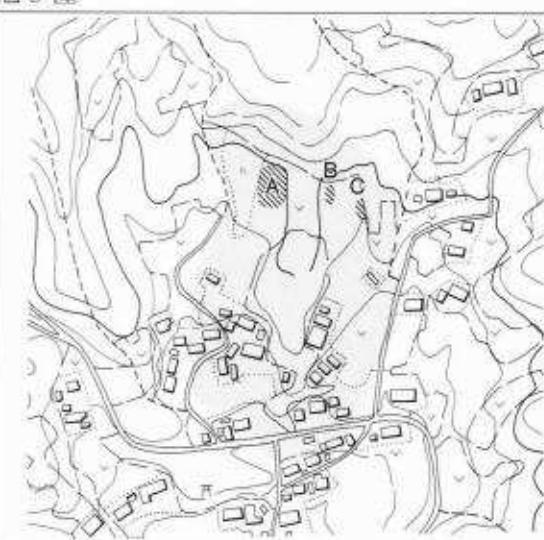


No.	41	遺跡名	大陽貝塚 (おおよう) [N F 78-2194]		
所在地	陸前高田市広田町字大陽			24	図幅 N J -54-14-7, 気仙沼
立地	丘陵	標 高	20m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (前・中)			現 況	畑地・山林・道路
文 献	—	遺 物	不明		



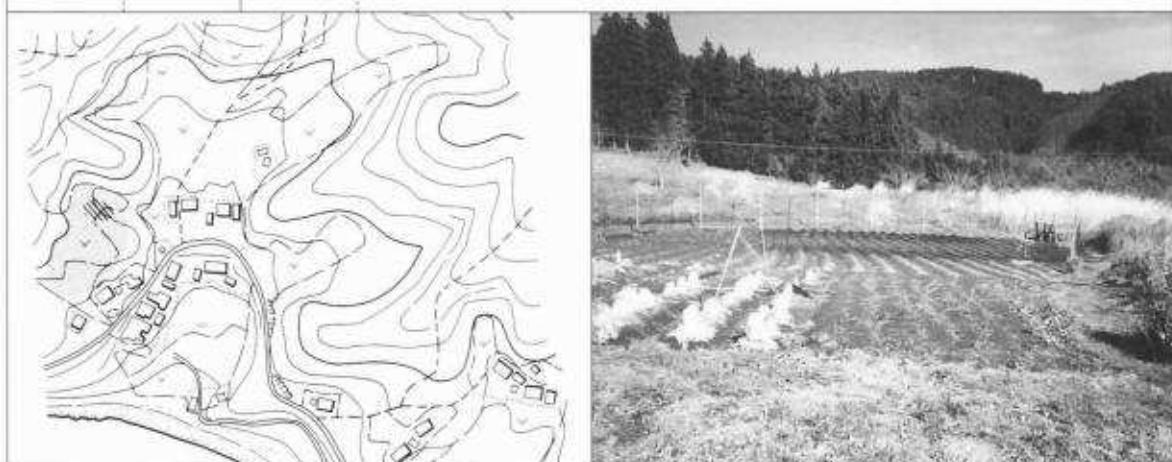
No.	43	遺跡名	久保貝塚 (畠尻) (くぼ) [N F 88-2256]		
所在地	陸前高田市広田町字久保			24	図幅 N J -54-14-7, 気仙沼
立 地	丘陵	標 高	5~10m	保存状況	壊滅
時 期	縄文 (後・晚)			現 況	宅地・道路
文 献	173	遺 物	人工…土器, 自然…不明 [大船渡市立博物館]		



No.	42	遺跡名	大陽台貝塚 (おおようだい) [NF78-2175]		
所在地	陸前高田市広田町字太陽	24	図幅	N J -54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標 高	30~50m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (前・中)			現 況	宅地・水田・畠地
規 模	200m×150m / (A地点50×30m 縄文前・中期, B地点5×10m, C地点5×10m)				
調査歴	昭和51(1976)年 - 陸前高田市教育委員会, 平成7(1995)年 - 岩手県教育委員会				
遺構					
人工遺物	土器・土製品・石器(石鎌・石匙・块状耳飾・円柱状石製品など)・骨角器(釣針・骨針・刺突具・棒状角器・骨ヘラ・装身具・鹿角棒)				
自然遺物	軟体動物腹足綱クロアワビ他26種・二枚貝綱コベルトフネガイ他17種・節足動物2種・棘皮動物2種・脊椎動物軟骨魚綱2種・硬骨魚綱マイワシ他13種・鳥綱ヒメウ他4種・哺乳綱ムササビ他8種				
資料保管	陸前高田市立博物館・大船渡市立博物館				
文 献	239				
備 考	• 南側に太陽貝塚隣接(一連か?) • A地点貝層は厚さ1.5m				
					
					

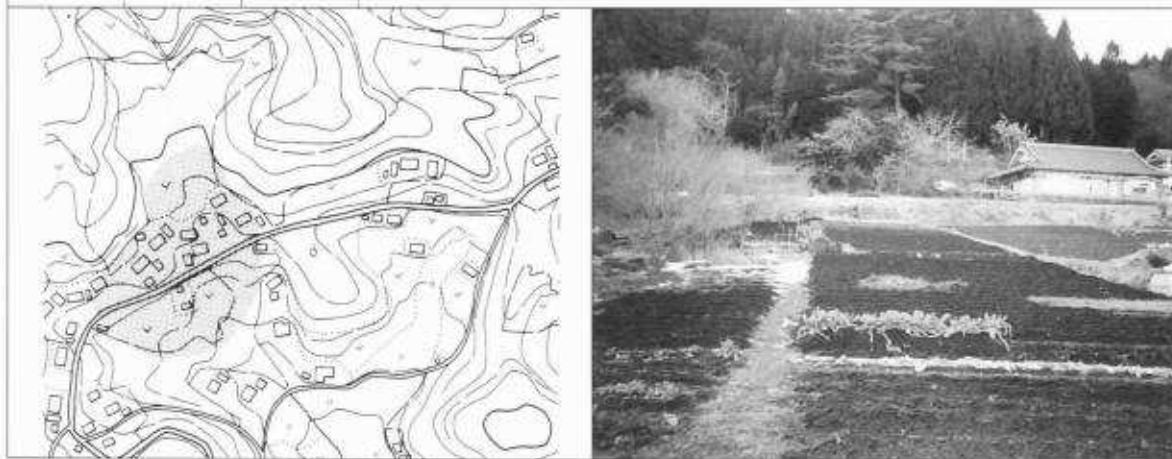
No.	44	遺跡名	越田貝塚 (こえだ)	[N F 88-0118]		
所在地	陸前高田市広田町字越田			24	図幅	N J -54-14-7, 気仙沼
立地	丘陵	標 高	40~50m	保存状況	良好	
時期	縄文／不明			現 況	畑地	
文 献	—	遺 物	人工…土器・石器(石鎌), 自然…イガイ			

[陸前高田市立博物館]



No.	45	遺跡名	袖野 I 遺跡 (そでのいち)	[N F 78-2239]				
所在地	陸前高田市広田町字袖野			24	図幅	N J -54-14-7, 気仙沼		
立地	丘陵	標 高	50~60m	保存状況	一部破壊(純貝層あり?)			
時期	縄文(前・中・後・晩)・平安／縄文(前)		現 況	宅地・畑地・道路				
文 献	173	遺 物	人工…土器・石器(磨製石斧・石鎌・石刀)・骨角器(装身具), 自然…不明					

[陸前高田市立博物館, 大船渡市立博物館]



No.	46	遺跡名	中沢貝塚 (なかざわ) [NF 88-1278]		
所在地	陸前高田市広田町字中沢	24	図幅	N J -54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標 高	30m	保存状況	一部破壊
時期	不明			現 況	山林

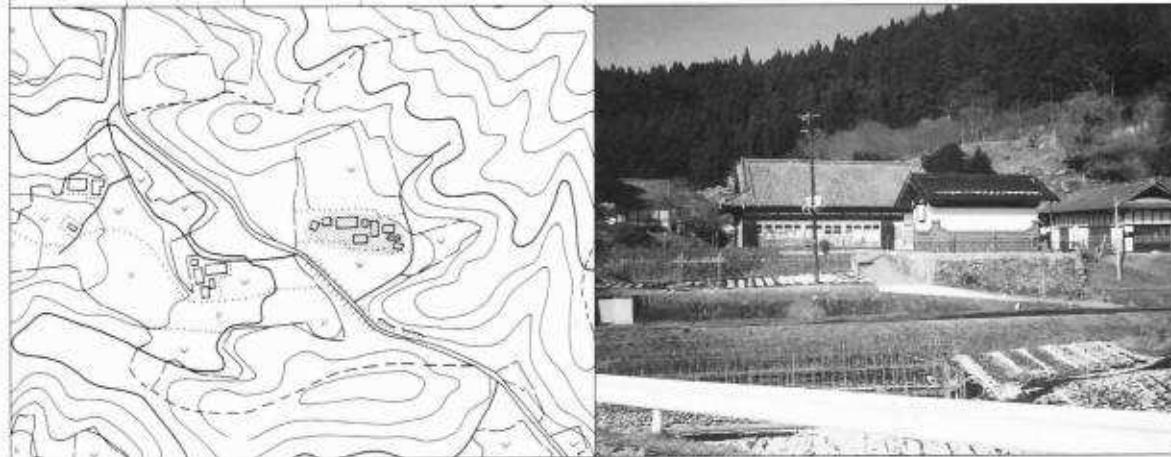
文 献 一 遺 物 自然…アワビ

[陸前高田市立博物館]



No.	48	遺跡名	船荒 I 遺跡 (船荒貝塚) (ふなれいち) [NF 78-2130]		
所在地	陸前高田市広田町字船荒	24	図幅	N J -54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標 高	60m	保存状況	壊滅
時期	縄文 (前)			現 況	宅地・畠地
文 献	173	遺 物	人工…土器 (大木1式), 自然…アワビ・オオヘビガイ・レイシ・チヂミボラ・クボガイ・イガイ		

[大船渡市立博物館]

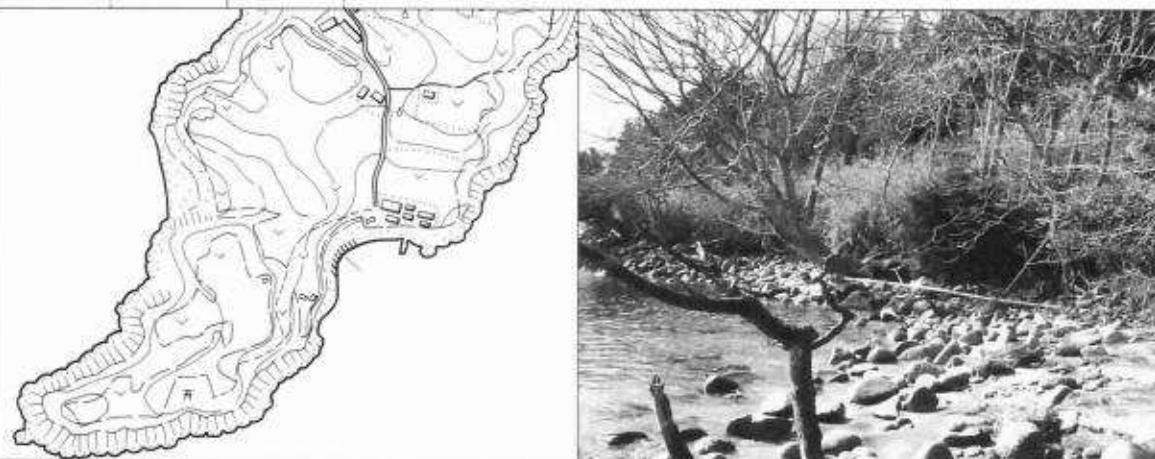


No.	47	遺跡名	中沢浜貝塚 (なかざわはま) [N F 88-1298]							
所在地	陸前高田市広田町字中沢			24	図幅 N J -54-14-7, 気仙沼					
立地	丘陵	標 高	5~30m	保存状況	一部破壊					
時 期	縄文(早・前・中・後・晩)・弥生・平安	現 況	宅地・畠地・道路							
規 模	130m×170m / (A地点20×20m縄文前期・晩期, B地点10×10m縄文前期・晩期, C地点10×10m縄文前~後期)									
調査歴	明治40・41(1907・08)年 - 野中完一, 大正6(1917)年 - 小金井良精, 大正13(1924)年 - 小田島禄郎, 昭和59~63(1984~88)年 - 陸前高田市教育委員会									
遺 構	土坑									
人工遺物	土器・石器(石鍬・磨製石斧・石錐・石匙・不定形石器ほか)・骨角器(釣針・鈎頭・ヤス・鏃・根バサミ・彌形角製品・刺突具・鹿角棒・骨ヘラ・骨針・装身具ほか)									
自然遺物	軟体動物多板綱ウスヒザラガイ科の一種・腹足綱クロアワビ他52種・掘足綱ヤカドツノガイ・二枚貝綱フネガイ科の一種他21種・節足動物カメノテ他4種・棘皮動物エゾバフンウニ他2種・軟骨魚綱ネズミザメ目の一一種他4種・硬骨魚綱マイワシ他31種・爬虫綱カメ目の一一種他2種・鳥綱アホウドリ科の一一種他8種・哺乳綱モグラ科の一一種他18種									
資料保管	陸前高田市立博物館・大船渡市立博物館・岩手県立博物館(小田島コレクション)・東京国立博物館・天理参考館									
文 献	22・42・300・318・325・331ほか									
備 考										
<ul style="list-style-type: none"> ・昭和9年 国指定史跡 ・保存管理計画策定中 										
 										

No.	49	遺跡名	瀬沢貝塚 (うそざわ) [NF78-1067]		
所在地	陸前高田市小友町字瀬沢	(24)	図幅	N J - 54-14-7, 気仙沼	
立地	丘陵	標 高	10~40m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文／縄文(晩)			現 況	宅地・水田・畑地・道路
規 模	100m×130m / (A地点10×10m縄文晚期, B地点3×3m縄文晚期, C地点3×3m縄文晚期)				
調査歴	明治32(1898)年一八木獎三郎, 明治40(1907)年一野中完一, 大正6(1917)年一松本彦七郎, 大正13(1924)年一柴田常恵・小田島祿郎, 大正14(1925)年一長谷部言人, 昭和46(1971)年一慶應大学, 昭和50(1975)年一陸前高田市教育委員会, 平成7(1995)年一岩手県教育委員会				
遺 構					
人工遺物	土器・土偶・耳飾・石器(石斧・石鎌・石匙・石錐・環状石斧・凹石・勾玉)・骨角器(鉛頭・ヤス・鎌・根バサミ・彌型角製品・刺突具・箆・骨針・装身具)				
自然遺物	軟体動物腹足綱エゾアワビ他51種・二枚貝綱サルボウ他22種・節足動物チシマフジツボ・棘皮動物ムラサキウニ・脊椎棒物軟骨魚綱ネズミザメ目の一一種他1種・硬骨魚綱マイワシ他15種・爬虫綱他1種・鳥類アビ科の一種他7種・哺乳綱ノウサギ他11種				
資料保管	陸前高田市立博物館・大船渡市立博物館・東北大學・慶應大学・東京国立博物館・天理参考館				
文 献	8・9・10・20~23・26・40・44ほか				
備 考	・「おそざわ」貝塚とも				
					
					

No.	50	遺跡名	館貝塚 (たて) [NF 67-2379]		
所在地	陸前高田市米崎町字館			24	図幅 N J - 54-14-7, 気仙沼
立地	半島	標 高	2~3m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (晩) · 中世／不明		現 況	宅地・畠地・道路	
文 献	—	遺 物	人工…土器(晩期), 自然…ムラサキインコ(純貝層)・イガイ (純貝層)・レイシ・マガキ(純貝層 3 枚)		

[陸前高田市立博物館]



No.	52	遺跡名	松峯遺跡 (まつみね) [NF 67-2305]		
所在地	陸前高田市米崎町松峯			21	図幅 N J - 54-14-6, 盛
立 地	丘陵	標 高	25m	保存状況	一部破壊
時 期	平安・近世／近世? (3×3m)		現 況	宅地・畠地	
文 献	—	遺 物	自然…ウバガイ・アサリ・コタマガイ・イガイ・オニアサ リ・マガチ		

[陸前高田市立博物館]



No.	51	遺跡名	堂の前貝塚 (どうのまえ)	[NF 68-2130]
所在地	陸前高田市米崎町字堂の前	(23)	図幅	N J - 54-14-6, 盛
立地	丘陵	標 高	30~40m	保存状況
時 期	縄文 (中・後)		現 況	畠地・道路
規 模	160m × 220m / (A 地点5×5m 縄文中~後期)			
調査歴	昭和46 (1971) 年 - 陸前高田市教育委員会, 平成8・9 (1996・97) 年 - 同教育委員会			
遺 構	竪穴住居跡・土坑			
人工遺物	土器(大木9式・門前式)・石器(石鎌・石斧・石錐・石皿・砥石・凹石・石錘・丸石)・骨角器(刺突具・骨ヘラ)			
自然遺物	軟体動物腹足綱トコブシ他12種・二枚貝綱ムラサキイソコ他10種・脊椎動物軟骨魚綱アカエイ・軟骨魚綱マダイ・マグロ属・哺乳綱クジラの一種・イノシシ・シカ			
資料保管	陸前高田市立博物館・岩手県立博物館 (小田島コレクション)			
文 献	173・218・378			
備 考				
				
				

(3) 上閉伊地区の概要

上閉伊地区は大槌町、釜石市、宮守村、遠野市によって構成されている。海岸に面していない宮守村、遠野市には今回の調査において確認された貝塚はない。4市町村の合計面積は1,500aで、本県全体の約一割を占めている。

大槌町、釜石市では、貝塚と考えられる遺跡が16箇所存在する。大槌町に4箇所、釜石市に12箇所である。いずれも海岸に近い丘陵上に立地している。

貝塚の分布をみると、大槌湾、釜石湾に大半が集中する。太平洋に面し、外洋に突き出た岬付近に立地している傾向がある。

正式な発掘調査の行われた貝塚は少ない。そのため、貝塚（貝層）の時期や規模、性格が不明なものが多い。また、宅地開発などによって、破壊された貝塚もあり、内容がほとんど分からぬるものもある。貝塚の現況が山林という所が多く、貝塚の範囲を特定できないものも多かった。釜石市、大槌町で貝塚の立地に適した所は早くから市街地になっているので、貝塚の確認ができないことも理由としてあげられるだろう。

貝塚調査の歴史をみる。戦前、小田島祿郎が大槌町赤浜貝塚を調査しており、岩手県立博物館に縄文前期の土器、土製腕輪、磨製石斧、釣針未製品、貝輪、垂飾品などが保管されている。

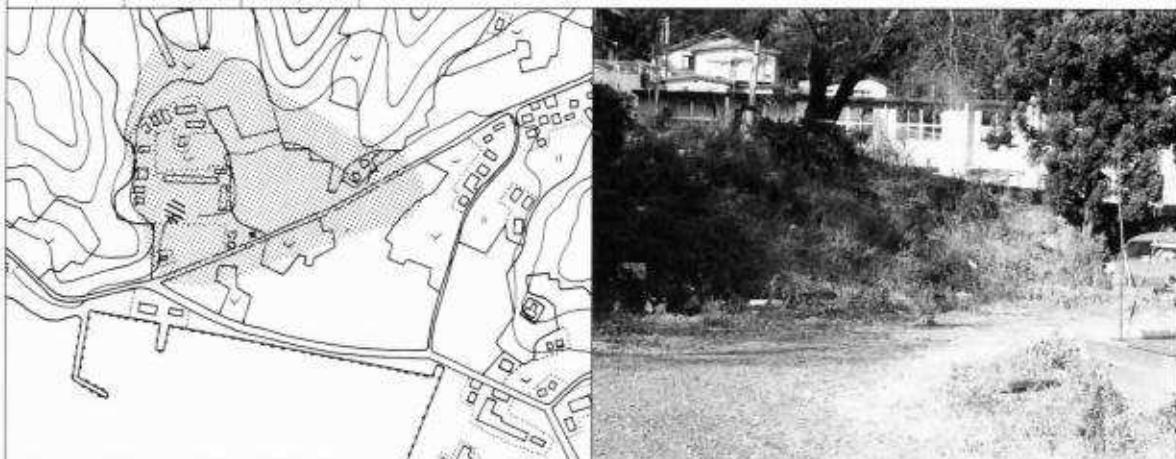
また昭和3年9月8日付の岩手日報に現在の赤浜Ⅱ遺跡地内から人骨が2体出土したことが掲載されている。

昭和63年から平成2年に三留孝が釜石市内の遺跡の分布調査を実施しており、貝塚についても報告している。しかし、今回それらの貝塚を踏査したが、貝層の存在を確認するに至らなかった。小規模な貝塚が多いからかもしれない。

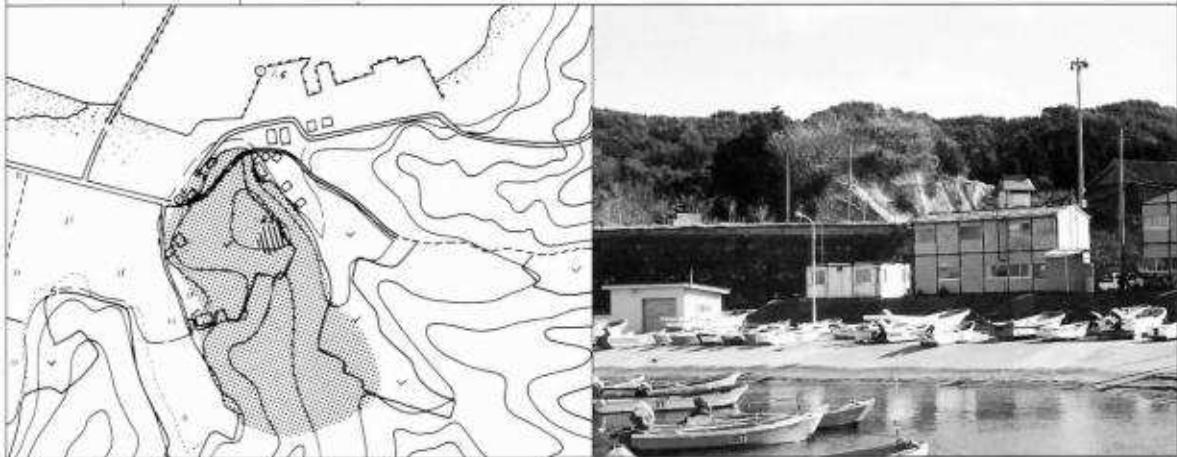
正式な発掘調査が行われたのは、大槌町崎山弁天貝塚、松磯遺跡のみである。崎山弁天遺跡は昭和46年に岩手大学の草間俊一らによって発掘が実施され、A地点から、純貝層、混貝土層が、それぞれ2枚づつ発見された。これらは、縄文中期中葉（大木8a、b式期）、中期後葉（大木9式期）、後期初頭と、層位的に堆積している。いずれも、主体となる貝はイガイである。魚類はマグロ、カツオ、ブリ、マダイ、カサゴ等が多いという。

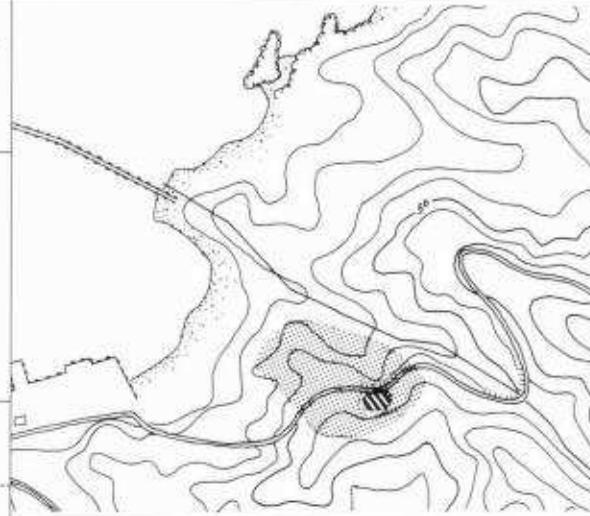
松磯遺跡は昭和54年に大槌町教育委員会によって5m×1.5m規模の試掘調査が行われている。報告書は未刊である。最大厚40cmの貝層が確認され、大部分が純貝層であるという。縄文土器（前期後半～中期初頭）、貝輪、骨角器（骨針、骨箇、装身具）、ホタテ、カキ、ツメタガイ、クボガイ、鹿の下顎骨等が発見されている。

No.	53	遺跡名	赤浜II遺跡 (あかはまに) [MG 33-2237]		
所在地	上閉伊郡大槌町赤浜		16	図幅	N J -54-13-4, 大槌
立地	平地	標 高	15m	保存状況	貝層は壞滅 (平成元(1989)年調査)
時 期	縄文 (前・中) / 縄文 (中)			現 態	学校用地
文 献	347	遺 物	人工…土器(縄文前・中期)・石器(石槍・石斧・石鎌・石皿), 自然…イガイ・人骨 (昭和3(1928年)岩手日報記事) 〔大槌町教育委員会, 赤浜小学校〕		



No.	54	遺跡名	向館遺跡 (むかいだて) [MG 34-0064]		
所在地	上閉伊郡大槌町吉里吉里		16	図幅	N J -54-13-4, 大槌
立地	段丘上(海岸)	標 高	20m	保存状況	一部破壊
時 期	中・近世 / 中世?			現 態	山林
文 献	—	遺 物	自然…イガイ・カキ・フジツボ		

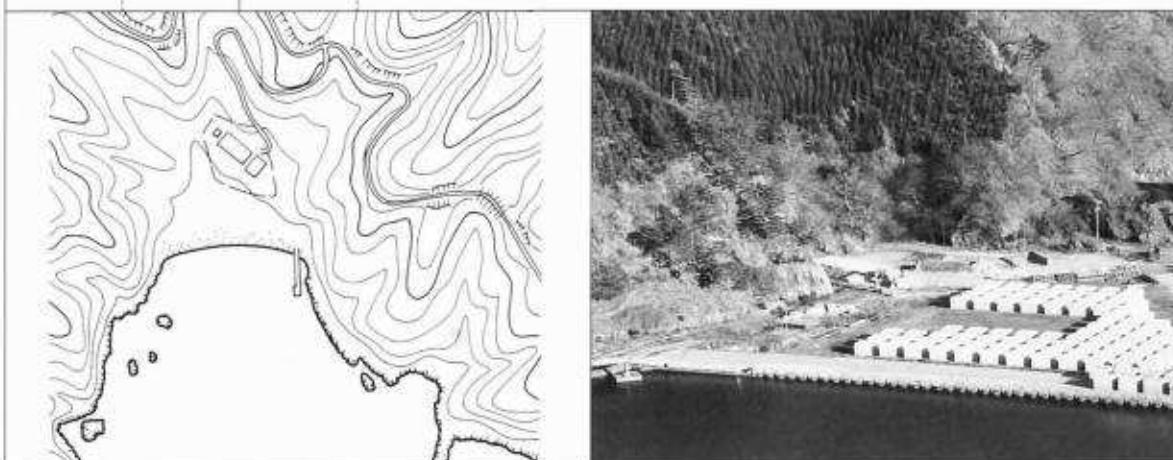


No.	56	遺跡名	崎山弁天貝塚 (さきやまべんてん)	[MG 34-0038]
所在地	上閉伊郡大槌町吉里吉里32地割崎山	(16)	図幅	N J - 54-13-4, 大槌
立地	段丘上(海岸)	標 高	22m	保存状況
時期	縄文(早・前・中・後・晩)／縄文(中～後)	現 況	一部破壊	山林・道路
規 模				
調査歴	昭和36(1961)年一小岩末治, 同年一江坂輝弥(表採), 昭和46(1971)年一草間俊一			
遺 構	土杭, 配石, 炉址			
人工遺物	土器(早・前・中・後・晩期), 石器(石鎌・石匙・石錐・石斧・石皿ほか), 骨角器(釣針・刺具・骨ヘラ・骨針・貝輪・骨刀ほか)			
自然遺物	フジツボ・ウニ・陸産貝類・脊椎動物門ほか			
資料保管	大槌町教育委員会・吉里吉里考古園			
文 献	224・225			
備 考	・町道上の方に及び舗装道路下に貝層がもぐり込んでいる			
				
				

No.	55	遺跡名	松磯遺跡 (まついぞ) [MG 23-1354]		
所在地	上閉伊郡大槌町吉里吉里第13地割	(16)	図幅	N J - 54-13-4, 大槌	
立 地	不明(資料なし)	標 高	45m	保存状況	良好
時 期	縄文 (前・中) (純貝層厚40cm)			現 況	山林
文 献	—	遺 物	人工…土器 (縄文前期後半～中期初頃)・骨角器 (骨針・穿孔骨針・骨ヘラ・装身具・貝輪), 自然…ホタテ・カキ・ツメタガイ・クボガイ・イソバショウ・ヒメエゾボラ・レイシ・シカ下顎骨		
			[大槌町教育委員会]		



No.	57	遺跡名	ヤカタ浜貝塚 (やかたはま) [MG 63-2189]		
所在地	釜石市泉	(17)	図幅	N J - 54-14-1, 釜石	
立 地	段丘上(海岸)	標 高	25m	保存状況	一部破壊 (ほぼ良好)
時 期	縄文 (中・晚)/縄文?			現 況	山林
文 献	362	遺 物	人工…土器・石器, 自然…イガイ・カキ・ユキノカサガイ		



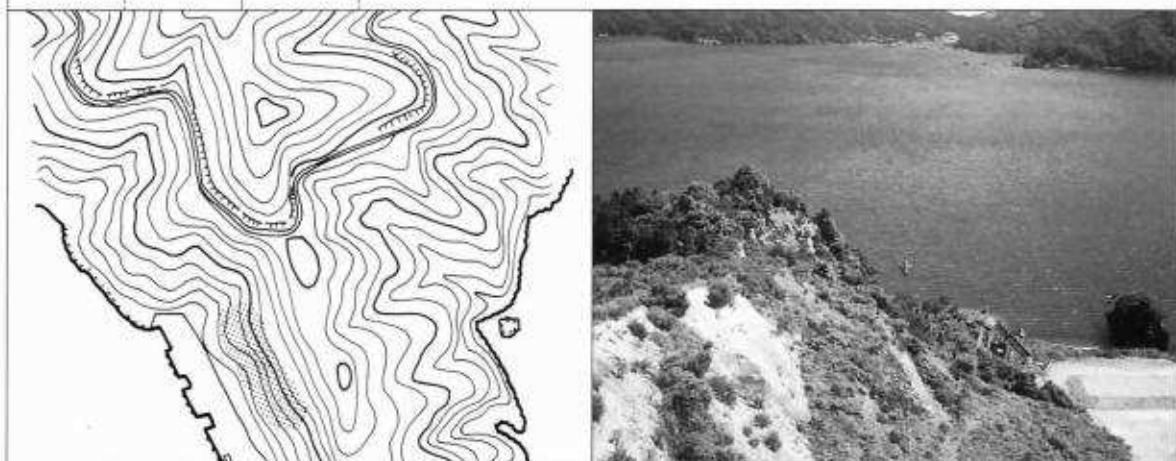
No.	58	遺跡名	新片岸 I 遺跡 (しんかたぎしいち) [MG 42-0395]		
所在地	釜石市鵜住居町第9地割			(16)	図幅 N J -54-14-1, 釜石
立 地	丘陵	標 高	60~100m	保存状況	壊滅
時 期	縄文 (後・晚) / 不明			現 況	宅地
文 献	362	遺 物	人工…土器 (縄文後・晚期)		



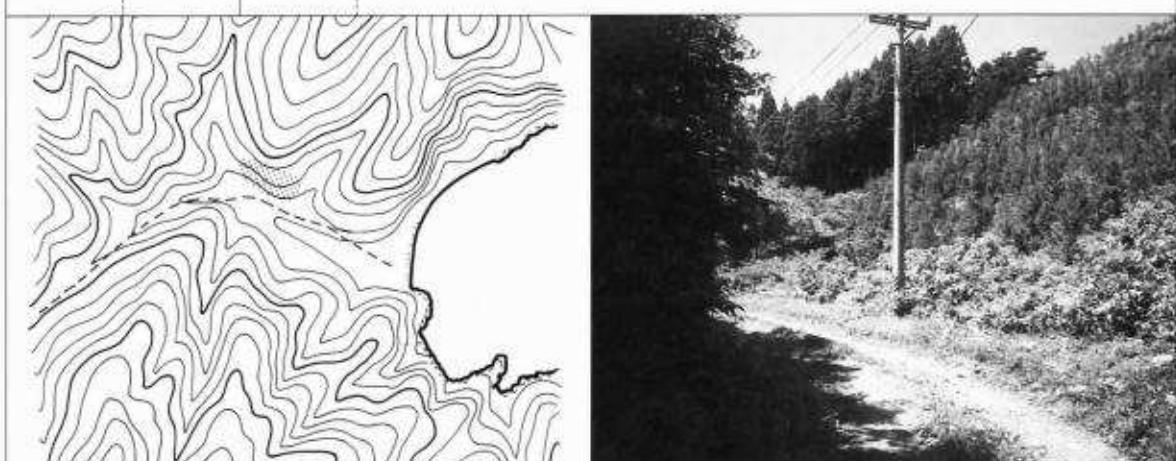
No.	59	遺跡名	片岸貝塚 (かたぎし) [MG 42-1305]		
所在地	釜石市片岸町上の沢			(16)	図幅 N J -54-14-1, 釜石
立 地	丘陵	標 高	20~40m	保存状況	壊滅
時 期	縄文 / 不明			現 況	宅地
文 献	-	遺 物	人工…土器 (縄文中期) ・ 石器 (石斧)		



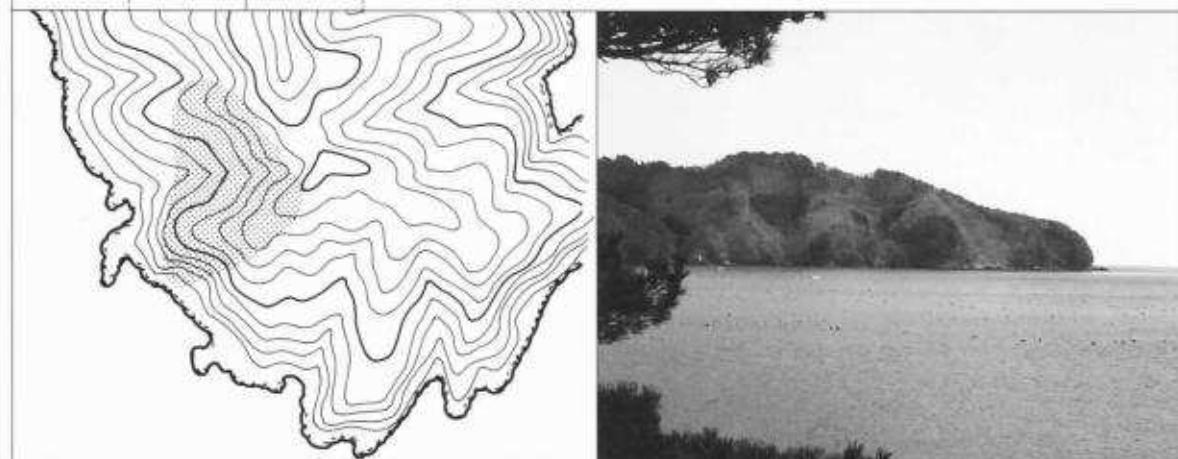
No.	60	遺跡名	小繩崎貝塚 (こなわさき) [MG 63-2194]		
所在地	釜石市新浜町小繩崎	(17)	図幅	N J -54-14-1, 釜石	
立地	台地	標高	20~60m	保存状況	一部破壊
時期	繩文 (中・後・晩) / 不明			現況	山林・荒蕪地
文献	362	遺物	人工…土器 (繩文中・後・晩期), 自然…エゾアワビ・タマキビ・ウミニナ・イボニシ・獸骨		



No.	61	遺跡名	ヤツギ浜貝塚 (やつぎはま) [MG 63-1260]		
所在地	釜石市新浜町ヤツギ	(17)	図幅	N J -54-14-1, 釜石	
立地	丘陵	標高	20~40m	保存状況	良好 (一部破壊)
時期	繩文 (中) / 不明			現況	山林
文献	362	遺物	人工…土器 (繩文中期), 自然…貝殻		



No.	62	遺跡名	仏ヶ崎遺跡 (ほとけがさき)	[MG 92-1364]	
所在地	釜石市唐丹町小白浜	(18)	図幅	N J - 54-14-1, 釜石	
立地	段丘上(海岸)	標高	10-100m	保存状況	良好
時期	縄文(後)／不明			現況	山林
文献	362	遺物	人工…土器(縄文後期), 自然…貝類		



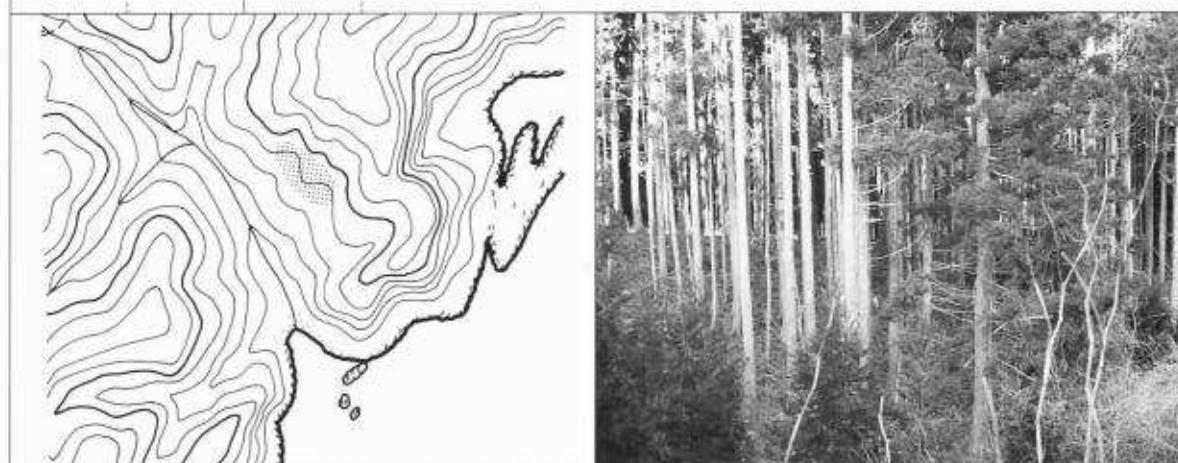
No.	63	遺跡名	大沢貝塚 (おおさわ)	[MG 44-1282]	
所在地	釜石市箱崎町大沢	(17)	図幅	N J - 54-14-1, 釜石	
立地	丘陵	標高	70~100m	保存状況	良好
時期	縄文(中)／不明			現況	山林
文献	-	遺物	人工…土器(縄文中期)		

[釜石市教育委員会]



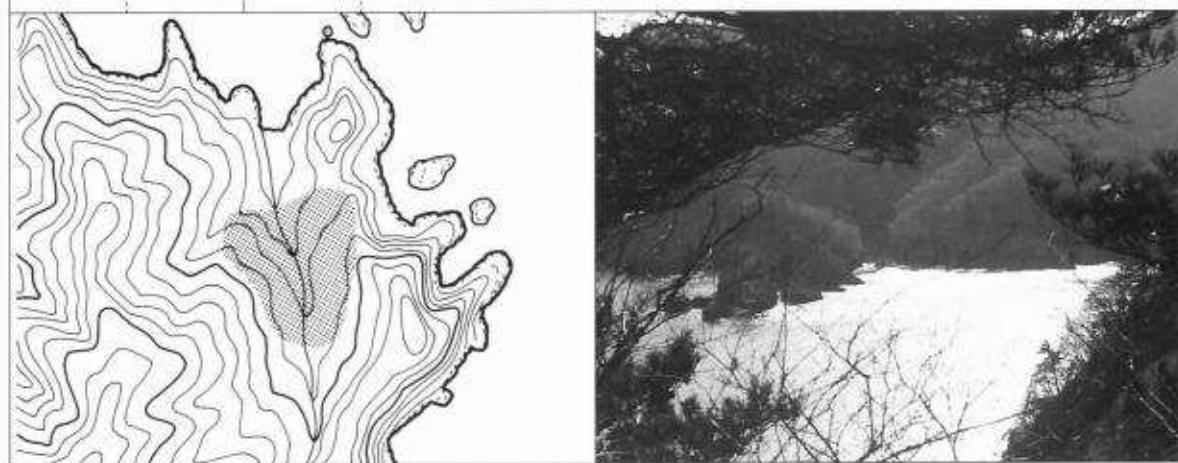
No.	64	遺跡名	シイノ浜遺跡 (しいのはま)	[MG44-2208]
所在地	釜石市箱崎町白浜大沢	(17)	図幅	N J -54-14-1, 釜石
立地	丘陵	標高	40m	保存状況
時期	縄文(早~晩)・平安／不明	現況	山林	

文献 一 遺物 人工…縄文土器(前~晚期), 土師器, 自然…エゾアワビ・イボニシ・ウミニナ・タマキビほか

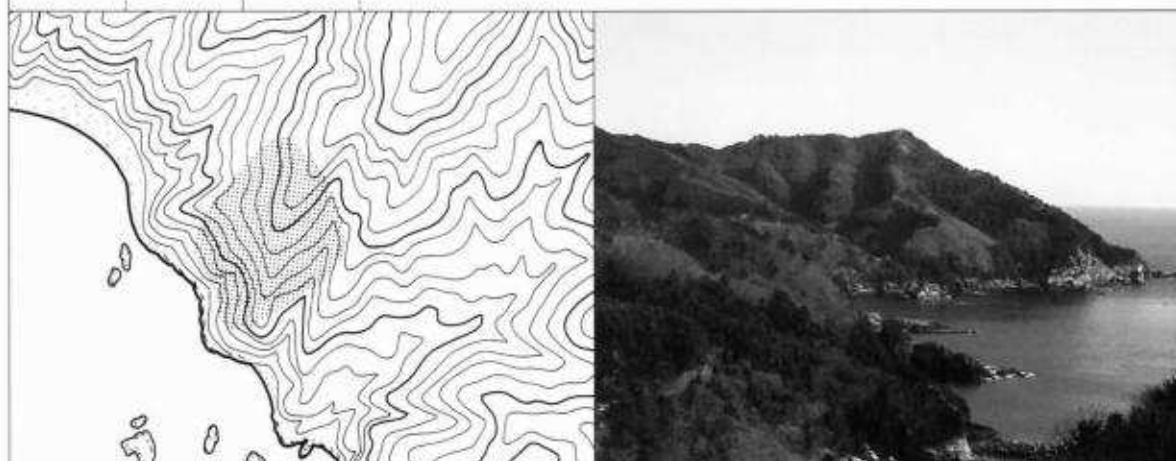


No.	65	遺跡名	赤磯遺跡 (あかいそ)	[MG84-0054]
所在地	釜石市平田町尾崎白浜小松	(08)	図幅	N J -54-14-1, 釜石
立地	丘陵	標高	20~80m	保存状況
時期	縄文(中・後)／不明	現況	山林	

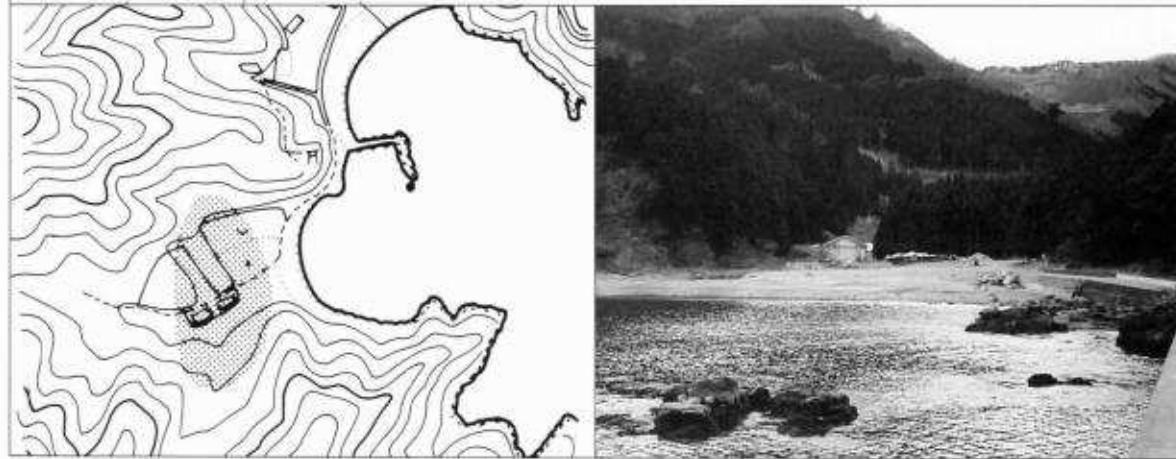
文献 362 遺物 人工…土器(縄文中・後期)



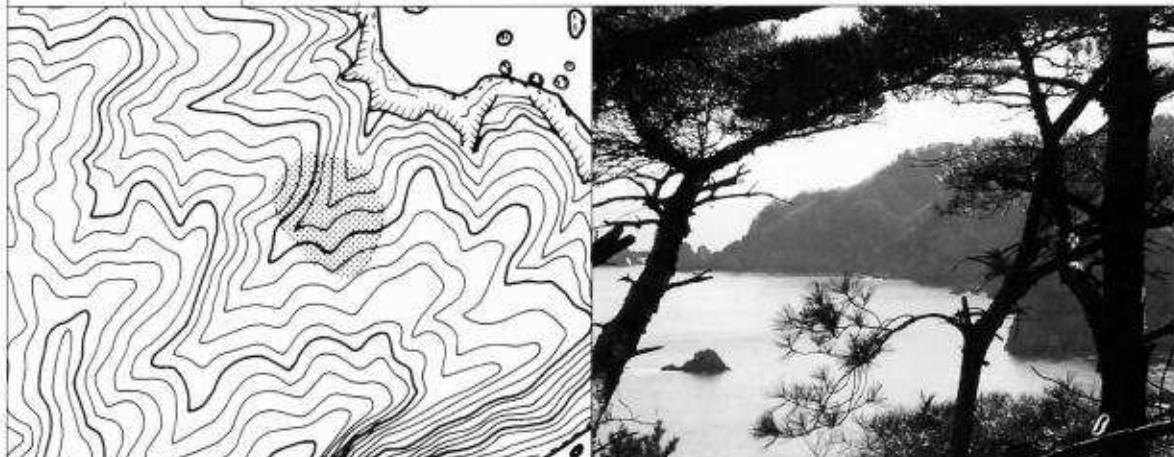
No.	66	遺跡名	油浜貝塚 (あぶらはま) [MG 83-1399]		
所在地	釜石市平田町尾崎白浜佐須	(18)	図幅	N J -54-14-1, 釜石	
立地	丘陵	標高	20~120m	保存状況	良好
時期	縄文 (中・後) / 不明			現況	山林
文献	362	遺物	人工…土器 (縄文中・後期)		



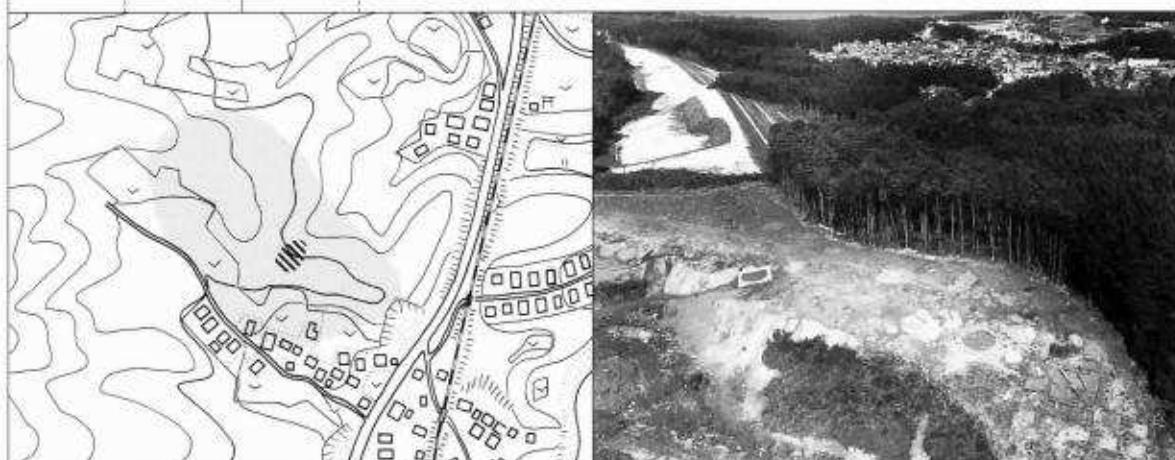
No.	67	遺跡名	鷺巣遺跡 (わしのす) [MG 83-2233]		
所在地	釜石市平田町尾崎白浜佐須	(18)	図幅	N J -54-14-1, 釜石	
立地	丘陵	標高	10~60m	保存状況	良好
時期	縄文 (中・後) / 不明			現況	山林
文献	362	遺物	人工…土器 (縄文中・後期)		



No.	68	遺跡名	大根崎遺跡 (おおねざき) [MG 84-1096]		
所在地	釜石市平田町尾崎白浜佐須	08	図幅	N J - 54-14-1, 釜石	
立地	丘陵	標 高	20~70m	保存状況	良好
時 期	縄文 (前~晩) / 不明			現 況	山林
文 献	362	遺 物	人工…土器 (縄文前~晩期)		



No.	129	遺跡名	山ノ内Ⅱ遺跡 (やまのうちⅡ) [MG 14-0230]		
所在地	下閉伊郡山田町船越第4地割	02	図幅	N J - 54-13-4, 大槌	
立 地	丘陵尾根端	標 高	60m	保存状況	ほぼ壊滅
時 期	縄文(中) / (縄文(中), フラスコ土坑中)			現 況	道路用地
文 献	401	遺 物	人工…縄文土器 (8 b, 10式)・石器, 自然…イガイ・クボガイ・スガイ・ヒメシラトリガイ 〔財〕岩手県埋蔵文化財センター〕		



(4) 下閉伊地区の概要

下閉伊地区にて現地踏査を実施した市町村は、北から田野畠村・岩泉町・田老町・宮古市・山田町の5市町村である。

本地区の海岸線は宮古湾周辺を境としてその北と南で著しく様相を異にしている。

北部は、「海のアルプス」と称され、海拔100m以上の海岸段丘が続いており、海岸線は海食崖・洞門・巨岩が連続する岩礁地帯が発達し、断崖上のアカマツ林と相まって雄大な景観を呈している。また、北上山地から東流する小本川・撰待川・田老川の河口部付近にはややまとまった沖積平野が認められるものの、これら以外の小河川では河口部付近に小規模な砂浜が形成されているにすぎない。このため、この地区に生息する貝類も岩礁性のものが主体となり、イガイ・エゾイガイ・ムラサキインコガイ等の二枚貝、エゾアワビ・クボガイ・コシダカガニガラ・チヂミボウ・エゾチヂミボウ・レイシガイ・イボニシ等の巻貝が生息している。

一方、宮古湾以南は山並みがそのまま海中に没するリアス式海岸が発達し、入江と半島が交互に続く複雑な海岸線を形成している。本地域では宮古湾と山田湾の比較的大規模な入江が存在しており、宮古湾では閉伊川・津軽石川・八木沢川などが注ぐ西岸から湾奥部にかけて沖積平野や砂浜・干潟が発達しており、特に津軽石川河口部付近の干潟は白鳥などの渡鳥の一大飛来地となっている。同様に山田湾でも閑戸川や織笠川が注ぐ湾奥部や船越半島基部付近に沖積平野や砂浜が発達している。本地域では概ね外洋に面した岩礁地帯では前述したような貝類が主体となり、湾内ではアサリ・オオノガイ・イソシジミ・ウバガイ・バカガイ等の二枚貝、ツメタガイ・エゾタマガイ・ホソウミニナ・ヒメエゾボラ等の巻貝が多く、砂底～砂泥底性種が主体を占める。

下閉伊地区北部の海岸段丘上に分布する貝塚は、従来田野畠村羅賀弁天貝塚・岩泉町茂師貝塚・田老町寺山貝塚・宮古市崎山貝塚・同大付貝塚などが知られていていたが、羅賀弁天貝塚・寺山貝塚については開発によりほぼ壊滅状態となっており、今回その内容を確認することはできなかった。また、これ以外に今回の踏査や各市町村による発掘調査で貝層等を確認したものは、岩泉町松林Ⅲ遺跡・田老町越田の各遺跡、宮古市細越Ⅰ遺跡・同白石遺跡・同下在家Ⅱ遺跡等を挙げができる。

これらの貝塚のうち、崎山貝塚は斜面部に縄文前期～中期を主体とする貝層・魚骨層・獸骨層等が形成される比較的規模の大きな貝塚であるが、細越Ⅰ遺跡・白石遺跡・下在家Ⅱ遺跡は遺構の埋土中に小規模な貝層が形成されたものである。また、大付貝塚からは縄文晩期の屈葬人骨が検出されており特筆される。松林Ⅲ遺跡は斜面部に縄文前期を主体とする獸骨層が形成されたものであり、比較的規模が大きく、しかもツキノワグマを含む大型獸が主体となる等通常の貝塚とは異なった特徴を持っている。山間部の石灰岩地帯には同様な遺跡が存在する可能性があり、今後注意を要するところである。越田遺跡はエゾアワビやイガイ等を主体とする比較的規模の大きい貝層が形成されている。遺跡内では縄文時代の遺物が採集できるものの、貝層自体は近世以降に伴うものである可能性が大きい。

下閉伊地区北部では、確認された貝塚の数は少ないが、これらの貝塚以外にも田野畠村机・同和野・同館石野Ⅰ遺跡・岩泉町中野遺跡・田老町水沢遺跡・同樫内遺跡などの大規模な遺跡が存在し、そのほとんどが海岸段丘上に立地しているが、発掘調査によりその内容を把握できているものは少ないとから、今後の調査により新たな貝塚が確認できる可能性は大きいと言える。

下閉伊地区南部では、従来宮古市鍬ヶ崎館山貝塚・同小沢貝塚・同磯鶴蝦夷森貝塚・同上村貝

塚・同小沢田貝塚・同早坂遺跡・山田町大洞（田の浜）貝塚・同川半貝塚・同新道貝塚・同大浦崎遺跡などが知られていたが、今回小沢貝塚・小沢田貝塚・大洞貝塚・新道貝塚・大浦崎遺跡では貝層を確認することができなかった。これら以外の貝塚は比較的規模の大きいものが多く、砂底～砂泥底性の貝類が出土する例が多い。

また、発掘調査等により新たに貝層を確認したものは、宮古市金浜館跡・同磯鶴館山遺跡・同島遺跡・同赤前遺跡群・同近内中村遺跡・同黒森町Ⅰ遺跡・山田町山ノ内Ⅱ遺跡・同沢田Ⅱ遺跡等を挙げることができる。これらは遺構中に形成された小規模なものが主体となるが、近内中村遺跡では縄文後期～晩期の小貝塚・獸骨層・屈葬人骨等が検出されており、沢田Ⅱ遺跡は古代の製鉄遺構を伴う廃滓場中に貝層が形成されている。また、黒森町Ⅰ遺跡では近世の屋敷跡（鑄物工場）に伴い動物遺存体が廃棄されたものであり、直接漁撈活動に関係するものではないが、消費地での情報を提供できる遺跡であると言えよう。この様な中小規模の貝塚は今後の発掘調査により更に数を増すものと思われる。

更に、前述したもの以外に各種開発等により既に壊滅し、その実態を全く確認できない貝塚も存在する。例えば、宮古市横山遺跡は中学校造成時に多量の貝殻が出土したと伝えられ、かなり大規模な貝塚が存在したと思われるが、発掘調査は実施されておらず、出土資料も一切保管されていないため実態は全く不明である。

以上、下閉伊地区に存在する貝塚を概観してみたが、その形成時期が縄文前期～晩期・古代～近世と各時代のものが揃っており、立地環境がバラエティーに富んでいることから岩礁性（外洋性）貝塚～砂泥底性（内湾性）貝塚のほかに獸骨のみを出土する遺跡等比較的内容も豊富である。

ここで、当地域内の貝塚から出土する動物遺存体について若干補足しておく。

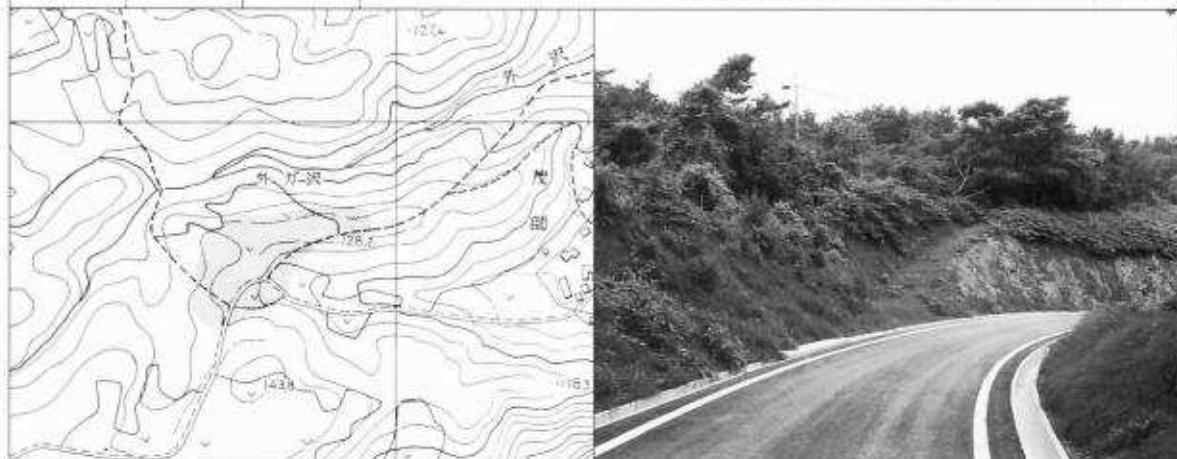
縄文時代では崎山貝塚から多量の魚骨・獸骨の出土を見るが、魚類については、主体となるものは外洋性・岩礁性魚種でマグロ・カツオ・ブリ等の大型回遊魚、アジ・サバ・イワシ等の小型回遊魚、アイナメ・フサカサゴ科等の根魚、及びマダイと4分類され、なかでも小型回遊魚の出土割合がもっとも多いことが知られている。獸骨では、シカ・イノシシが主体となるが、イルカやオットセイ等の海獸類が少なからず出土しており今後も注意を要する。

近内中村遺跡（後～晩期）では小規模な貝層が検出され、マダイ・フサカサゴ科等の海産魚類に混在し、サケ科がやや多く出土する傾向が認められた。また、クジラ・クマ・サル等の出土も確認されている。本遺跡は現在も調査中であり、詳細は報告書の刊行を待つ必要がある。

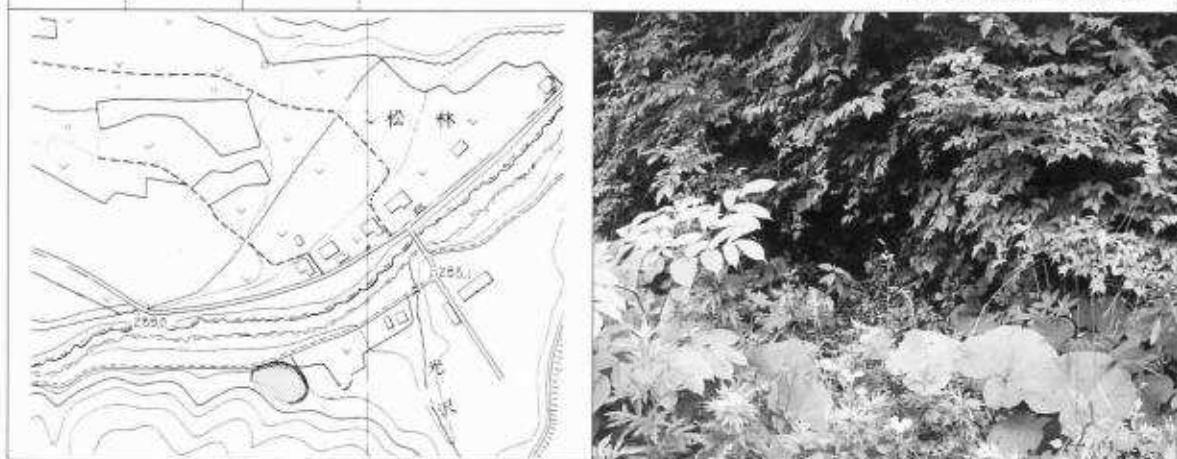
弥生時代以降になると、貝塚は一般に小規模化する傾向があり、遺構埋土中に形成されたものが主体となる。平安時代に伴う磯鶴館山遺跡や島田遺跡からはマダラの骨が出土している。今のところ当地域ではマダラは縄文時代に伴う確実な例はないので、マダラ漁は平安時代以降に発達したものと見るべきであろう。

本地区に存在する貝塚は、気仙地区同様に明治時代以降貝塚研究の一翼をになってきたものであるが、前述したように十分な調査が行われないままに破壊されたものも多い。現在、史跡等として保護されているものは崎山貝塚（国指定）・磯鶴蝦夷森貝塚（宮古市指定）の2例のみであり、今後も調査を継続し各貝塚の実態を把握しながら、しかるべき保護策を講ずるよう努める必要があるものと思われる。

No.	69	遺跡名	茂師貝塚 (もし) [KG 64-0106]	
所在地	下閉伊郡岩泉町小本字本茂師	(9)	図幅	N J - 54-7-14, 田老
立地	段丘上(海岸)	標 高	120~130m	保存状況
時 期	縄文(早~晩) / 縄文		現 況	一部破壊
文 献	372 404	遺 物	人工…土器(縄文早~晩期・弥生)・石器・石製品・土偶・骨角器(骨針) 〔岩泉町教育委員会、岩手県立博物館〕	



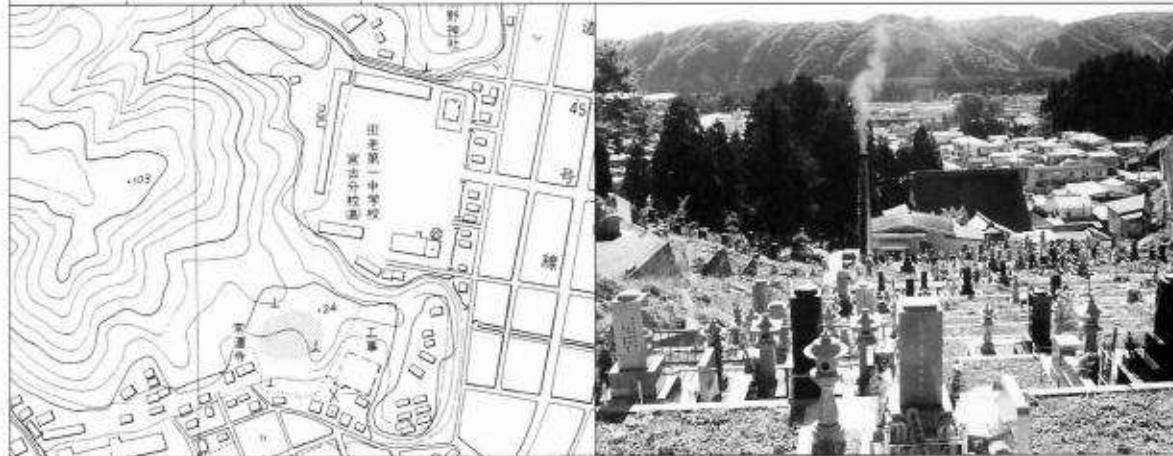
No.	70	遺跡名	松林Ⅲ遺跡 (まつばやしさん) [KF 08-1394]	
所在地	下閉伊郡岩泉町安家字水渡	(7)	図幅	N J - 54-13-5, 門
立 地	段丘上(河岸)	標 高	290m	保存状況
時 期	縄文(前)		現 況	畑地・山林
文 献	360	遺 物	人工…土器(円筒下層d式)・石器・石製品・自然…クマ・シカ・イノシシ 〔岩泉町教育委員会〕	



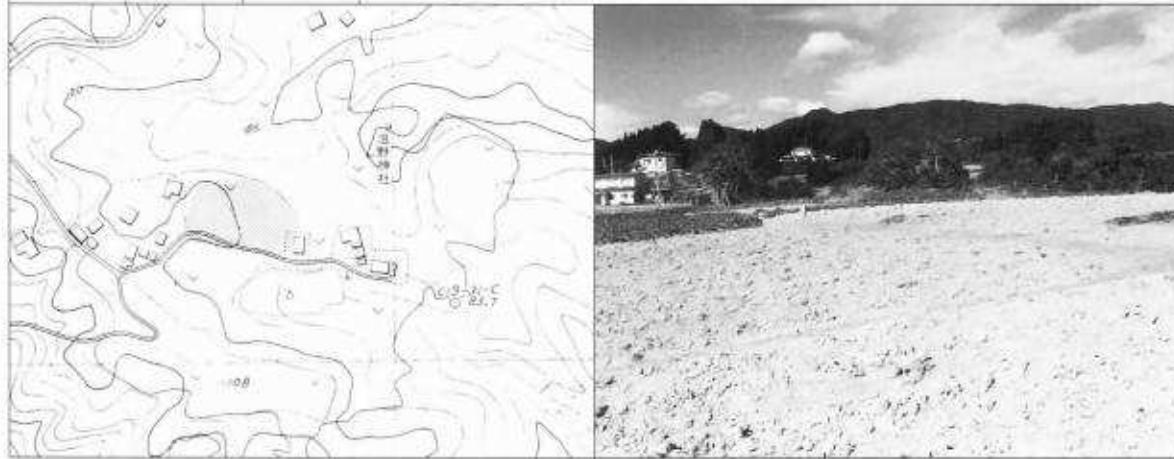
No.	71	遺跡名	羅賀弁天貝塚 (らがべんてん) [KG 14-2034]	
所在地	下閉伊郡田野畠村羅賀		(8)	図幅 NJ-54-13-1, 岩泉
立地	丘陵斜面	標 高	30m	保存状況 壊滅?
時 期	縄文(後) / 不明		現 況	道路
文 献	—	遺 物	人工…縄文土器, 自然…獸骨・貝類 [田野畠村歴史民俗資料館]	



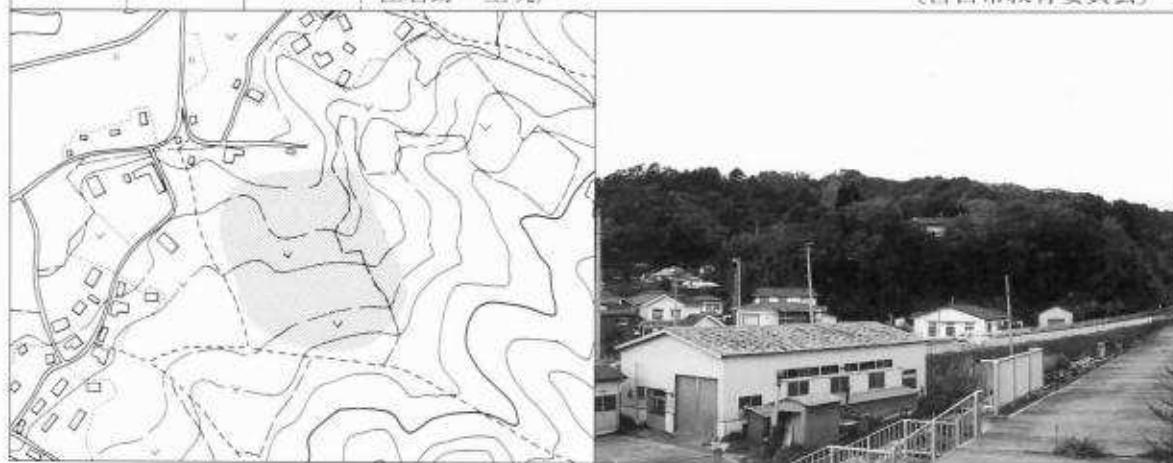
No.	72	遺跡名	寺山遺跡 (てらやま) [KG 94-1184]	
所在地	下閉伊郡田老町寺山		(10)	図幅 NJ-54-7-14, 田老
立 地	緩斜面	標 高	20m	保存状況 壊滅?
時 期	縄文 / 不明		現 況	墓地
文 献	—	遺 物	不明	



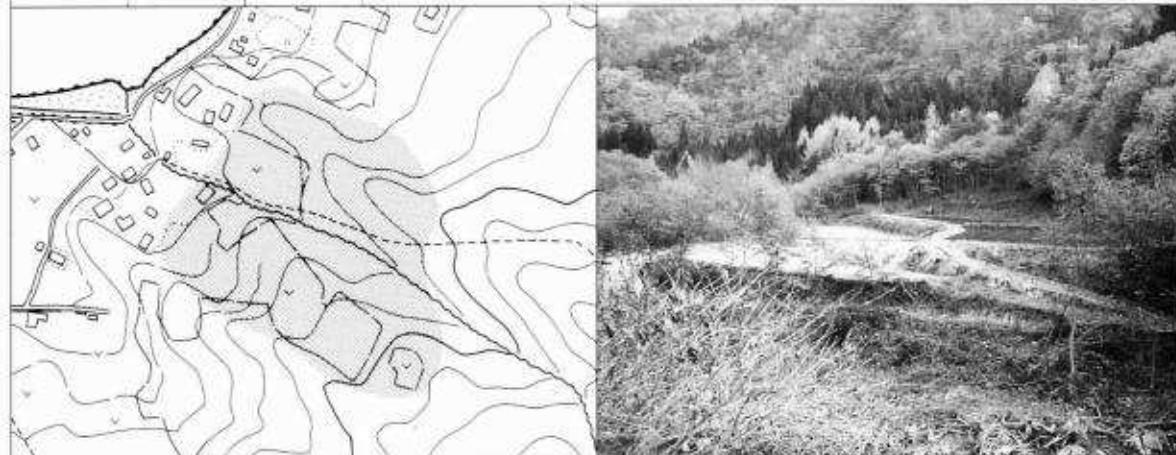
No.	73	遺跡名	越田遺跡 (こしだ) [KG 94-1201]		
所在地	下閉伊郡田老町越田	(10)	図幅	N J - 54-7-14, 田老	
立地	段丘上(海岸)	標 高	100m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文・近世以降／近世以降			現 態	畑地 (露頭に貝層)
文 獻	-	遺 物	人工…土器, 自然…アワビ・イガイ		



No.	74	遺跡名	赤前IV八枚田遺跡 (あかまえよんはちまいだ) [LG 54-1008]		
所在地	宮古市赤前字八枚田	(11)	図幅	N J - 54-13-3, 宮古	
立 地	台地	標 高	40m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(中・晚)・弥生・奈良・平安／平安			現 態	畑地・山林・原野
文 獻	-	遺 物	人工…土器 (縄文中・晩期末, 弥生(天王山式), 土師器, 須恵器, フイゴ羽口, スラグ), 自然…大洞A'式→イガイ・ウバガイ (豊穴住居跡)・平安→ウバガイ・オオノガイ・ウチムラサキガイ・イガイ・ウバガイ・マガキ・オオノガイ・チシマフジツボ (豊穴住居跡・土坑)		[宮古市教育委員会]



No.	75	遺跡名	赤前V柳沢遺跡 (あかまえごやなぎさわ) [L G54-0089]				
所在地	宮古市赤前字柳沢				(II)	図幅	N J-54-13-3, 宮古
立地	台地		標 高	40m	保存状況		一部破壊
時 期	平安			現 態	畑地・山林・原野		
文 献	—	遺 物	人工…土器（土師器・須恵器）・鉄製品（釘ほか）、自然…同定不能（獣骨の焼骨層） 〔宮古市教育委員会〕				

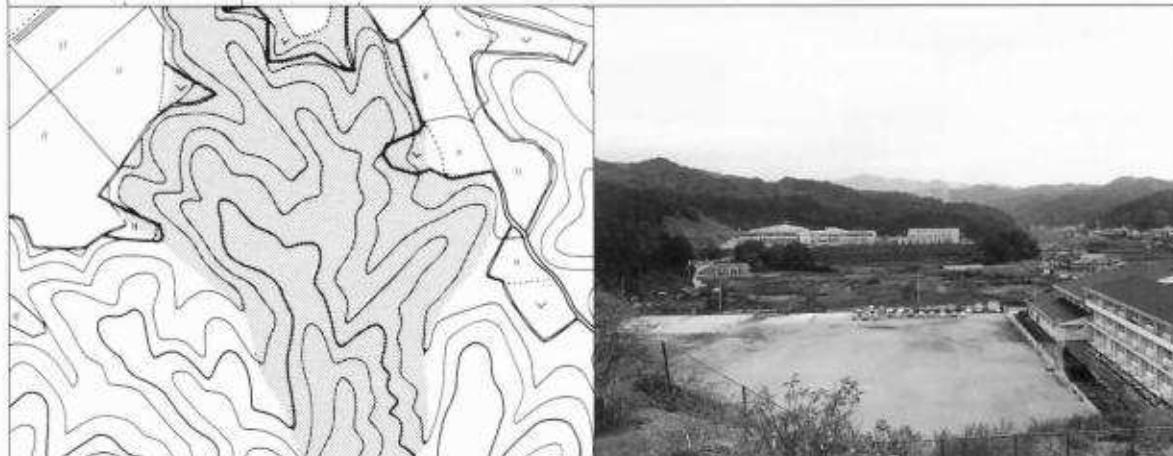


No.	76	遺跡名	小沢田貝塚 (こさわだ) [L G34-1073]				
所在地	宮古市磯鶴				(II)	図幅	N J-54-13-3, 宮古
立 地	台地		標 高	50m	保存状況		良好
時 期	縄文 (中)・奈良・平安／不明			現 態	山林		
文 献	281	遺 物	なし				



No.	77	遺跡名	島田遺跡 (しまだ) [L G 34-2091]		
所在地	宮古市磯鶴字島田			(11)	図幅 N J - 54-13-3, 宮古
立地	台地	標 高	29m	保存状況	一部破壊
時 期	平安			現 況	宅地・山林
文 献	313	遺 物	人工…土器(土師器・須恵器)・鉄器, 自然…マダラ・シカ(平安時代の土坑)・人骨(時期不明)		

〔宮古市教育委員会〕



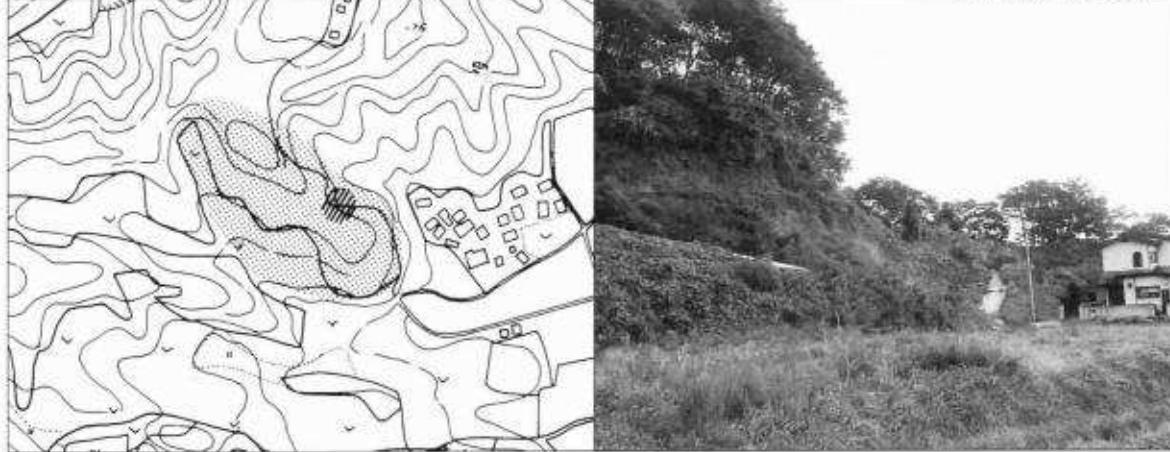
No.	78	遺跡名	上村貝塚 (わむら) [L G 34-1085]		
所在地	宮古市磯鶴上村			(11)	図幅 N J - 54-13-3, 宮古
立 地	台地(丘陵)	標 高	20m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(中)・弥生・奈良・平安／縄文(中)			現 況	宅地・畠地
文 献	353	遺 物	人工…土器(大木8b~9式・弥生・土師器)・石器(ヒスイ大珠・独結石・石製紡錘車)・骨角器, 自然…クロアワビ・シボリガイ・アオガイ・コシダカガニガラ・クロタマキビガイ・イボニシ・レイシガイ・オオコハリガイ・イガイ・ムラサキウニ・マイワシ・ニシン・スズキ科の一種・ウミタナゴ・リス科の一種・ネズミ科の一種ほか		

〔宮古市教育委員会〕



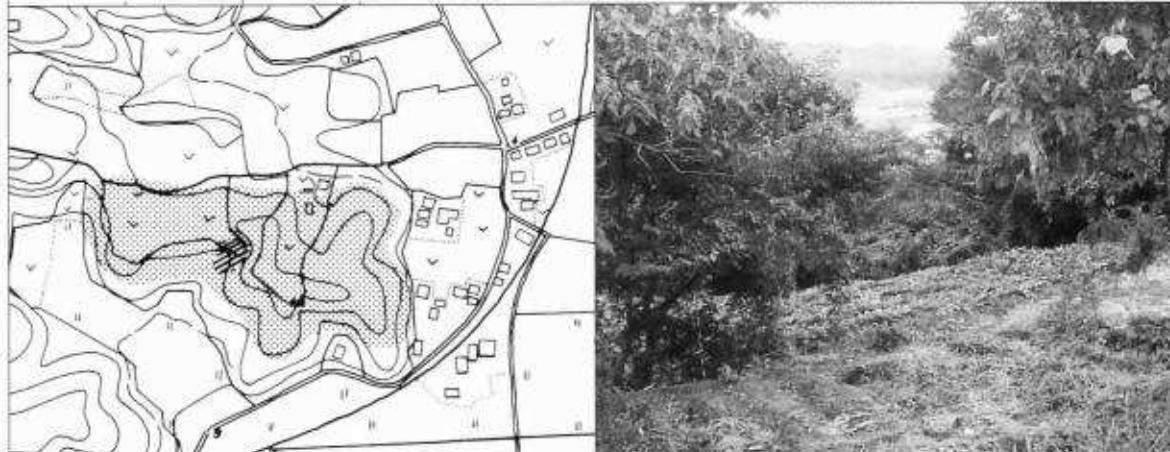
No.	79	遺跡名	早坂遺跡 (はやさか) [LG 34-1075]		
所在地	宮古市磯鶴上村	(1)	図幅	N J - 54-13-3, 宮古	
立地	台地	標 高 40m	保存状況	一部破壊(貝層露出 厚1m)	
時 期	縄文(早・中)・弥生・奈良・平安／縄文	現 態	宅地・山林		

文献 一 遺 物 人工…土器・石器・自然…コガモガイ・コウダカアオガイ・ユキノカサ科・エゾアワビ・サザエ・サンショウガイ・レイシ・クボガイ・ヘソアクボガイ・イガイ・ムラサキインコガイ・クログチガイ・コベルトブネガイ・マガキ・イソシジミ・ウツシジミ・キスマトイガイ・オオノガイ・チリハギガイ・トマヤガイ科・アサリ・マイワシ・カタクチイワシ・サバ・カツオ・マダイ・アイナメ・フナカサゴ科・カワハギ科・マフグ科・板鰓亞綱・チシマフジツボ・ウニ・クルミ
〔宮古市教育委員会〕

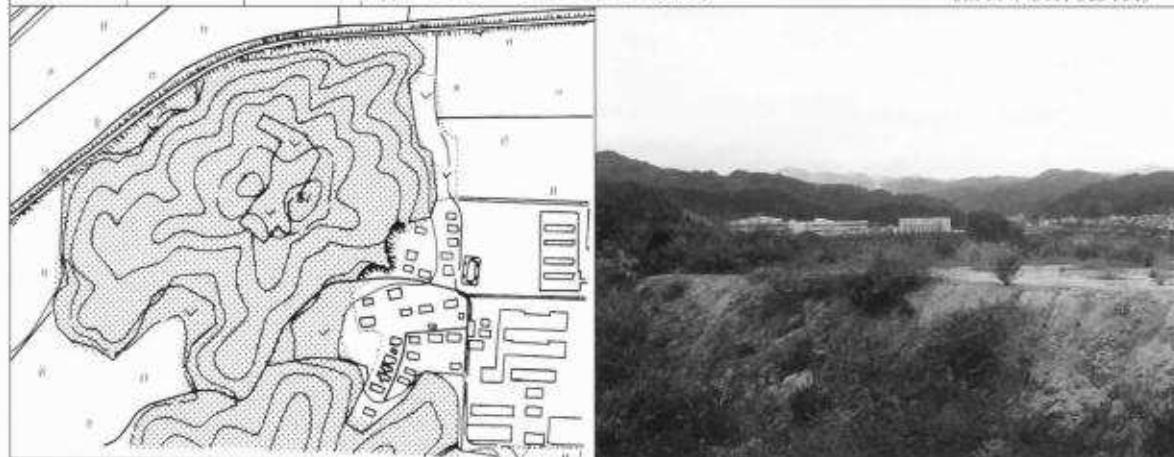


No.	80	遺跡名	磯鶴蝦夷森貝塚 (そけいえぞもり) [LG 34-2007]		
所在地	宮古市磯鶴上村・竹洞	(1)	図幅	N J - 54-13-3, 宮古	
立地	台地	標 高 46m	保存状況	一部破壊 (昭和31年宮古市指定史跡)	
時 期	縄文(前・中)／縄文	現 態	畠地・山林		

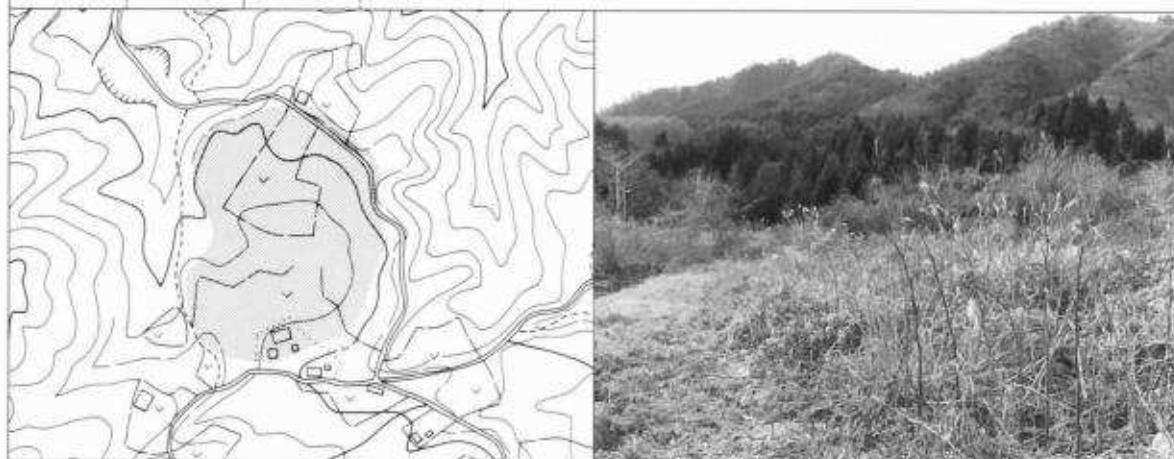
文献 323 遺 物 人工…土器・石器・骨角器(ヤス・刺突具・骨ヘラ・鎌刀)・自然…ユキノカサガイ・ユキノカサガイ科の1種・ツメタガイ・アカニシ・チヂミボラ・エゾチヂミボラ・レイシガイ・タマキビ・イシダタミガイ・マガキ・ホタテガイ・コトマガイ・ウバガイ・イソシジミ・チリハギガイ・マダイ・マグロ属・マイワシ・カタクチイワシ・アイナメ・サメ類・チシマフジツボ・ウニ・イノシシ・ニホンジカ・クジラ類・人骨2体以上
〔宮古市教育委員会〕



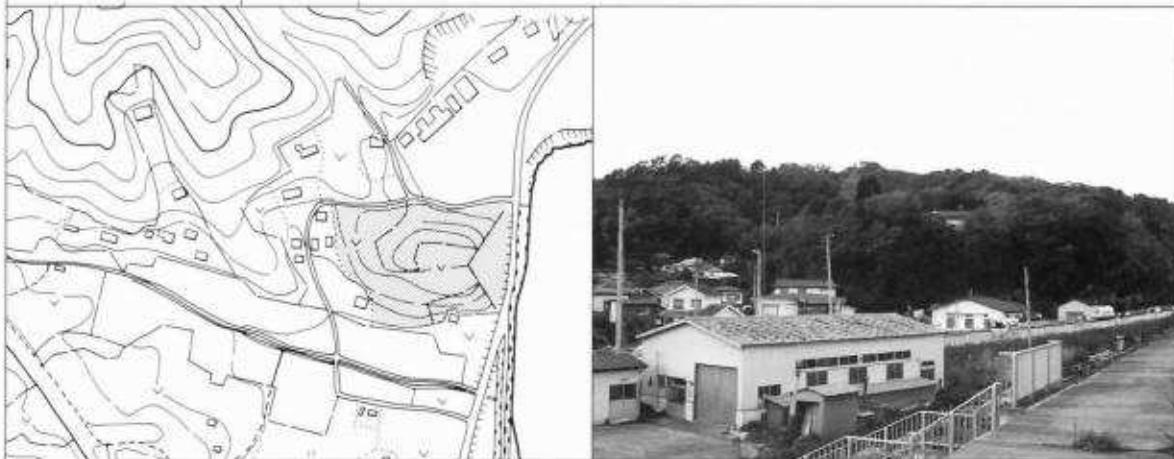
No.	81	遺跡名	磯鶴館山遺跡 (そけいたてやま)	〔L G 34-2155〕	
所在地	宮古市磯鶴中谷地ほか			(11)	図幅 N J -54-13-3, 宮古
立 地	台地	標 高	35m	保存状況	壊滅
時 期	平安・中世・近世／古代以降		現 態	宅地・山林・原野	
文 献	16・27	遺 物	人工…土器（土師器・須恵器）・鉄器（釣針・農工具・武具など）・自然…エゾアワビ・ユキノカサガイ科・オオハビガイ・ホソヤツメタガイ・チヂミボラ・レイシガイ・マルオカチョウシガイ・オオコガクガイ・コベルトフネガイ・ムラサキインコガイ・イワガキ・チリハギガイ・ヌノメアサリ・イソシジミガイ・コマタガイ・チシマフジツボ・サケ科・オオボラ科・カレイ科・マダラ・シカ・イノシシほか		



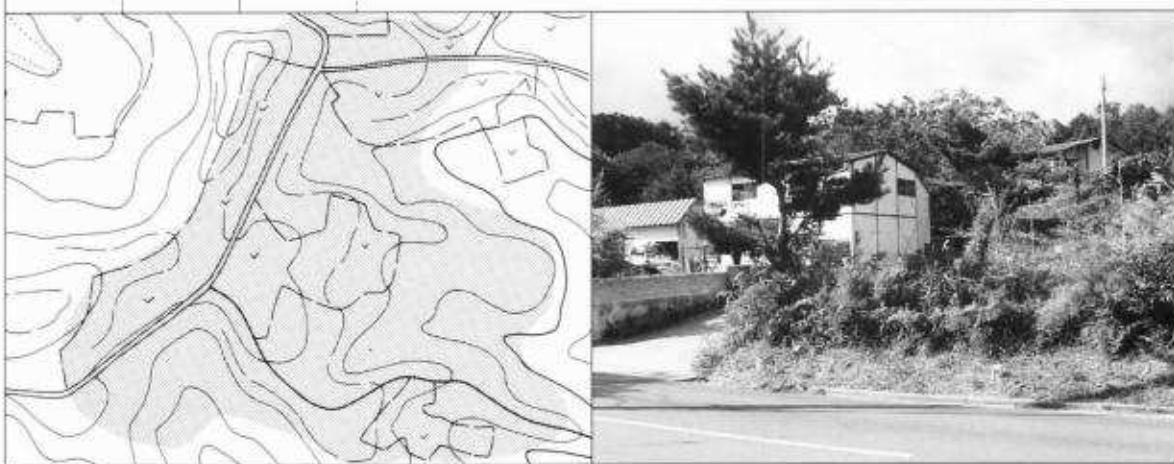
No.	82	遺跡名	赤なしが沢遺跡 (あかなしがさわ)	〔L G 35-1144〕	
所在地	宮古市大字重茂岬の神			(13)	図幅 N J -54-13-3東, 鮎ヶ崎
立 地	段丘上(海岸)	標 高	115m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(前・中)		現 態	宅地・畑地・山林	
文 献	-	遺 物	人工…土器(縄文前・中期)・石器, 自然…ホホジロサメ歯 製ペンダント		



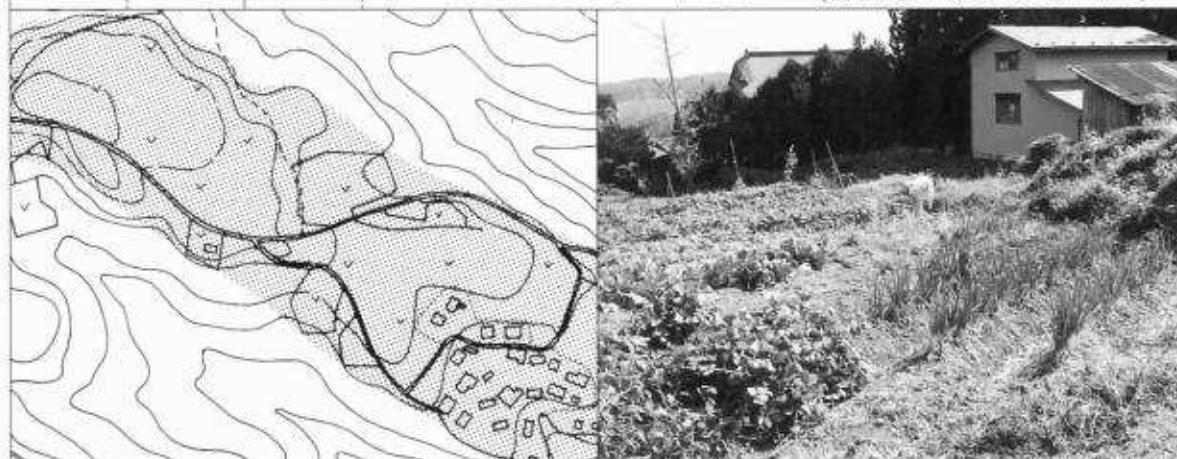
No.	83	遺跡名	金浜館跡 (かねはま) [LG 43-2335]		
所在地	宮古市大字金浜西角地・堤ヶ沢	(1)	国幅	N J - 54-13-3, 宮古	
立 地	台地	標 高	32m	保存状況	壊滅
時 期	縄文(前・中)・中世／縄文		現 態	宅地	
文 献	303	遺 物	人工…縄文土器(大木4~10式)・石器・天目茶碗・青磁皿、自然…岩礁性貝類		[宮古市教育委員会]



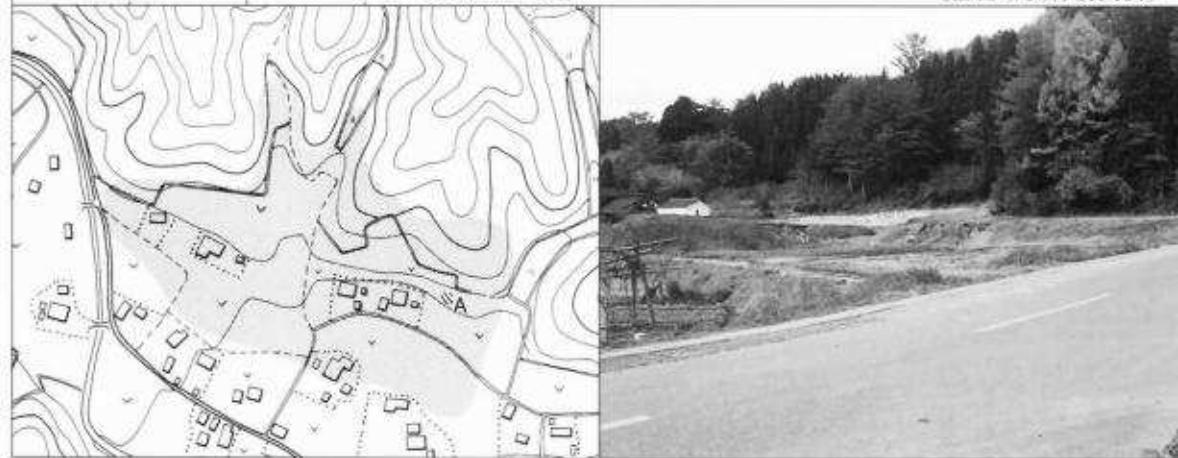
No.	84	遺跡名	白石遺跡 (しろいし) [LG 14-2195]		
所在地	宮古市大字崎嶽ヶ崎字白石	(1)	国幅	N J - 54-13-2, 田老	
立 地	段丘上(海岸)	標 高	130m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(中・後)		現 態	宅地・畠地・山林・道路・原野	
文 献	333 334 359	遺 物	人工…縄文土器(大木10式～後期初頭)・石器・キノコ形土製品・土偶など、自然…岩礁性貝類		[宮古市教育委員会]

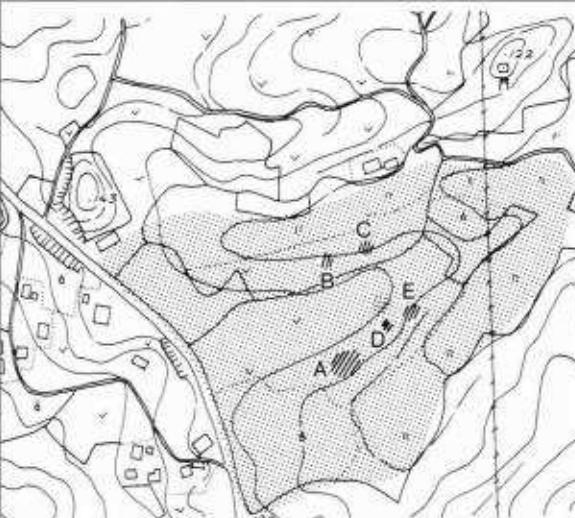


No.	85	遺跡名	大付遺跡 (おおづけ) [LG 14-2291]						
所在地	宮古市大字崎嶺ヶ崎第15地割字大附			(10)	図幅	N J -54-7-14・13-2, 田老			
立地	段丘上(海岸)		標高	100m	保存状況	一部破壊(貝層本体は宅地化)			
時期	縄文(早・前・中・後・晚)・弥生/縄文		現況	宅地・畠地・山林・道路・原野					
文献	16 243	遺物	人工…土器(早期末~前期初頭以降各期・砂沢式・天王山式)・骨角器(釣針・銛頭・彌形角製品・骨ヘラ・セミ形骨偶)・土偶・石製品(石棒), 自然…シカ・ツメタガイ・スズキ・マダイ・クジラ・イルカ [宮古市教育委員会, 個人]						

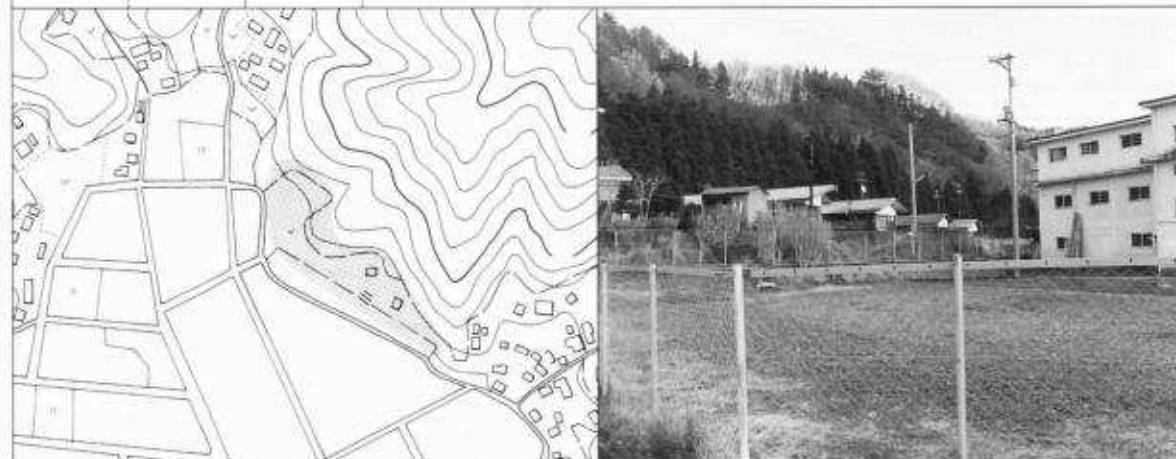


No.	87	遺跡名	近内中村遺跡 (ちかないなかむら) [LG 23-2059]						
所在地	宮古市大字近内中村			(11)	図幅	N J -54-13-3, 宮古			
立地	台地~沖積平野(低地)		標高	25m	保存状況	一部破壊(発掘調査中)			
時期	縄文(中・後・晚)・弥生・平安・中世・近世 (A地点10×10m縄文後期末~晩期前半)		現況	宅地・水田・畠地・山林					
文献	-	遺物	人工…土器(中期末葉~後期後葉~晩期)・石器・骨角器(釣針・ヤヌ・彌形角器・ヘアピンなど)・香炉形土器・注口土器・巻貝形土器・土偶・イノシシ形土製品・ヒスイ製小玉・装飾品類, 自然…シカ・イノシシ・イヌ・サル・クジラ・イルカ・ウサギ・ヤマドリ・マイワシ・サケ科の一種・フサカサゴ科の一種・カレイ科の一種・ウグイ・マダイ・ボラ・スズキ・人骨 [宮古市教育委員会]						

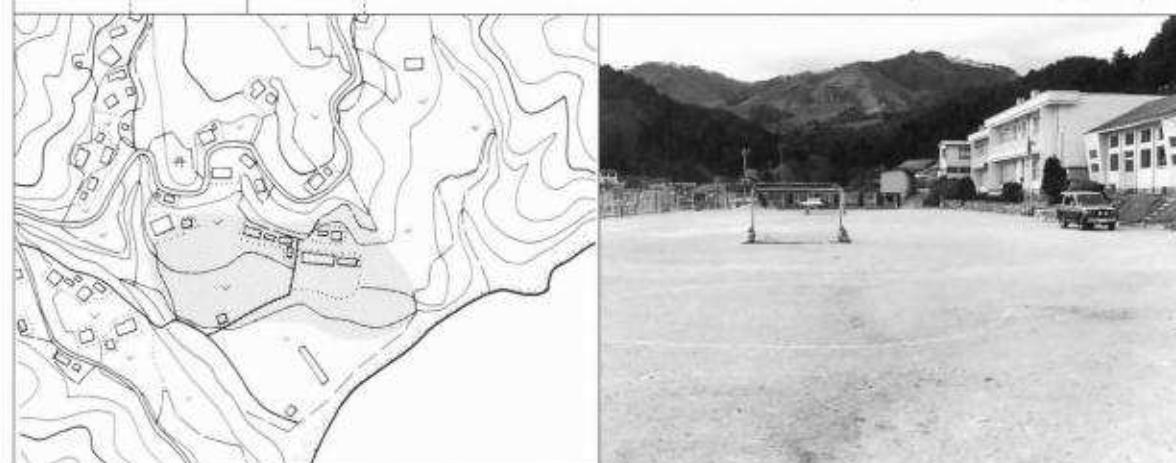


No.	86	遺跡名	崎山貝塚 (さきやま) [L G 14-2079]																
所在地	宮古市大字崎山第1地割字千束長根ほか			(10)	図幅	N J -54-7-14・13-2, 田老													
立 地	段丘上(海岸)		標 高	115m	保存状況	一部破壊(貝層自体は良好)													
時 期	縄文(前・中・後・晩)・弥生・平安			現 況	宅地・水田・畑地・山林・道路・原野														
規 模	350m×200m / (A地点30×30m縄文(前～中), B地点10×10m縄文(前?), C地点20×20m縄文(前期前半), D地点6×6m縄文中期後半, E地点20×20m縄文(前～中))																		
調査歴	大正13(1924)年－柴田常恵・小田島祿郎, 昭和59(1984)年－武田将男, 昭和60(1985)年－上野猛, 昭和61－平成2(1986－90)年－高橋憲太郎, 平成3～5(1991～93)年－高橋憲太郎, 平成6～7(1994～96)年－高橋憲太郎(昭和61～平成7年は範囲確認調査)																		
遺 構	竪穴住居跡・土坑・配石・中央広場・環状遺構帶・立石・掘立柱建物跡ほか																		
人工遺物	土器(大木1-10式・上村式-螢沢式)・石器(石鎌・石槍・その他各種)・骨角器(釣針・骨角ヘラ・錐・骨針・刺突具・刃斧・ヘアピン・貝状角製品・装飾品ほか)・石製品・土製品類(石棒・勾玉・块状耳飾・環状石製品・動物形石製品・キノコ形土製品他)																		
自然遺物	クロアワビほか11種・オカモノアラガイほか11種・ムラサキインコガイほか10種・アカフジツボほか2種・オオバフンウニほか1種・ツノザメほか2種・ニシンほか28種・ミズナキドリ科の一種ほか5種・ニホンザルほか13種・ヘビ亜目の一一種ほか爬虫綱1種ほか																		
資料保管	宮古市教育委員会・個人・岩手県立博物館(小田島コレクション)																		
文 献	169・326・333・334・341・359・371・381～383・391・395																		
備 考																			
<ul style="list-style-type: none"> ・縄文前期に伴う石器による切傷を有する人骨出土 ・平成8年 国指定史跡 ・A地点 主体は前期の魚骨層 ・C地点 主体は貝ブロックと獸骨層 ・D地点 ムラサキインコガイ等を主体とする貝層 ・E地点 前期は魚骨層主体、中期は貝ブロック及び獸骨層 																			
 																			

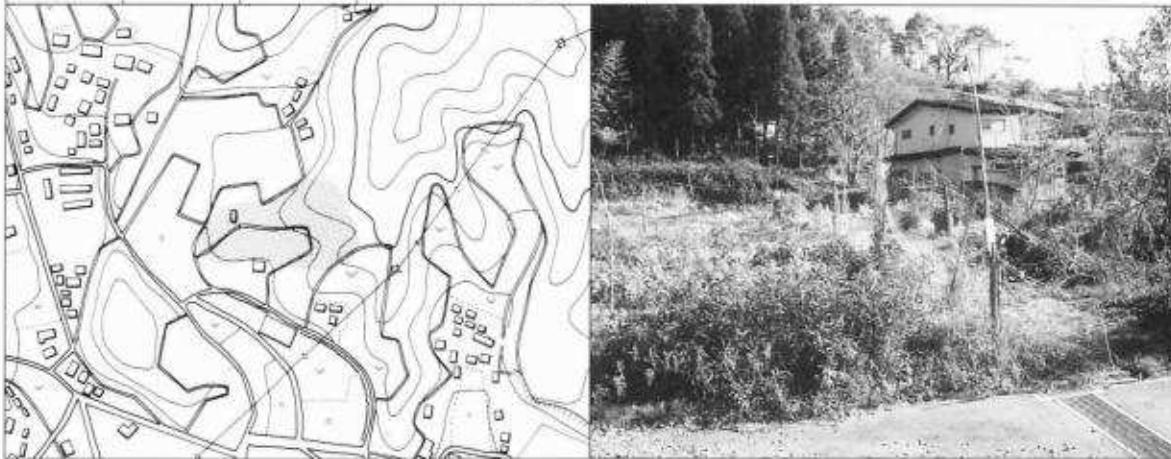
No.	88	遺跡名	小沢貝塚（小沢東貝塚）（こざわ）〔LG23-2377〕		
所在地	宮古市小沢		(11)	図幅	NJ-54-13-3, 宮古
立地	沖積平野(低地)	標 高	10m	保存状況	一部破壊(貝層は消滅か?)
時 期	縄文（前・中・後）・奈良／不明			現 況	宅地・畠地・山林
文 献	169	遺 物	人工…土器（縄文前～後期・土師器）・石製品（石剣）・土偶、自然…確認できず		〔個人〕



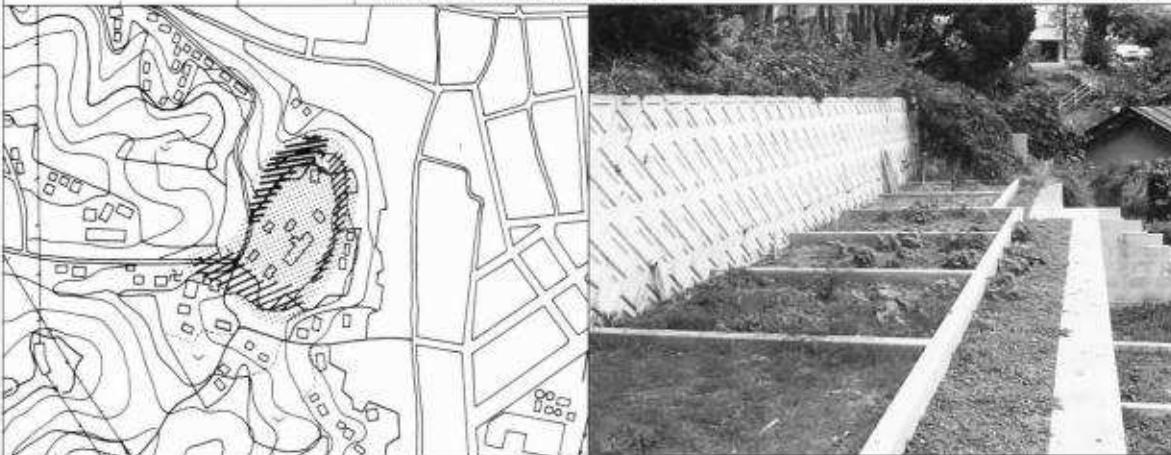
No.	89	遺跡名	千鶴遺跡（千鶴II遺跡）（ちけい）〔LG75-0345〕		
所在地	宮古市重茂千鶴上野		(14)	図幅	NJ-54-13-3東, 鮎ヶ崎
立 地	段丘上(海岸)	標 高	20m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文（前・中・後）／縄文（前）			現 況	宅地・畠地・山林・道路
文 献	-	遺 物	人工…土器（上川名式～）・石器（石鎌・石匙・削器・打製石斧・石ヘラなど）、自然…獸骨（焼骨）→前期堅穴住居跡内		〔宮古市教育委員会〕



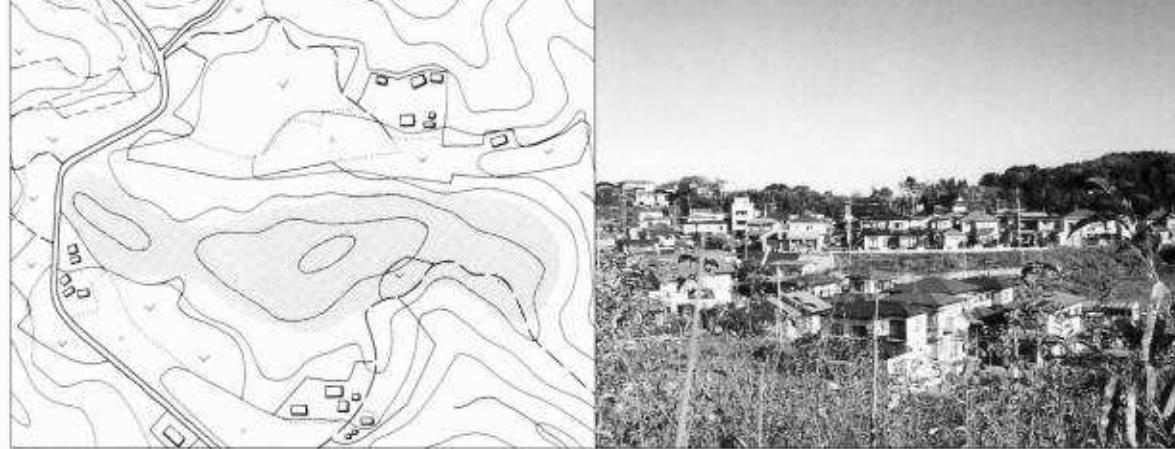
No.	90	遺跡名	黒森町I遺跡 (くろもりちょういのち) [L G23-2360]						
所在地	宮古市黒森町				(1)	図幅	N J -54-13-3, 宮古		
立地	台地	標 高	29m	保存状況		一部破壊			
時 期	近世			現 況	宅地・畠地・山林・道路				
文 献	363	遺 物	人工…陶磁器 (17~19世紀)・鉄器・銅器・古錢・キセル・カンザシ・墓石・鋳型・埴堀・羽口・炉壁, 自然…イガイ・オオノガイ・ウバガイ(多)・トリガイ・ホタテ・アサリ・コタマガイ・タマキガイ・エゾアワビ(多)・ブリ属・キジ科・ネコ・イヌ(多)・人骨						



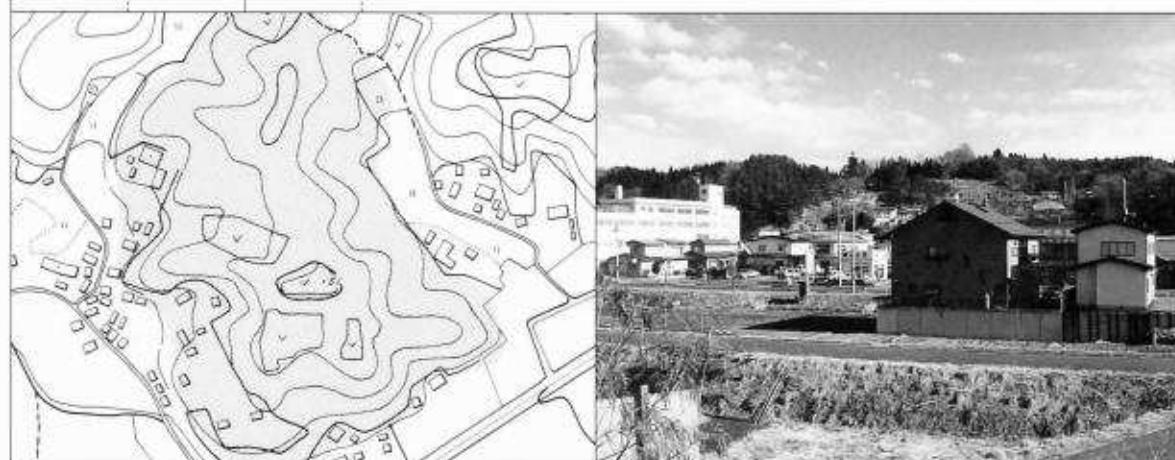
No.	91	遺跡名	鍬ヶ崎館山貝塚 (くわがさきたてやま) [L G24-2183]						
所在地	宮古市鍬ヶ崎字下町				(1)	図幅	N J -54-13-3, 宮古		
立地	段丘上(海岸)	標 高	46m	保存状況		一部破壊 (主要な貝層は調査済)			
時 期	縄文(早・前・中・後・晩)・弥生・平安・中世/縄文・平安			現 況	宅地・山林・道路・原野・墓地				
文 献	16・17・ 27・345	遺 物	人工…土器(貝穀文・織籠起線文・土川名目式・大木8a-10式・後期中葉・大洞B-C2式・製塙土器(平安))・骨角器類(釣針・筋頭・ヤス・骨針・骨ヘラ・刺突具など), 自然…ウニ・ブメタガイ・ユキノカサガイ・マダカアワビ・マガキ・イタヤガイ・イカイ・コタマガイ・ワキアケアサリの一種・カガミガイ・ムラサキガイ・サメ類・アカエイ・トビエイ・ギス・ニシン・カタクチイワシ・サケ・ウグイ・マダラ・スズキ・カサゴ・クロダイ・マダイ・カツオ・クロマダロ・ヒラメ・アザラシ・クジラ・イルカほか						



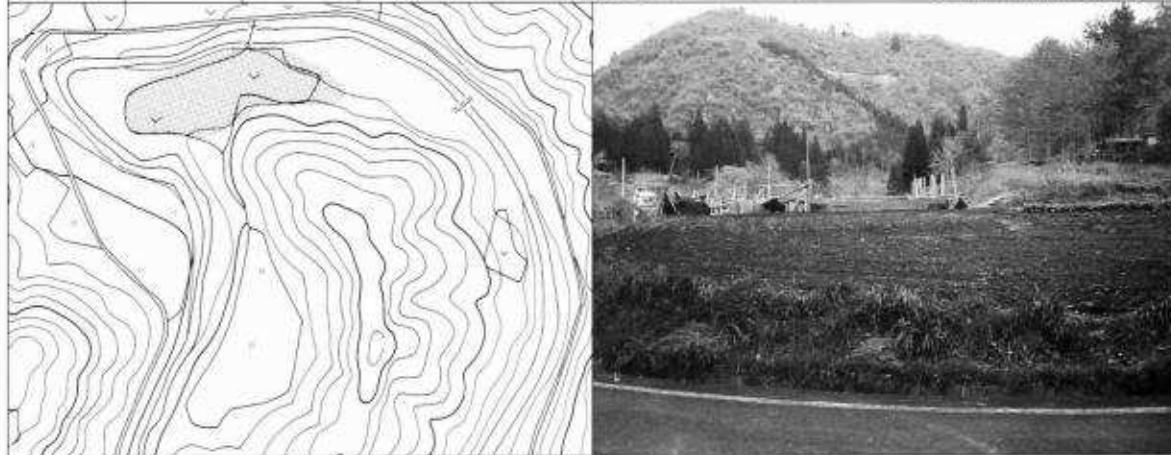
No.	92	遺跡名	下在家Ⅱ遺跡 (しもざいけに) [LG24-0141]		
所在地	宮古市崎鉢ヶ崎字下在家			(10)	図幅 NJ-54-13-2, 田老
立地	段丘上(海岸)	標高	125m	保存状況	一部破壊
時期	縄文・近世(第5土坑1.2×0.8m)/古代以降		現況	宅地・山林	
文献	—	遺物	人工…土器片・石器(石鐵)・寛永通宝・鉄製釣針、自然…エゾアワビ・ベツコウカサガイ・マツバガイ・ユキノカサガイ・アオガイ・シロガイ・クボガイ・コシタカガニカラ・タマキビ・レイシガイ・チヂミボラ・エゾチヂミボラ・ホタテガイ・コベルトフネガイ・イガイ(多)・ムラサキインコガイ(全体)・スノメアサリ・フジツボ類・バフンウニ・キタムラサキウニ・サメ類・アイナメ・マダラ・カサゴ科の一種		



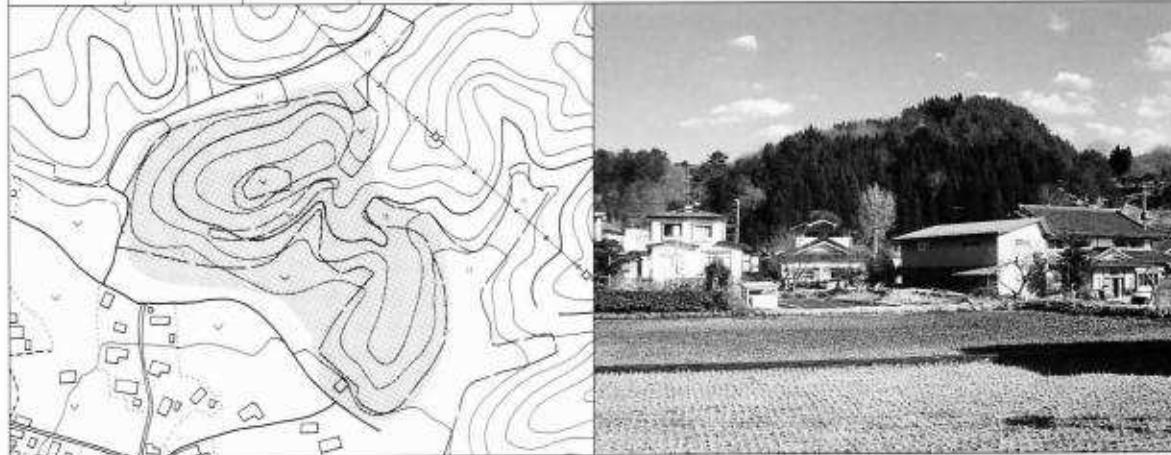
No.	93	遺跡名	千徳城遺跡群(堀合館跡) (せんとくじょういせきぐん、ほりあいたて) [LG33-0097]		
所在地	宮古市千徳			(11)	図幅 NJ-54-13-3, 宮古
立地	台地	標高	52m	保存状況	一部破壊
時期	中世		現況	宅地・畠地・山林・道路・墓地	
文献	—	遺物	人工…土師器片少量、自然…ウマ・ウシ(中世)		



No.	94	遺跡名	細越 I 遺跡 (ほそごえいち) [L G03-2102]			
所在地	宮古市田代字半沢	(10)	図幅	N J - 54-13-2, 田老		
立地	段丘上(河岸)	標高	85m	保存状況	一部破壊	
時期	平安	現況	水田・畑地			
文献	370	遺物	人工…土師器 (10~11世紀)・鉄器・フイゴ羽口・スラグ・ハンマースケール、自然…ユキノカサガイ科・タマキビガイ・オオコハクガイ・イガイ・ムラサキインコガイ・チリハギガイ・アカフジツボ・十脚目短尾亜目 (カニ)・炭化種実 (ドングリほか) [宮古市教育委員会]			



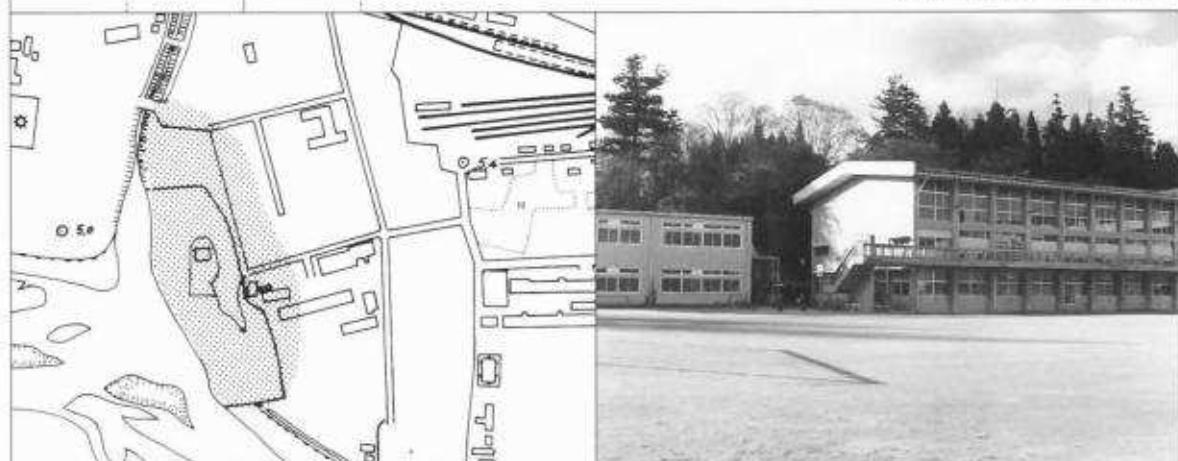
No.	95	遺跡名	近内館跡 (ちかないたて) [L G23-2162]			
所在地	宮古市近内字踊場	(11)	図幅	N J - 54-13-3, 宮古		
立地	台地	標高	50m	保存状況	良好	
時期	平安・中世／古代	現況	畑地・山林			
文献	-	遺物	人工…土師器・須恵器・鉄器、自然…岩礁性二枚貝 (イガイ?) [宮古市教育委員会]			



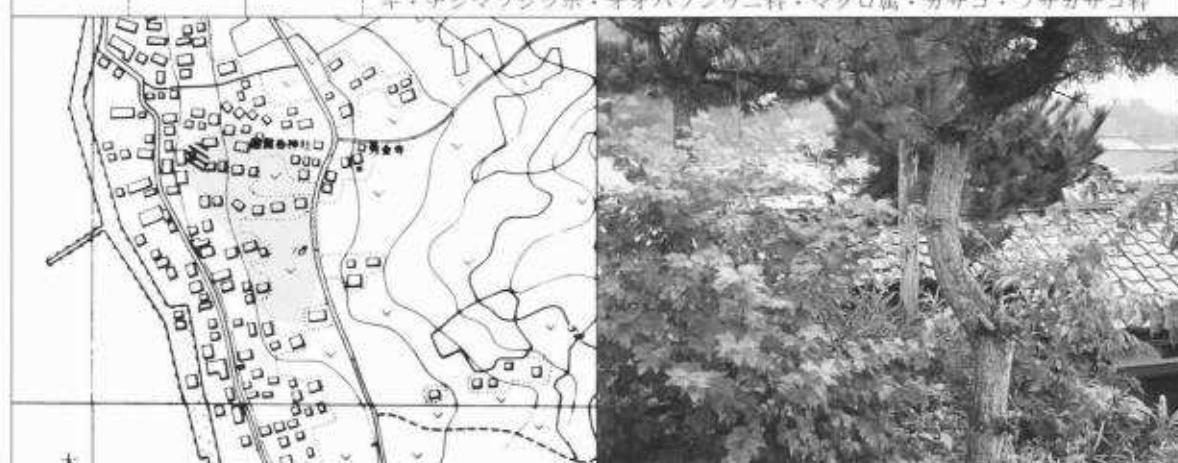
No.	96	遺跡名	横山遺跡（よこやま）（笠間館の一部）[LG 33-0385]				
所在地	宮古市宮町2丁目				(1)	図幅	NJ-54-13-3, 宮古
立地	台地		標高	20m	保存状況		一部破壊 (貝層は壊滅か?)
時期	奈良・平安・中世／古代?				現況	宅地・山林・学校	

文献 一 遺物 人工…陶磁器・鉄器、自然…なし

[宮古市教育委員会]



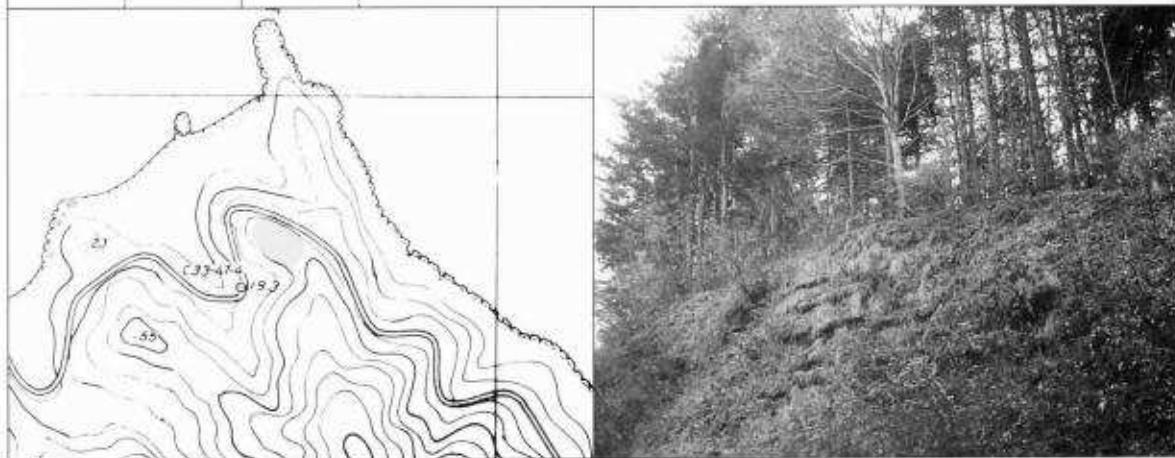
No.	97	遺跡名	川半遺跡（かわはん）[MG 05-0170]				
所在地	下閉伊郡山田町川半				(1)	図幅	NJ-54-13-4東, 露天ヶ岳
立地	緩斜面		標高	15m	保存状況		一部破壊
時期	縄文（中）／不明				現況	宅地	
文献	一	遺物	人工…土器（大本8柄式）・石器・陶磁器（肥前系18世紀前半～中葉）、自然…コウダカアオガイ・イシダタミガイ・ゴンダカガシガラ・クボガイ・タマキビガイ・クロタマキビガイ・ウミニナ・ヒレガイ・チヂミボラ・レイシガイ・イガイ・ホタテガイ・マガキ・ウチムラサキガイ・アサリ・クチバガイ・ウバガイ・ヒメシラトリガイ・サビシラトリガイ・シラトリガイモドキ・チシマフジツボ・オオバツヌニ科・マグロ属・カサゴ・フサカサゴ科				



No.	98	遺跡名	新道貝塚（しんどう） [MG 04-2320]		
所在地	下閉伊郡山田町新道		(12)	図幅	N J - 54-13-4, 大槌
立地	緩斜面	標高	10m	保存状況	一部壊滅
時期	縄文（中）／不明			現況	畠地・山地



No.	99	遺跡名	大浦崎遺跡（おおうらさき） [MG 05-0063]		
所在地	下閉伊郡山田町大浦崎		(12)	図幅	N J - 54-13-4, 大槌
立地	丘陵	標高	40m	保存状況	不明
時期	不明			現況	山林



No.	100	遺跡名	沢田Ⅱ遺跡 (さわだに) [LG94-0033]					
所在地	下閉伊郡山田第3地割55-1ほか				(12)	図幅 NJ-54-13-4, 大楕		
立地	丘陵尾根端	標高	12m	保存状況		ほぼ壊滅		
時期	縄文(中)・古代(奈良?)／縄文・奈良		現況		道路用地			
文献	—	遺物	人工…縄文土器(大木10), 土師器, 自然…ウミニナ・ヒメシラトリ・アサリ・ネジボラ・コエゾボラモドキ・シライトマキ・マダラ・フサカサゴ科の一種・アイナメ・シカ 〔財〕岩手県埋蔵文化財センター]					
								

No.	101	遺跡名	大洞貝塚 (おおほら) [MG14-0397]					
所在地	下閉伊郡山田町田の浜				(12)	図幅 NJ-54-13-4, 大楕		
立地	緩斜面	標高	15m	保存状況		壊滅か?		
時期	不明		現況		宅地			
文献	—	遺物	不明					
								

(5) 九戸地区の概要

九戸地区は本県の北東部に位置する。太平洋に面した種市町、久慈市、野田村、普代村、内陸に位置する大野村、山形村からなる。

本地区の特徴として単調な海岸線が挙げられる。宮古市以南から仙台湾にかけては、沈降性のリアス式海岸が広がり、湾が連続し複雑な海岸線を呈しているのに対し、岩手県北部の海岸は、隆起性の海岸段丘が形成され単調な海岸線を呈する。この単調な海岸線は、同じ方向に何度も繰り返された隆起によって形成されたもので、北は八戸市鮫付近から南は田野畠村まで連なり、海岸線の多くは切り立った海食崖となっている。この単調な海岸線が変化するのは久慈湾と野田湾である。ほかの地域は花崗岩を基盤岩としているが、久慈湾と野田湾には礫岩、砂岩、凝灰岩を主とする固結度の小さい久慈層群、野田層群が分布しており、それが浸食作用を受け湾が形成されたものである。八戸市から普代村北端部にかけて、海岸線に沿うように8段程の海岸段丘が認められ、最大幅で14kmにもわたり、この段丘が開析され主たる地形が形成されている。海岸段丘以西である山形村や普代村は北上山地に属する。

県南のリアス式海岸には貝塚が多く分布しているのに対し、県北は貝塚の分布が極端に減少する。これは、湾が少なく、貝の育成に好条件な遠浅な湾がないことなどが挙げられるが、八戸市周辺や小川原湖周辺においては多くの貝塚の分布が確認されており、本地区の海岸線は、切り立った海食崖が発達しているため貝の採取には地形的制約があったことも要因と考えられる。

県北地域では貝塚が少ないこともあり、研究者が訪れることが少なかった。昭和2(1927)年に岩手県史跡名称天然記念物調査会委員であった小田島祿郎が、それまで調査されていなかった県北の貝塚や洞穴遺跡の調査のために宮古市から種市町までの貝塚を調査し、この時、種市町八木貝塚、黒マッカ貝塚等を発見した。これが本地区における貝塚調査の始まりと考えられる。小田島は、昭和6(1931)年・7(1932)年には野田村の根井貝塚の調査を実施し、縄文時代後期末葉に属する骨角器・土器類を層位を区分して取り上げている。その後、根井貝塚は昭和58(1983)年には岩手県立博物館により発掘調査が実施されるが、本地区における貝塚の発掘調査はそれまで空白の時期となる。

本地区における各市町村の遺跡の概要に触れてみたい。種市町では、45遺跡が確認されている。平成6年度に町内で初めて発掘調査が行われたゴッソー遺跡からは、縄文時代の陥し穴や土坑、焼土遺構等が検出され、縄文時代早・前期の遺物が出土している。また、町指定史跡として江戸時代に築かれた有家の御台場（砲台跡）がある。貝塚として登録されているのはホックリ貝塚、八木貝塚、小子内貝塚、黒マッカ貝塚の4箇所である。久慈市では、408遺跡が確認されている。昭和50年代後半から発掘調査件数が増加し、現在に至っている。コハク玉の未成品が大量に出土した中長内遺跡や、縄文時代から古代にかけて連綿と続き約30万m²もの広大な規模をもつ平沢I遺跡などは注目される。また、市指定史跡として二子貝塚、寺里I遺跡、久慈城跡、麦生砲台場跡、平沢一里塚がある。貝塚として登録されているのは二子貝塚の1箇所である。野田村では44遺跡が確認されている。県指定史跡である野田堅穴群（中平遺跡）、藤手刀3振が出土した中新山遺跡、縄文時代前期後半の遺物が大量に出土する広内遺跡等が注目される。貝塚として登録されているのは根井貝塚の1箇所である。普代村には53遺跡が確認されている。平成9年度に村内で初めて発掘調査が行われた太田名部遺跡からは、縄文時代前期の堅穴住居跡、陥し穴状遺構等が検出された。また、堀内机遺跡は縄文時代中期の大規模集落跡として注目される。貝塚は確認されていない。大野村は72遺跡が確認されているが、貝塚は確認されていない。山形村は204遺跡が確認されている。成谷遺跡、

早坂平遺跡、太戸の境久保遺跡の旧石器時代の遺跡や、製鉄関連遺跡が71箇所と多く注目される。また、村指定史跡として霜畠の合戦場一里塚がある。貝塚は確認されていない。

本地区において貝塚として登録されているのは、種市町ホックリ貝塚、八木貝塚、小子内貝塚、黒マッカ貝塚、久慈市二子貝塚、野田村根井貝塚の6箇所である。これらの立地をみると、野田村根井貝塚が海岸線から3kmも離れた標高約225~300mの高位段丘面に立地しており特異であるが、他の貝塚は海岸近くの低位段丘面にいずれも立地している。

本地区における貝塚の発掘調査としては、まず、岩手県立博物館による根井貝塚の発掘調査が挙げられる。3次にわたって発掘調査が実施され、堅穴住居跡埋土中に形成された小規模な貝層が確認されている。その後、久慈市教育委員会により、昭和61(1986)年度に久慈市大尻遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代前期後半の遺物包含層から貝や獸骨、人骨が出土している。また、近世以降に形成されたと推測される厚さ約80cmの貝層が検出されている。平成元(1989)~2(1990)年度には二子貝塚の発掘調査が実施され、縄文時代後期~晩期にかけて形成された厚さ約30cmの貝層が検出され、埋葬人骨も発見されている。平成元年度(1989)には久慈市麦生I遺跡の発掘調査により、近世以降の堅穴状遺構の埋土に厚さ約80cmの貝層が検出されている。

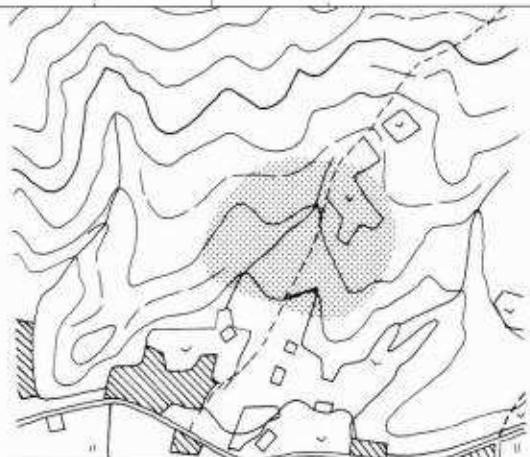
その他、発掘調査で遺構の埋土中に形成された小規模な貝層の検出例として以下のものが挙げられる。昭和62(1987)年度の(財)県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる、久慈市平沢I遺跡発掘調査により平安時代の堅穴住居跡2棟の埋土の一部に貝層が、同じく平成7(1995)年度の調査で、平安時代の堅穴住居跡及び土坑の埋土の一部に貝層が確認されている。平成2(1990)年度の久慈市昌場沢遺跡の奈良時代の土坑の埋土に貝層が確認されている。

種市町ホックリ貝塚、八木貝塚、小子内貝塚、黒マッカ貝塚は、発掘調査が行われておらず、実態は把握されていない。また、種市町上のマッカ遺跡、久慈市大芦遺跡、野田村広内遺跡、普代村堀内机遺跡においては発掘調査により貝層等が確認されたものではなく、遺跡からの表面採取資料に貝や獸骨が含まれていたり、文献に貝や魚骨の出土の記載が認められたりしたもので、実態は不明であるが、貝層が存在する可能性を示すものである。

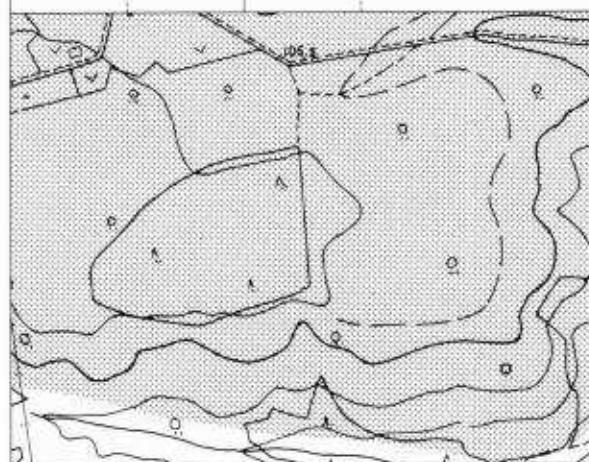
本地区においては、縄文時代に形成された大規模な貝塚は確認されていない。そのような中、久慈市二子貝塚は貝層の厚さ約30cmであるが比較的良好な貝層が確認されており貴重といえる。野田村根井貝塚、久慈市大尻遺跡はそれに次ぐ規模と思われる。古代については、堅穴住居跡や土坑の埋土に貝層が検出される例がある程度である。近世以降と思われる貝塚は久慈市大尻遺跡、麦生I遺跡、種市町小子内貝塚を挙げることができる。

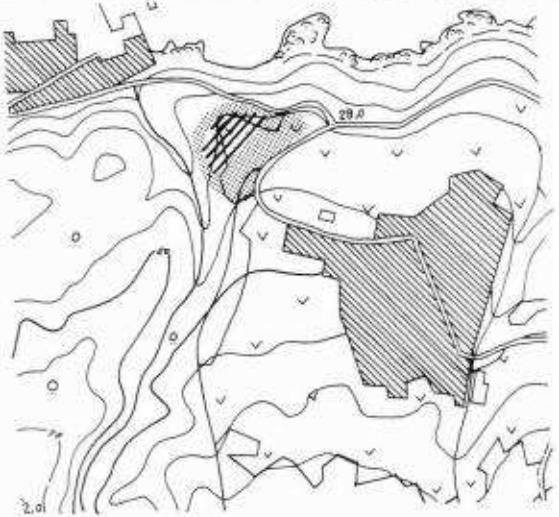
これまでの発掘調査で出土した骨角器・貝製品としては、根井貝塚から釣針・燕尾形銛頭・鐵先・骨角牙鑓・彌型角器・骨範・刺突具類・歯牙製品・骨針・椎骨製耳飾・歯牙製垂飾品・管状骨製飾品・貝輪等が出土している。久慈市二子貝塚からは、釣針鐵先・骨鑓・根挟み・骨範・刺突具・彌型角器・管状骨製飾品骨針・歯牙製垂飾品・椎骨製垂飾品・貝輪・巻貝製垂飾品・貝加工品等が出土している。また貝輪が製作できる大きさのものは、現在、南西諸島と伊豆七島の南部にしか生息していないオオツタノハ製のものがみられ特筆される。自然遺物としては、貝類では、根井・二子貝塚ともタマキビ・クロタマキビ・チヂミボラ等岩礁性の貝類が多い。魚類では根井貝塚がマダイ・アイナメ・カサゴ類が多く、二子貝塚では、これにウミタナゴ・マイワシ・マサバ等が加わる。獸骨は根井・二子貝塚ともシカ・イノシシが多い。

No.	102	遺跡名	昼場沢遺跡 (ひるばさわ) [J G 20-1037]		
所在地	久慈市旭町			(4)	図幅 NK-54-18-3, 久慈
立地	段丘上(海岸)	標高	35m	保存状況	一部破壊
時期	奈良・平安／奈良			現況	山林
文献	350	遺物	人工…土師器, 自然…イガイ (奈良時代土坑内に貝が堆積) [久慈市教育委員会]		



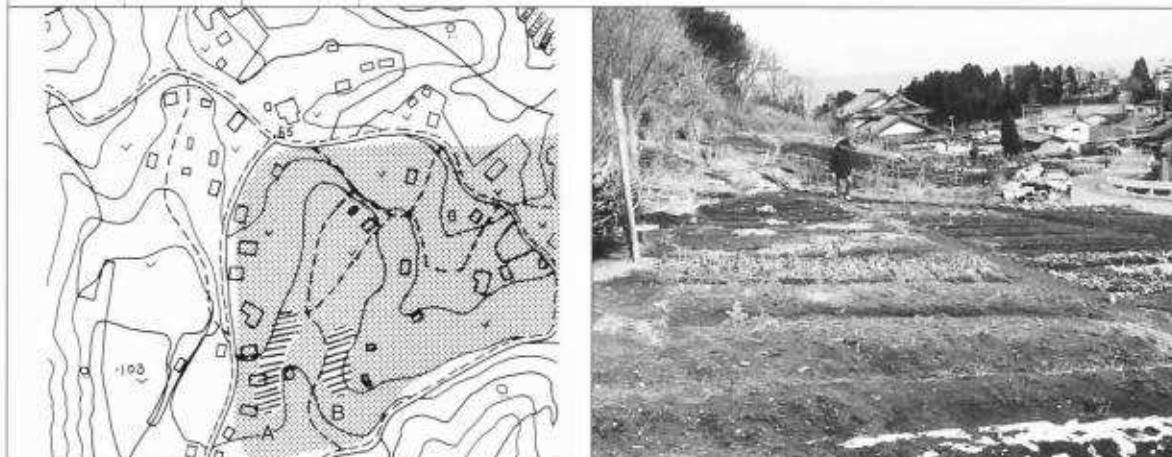
No.	103	遺跡名	平沢 I 遺跡 (ひらさわいち) [J G 30-0282]		
所在地	久慈市長内町			(4)	図幅 NK-54-18-3, 久慈
立地	段丘上(海岸)	標高	107m	保存状況	一部破壊
時期	縄文・弥生・古墳～奈良・平安／平安			現況	山林等
文献	337	遺物	人工…土師器, 自然…イガイ・エゾイガイ・ムラサキインコ (住居跡2棟から貝類が出土) [財]岩手県埋蔵文化財センター]		



No.	104	遺跡名	二子貝塚 (ふたご) [J G 30-0372]		
所在地	久慈市長内町44-90-1	(4)	図幅	NK-54-18-3, 久慈	
立地	段丘上(海岸)	標高	40m	保存状況	良好
時期	縄文(早~晩) / 縄文(後~晩)	現況	畑地		
規模	60m×35m / 50m×5m				
調査歴	平成元・2(1989・90)年 - 久慈市教育委員会				
遺構	土坑・埋葬人骨・埋甕・集石				
人工遺物	土器・石器・石製品(石鎌・石錐・石匙・石斧・凹石・磨石・石皿・石棒・石刀類)・土製品類(土偶・キノコ形土製品ほか)・骨角器(鐵先・鐵・根バサミ・骨ヘラ・刺突具ほか)				
自然遺物	貝類(エゾアワビ・ユキノカサ・ヒレガイ・オオツタノハほか)・獸骨類(ノウサギ・タヌキ・キツネ・シカ・イノシシほか)・鳥骨類(ミズナギドリ科・ガンカモ科の一種)・魚骨類(マイワシ・ニシン・カタクチイワシ・マアナゴ・ウグイ・マダラ・マアジ・マダイ・アイナメ・ホッケ・ヒラメ・ウミタナゴほか)・琥珀・炭化材				
資料保管	久慈市教育委員会, 個人				
文献	290・373・384				
備考					
<ul style="list-style-type: none"> ・昭和48年 市指定史跡 ・昭和24年 道路改修の際に遮光器土偶出土(晩期中葉) ・岩礁性貝塚が主体 					

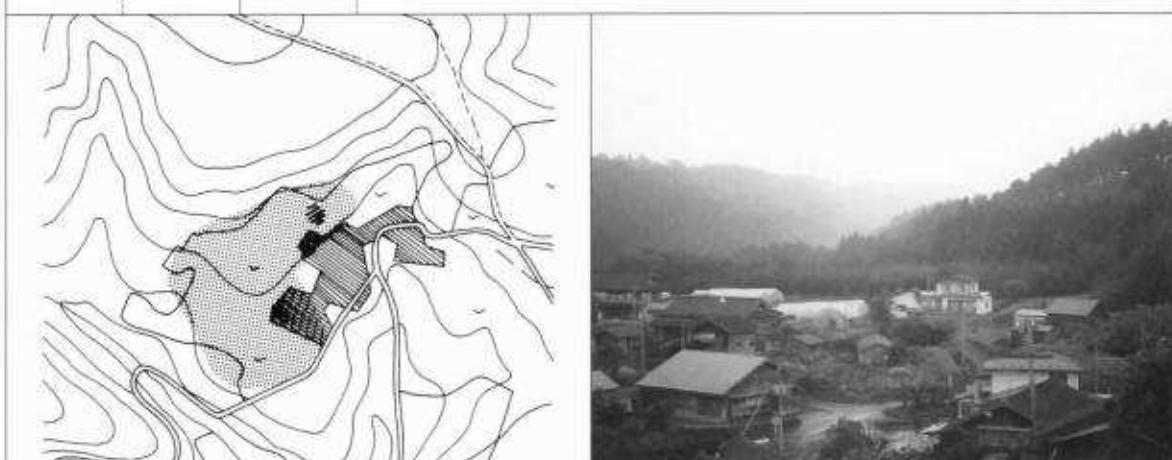
No.	105	遺跡名	大尻 I 遺跡 (おおじりいち) [J G31-1028]		
所在地	久慈市長内町第45地割	(4)	図幅	NK-54-18-3, 久慈	
立 地	段丘上(海岸)	標 高	90m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文(前・中)・近世			現 況	宅地・畠地・道路
文 献	329	遺 物	人工…縄文土器・キセル, 自然…獸骨・貝類(縄文)・アワビなど貝類(近世貝層 1m)		

[久慈市教育委員会]

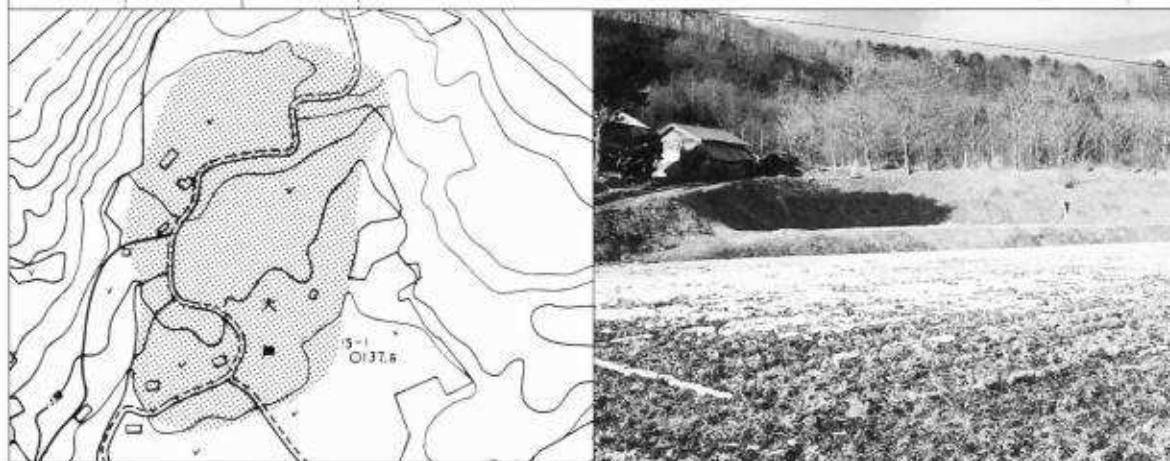


No.	106	遺跡名	麦生 I 遺跡 (むぎょういち) [J G11-1052]		
所在地	久慈市倚浜町字麦生	(4)	図幅	NK-54-18-3, 久慈	
立 地	段丘上(海岸)	標 高	90~110m	保存状況	良好
時 期	近世／近世以降			現 況	畠地・山林
文 献	349	遺 物	人工…陶磁器・キセル・鉄片, 自然…アワビ・レイシ・チヂミボラ・クボガイ・イガイ(近世以降と推定される竪穴状構に貝が堆積)		

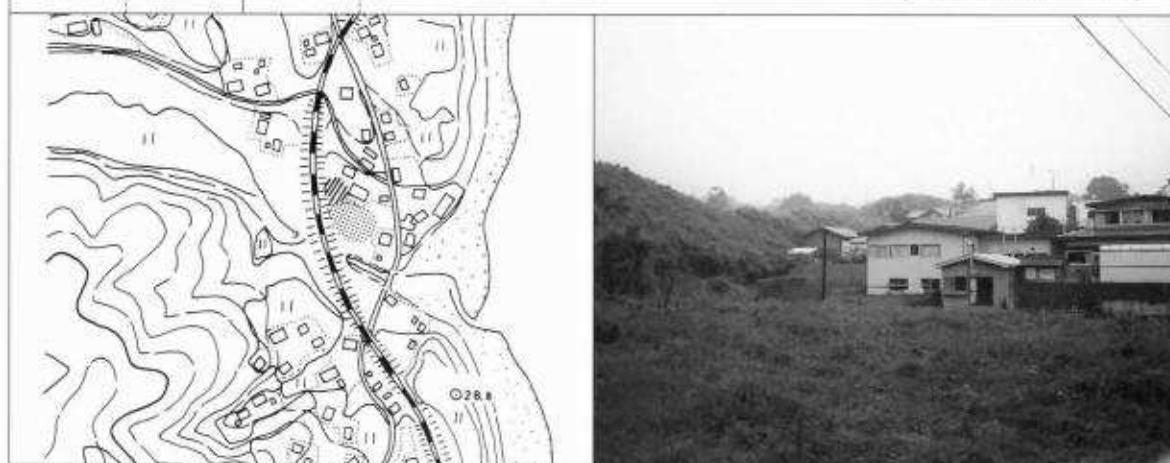
[久慈市教育委員会]



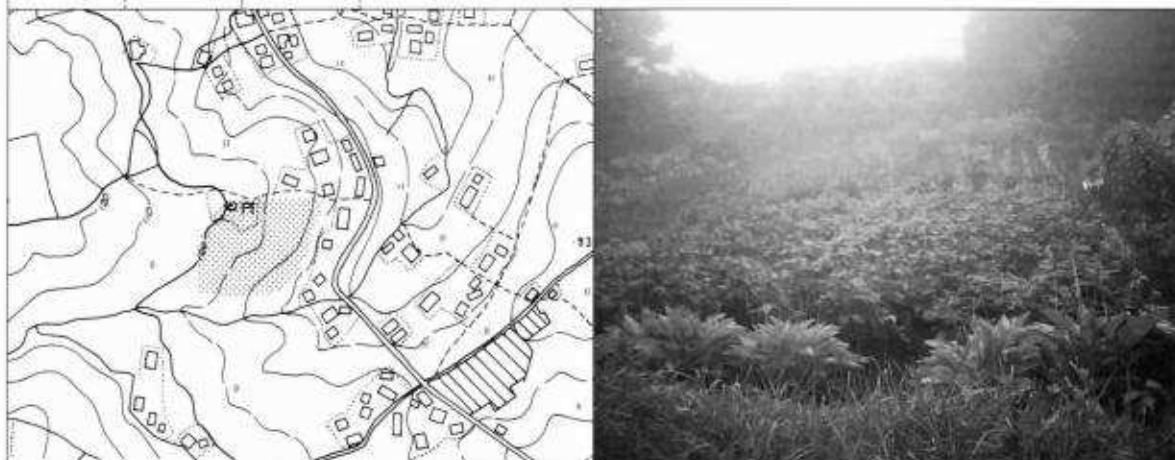
No.	107	遺跡名	大芦遺跡 (おおあし) [JF18-0291]		
所在地	久慈市夏井町	(3)	図幅	NK-54-18-7, 陸中大野	
立地	丘陵斜面	標高	160m	保存状況	一部破壊
時期	縄文 (後・晚期) / 縄文		現況	水田・畑地	
文献	306	遺物	人工…土器・骨角器, 自然…獸骨 (シカ・イノシシ・ウシ・ウマ) ・鳥骨・貝 (イガイ)		[久慈市教育委員会, 財岩手県埋蔵文化センター]



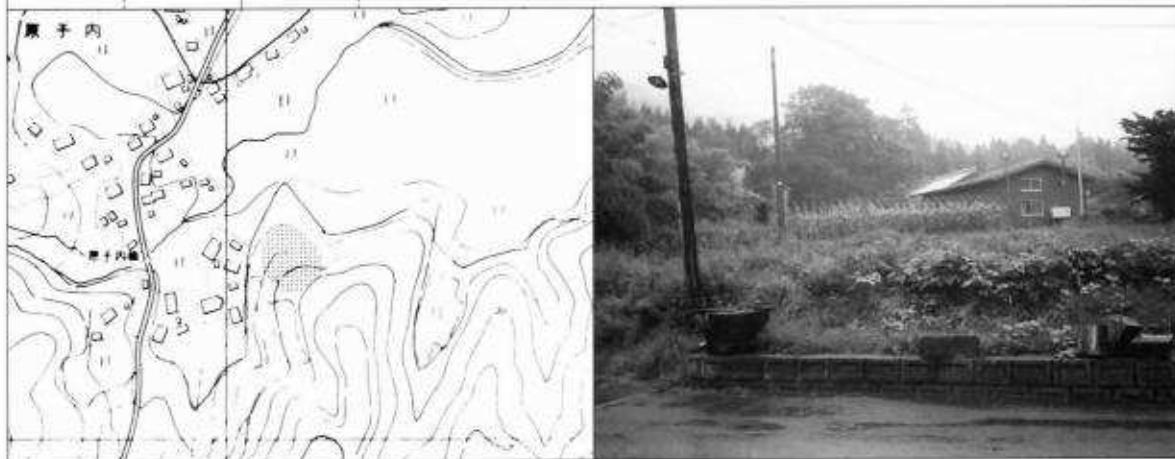
No.	108	遺跡名	小子内貝塚 (おこない) [IF79-1358]		
所在地	九戸郡種市町大字小子内字長坂	(1)	図幅	NK-54-18-2・6, 隆上岳	
立地	段丘上(海岸)	標高	20m	保存状況	一部破壊
時期	縄文・近世 / 近世以降		現況	宅地・畑地	
文献	—	遺物	人工…陶器, 自然…ホタテ主体 (近世以降の貝層)		[久慈市教育委員会]



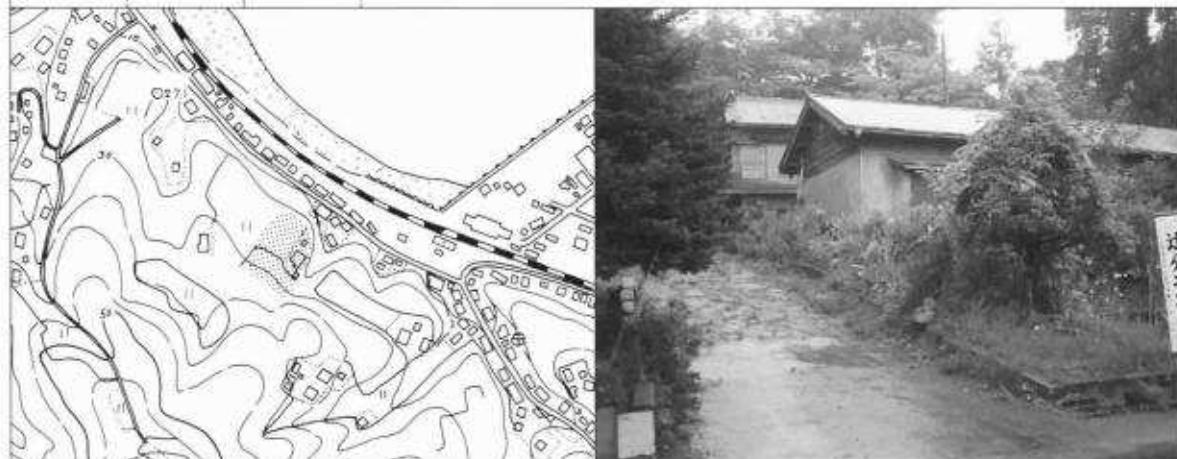
No.	109	遺跡名	上のマッカ(タテマッカ)遺跡(うえのまっか) [I F 89-0340]		
所在地	九戸郡種市町大字有家			(2)	図幅 NK-54-18-3, 久慈
立地	段丘上(海岸)	標高	100m	保存状況	良好
時期	縄文(中)／不明			現況	畑地・山林・神社境内
文献	-	遺物	人工…土器(縄文中期)・石器(石鏃), 自然…シカ・イノシシ・イガイ・ツブ(チヂミボラの一種) 〔久慈市教育委員会, 個人〕		



No.	110	遺跡名	黒マッカ貝塚(くろまっか) [I F 79-2344]		
所在地	九戸郡種市町大字有家			(2)	図幅 NK-54-18-3, 久慈
立地	段丘上(海岸)	標高	40m	保存状況	良好
時期	縄文(後)／不明			現況	宅地・畑地・荒蕪地
文献	-	遺物	なし		



No.	111	遺跡名	八木貝塚 (やぎ) [I F79-0351]		
所在地	九戸郡種市町八木	(1)	図幅	NK-54-18-2・6, 隅上岳	
立地	段丘上(海岸)	標高 40m	保存状況	一部破壊	
時期	縄文(中・後・晩)／不明		現況	宅地・畠地	
文献	—	遺物 人工…土器(縄文中・後・晩期)・石器(石鎌)・土製品(石棒), 自然…アサリ・アワビ・ウニ・イガイ・ツブ(チヂミボラの一種)		[岩手県立博物館, 個人]	



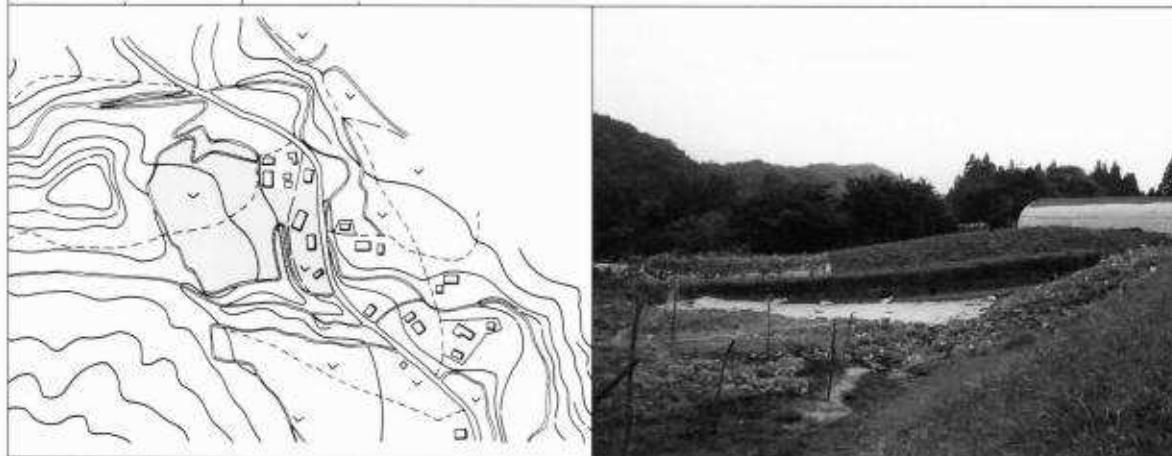
No.	112	遺跡名	ホックリ貝塚 (ほっくり) [I F69-2393]		
所在地	九戸郡種市町八木字ホックリ	(1)	図幅	NK-54-18-2・6, 隅上岳	
立地	段丘上(海岸)	標高 20m	保存状況	壊滅?	
時期	縄文(早・前・晩)／縄文(晩)		現況	宅地・山林・墓地・線路・港湾埋立	
文献	—	遺物 人工…製塩土器(晩期)		[個人]	



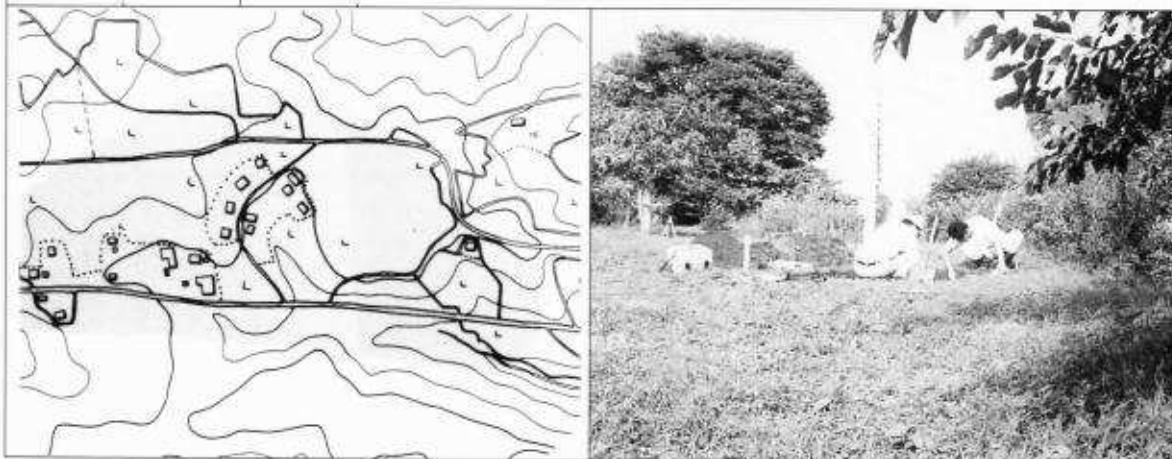
No.	113	遺跡名	根井貝塚 (ねい) [J G71-2071]					
所在地	九戸郡野田村大字玉川1-3-1	(6)	図幅	NK-54-18-4, 陸中大野				
立地	段丘上(海岸)	標高	225m	保存状況	良好			
時期	縄文(後期末葉) / 縄文(後)	現況	畠地					
規模	東西200m×南北100m / 貝層は堅穴住居内							
調査歴	昭和6・7(1931・32)年 - 小田島祿郎, 昭和58~60(1983~85)年 - 岩手県立博物館							
遺構	堅穴住居跡・土坑・焼土投げ捨て遺構							
人工遺物	土器(縄文後期後葉~晩期中葉)・石器(石鏃・石錐・石斧・軽石製品ほか)・骨角器(釣針・鋸頭・骨ヘラ・刺突具ほか)・石製品(石棒・垂飾品・岩版)・土製品(土偶・土玉・耳飾)・貝製品(貝輪)							
自然遺物	貝類(クロアワビ・ユキノカサ・クボガイ・コシダガニガラ・タマキビ・クロタマキビ・レイシ・イボニシ・ヒメエゾボラ・アラレタマキビ(ほか))・魚骨類(ネズミザメ科・トビエイ科・マイワシ・ウグイ・マグロ・カツオ・マサバ・ブリ・マダイ・スズキ・アイナメ科の一種ほか)・歯骨類(ヘビ目の一種・ノウサギ・リス科・ムササビ・ツキノワグマ・タヌキ・キツネ・オオカミ・イノシシ・シカ・クジラ類)・鳥骨類(キジ・ガン・カモ科・ガンビシクイ科・ワシ・タカ類)							
資料保管	岩手県立博物館(小田島コレクション)							
文献	324							
備考								
• 祭祀的な遺構を伴う住居跡(後期末)								



No.	114	遺跡名	広内遺跡 (ひろうち) [J G41-2192]		
所在地	九戸郡野田村広内	(5)	図幅	NK-54-18-4, 陸中野田	
立地	段丘上(海岸)	標高	50~70m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(前・中)・奈良・平安/縄文		現況	畠地	
文献	214 299 367	遺物	人工…土器(縄文前・中期)・石器・ヒスイ大珠・玦状耳飾・骨角器(釣針), 自然…魚骨		



No.	115	遺跡名	堀内机遺跡 (ほりないいつくえ) [J G81-1254]		
所在地	下閉伊郡普代村堀内机	(6)	図幅	NK-54-18-4, 陸中野田	
立地	海岸段丘上	標高	200~210m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(前・中)/不明		現況	畠地	
文献	320	遺物	貝類(チヂミボラ、レイシ、ユキノカサガイ、ハマグリ、ウバガイ、クボガイ、マガキほか)		[岩手県教育委員会]



(6) 両磐地区の概要

いまから2万年ほど前は最終氷期であるウルム氷期の最寒冷期に当たり、海面は現在より100m以上も低下したとされ、宮城県北部の若柳町付近では-20m付近に当時の谷底が認められている。

岩手県最南端部の花泉町花泉遺跡（金森遺跡）はこのころに形成されたものであり、金流川のほとりの海拔高度30mほどの段丘面上にあって、プリスクス野牛・原始牛・ヤベオオツノシカ・ヘラシカをはじめとして、ナウマンゾウ・ノウサギなどの獣骨化石および骨器の出土をみている。同遺跡付近にはまた、縄文晩期や群集墳を伴う古墳時代の遺跡も残されていて、湧水池を中心にわずかではあるが、イノシシ・シカ・タニシ・ハマグリなどが出土している。

続くおよそ2万年前以降は海面が上昇に転じ海域を広げ、やがてウルム氷期最寒冷期までに下刻され続けてきた谷底は溺れ谷となり、川の上流から運ばれてきた土砂によって埋積されることとなる。

宮城県北部の若柳町付近を最奥部とする石巻平野では、約7,900年前に海岸線が最も後退して現在の海岸線から約40km地点の追町佐沼付近まで達した。その海水準は現在より7~10m低い位置にあったといわれている。しかし、その後は海面の上昇速度がやや鈍化したようで、結果的に川の上流から運ばれた土砂の堆積速度がそれを上回るようになり、一層谷底の埋積が進み、陸域が拡大していった。海面が現在とほぼ同じ水準に達するのは、約5,000年前以後のことである。

ところで、花泉町と境を接する藤沢町黄海の北上川に架かる北上川橋架換工事の一環として施工された橋台工事の際に、海拔高度-3m付近からシカの角、イノシシの歯牙、馬歯、マグロ類の椎骨、ハマグリとマガキの貝殻を伴って、縄文早期後半の土器片（素山Ⅱa式？）が出土したことがある。その¹⁴C年代は6970±130年B.P.（マガキの貝殻）と見積もられている。この遺跡はこの地域の地史を解明するうえでも重要である。また、ここから南に15kmほど下った宮城県中田町の浅部A貝塚でもほぼ同時期（船入島下層式）にナガカキを主体とし、小型のヤマトシジミを若干交える鹹水性の貝層が確認されているが、標高はやや高く35~45mとなっている。

その後、約5,000年前以降海面はほぼ安定する。浸食基準面の安定化に伴い、石巻平野では上流からの堆積物の供給量が減少し、ほとんど谷底は埋積されなかつようである。そして追川流域や北上川流域ではいたるところに沼や湿地帯が形成されることとなり、今日に至っている。伊豆沼や長沼は、この時期に追川に流入する河川の出口が追川の堆積作用と自然堤防によって堰き止められてできたものである。

なお、伊豆沼周辺の追町糠塚貝塚では縄文前期中葉（大木4式）まではハマグリを主体とする貝層が認められ、前期後葉にはヤマトシジミ、後期中葉にはカラスガイ・タニシを主体とする貝層があり、さらに南方町長者ヶ原貝塚では前期後葉～中期前葉にかけてヤマトシジミ、中期中葉にイシガイ・オオタニシを主体とする貝層が、また同町青島貝塚では中期中葉～後期前葉にかけてスマガイ・オオタニシを主とする貝層が形成されており、貝塚の変遷とともにこの地域の地形発達史を考える上で興味深い。

さて、岩手県南から宮城県北地域の内陸部に分布する貝塚は、研究者によって北上川中流域貝塚群あるいは追水系貝塚群と呼ばれ、後者はさらに夏川沿岸・蕪栗沼沿岸・古伊豆沼沿岸・北上川西岸・江合／鳴瀬川沿岸の6支群に分類されている。しかし、完新世における海の侵入経路は追川流域と鳴瀬川・江合川流域では異なり、貝塚の形成過程・内容も若干異にしていることから、ここでは便宜上追水系貝塚群と鳴瀬川・江合川水系貝塚群、そして北上川水系貝塚群に区分する。

追川水系貝塚群はさらにその立地条件から、鹿沼貝塚群、中田沼貝塚群、伊豆沼貝塚群、長沼貝塚群、船越沼貝塚群、蕪栗沼貝塚群などに細別できそうである。これらの貝塚群はいずれも沼あるいは湿地帯（谷地）を中心にはば同時期に形成された主に淡水性の貝塚群で、互いに共通することも多い。以下、鹿沼貝塚群・中田沼貝塚群について述べる。

鹿沼貝塚群は石巻平野の最北端に位置し、岩手県花泉町と宮城県若柳町・石越町との境を流れる夏川流域に分布する一群の貝塚である。ここでは最近まで鹿沼とよばれる低湿地帯があつて、縄文時代にはさらに大きな沼地があったものようである。岩手県側では貝鳥貝塚をはじめ白浜貝塚、石崎貝塚、鴻ノ巣貝塚がこれに属し、宮城県側では富崎貝塚、黒山貝塚、赤谷貝塚が含まれる。宮城県石越町の田上貝塚は追川に面しているが、広義にはこれに含めて考えてもよいかもしれない。

この地域を代表する貝鳥貝塚は、磯田川と夏川に挟まれた丘陵の末端部の小高い台地に縄文中期中葉（大木8a式）から弥生にかけて形成された比較的規模の大きな遺跡で、後期を中心に中期～晚期の貝層が発達している。後期前・中葉の貝層はイシガイを主としカラスガイを含み、後葉にはオオタニシを主としてイシガイからなり、フナ・ウナギなどの魚類、イノシシ・シカなどの哺乳類、鳥類ではガン・カモ類が目立って出土している。また、この地域には棲息しない哺乳類、鹹水性の貝・魚類も検出され、追川の水運を通じて石巻沿岸地域の貝塚と接触・交流があったことを示している。

対岸の白浜貝塚では後期前葉～弥生、富崎貝塚は後期中葉～晩期末葉、黒崎貝塚及び田上貝塚は後期中葉～晚期初頭にかけての遺物が出土し、貝鳥貝塚と互いによく似た内容をもっている。石崎貝塚は中期末葉～後期前葉にかけての遺物が出土するが、貝層はすでに破壊されその詳細は不明である。鴻ノ巣貝塚および赤谷貝塚は以上に述べた貝塚よりも形成時期が若干古く、中期に営まれたようであるが、不明なことが多い。

ところで藩政時代には北上川右岸に岩手・宮城両県にまたがって中田沼と呼ばれる沼が広がっていた。この沼のほとりに高倉貝塚および宮城県中田町二ツ木貝塚がある。これを中田沼貝塚群と呼ぶ。

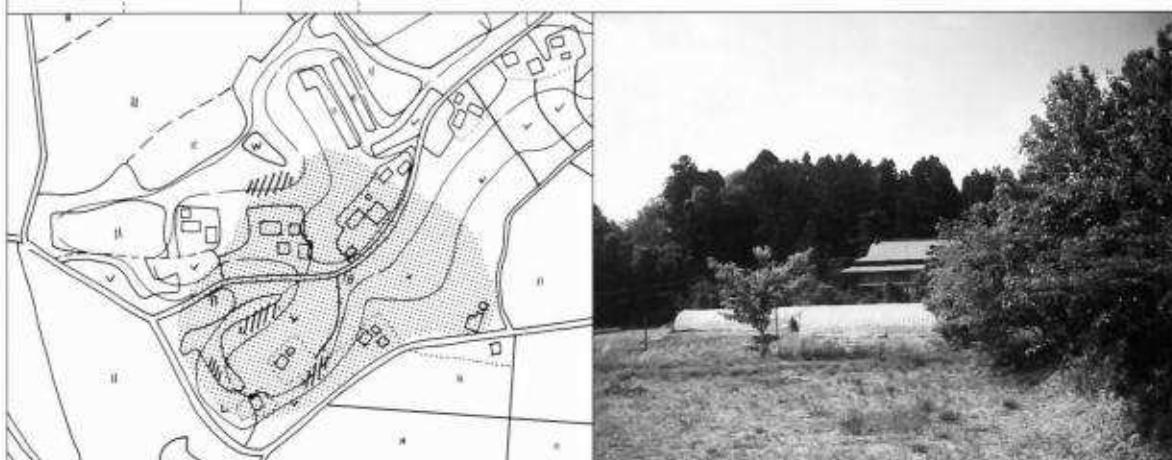
二ツ木貝塚は近年開田事業によって大部分が削り取られ不明なことが多いが、縄文中期末葉（大木10式）～晩期末葉にかけての遺物が出土し、淡水性の貝層が分布していたという。高倉貝塚はこれまでに正式な発掘調査が行われていないが、後期前葉から晩期後半にかけての遺物が出土し、北斜面と南斜面には少なくとも後期前葉と考えられる時期の淡水性の貝層が確認できる。特に南斜面の貝層は保存が良好で、今後の調査が期待される。

以上に述べた貝塚群以外にもこの地域では、縄文～弥生にかけての遺跡から動物遺存体や骨器の出土を見ることがある。花泉町日形の中神遺跡（縄文後期～弥生）がその代表的な例であり、北上川に面した小高い台地上に形成された同遺跡からは多数の獸骨のほか、骨器が出土している。隣接する宮城県東和町丸森山遺跡（縄文中期末葉～後期前葉）でも同様の状況を示す。また、同じく北上川に面した一関市草ヶ沢遺跡（縄文晩期～弥生）、同市荷掛場遺跡（縄文晩期）からも若干の骨器の出土が知られている。

No.	116	遺跡名	鴻ノ巣遺跡 (こうのす) [OE58-1124]		
所在地	西磐井郡花泉町永井字鴻ノ巣	(31)	図幅	N J - 54-14-16, 若柳	
立地	台地	標 高	12m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (中期前葉) / 不明		現 況	畑地	
文 献	—	遺 物	人工…土器 (縄文前期中葉)		



No.	117	遺跡名	石崎貝塚 (いしざき) [OE58-1002]		
所在地	西磐井郡花泉町永井字西狼ノ沢	(31)	図幅	N J - 54-14-16, 若柳	
立 地	台地	標 高	19m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (中・後) / 不明		現 況	宅地・畑地・山林	
文 献	—	遺 物	人工…土器 (中期中葉～後期前葉) , 石器 〔岩手県教育委員会, 個人〕		



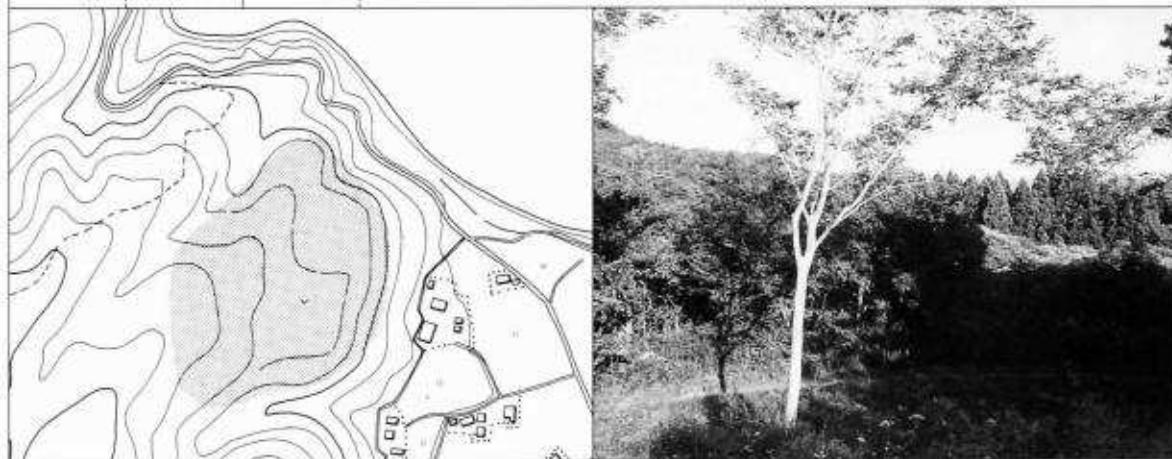
No.	118	遺跡名	高倉貝塚 (たかくら) [OE58-2396]		
所在地	西磐井郡花泉町永井字東方	(31)	図幅	N J -54-14-16, 若柳	
立地	台地	標 高	26m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (後・晚) / 縄文 (後)			現 況	宅地・畠地
文 献	-	遺 物	人工…土器 (中～晚期)・石器, 自然…骨片 [岩手県教育委員会]		



No.	119	遺跡名	下金森遺跡 (しもかなもり) [OE27-2180]		
所在地	西磐井郡花泉町花泉字守沢	(31)	図幅	N J -54-14-15, 一関	
立 地	段丘上(河岸)	標 高	27m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文 (中・後・晚)・古墳/不明			現 況	水田・水源地
文 献	228 411	遺 物	人工…土器 (縄文中～晚期), 自然…シカ・イノシシ・ウマ・ マルタニシ・セタイシガイ・マツカサガイ・ハマグリ・マツ・イヌシデほかの種子・昆虫 [筑波大学ほか]		



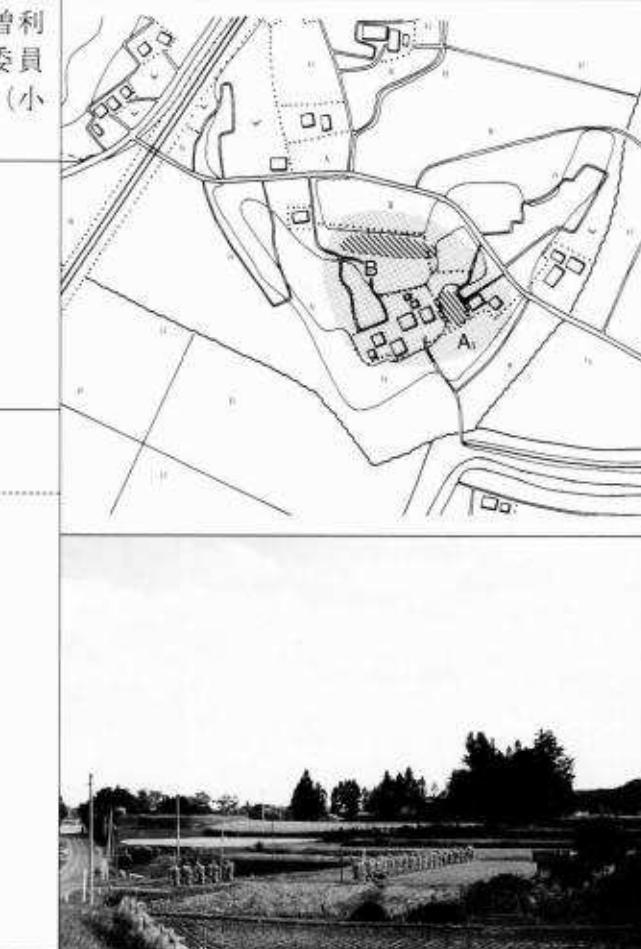
No.	120	遺跡名	中神遺跡（土人森（ヒトヤマリ）貝塚）（なかがみ）〔OE29-2028〕		
所在地	西磐井郡花泉町日形字中神	30	図幅	N J -54-14-11, 千厩	
立地	台地	標 高	65m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文（後・晚）・弥生／縄文（後）～弥生	現 態	山林・荒蕪地		
文 献	380	遺 物	人工…土器（縄文後期中葉～後葉・晚期・弥生中期（谷起島式）・石器（勾玉・石錐）・骨角器（骨針）・土偶、自然…イノシシ・シカ〔東北大学考古学研究室、日形小学校、個人〕		



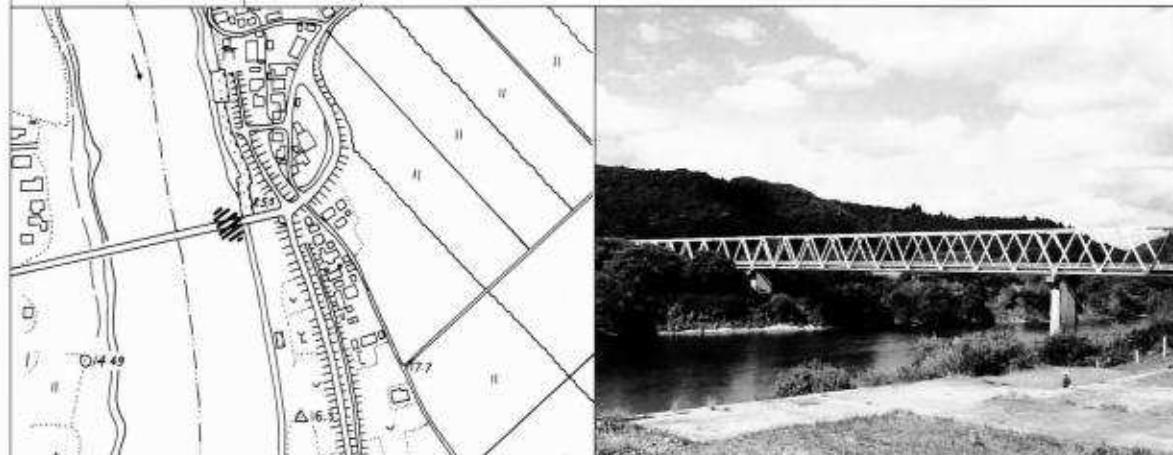
No.	122	遺跡名	白浜貝塚（しらはま）〔OE47-2391〕		
所在地	西磐井郡花泉町桶津字台	31	図幅	N J -54-14-16, 若柳	
立地	台地	標 高	15m	保存状況	一部破壊
時 期	縄文（後・晚）・弥生／縄文（後）	現 態	宅地・水田・畑地		
文 献	—	遺 物	人工…土器（縄文後期中葉～後葉、晚期大洞B・B C・C1式、弥生中期谷起島式）・石器（石鍬・石匙・石錐・石棒）・貝輪・土偶、自然…シカ・イノシシ・イシガイ〔岩手県教育委員会、岩手県立博物館、個人〕		



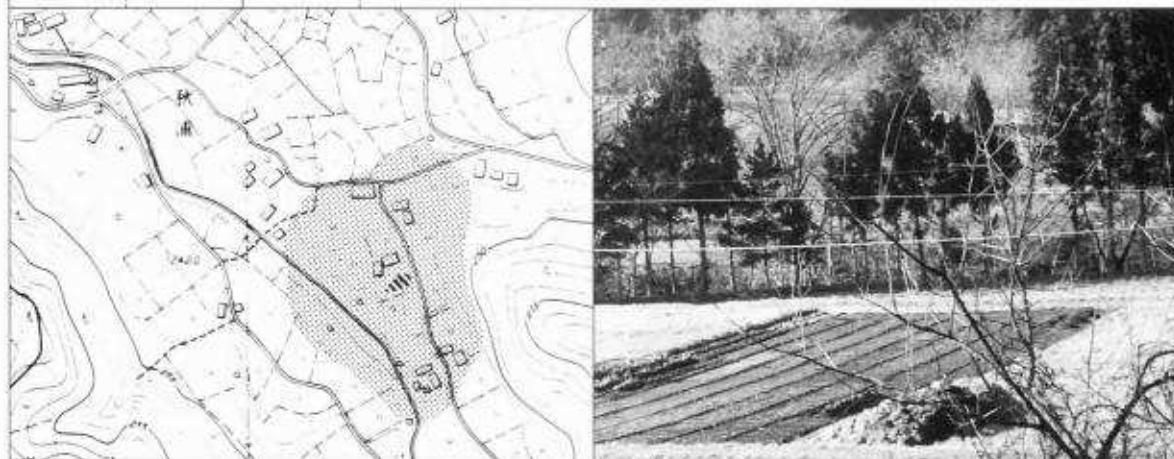
No.	121	遺跡名	貝鳥貝塚 (かいとり)	〔O E 57-0136〕										
所在地	西磐井郡花泉町油島字貝鳥			(31)	図幅	N J -54-14-16, 若柳								
立地	台地	標高	15m	保存状況	一部破壊									
時期	縄文(中・後・晩)・弥生/縄文(中~晩)			現況	宅地・水田・畠地・山林									
規模	150m×130m / (A地点20×15m, B地点50×20m)													
調査歴	昭和31(1956)年-岩手大学, 昭和32(1957)年-東京大学人類学教室, 昭和41・44(1966・69)年-花泉町教育委員会(岩手大学・早稲田大学)													
遺構	竪穴住居跡													
人工遺物	土器(大木8b・9・10式, 後期, 大洞B・BC・C1・C2・A・A'式, 弥生)・土製品(土錘・土偶)・石器(石斧・石棒・石匙・石鎌・石錐)・骨角器(根バサミ・骨針)・管玉・小玉・貝輪													
自然遺物	イノシシ・シカ・ウサギ・人骨・オオタニシ・マルタニシ・タガイ・ヒダリマキマ・イマイ・カワシンジョガイ・マシジミ・カワニナ・ベンケイガイ・アカガイ・サルボウ・ユキノカサ・ハマグリ・ミルクイ・アサリ・マガキ・アカニシ・カモシカ・テン・イタチ・キツネ・タヌキ・ニホンオオカミ・ムササビ													
資料保管	東京大学・早稲田大学・加曾利貝塚博物館・花泉町教育委員会・個人・岩手県立博物館(小田島コレクション)													
文献	162・215・283・292・328													
備考														
・昭和41年 県指定史跡														



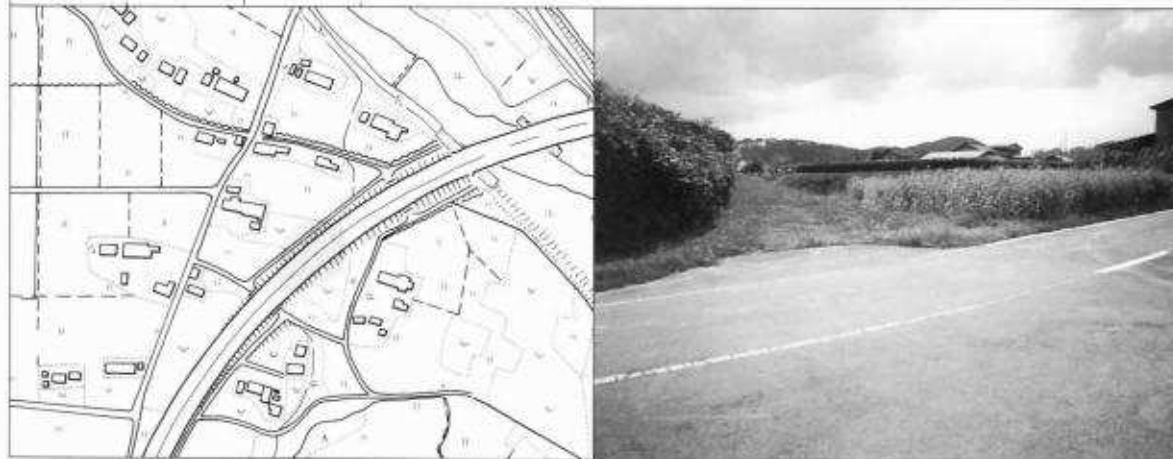
No.	123	遺跡名	北上川橋遺跡 (きたかみがわばし) [O E 29-2168]		
所在地	西磐井郡藤沢町黄海字天沼	30	図幅	N J -54-14-11, 千厩	
立地	川底に埋没	標 高	-3m	保存状況	不明
時 期	縄文 (早)			現 況	川底
文 献	213	遺 物	人工…土器 (縄文早期末素山Ⅱa式), 自然…ニホンジカ・イノシシ・ハマグリ・マガキ [一関市教育委員会, 藤沢町教育委員会]		



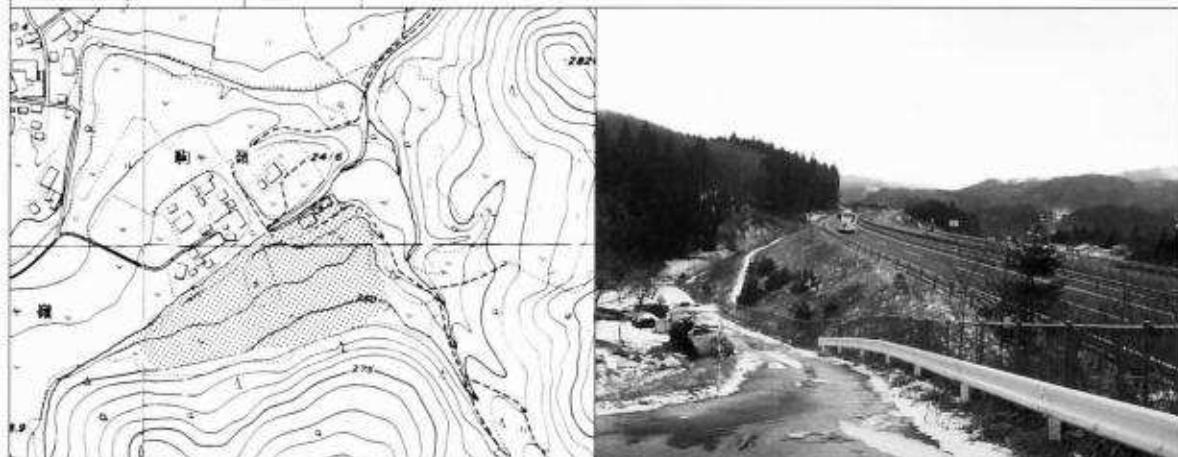
No.	125	遺跡名	秋浦Ⅱ遺跡（秋浦貝塚） (あきうらに)	[KE38-0131]
所在地	岩手郡岩手町川口第21地割60ほか	26	図幅	NJ-54-13-13, 沼宮内
立地	段丘上(河岸)	標高 240m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(中～後期)／不明		現況	宅地・水田・畠地
文献	—	遺物	人工…土器(縄文中期末～後期初頭), 自然…カワシンジュガ イ・獸骨	[個人]



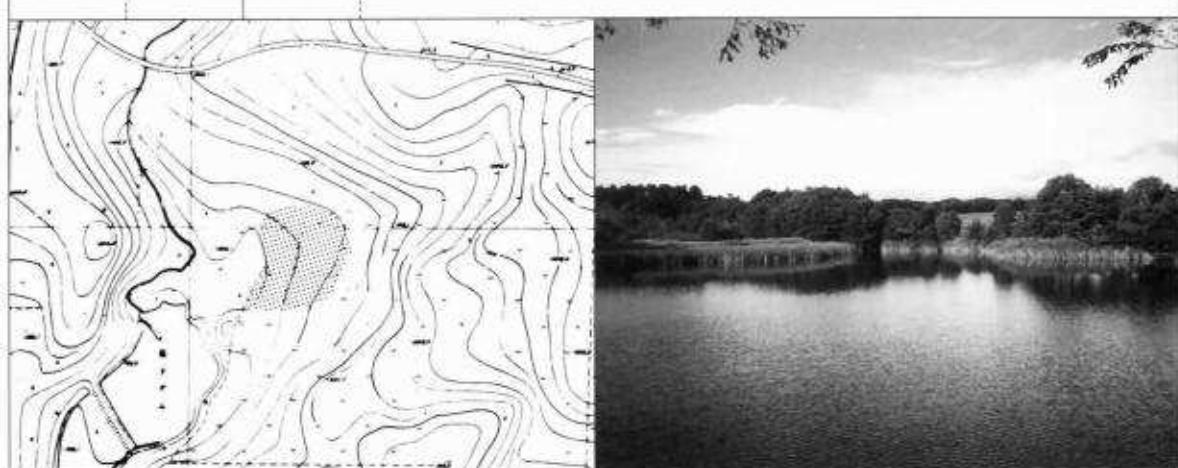
No.	126	遺跡名	東裏遺跡 (ひがしうら)	[NE65-1265]
所在地	胆沢郡衣川村大字下衣川字東裏	29	図幅	NJ-54-14-14, 水沢
立地	段丘上(河岸)	標高 30m	保存状況	一部破壊
時期	縄文(晩)		現況	水田・畠地・道路
文献	247	遺物	人工…土器・石器・石製品・骨角器(ヤス状・骨針状), 自然…シカ・イノシシ・中型獸・アサリ	[衣川村教育委員会]



No.	127	遺跡名	五庵 I 遺跡 (ごあんいち)	[J E 46-0151]
所在地	二戸郡淨法寺町大字駒ヶ嶺字五庵2ほか	25	図幅	NK-54-18-16, 荒屋
立地	段丘上(河岸)	標高	240~251m	保存状況
時期	縄文(晩)		現況	畠地・道路
文献	307	遺物	人工…土器・敲石(土坑内), 自然…カラスガイ(プラスコ内 ビット出土)	[財]岩手県埋蔵文化財センター]



No.	128	遺跡名	貝がら谷地貝塚 (かいがらやち)	[K E 86-0056]
所在地	岩手郡滝沢村滝沢11地割字木賊川農水省牧場内27	図幅	N J -54-13-14, 盛岡	
立地	台地	標高	170m	保存状況
時期	不明		現況	山林・原野
文献	一	遺物	伴出遺物なし	



第3章 岩手県内貝塚内容確認調査結果報告

今回の調査にあたり、岩手県内で特に早急な内容確認が求められるいくつかの貝塚について、調査員合同で試掘調査等を実施した。調査地の選定には、次の点に留意した。(1)近い将来開発計画が具体化する可能性があり、遺跡の範囲等を確定しておく必要のあるもの。(2)以前から重要な内容を有する貝塚として意識されてきたものの、内容の具体についてほとんど明らかとなっていたいなかったもの。(3)貝塚分布の稀薄な地域における立地条件の確認。以上により、平成7年度においては陸前高田市獺沢貝塚及び大陽台貝塚、8年度には花泉町高倉貝塚・白浜貝塚及び石崎貝塚、9年度には普代村堀内机遺跡について調査を実施した。

1 陸前高田市獺沢貝塚

調査期日：平成7年11月24～26日

所在地：陸前高田市小友町字獺沢地内

(1)概要

獺沢貝塚は、西側に広田湾を望む緩斜面に立地している。広田半島を縦断する県道広田半島線によって遺跡のほぼ中央が南北に寸断されている。県道から東側は山林・宅地が中心であるが、遺物散布の広がりが確認されている。以前より貝塚として知られていたのは西側畠地部分で、かつて水田として利用されていたこともある。この小さな張出は、北側の沢及び南側湾状の凹地によって舌状を呈し、海岸線により近い部分は大きく段差があって、さらに小さい張出を形成する。

現在休耕田となっているうちの約75m²については、昭和50年の開田に際して陸前高田市教育委員会が緊急発掘調査を実施し、記録保存を行っている。これ以外にも、この貝塚は古くから調査が断片的に継続されており、出土遺物は各地・各機関に分散している。大正年間には、松本彦七郎による調査が実施され、土器片を層の特徴ごとに区分して採取し、その時間的推移を考察するなど、その後の日本考古学の方法に影響を与えたと考えられている。現在畠地となっている部分では、縄文土器片・獸骨類・石器などが散布し、耕作等により貝層または遺物包含層が一部攪乱を受けていることが予想される。

今回の調査では、昭和50年調査地点の再確認及び西側斜面下部を中心とする箇所での遺存状況の確認を主な目的とした。50年調査区とは別に新たに2m四方のグリッドを設定し、そのうち10カ所について試掘を実施した。調査は、表土を除去したのち、遺物を包含する層については、遺構の有無を確認しながら少しづつ掘り下げを行い、基本的に無遺物層（地山）まで確認した。特に動物骨を多く含んだ5Gについては、5ミリメッシュによる乾燥ふるいを現地で行っている。地山を構成する土壤は風化した花崗岩であるマサ土で、表土及び遺物包含層等もマサ土の腐食した土壤で構成されている。基盤に含まれる粘板岩は、薄く剥離して各層に多量に混在する。

1～4Gは、基本的に表土直下がマサ土による地山となり、本来の包含層等は失われている状況が確認された。ただし、小面積の発掘であることから、地山層（Ⅲ層）を掘り込んで形成される遺構の有無について結論を出すことは困難である。西側の低い段の部分に近い5Gでは、表土下で混貝土層が2層確認されている。上層にはウチムラサキ・カキ・イガイほか魚骨等も多数含まれている。下層にも同様に動物骨等が含まれるもの、貝は少なくなる。層厚は55cmを超える。層中に炭

化物や焼土ブロックが混じることから、遺構の一部である可能性も有している。斜面最下部の8G、9Gでは、表土及び包含層・地山中に花崗岩の円礫が含まれ、上方からの土砂等の移動が予想される。10Gでは、表土が流出し、包含層が露出していると考えられる状況で、最上層中に貝の小片を始め、鹿角製釣針片、土偶片などが含まれる。

総じて、県道付近（西側約50mまで）は過去の土地造成等による削平が進み、遺跡の遺存状況は良くないものの、西側斜面（段差付近）では表面で観察される遺物量も増加し、貝層等も部分的に確認されることから、遺跡が破壊を免れて残存しているものと考えられる。ただし、傾斜が急な部分では、表土が流出し続けることから、破壊の進行を抑えるなんらかの方策を講じる必要に迫られている。

(2)出土遺物

ア 土器：（第18～21図、表2）

出土した土器は整理箱で3箱程度である。斜面上部は2Gで土器片が出土しているが、他の調査区では出土しておらず、層序の観察所見と軌を一にしている。5G、6Gでは最も多く土器片を出土する。6Gでは、上下2層の遺物包含層の両者より土器片が出土する。いずれの層も、縄文晩期土器片を主体とし、後期中葉から後葉の土器片が少量混在する出土数を示している。口縁部片の数量で見た場合に、上層の2層では30%程度が晩期後葉の土器片であるのに対し、下層の3層では20%程度に低下する。しかし、多数を占める体部片には、明確な時期比定の困難な地文の縄文のみが施されており、包含層の形成時期等についてさらに検討する必要があると考えられる。

6Gに限らず、遺物を出土する調査区ではいずれも複数型式の土器片を出土しており、調査技術の問題も含め、遺跡の形成過程を慎重に検討する必要がある。調査区全体では、縄文後期中葉以降の各時期が散発的に出土するが、出土量が乏しいのは後期後葉～晩期初頭で、後期中葉と晩期中葉の間に若干の空白が認められる。また、2Gでは弥生後期の土器片が少量出土しているが、遺跡の主たる時期とは異なったもので、明瞭にこの段階に伴った骨角器、動物遺存体類も不明である。

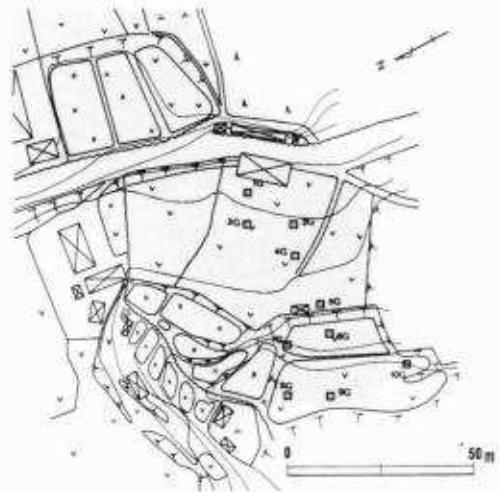
1～6は2G出土土器片である。3は6と共に伴する可能性もあるが、より新しい様相を示している。4、5は不整な撲糸文の施文される弥生後期の甕破片。1、2は大洞C2式か。7～11は5G出土。この調査区では、縄文後期後葉及び晩期初頭ごろの土器片が少量出土する。12～45は、6G2層出土。大洞C2式を中心に、一部A式を出土している。28・29・40は、図示した資料のうちでもより新しい様相を呈している。全体にミガキ調整がよくなされ、浅鉢・壺のほか、中・小型の鉢口縁部外面も十分に磨かれているものが多い。46～第20図63は6G3層出土。後期中葉の土器片がわずかに混じるが、ほとんどは晩期中葉～後半に位置するものである。基本的様相は上層と同様である。52は広口の壺。口縁部外面にレリーフ状の工字文が連続する。隆起線の交点は、わずかに盛り上がりを見せる。64、65は7G2層出土。6Gよりわずかに北に位置する調査区であるが、遺物の出土量は極端に少ない。66～70は9G出土。70のような後期前葉の土器片が混じり、ほかにも69の後期中葉の土器が出土している。71は10G2層出土。晩期後半の壺体部上半と考えられる。

第21図は表土等より出土した土器である。後期（72、81、87）、晩期前半（82、83、89）が多少含まれるが、全体的に包含層出土土器とほとんど変わりのない様相である。98は高杯脚の部分であるが、今回出土したものではなく、土地所有者が以前に収集していたものである。

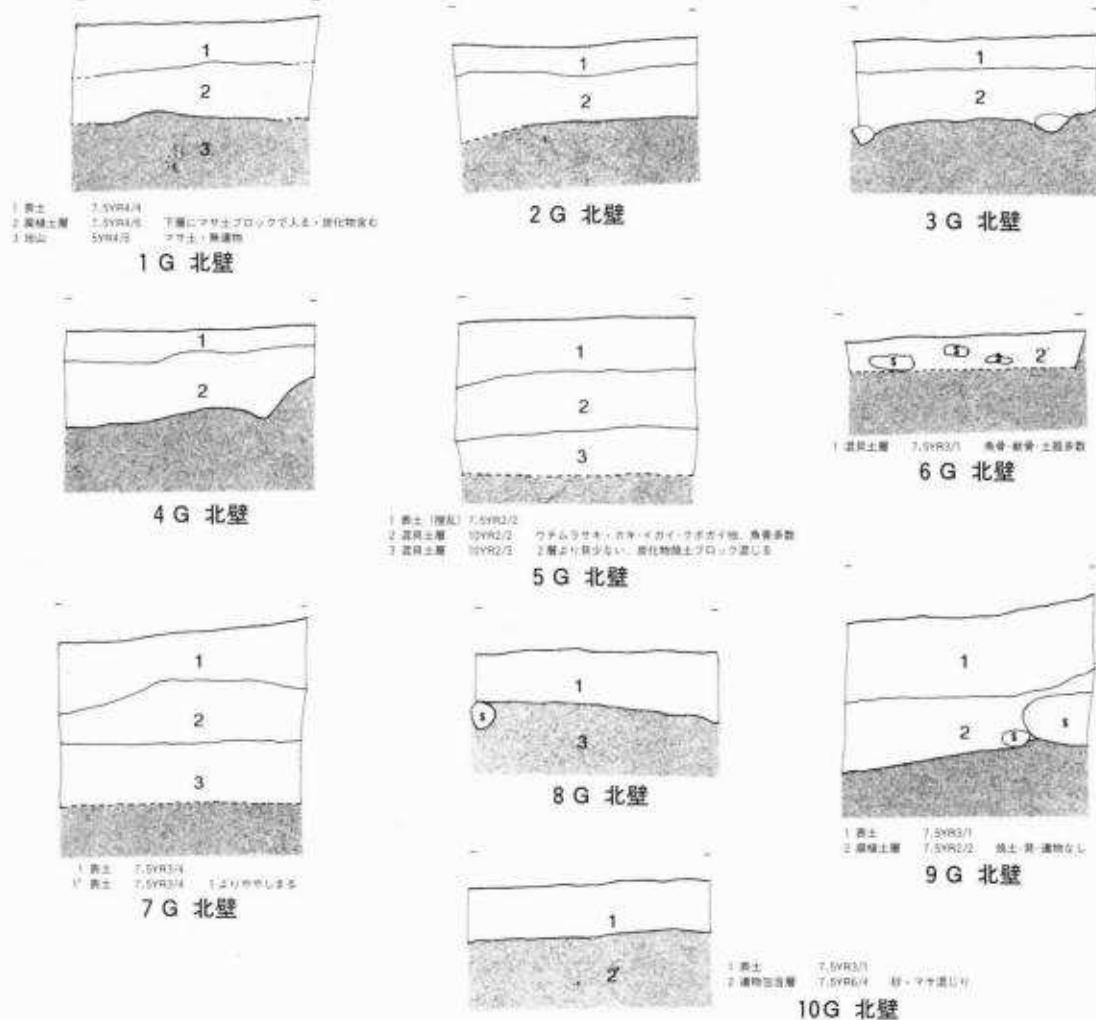
イ 石器：（第22、23図、表3）



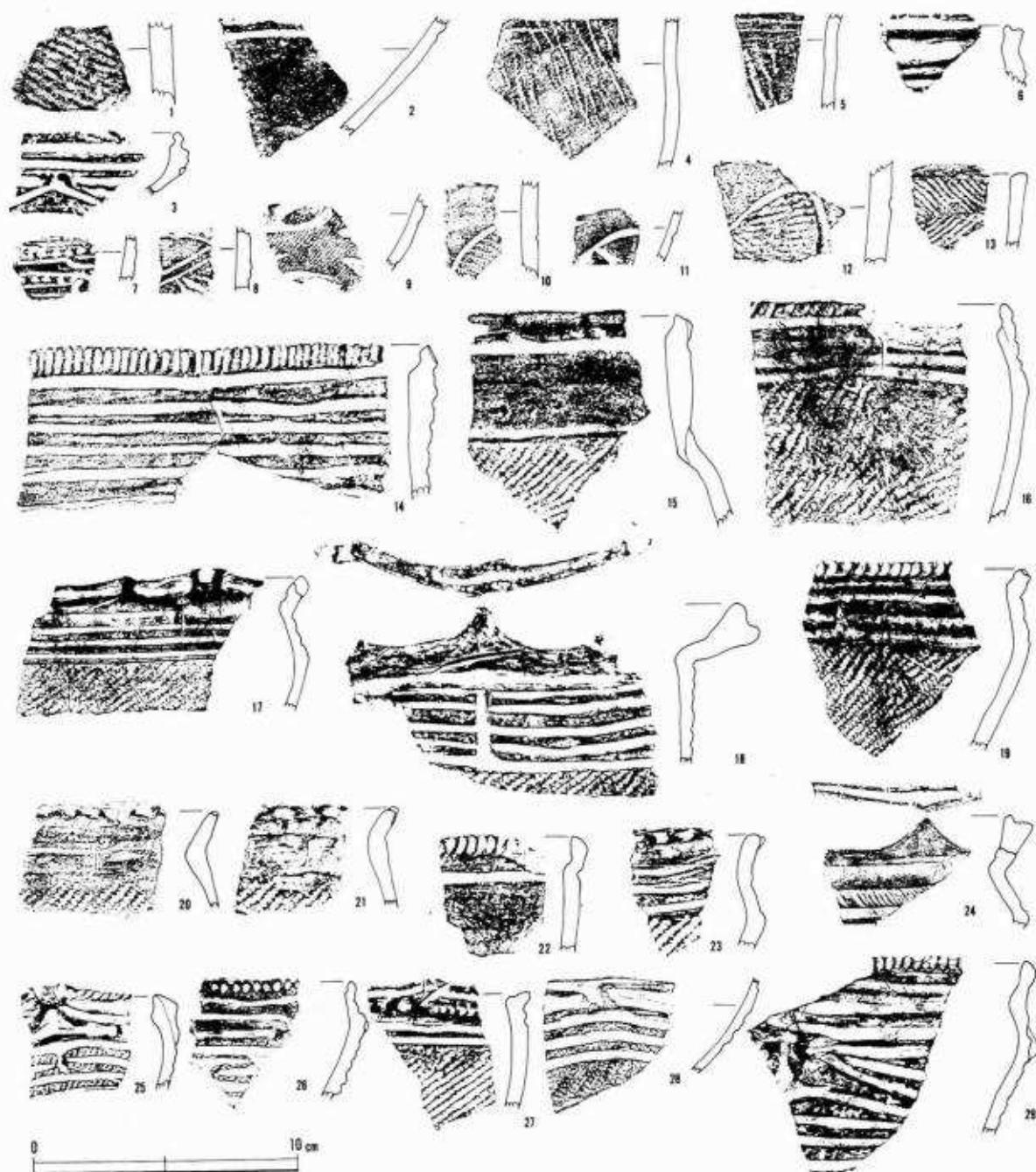
遺跡範囲及び周辺地形



試掘グリッド配置図

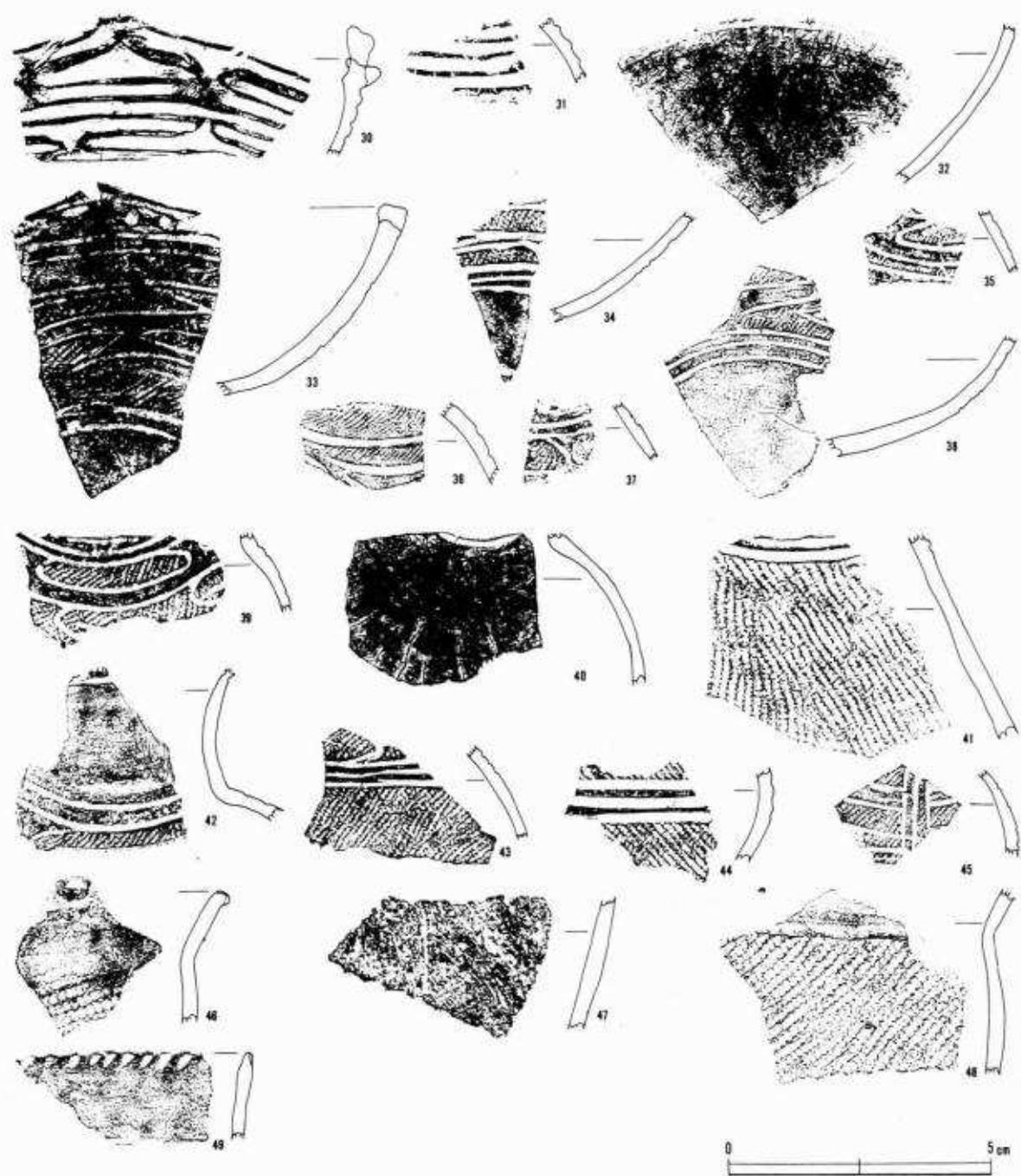


第17図 陸前高田市齋澤貝塚発掘区位置図及び層序断面図



No.	地区	層段	器種	口径	口縁部外観	胎色	側面土牛	側面下牛	底面形状	底面	内面	外表面特徴	内面特徴	備考
1	2層	?				R.L.M								
2	2層	金鉢	M			C.L.M								
3	2層	金鉢	M			C.L.M								
4	2層	金鉢	M			C.L.M								
5	2層	金鉢	M			C.L.M								
6	2層	金鉢	M			C.L.M								
7	2層	金鉢	M			C.L.M								
8	2層	?				C.L.N								
9	2層	?				L.R.C.M								
10	2層	?				L.R.C.M								
11	2層	?				C.M								
12	2層	?				R.T.C.D.N								
13	2層	?												
14	2層	?												
15	2層	?												
16	2層	?												
17	2層	?												
18	2層	?												
19	2層	?												
20	2層	?												
21	2層	?												
22	2層	?												
23	2層	?												
24	2層	?												
25	2層	?												
26	2層	?												
27	2層	?												
28	2層	?												
29	2層	?												
30	2層	?												

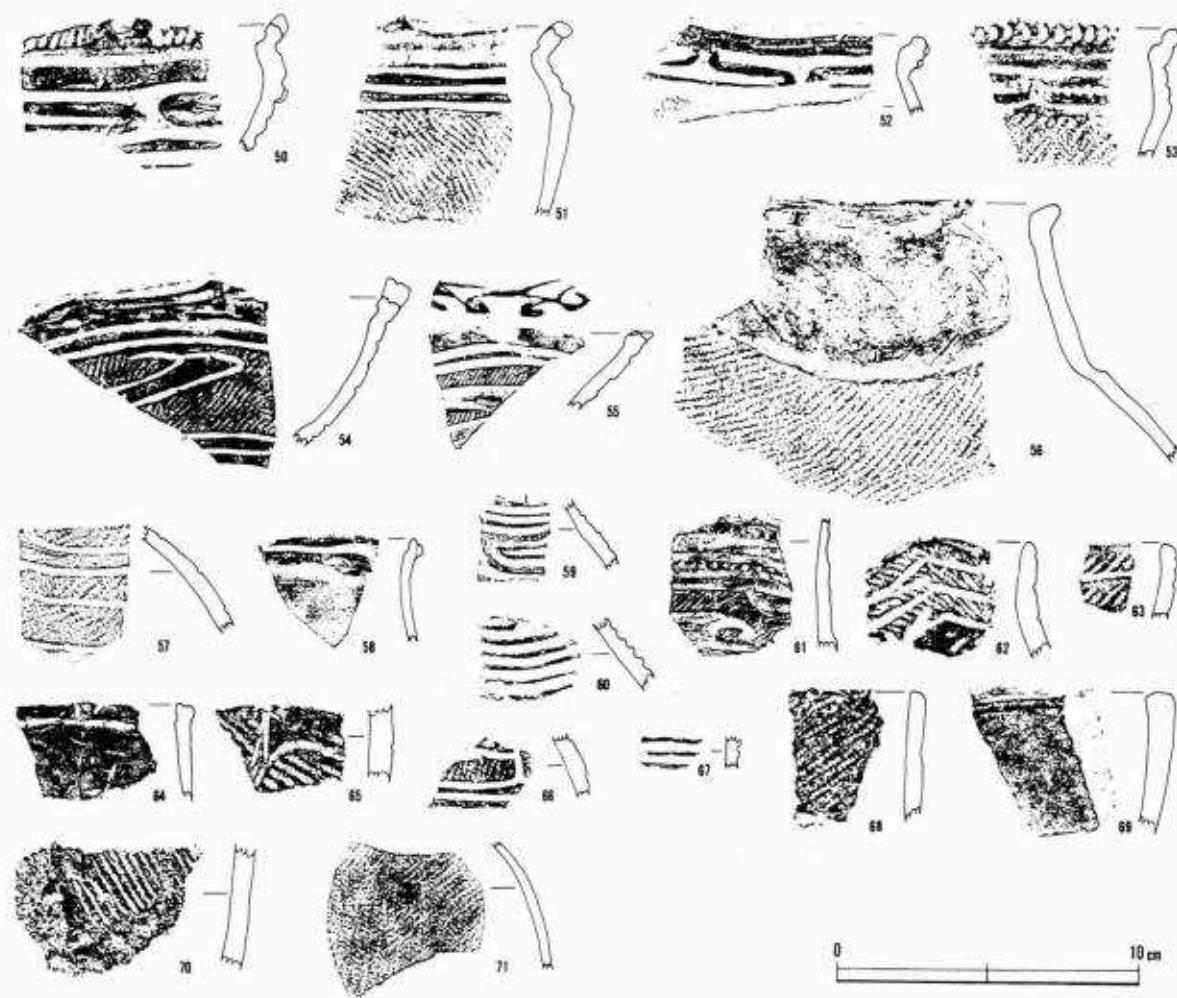
第18図 陸前高田市瀬沢貝塚出土土器 (1)



0 5 cm

番号	地質	層位	断面	口径	口縁部剖面	断面	傳透土手	傳透下手	直通竹立	直通	内側	外側内側	外側外側	直通
30	E.G.	2層	瓦片	CIM	CIM						M	淡褐色	暗褐色	
31	E.G.	2層									N	深褐色	黃褐色	
32	E.G.	2層									N	深褐色	黃褐色	
33	E.G.	2層									M	深褐色	暗黃褐色	
34	E.G.	2層	白	CIM	CIM	L.R>C.M	CIM	M			M	深褐色	暗黃褐色	
35	E.G.	2層									M	深褐色	暗黃褐色	
36	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
37	E.G.	2層									M	深黃褐色	暗黃褐色	
38	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
39	E.G.	2層									M	深黃褐色	暗黃褐色	
40	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
41	E.G.	2層									M	深黃褐色	暗黃褐色	
42	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
43	E.G.	2層									M	深黃褐色	暗黃褐色	
44	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
45	E.G.	2層									M	深黃褐色	暗黃褐色	
46	E.G.	2層									N	深黃褐色	暗黃褐色	
47	E.G.	2層									M	深褐色	暗褐色	
48	E.G.	2層									N	深褐色	暗褐色	
49	E.G.	2層									K	深褐色	暗褐色	2.5
											N/M	深褐色	暗褐色	
											N	深褐色	暗褐色	

第19図 陸前高田市獺沢貝塚出土土器 (2)



No.	種類	部位	品種	口徑	口徑變外徑	規格	使用上半	底部下半	底部外力	底部	內底	外底顏色	內底顏色	標記
50	E.G.	上部	珠	圓頭T字形珠	C:M					M		黃褐色	黃褐色	
51	E.G.	上部	珠	C:M	M	C:M	A:L			M		黃褐色	黃褐色	
52	E.G.	上部	珠	M	C:M					M		黃褐色	黃褐色	
53	E.G.	上部	珠	圓頭T字形珠	C:M		L.R.C:M			M		綠褐色	綠褐色	
54	E.G.	上部	珠	C:M	C:M		L.R.C:M			M		綠褐色	綠褐色	
55	E.G.	上部	珠	C:M	C:M		L.R.C:M			M		黃褐色	黃褐色	
56	E.G.	上部	珠	M	M		L.R.C:M			M/N		綠褐色	綠褐色	
57	E.G.	上部	珠	M	M		L.R.C:M			O/N		藍灰色	藍灰色	
58	E.G.	上部	珠	H:C:M						M		藍灰色	藍灰色	
59	E.G.	上部	珠			C:M				N		綠褐色	綠褐色	
60	E.G.	上部	珠				C:M			M		綠褐色	綠褐色	
61	E.G.	上部	珠				L.R.C:M			K/N		黃褐色	黃褐色	
62	E.G.	上部	珠	N	B.L.C:N					N		綠褐色	綠褐色	
63	E.G.	上部	珠	M	L.R.C:M					M		藍灰色	藍灰色	
64	E.G.	上部	珠	C:M	M					M		藍灰色	藍灰色	
65	E.G.	上部	珠			B.L.C:M				M		綠褐色	綠褐色	
66	E.G.	上部	珠			L.R.C:M				N		藍灰色	藍灰色	
67	E.G.	上部	珠	7		C:M				M		藍灰色	藍灰色	
68	E.G.	上部	珠	N	L.M					N		藍灰色	藍灰色	
69	E.G.	上部	珠	M	M					M		藍灰色	藍灰色	
70	E.G.	上部	珠					N		N		藍灰色	藍灰色	
71	E.G.	上部	珠					L.B:N		M		藍灰色	藍灰色	

第20図 陸前高田市瀬沢貝塚出土土器 (3)

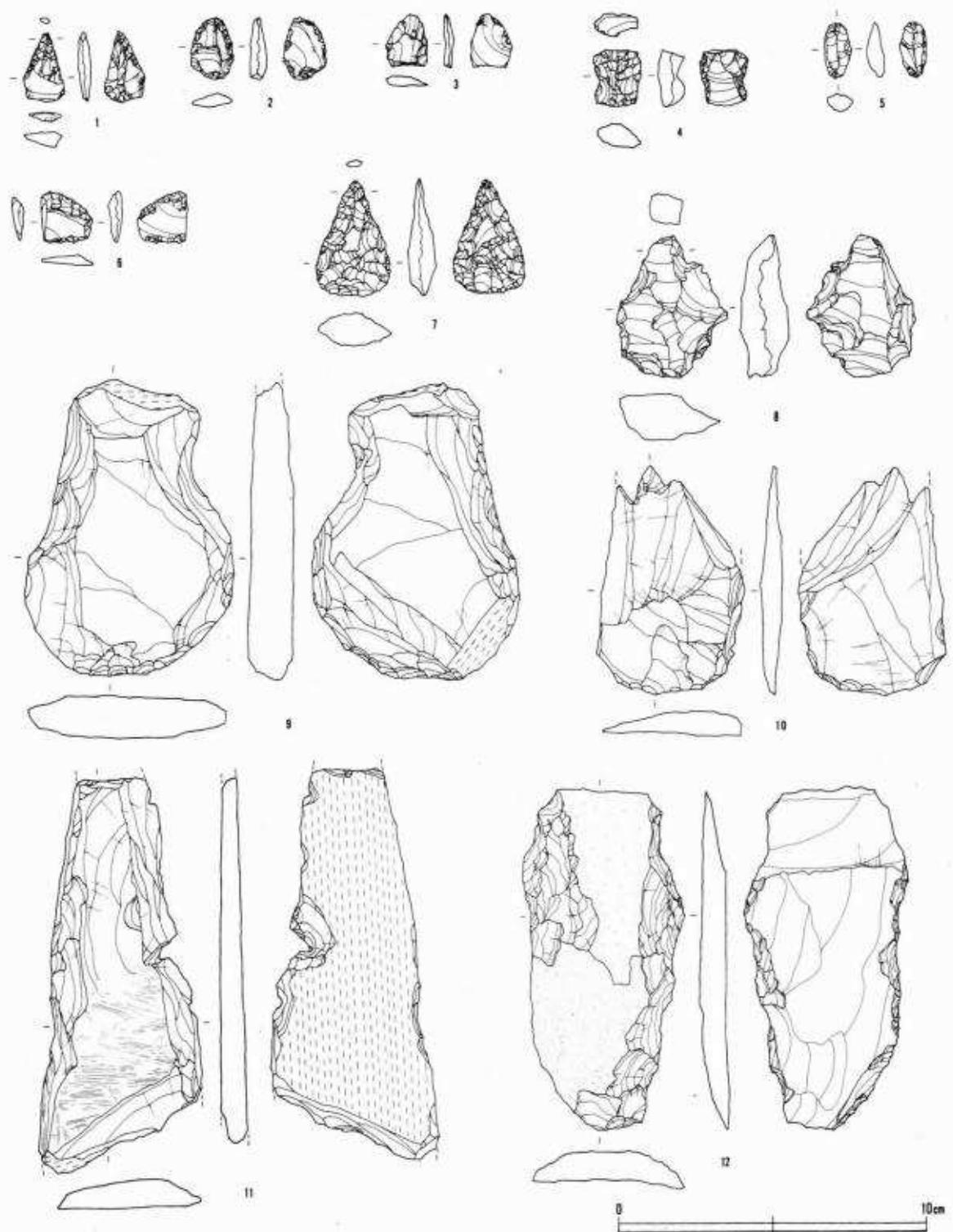
出土した石器は49点である。うち、二次加工の認められる石器は13点出土している。13点のうち7点は表土等より出土しているため、包含層中からは6点が出土している。

石器として使用されている石材は、数量的には第一に粘板岩、第二に頁岩である。ただし、頁岩が主として小型の剥片石器の石材として用いられているのに対し、粘板岩は石鍬などの大型の剥片石器及び石棒等石製品の素材として用いられている。したがって、両者を単純に比較することはできない。このような石材の利用形態は、岩手県南地方に共通して認められるが、沿岸部では頁岩の利用が限定されていたためか、粘板岩が突出する傾向が観察される。

調査区別では、10Gからの出土が多い。土器片を多く出土した6Gでは、粘板岩製の石棒未成品？

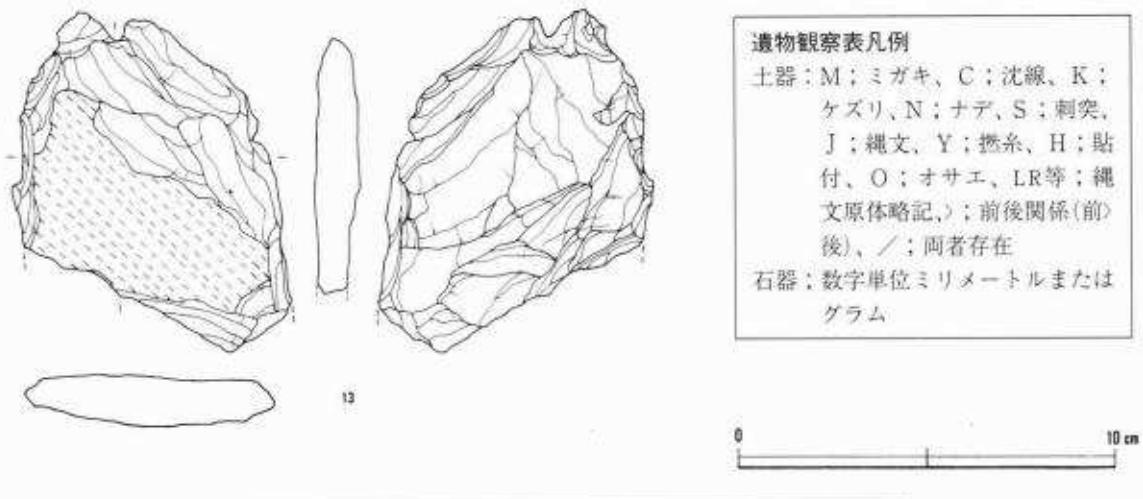


第21図 陸前高田市瀬沢貝塚出土土器 (4)



No.	出土区	層位	器種	石種	長	幅	厚	重量	備考
1. 100	西土	石礫	青石	23	13	4.6	1.2		基底部分
2. 100	西土	石礫	青石	19.6	13.7	4.6	1.4		
3. 45	西土	細長刮削器片	青石	16.7	13.5	3	0.7		
4. 100	西土	打い面研磨器片	青石	19.4	15.6	7.7	2.7		
5. 100	西土	ビラードチルト・スコーン	チャート	16	9.3	6	0.9		
6. 100	西土	スラッシュバー	青石	16.3	15	4.2	1.2		
7. 250	東土	小刮削	青石	36	24.6	6.2	2.8		
8. 250	東土	小刮削	青石	4.6	25.5	17.7	17.4		
9. 100	西土	石片	粘板岩	24.3	10.2	14.4	1.1		
10. 100	西土	石片	粘板岩	7.5	20	24.3			古跡製作削片
11. 60	西土	打い未完成品?	粘板岩	197.2	58	9.7	75.4		
12. 60	西土	打い未完成品?	粘板岩	112	52	10	92		敲打面残存

第22図 陸前高田市瀬沢貝塚出土石器 (1)



第23図 陸前高田市瀬沢貝塚出土石器 (2)

第2表 陸前高田市瀬沢貝塚出土土器集計表

時期	No. 2 2層												
	口縁部		体部				底部						
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		2					2	4					
先							2	1					
不明		1					1	5	1				
時期	No. 5 2層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉							2						
先葉	1	2					4						
中期		2					2						
その他							3						
不明		3					2	44	3			1	
時期	No. 6 2層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		2					1						
後葉		1					1						
中期	2	14	6			1	10	4				1	
後葉	1	9	1			5	8	2	1				
その他							3						
不明	1	2				47	112	22	1		6	4	2
時期	No. 6 3層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		2					2						
後葉		1					1						
中期	1	2					1	2					
後葉	1	4	2			4	4	2	1				
中期	2	14	6			1	10	4				1	
後葉	1	9	1			5	8	2	1				
不明	6	2	1			13	81	13			1	3	
時期	No. 7 2層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		1					1						
中期	1						2						
後葉		1					2	3				1	
その他							1						
不明	1						7	7				1	
時期	No. 9 2層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		1					1						
中期		1					2						
後葉							2	3				1	
その他							1						
不明	1						7	7				1	
時期	No. 10 2層												
口縁部	体部				底部				底部				
-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
後葉		1					1						
中期							1	1					
後葉							1						
不明							10	17	6		1		1

第3表 陸前高田市鰐沢貝塚出土石器集計表

	貝 岩	ギョクズイ	黒曜石	粘板岩	凝灰岩	砂 岩	チャート	安山岩	珪質頁岩	流紋岩	不明・その他
2G表土											
3G表土	1										
4G表土	1										
5G表土	2			2							1
5G2層						1					
6G表土				3		1					
6G2層	2	2		5							1
6G3層	3			3	1	1					
7G表土	1	1		1							1
8G表土	1			1							
9G表土		1									
10G表土	7	1				4					1
10G2層				1							

が出土している。石鎌は薄手の剥片を利用した茎のないものが主であるが、7のような小型石槍状の両面加工石器も存在する。9は柄部をつくり出す石鋤で、両端に節理面が見られることから、大きさが規定されている。

刃部の加工は不明瞭で、摩痕も観察されない。10,13も、石鋤断片として理解した。11は片面が研磨されているところから石刀の未成品か。12には敲打痕が認められる。

ウ 動物遺存体等

ここでは10箇所のグリッドを設定している。現況は畑や宅地で、広田湾に向う緩斜面が延び、斜面の下方で傾斜が大きくなり最後には崖になっている。

この斜面の下方の崖の付近に遺物包含層が広がり、貝層もその中に確認されている。この付近は畑で遺物が地表面に非常に多く散布し、急傾斜のため崖に向かって土砂と共に遺物も少しずつ流れている状況にある。

包含層には5G・6Gの2箇所のグリッドが設けられている。遺物は目視による取り上げのほか、6Gで2層・3層から貝層をサンプリングし、5mmと1mmメッシュの水洗フルイにかけている。水洗フルイ後の重量で、5mmメッシュ上の分析量は2層で1.6kg（全重5.0kg）、3層で0.7kg、1mmメッシュ上の遺物は2層で61.7g（全重5.2kg）、3層で60.1g（全重1.4kg）を分析対象としている。

貝類は岩礁性の貝が主体となっている。内容はチヂミボラ・タマキビ・レイシカイ・ヘソアキボガイ・アサリ・ウバガイ・ホタテ・イガイなどである。イガイはほとんどが熱を受けて灰色に変色している。

魚類はマグロ類の椎骨が多いのが目に付く。

哺乳類はシカ・イノシシが多い。イノシシは頭部の骨が多い。他にカモシカの角が出土している。

その他のものではフツツボなどが出土している。

第4-1表 陸前高田市鰐沢貝塚出土石器集計表

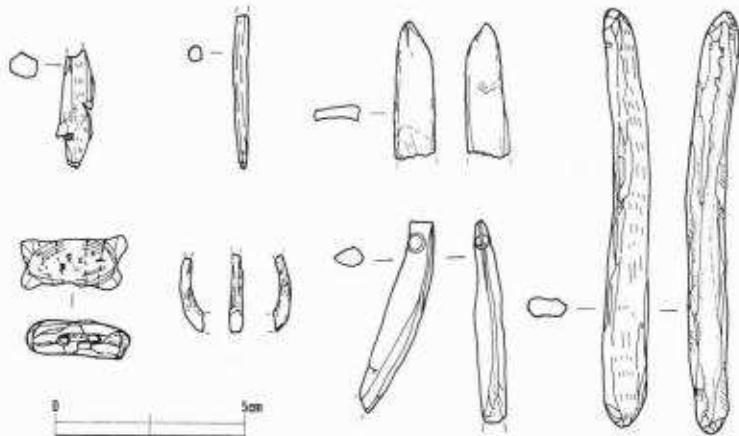
目視による採集遺物

魚類

地点・層位	魚名	数量	哺乳類						
			アワビ	アコウ	ヒラメ	カサゴ	カサゴ	カサゴ	
5G2層	アコウ	1			風魚 1	500g			下層岩礁層1
5G3層	アサリ	1							下層岩礁層1
6G2層	内海2	1	内海2	内海2					下層岩礁層1
6G3層	内海2	24	内海2	内海2					上層岩礁層1
									上層岩礁層1
									6G2層
									6G3層
									角1
									角1

貝類ほか

地点・層位	スズキの巣 種名	数量 左	スズキの巣 種名	数量 右	スズキの巣 種名	数量 (既消費なし)	その他	備考
5G3層								
6G表土	アコウ	3	ヒラメ	2	カサゴ	2		
	アサリ	1	ヒラメ	1	カサゴ	1		
	カサゴ	1	ヒラメ	1	カサゴ	1		
	カサゴ	1	ヒラメ	1	カサゴ	1		
6G2層	アコウ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1	ワニ	イカイヒ骨 で変色
	カサゴ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1		
	カサゴ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1		
6G3層	アコウ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1		
	カサゴ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1		
	カサゴ	1	ヒラメ	1	エゾコトコロ	1		



第24図 陸前高田市鰐沢貝塚出土骨角器類

第4-2表 陸前高田市鰐沢貝塚出土動物遺存体一覧 (2)

フルイ 5mm×メッシュ

哺乳類

層位/種名	イノシシ	ヒト	ネコ?類
No. 6. 2層			
No. 6. 3層	白骨(M3?)1	臼歯2	大顎骨 右1

魚類

層位/種名	スズキ	アイナメ	ワカサギ科	ウナギ	ブリ	サケ科	サバ科	コイ科	マイワシ	サヌカ	マフグ科?	マグロ類	不明
No. 6. 2層	主鱗蓋骨 左 左1. 尾椎 1	前上頸骨 左 1. 右1. 手吸骨 左1. 鰓椎3. 尾 椎15	前上頸骨 右1. 鰓椎 1. 尾椎2	主上頸骨 右1	骨骨 左1	椎骨片	腰椎2. 尾 椎8	腰椎2	腰椎1. 尾 椎4		尾椎2	下尾骨1	主上頸骨 左 1. 方骨 左3. 右2. 腹椎5。 尾椎14
No. 6. 3層	主鱗蓋骨 左 1. 鰓椎2. 尾椎 13	前上頸骨 左1			椎骨片	腰椎10. 尾椎20			腰1				腰椎10. 尾椎 33. 方骨 左 1. 右2

巻貝

層位/種名	エノアワビ	ナニワボラ	レイノガイ	イボニシ	スナイ(?)	陸奥貝類	不明
No. 6. 2層	破片	破片	破片	フタ1	21		
No. 6. 3層	破片	破片	破片		10	2	

二枚貝

層位/種名	ツブリ	メガイ	オニアゼリ	ホタテガイ	ムラサキイシ	イソハガキ類	フネガイ科	不明
	左	右	左	右	左	右	左	右
No. 6. 2層	3	8	3	4	破片		5	破片
No. 6. 3層	6	10			破片	1	1	破片

その他

地点・層 種類・数	ヘビ亜目	ウニ類	フジツボ類
No. 6. 2層	椎骨11	殻板破片4	破片1
No. 6. 3層	椎骨4	椎板片1	破片5

フルイ 1mm×メッシュ

魚類

層位/種名	マイワシ	サバ科	ハゼ科	下記
No. 6. 2層	腹椎3. 尾椎2		骨骨 右1	腰椎2
No. 6. 3層	腹椎2. 尾椎2	尾椎1		

その他

層位/種名	エノアワビ	陸奥貝類	イガイ	ウニ類	フジツボ類
No. 6. 2層	破片		1	破片	軟板片5 破片1
No. 6. 3層	破片		1	破片	軟板片12

2 大陽台貝塚

調査期日：平成7年11月24～26日

所在地；陸前高田市広田町字大陽地内

(1)概要

大陽台貝塚は、広田半島西側の南向き斜面に立地する。ほぼ真北には仁田山が位置し、それより広田湾に向かう小規模な沢によって開析されて尾根状を呈する張出が形成されている。遺跡は、尾根頂部を挟み東西に形成されている。特に尾根西側では古くから開田が進められ、昭和51年には記録保存を目的とした発掘調査が実施されている。県道広田半島線は遺跡のほぼ南端を東西に走り、さらにその南側の湾に近い部分は大陽貝塚として区分されている。

尾根頂部は針葉樹もしくは竹林となり、保存状態は良好と推定されるものの、詳細な表面調査は困難な状況にある。一方、東側畠地は比較的急斜面を形成するためか、表土の流出が著しく、土器片及び石器等が地表面に散乱する状況である。県道沿いでは宅地化が進行し、開田も進められて遺跡の残存状況は良くないものと考えられる。従来知られていた貝層は、尾根西側に40mほどの広がりを持ち、部分的に1.5mの深さに達する純貝層である。さらに、その貝層の広がりは北側尾根沿いに広がり、その一部を構成する貝層が小規模ながら確認されている。また、東側沢沿いに径30mほどの半円の貝層が新たに確認されている。

今回の調査では、この貝塚が広田半島内において有数の規模を持つものであること、さらに、縄文前期後半の貝塚としては県内でも最大級のものであること、前回の調査では、貝塚の一部内容の把握を行ったにすぎず、全体像を明らかにする必要があること、などの理由から、遺跡の全体概要を把握することを目的とした。そのため、現況地形測量図を作成するとともに、25mメッシュによる遺物の表面採集、検土壤による貝層のボーリング調査などを、主に遺跡の東側斜面について実施した。

その結果、東側貝層範囲が新たに確認されるなど、一定の成果をあげることができた。ただし、期間の制約などから、従来の情報について大きく上積みするには至らなかった。特に、遺跡の全体像については、表面採集した土器片が大きく原位置を移動しているものと推測され、地点による縄文前期及び中期の相違などについては今後に課題を残した。また、宅地化及び農地開発の進展に対応した遺跡の保護策に加え、包含層の自然流出についても早急な対応が求められる状態であることを再確認した。

(2)出土遺物

ア 土器；(第26～27図)

今回採集できた土器の総量は小整理箱1箱程度である。それらのほとんどは、北東斜面の畠地で採集されている。貝層の形成時期は大木5式期と大木8b式期とされており、採集された土器片もそれらの時期のものが見られる。それ以外に、大木6式期～7式期にかけてのものが多く見られ、これらの時期の遺物が貝層とどのように関わりを持つものか、今後検討する必要がある。

縄文前期後半の土器は、胎土にやや大きめの砂粒を含み、器面が荒れた状態を示すものが多い。1は、朝顔状に開く口縁を有する鉢である。いわゆる金魚鉢状を呈する器形と推定される。厚手の器壁で、外面はていねいにナデられる。内面に鋸歯状の粘土紐が貼り付けられているが、器面との接合状態は悪く、一部で剥落する。3は口縁部をいったん成形した後、粘土を貼り付けて二叉状の突起をつくり出す。外面に縄文が施文され、接合痕は内面でのみ観察される。5,6は、口縁部と

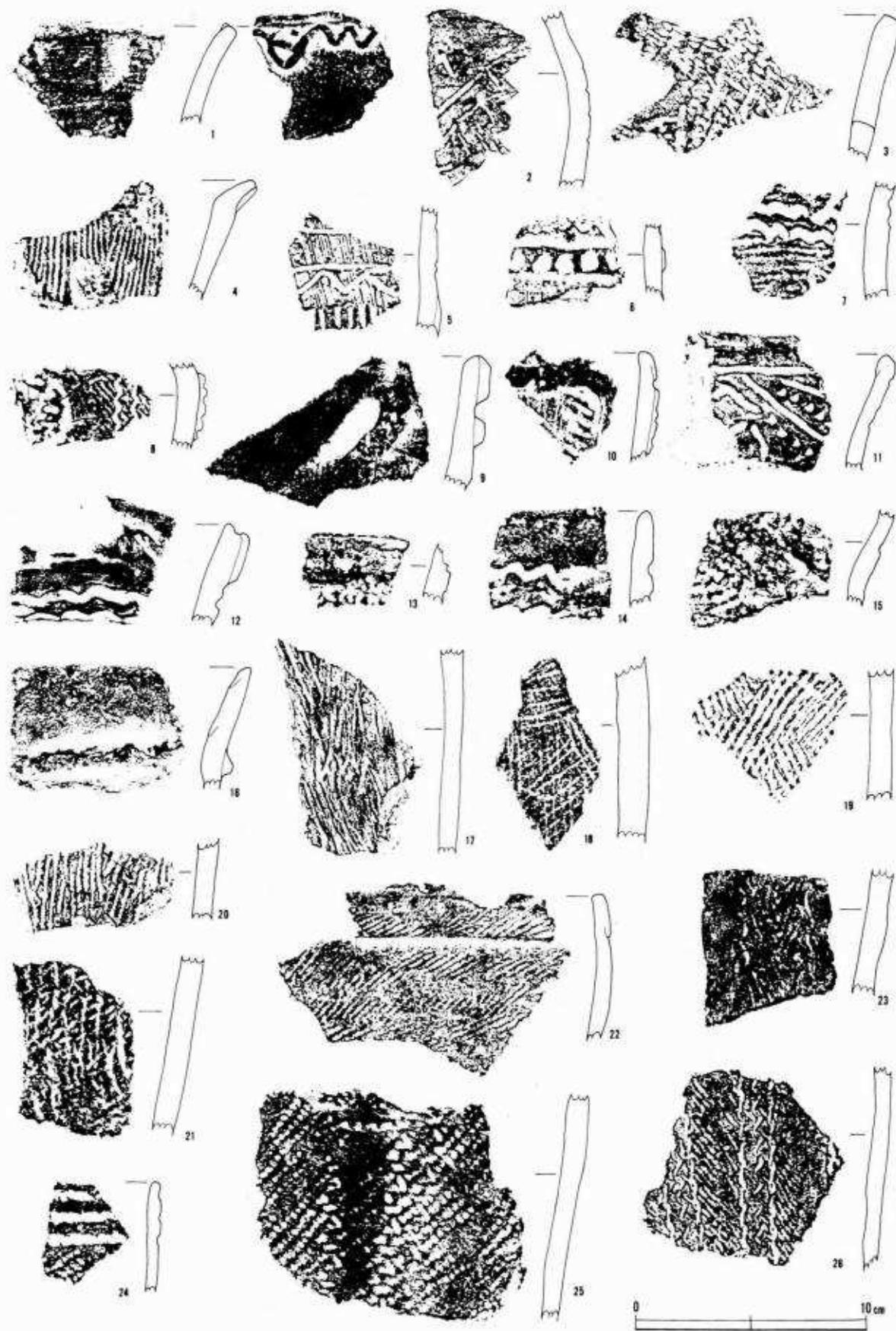


遺跡範囲及び周辺地形

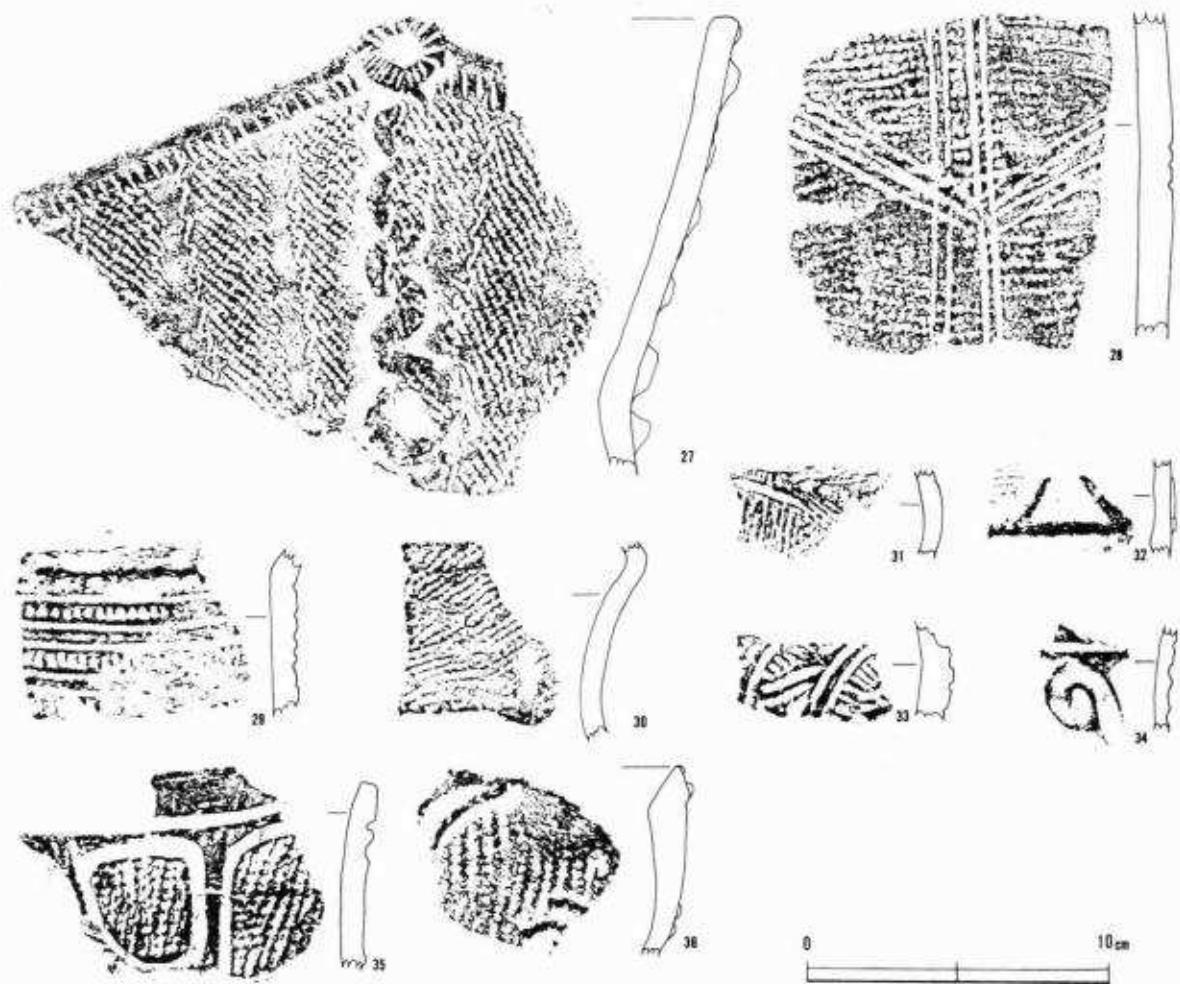


東側斜面現況地形測量図

第25図 陸前高田市大陽台貝塚平面図



第26図 陸前高田市大陽台貝塚出土土器 (1)

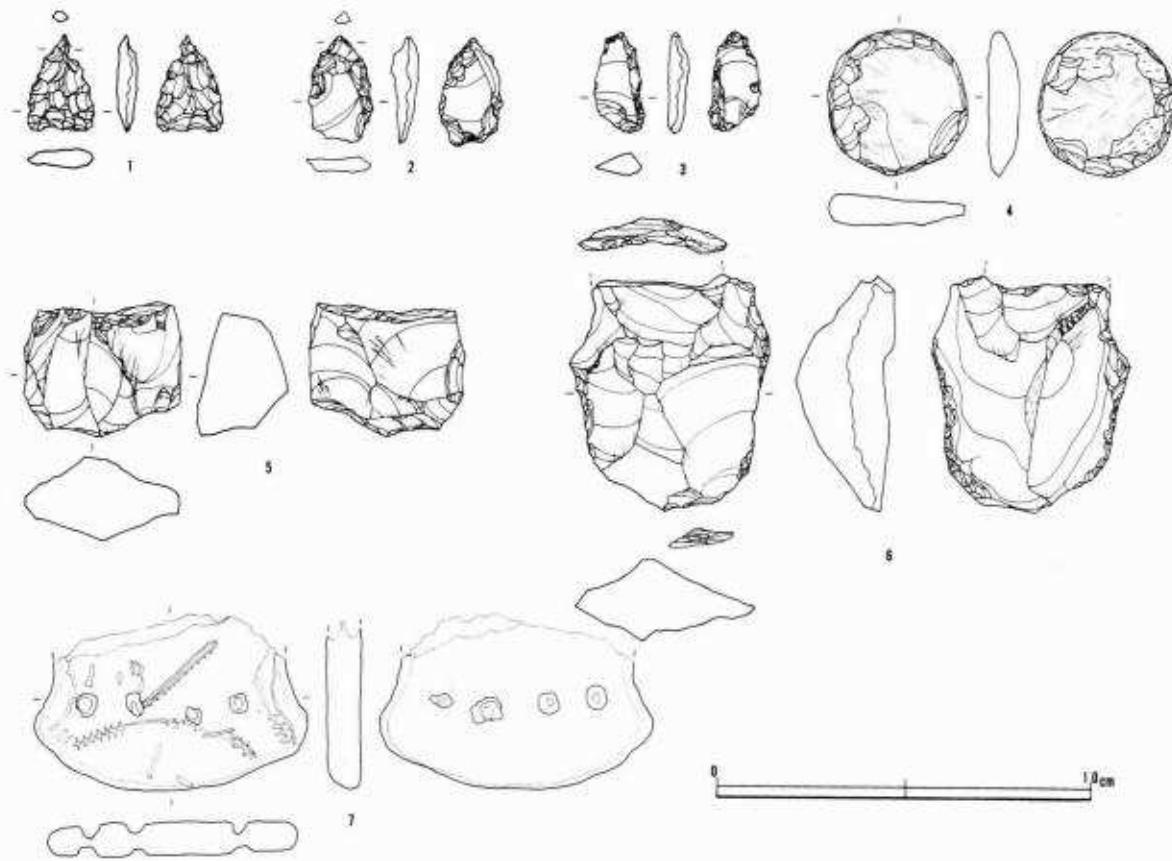


第27図 陸前高田市大陽台貝塚出土土器（2）

体部の文様帶を区画する連続する縦の刻みもしくは指頭による押圧を有する粘土帯が観察される。5は櫛歯状工具による地文が施された後、鋸歯状の沈線により装飾される。12は、口縁部外面に幅広い粘土帯が貼り付けられ、複合口縁となっている。文様帶の区画は波状の沈線によってなされている。7は体部上半であるが、地文に横走する撚糸文が見られるほかは、12, 14などと共通するモチーフを有している。24は口縁部外面に撚糸が押圧される。R L系の縄文が縦方向に回転されている。4は口縁部の突起が外面から指頭状の工具により押圧され、凹状を呈している。縦の撚糸文が、その後に回転施文されている。17-21は体部片で、複数方向に撚糸文が施文される。中期前半の土器は、縦方向に回転される縄文が特徴的である。27は、大型深鉢の口縁部。地文は結節を有するL R 縄文が縦に回転施文されている。波状頂部より垂下される粘土紐は地文施文後に貼り付けられ、さらに縄文によって表面が調整されている。25は、結束された同方向の撚りの原体が縦に回転される。一定間隔で、磨消を行っている。32, 35, 36は中期中葉のもの。前期後半から中期前半の土器片に比して、内外面の調整がていねいで、9のようにミガキ調整がなされるものもある。縄文施文後に、沈線で区画された部分に細い粘土が貼り付けられる。

イ 石器；（第28図）

採集した石器のうち、二次加工を有しているものは6点である。このほか、剥片類を若干採集し



No.	出土品	属性	器種	石材	高	幅	厚	重量	備考
1	東斜面土器	表様	石錐	頁岩	24.8	19.2	4.7	1.6	欠損
2	東斜面土器	表様	石錐	凝灰岩	29.3	18.0	6.4	2.8	先端側縁折り脱け
3	東斜面土器	表様	石錐	頁岩	26.1	17.2	3.2	1.5	万葉鏡面
4	東斜面土器	表様	石鋸	粘板岩	38.8	38.4	7.0	15.1	
5	東斜面土器	表様	石核	アリート	32.7	42.0	22.8	42.4	
6	東斜面土器	表様	スフレイバー	チャート	62.3	91.0	21.7	93.3	ヒレ・脚・脚質

第28図 陸前高田市大陽台貝塚出土石器・土製品

ている。1, 3は頁岩製の石錐。1は先端の一部を欠損する。3はやや厚手の剥片を素材とし、右側縁及び先端に二次加工を加え石錐としている。剥片の打面及びバルブは除去するが、そのため、基部が左右非対称を呈する。2は凝灰岩質の石材で、剥片の利用形態は3と同様である。先端部にバルブの高まりを残している。4は、粘板岩の剥片を利用し、表裏面及び側縁を研磨して円盤状に仕上げている。風化が著しく、表面の剥落が認められる。5はチャート製の石核。打面を上下に有するが、下方の打面からの剥離は石核調整段階のものである可能性がある。6もチャート製。上下両端に折れ面を有する。両側縁に連続する細部調整が観察される。

ウ 土製品：（第28図）

土偶が1点採集されている。板状のもので、上半が欠損している。縄文中期前半に属すると考えられる。黄褐色を呈する。胎土は同時期の土器に比して砂粒の混和が少なく、洗練されている印象を受ける。横方向に4孔が連続して背面より穿孔されている。

エ 動物遺存体等：今回の調査では採集されていないが、前回の調査で巻貝20種、二枚貝18種、陸産貝4種が確認されている。魚骨はマグロを中心として9種。鳥獣類にはイノシシ、シカなどの大型獣も含まれている。骨角貝製品には、範状骨器、範状鹿角製品、釣針、骨針、サメ類椎骨垂飾品、ツメタガイ穿孔品、イタボガキ製貝輪などがある。

3 高倉貝塚

調査期日：平成8年11月29～12月1日

所在地：西磐井郡花泉町高倉地内

(1)概要

高倉貝塚は、花泉町の南西部、宮城県境にごく近い丘陵尾根の最先端部に位置している。この付近は北上川が主要な河川として南東方向に流れ、いくつかの支流が小規模な河岸段丘や自然堤防などを形成している。近世には、現在高倉貝塚南側に広がる水田地帯に中田沼と呼ばれる湖沼が所在したことが知られている。花泉町内の貝塚は、こうした旧湖沼に半島状に延びる丘陵尾根の先端部に形成され、標高は10～20mを測っている。

この貝塚は、大正年間に小田島禄郎による調査が行われているなど、古くから知られていたものの、遺跡の範囲や規模、及び貝層位置などについては不明な部分が多くかった。一方で近年の遺跡内における農地改良や深耕、道路改良などにより、遺跡の破壊が徐々に進行している状態にあった。そのため、早急な遺跡範囲の確認、貝層位置の確認などを行う必要性があった。

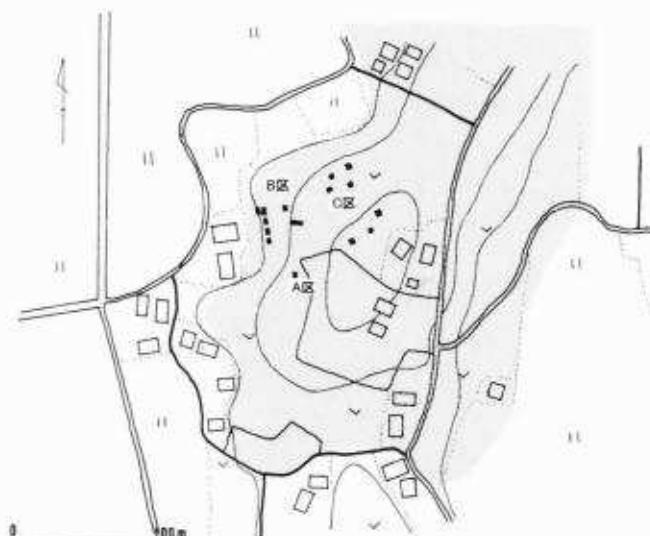
調査は、まず遺跡の範囲確認から着手した。丘陵尾根を踏査し、遺物の分布範囲を把握した。その結果、丘陵尾根北側の広い範囲で縄文土器片等が確認された。また、貝塚の中心と考えられる丘陵先端部は、近年の開墾による地形変更以外に、中世城館として利用されていたことが明らかとなつた。

試掘調査は、丘陵先端部を中心に実施した。遺跡西側を南北に走る県道から、東側に丘陵先端を巻くように延びる町道が設置されている。その最南端部から南向き斜面の畠地に上り、さらに北進すると100mほどで傾斜は北西向きに変わる。この付近をA区とした。さらにその北側の一段低い畠地は西向きに傾斜するが、この畠地をB区と呼んだ。B区北東側は3mの比高を有する崖面で、その上部が広い平坦地となっている。この平坦地をC区とした。

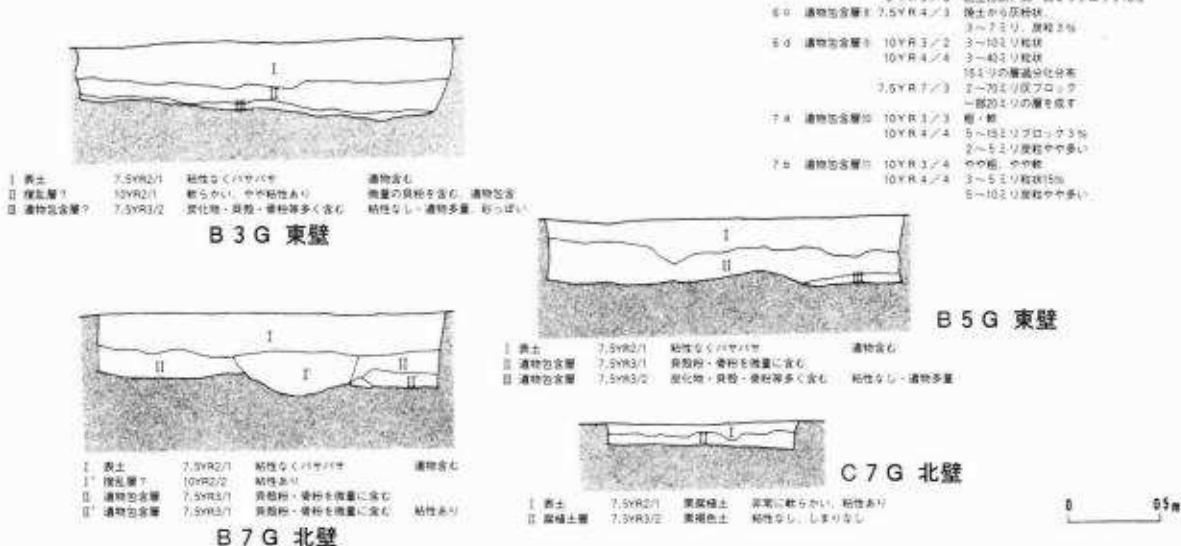
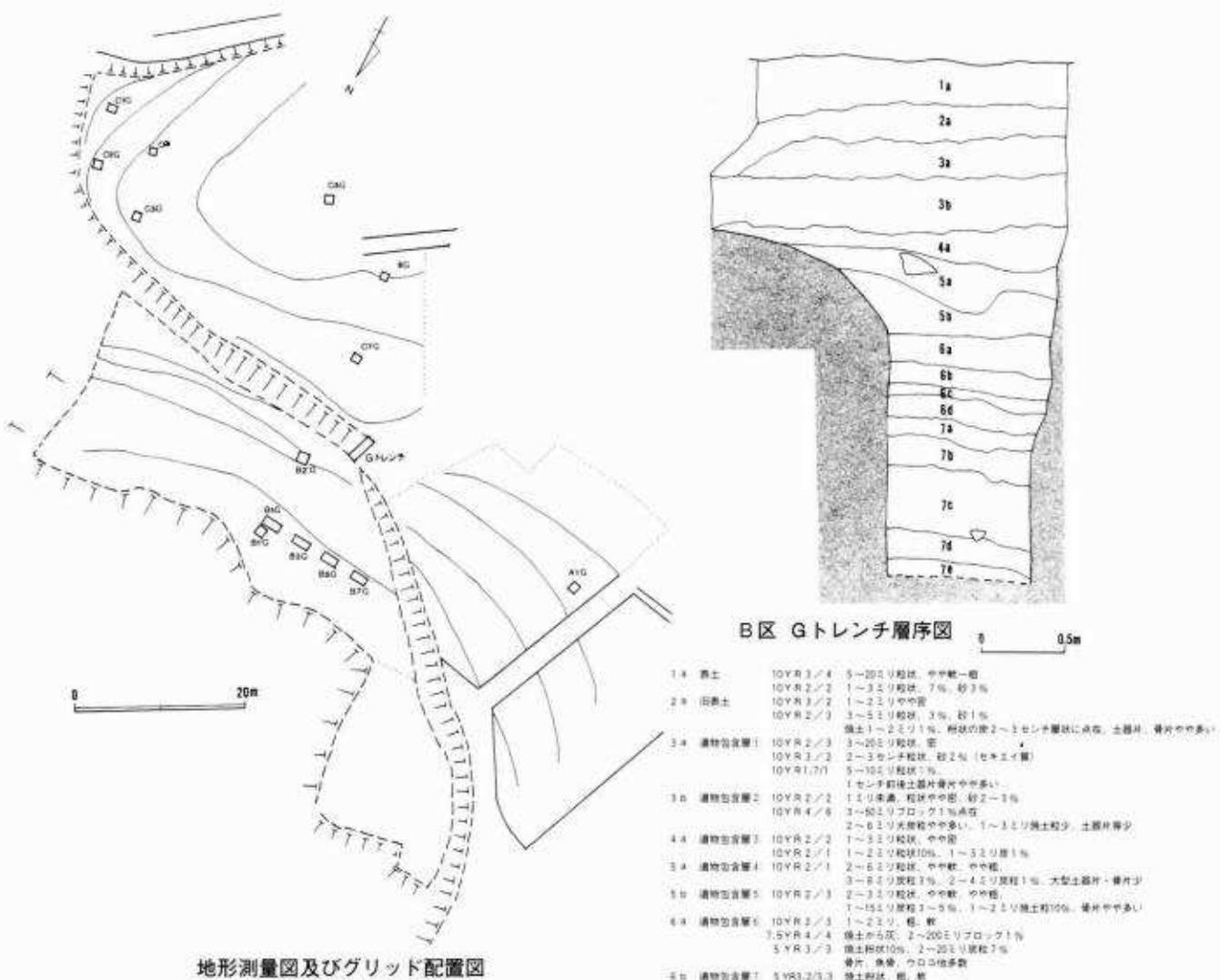
A区は、2m四方のグリッドを1箇所調査したのみである。この付近は包含層の形成が薄く、表土直下が地山となる。遺物の出土もなく、表面での散布も少ない。ただし、南側に延びる張出は遺構の存在が予想され、今後調査を継続する必要がある。

B区は、南側の根菜類の畠地と北側果樹園とに大きく分かれる。西側宅地は、この畠地から延びる地形の緩斜面を大きく削平して造成したものと考えられ、すでに旧地形が失われているものと推定される。また、この付近では過去の畠地等の造成に際して大量に遺物が出土したと伝えられ、その一部は土地所有者宅に保管されてあった。その中には、晩期深鉢の土器片等に混じりヒト大腿骨も含まれていることから、付近に墓域が存在したことが推定できる。

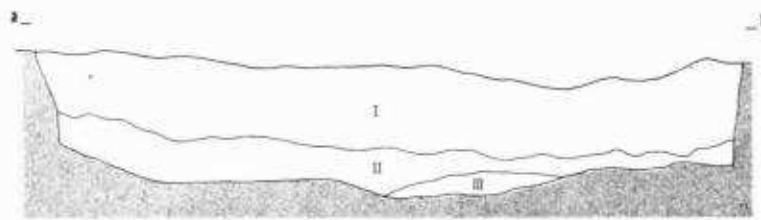
畠地表面に骨片の散布が観察されたため、その付近にグリッドを設定した（B



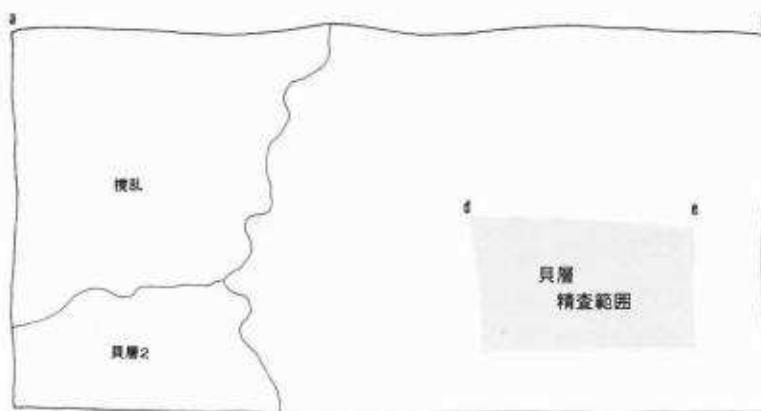
第29図 花泉町高倉貝塚周辺地形図



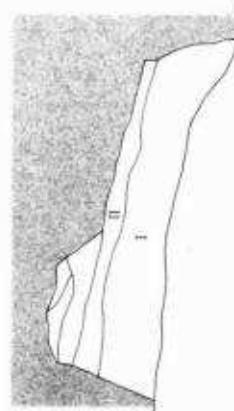
第30図 花泉町高倉貝塚平面図及び層序断面図 (1)



B I G 東壁断面図



B I G 貝層分布状況平面図

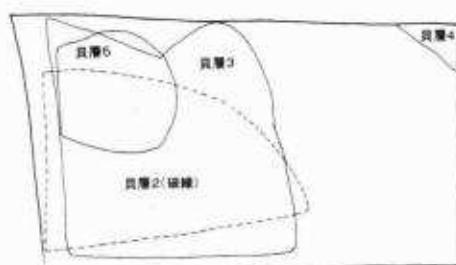


— a — b — c — d — e — f — g — h — i —

貝層1	黒褐色泥貝土層
貝層2	黒褐色角骨層
貝層3	黄褐色泥貝土層
貝層4	黄褐色泥貝土層
貝層5	黄褐色泥貝ブロック
貝層6	明褐色泥貝土層
貝層7	暗褐色泥貝土層
貝層8	暗褐色泥貝土層
貝層9	暗褐色泥貝土層
貝層10	暗褐色泥貝土層
貝層11	暗褐色泥貝土層
貝層12	暗褐色泥貝土層
貝層13	暗褐色泥貝土層
貝層14	暗褐色泥貝土層
貝層15	暗褐色土層
貝層16	黄褐色貝層
貝層17	黄褐色泥貝土層
貝層18	褐色貝層



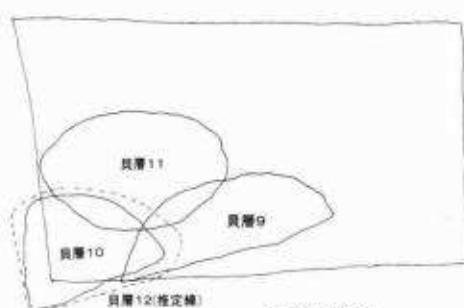
貝層精査東壁断面図



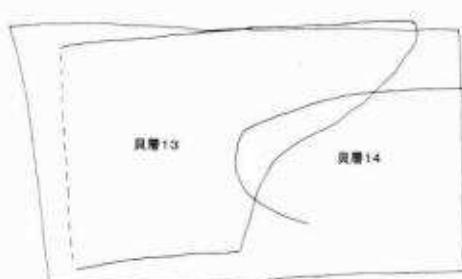
貝層精査①



貝層精査②

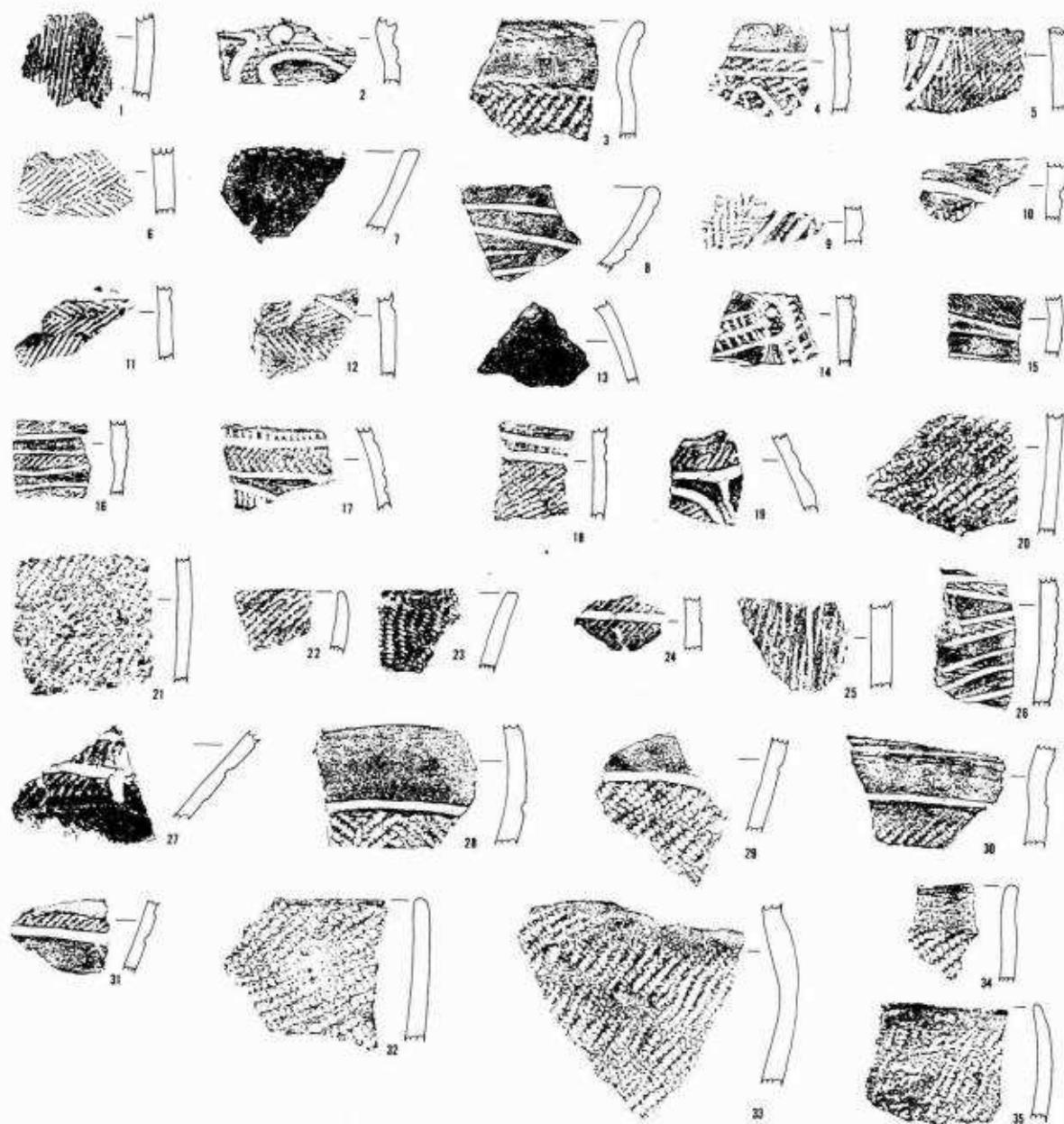


貝層精査③



貝層精査④

第31図 花泉町高倉貝塚平面図及び層序断面図 (2)



No.	地名	層位	種類	口面	口縁部の型	断面	体面上半	体面下半	直面外凸	底面	内面	外面色斑	内面色斑	備考
1	T.G.	工具	2号								二面	無斑色	無斑色	
2	T.G.	工具	2号				LR-C/M				M	無斑色	無斑色	
3	T.G.	工具	2号	M	M	LR-C/M				M	無斑色	無斑色		
4	T.G.	工具	2号				M			M	無斑色	無斑色		
5	T.G.	工具	2号				LH-C			M	無斑色	無斑色		
6	T.G.	工具	2号				RL-LR			M	無斑色	無斑色		
7	T.G.	工具	2号	M	M					M	無斑色	無斑色	工具柄	
8	T.G.	工具	2号				RL-LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
9	T.G.	工具	2号				LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
10	T.G.	工具	2号				LR-C			K	無斑色	無斑色		
11	T.G.	工具	2号				LR-C/G			M	無斑色	無斑色		
12	T.G.	工具	2号				M			M	無斑色	無斑色		
13	T.G.	工具	2号				LH-C/M			D/N	無斑色	無斑色		
14	T.G.	工具	2号				C/M-H			N	無斑色	無斑色		
15	T.G.	工具	2号				RL-C/M			N	無斑色	無斑色		
16	T.G.	工具	2号				LR-C/M			D/N	無斑色	無斑色		
17	T.G.	工具	2号				RL-C/M			M	無斑色	無斑色		
18	T.G.	工具	2号				LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
19	T.G.	工具	2号				LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
20	T.G.	工具	2号				LR			M	無斑色	無斑色		
21	T.G.	工具	2号							M	無斑色	無斑色		
22	T.G.	工具	2号	M	C/M					M	無斑色	無斑色		
23	T.G.	工具	2号				RL-LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
24	T.G.	工具	2号				LR-C/M			M	無斑色	無斑色		
25	T.G.	工具	2号	M	LR	J/C				M	無斑色	無斑色		
26	T.G.	工具	2号			Y/C				M	無斑色	無斑色		
27	T.G.	工具	2号			JG/C				M	無斑色	無斑色		
28	T.G.	工具	2号			JG/C/M				M	無斑色	無斑色		
29	T.G.	工具	2号			LR-C/M				M	無斑色	無斑色		
30	T.G.	工具	2号			RL-C/M				M	無斑色	無斑色		
31	T.G.	工具	2号			LR-N/C/M				M	無斑色	無斑色		
32	T.G.	工具	2号	M	LR	K/LR				M	無斑色	無斑色		
33	T.G.	工具	2号	M	N/M	N/M				M	無斑色	無斑色		
34	T.G.	工具	2号	M	M	LR				M	無斑色	無斑色		
35	T.G.	工具	2号	N	LR	M				M	無斑色	無斑色		

第32図 花泉町高倉貝塚出土土器 (1)

1' G)。さらに、その東側10mにB 2' Gを設定した。ところが、B 1 G付近から南側に向けて根菜類の耕作が同時に進行したため、急速その耕作範囲についてトレーナーを設定して調査を行った(B 1 G ~ 7 G)。このトレーナーでは特に北側の遺存状態が良好で、15枚にわたる貝層が確認されている。同様に、動物骨等を含む層は3・5・7 Gでも確認されているが、時間的制約から細かな分層調査を実施することはできなかった。

この貝層の形成時期は、出土土器が後期前葉から晩期後葉の広い時期にわたっているため、特定することが困難である。しかし、比較的出土量が多く、遺存状態も良好であるB 1 Gでは、貝層上面で出土した土器が縄文後期前葉から中葉にかけてのもので、B 3 G ~ 7 G貝層前後で出土する土器もこの時期を中心にしていることから、この段階に形成されたものと考えて大過ないと考えられる。ほかに、晩期土器片が若干混じるが、既述した墓域と関連するものである可能性を有している。

B区とC区を隔てる斜面にGトレーナーを設定し、土層断面の観察を行っている。その結果、この崖面は、約3 mの厚さで遺物及び焼土等を含む極めて厚い包含層として形成されている可能性が高まっている。出土土器は縄文中期中葉から後期後葉に至る時期であるが、崩落土等から出土しており、包含層形成の時期を特定することは困難であった。

C区では、主に遺構の所在確認を目的として2 m四方のグリッドを7箇所設定している。これらの調査区では遺物の出土がほとんどなく、表土直下に地山が確認されている。これより、この平坦地がかなり古い段階で削平造成されている可能性を考えている。最西部のC 7 Gと、Gトレーナーとの距離が10m以上あったため、上部C区平坦地と崖の包含層との関係が不明確なまま残された。

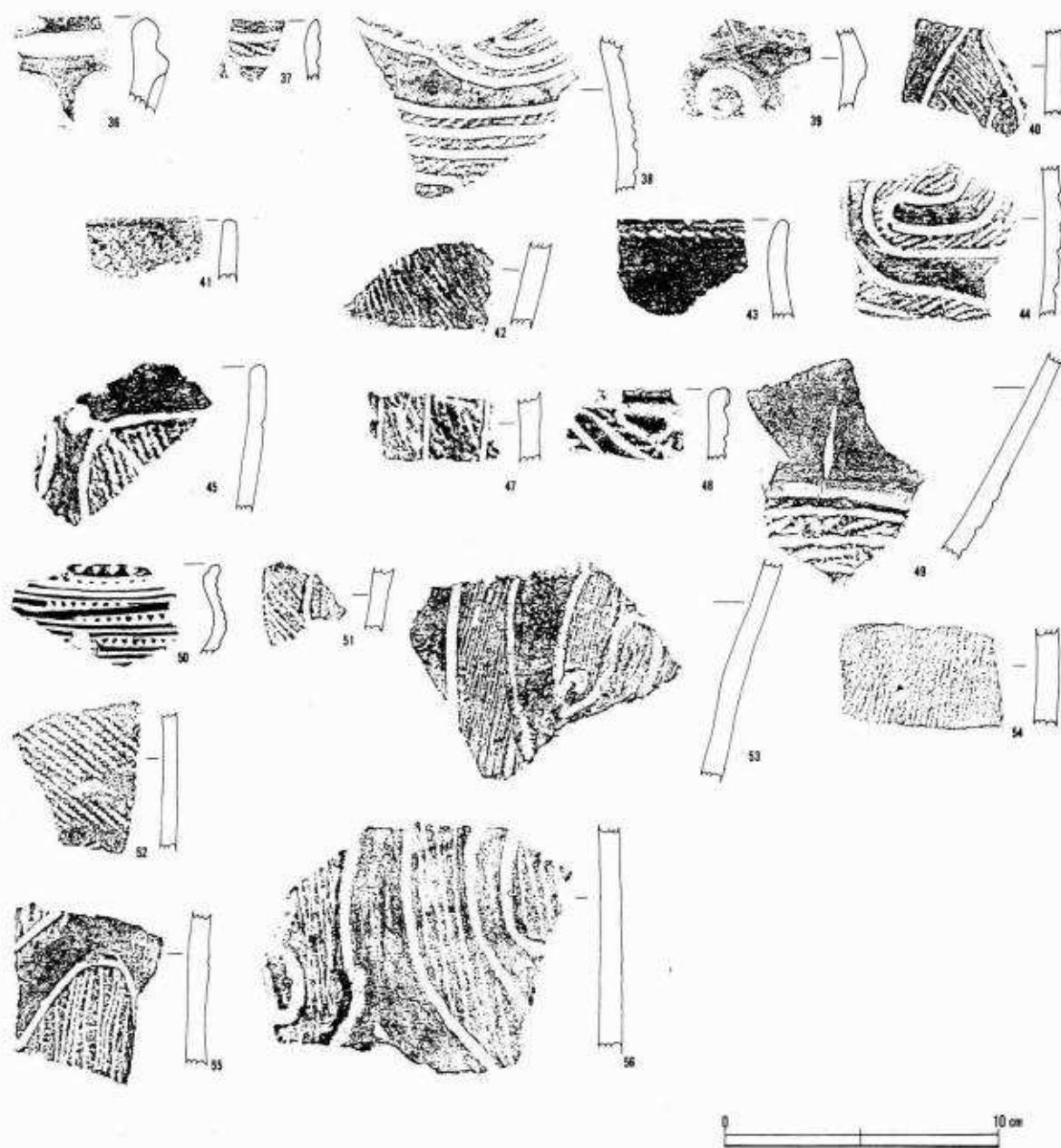
(2)出土遺物

ア 土器：(第32~35図、表5)

今回の調査で出土した土器は、整理箱で3箱である。すべて小片であり、全体を復元できる資料は出土していない。

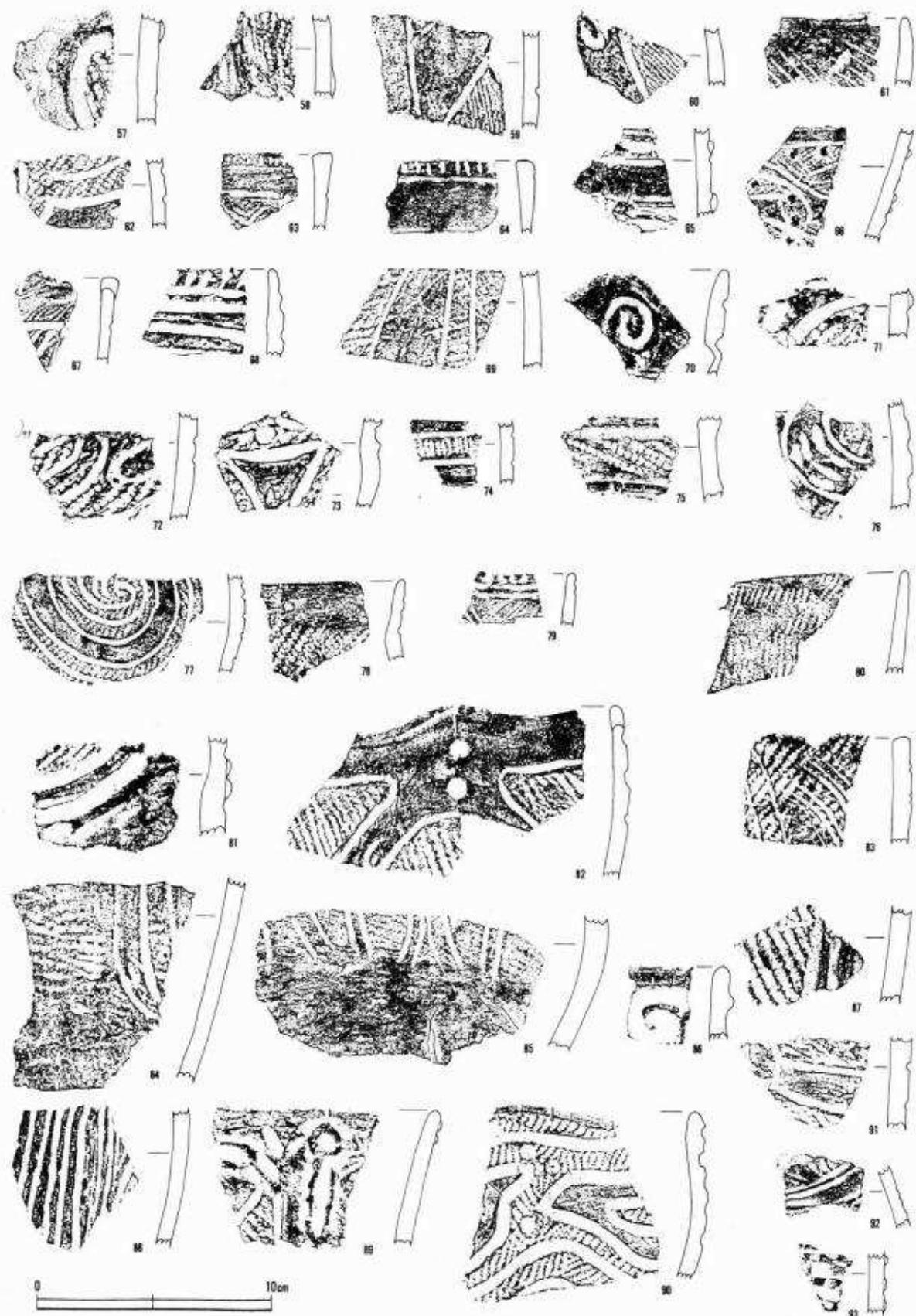
B 1 Gでは、貝層上部のII層及び上部の貝層1、2、5より土器が出土している。II層出土土器は、わずかに縄文晩期初頭のものを含むものの、ほとんどは後期に属する。1は、細かな櫛状工具により地文が施文される。2~4は、後期前半の土器。3は、口縁部外面に撚糸原体の押圧が見られ、体部上半とはミガキの行われる無文帯によって区画される。4の沈線は、縄文施文後。5~12は後期中葉に属する。地文に短い原体による羽状の縄文を施すのが特徴的である。ミガキも多用され、無文部と縄文部の沈線区画が際立っている。14~17は後期後半から終末。14は器面に二条の粘土紐を貼り付け、一定間隔で刻みを入れている。交点にはさらに一段盛り上げて粘土粒を貼り付けた。15~17は、入組文状の意匠を沈線で区画し、縄文部をややレリーフ状に磨消縄文手法で仕上げている。21,22は貝層上部(2)出土。地文のみの深鉢である。

B 3 Gでは、表土・攪乱層直下の層(III層)より出土している。図示した資料は後期中葉のものが多いが、このほか中期後葉の土器片も出土している。25は、縦方向に回転される不整な撚糸文を地文とする。26,27は、後期前半。沈線で縄文部と無文部を区画し、平行線を中心とした意匠で構成する。無文部はよくミガキがなされる。28~30は、より広い縄文帯を有している。28は短い縄文原体を使用して羽状に施文する。無文部はミガキがなされる。沈線は断面が半円状を呈し、やや浅く施文される。内面は横方向にケズリがなされたままで、29,30の内面とは対照をなしている。32~35はいずれも地文(LR系)のみ施されている。ただし、口唇及び口縁部外面の無文部はミガキがなされている。具体的時期比定は難しい。



No.	種類	部位	器種	口縁部外観	断面	内面形状	生産工場	流通販賣	器形	大きさ	外見色調	内見色調	備考
36	T.G.	口縫	片持	M	C/M				M		黒褐色	黒褐色	
37	T.G.	口縫	片持	M	L.R./C/M				M		黒褐色	黒褐色	
38	T.G.	口縫	片持	M	L.R./C/M				M		黒褐色	黒褐色	
39	T.G.	口縫?	片持	M	C/M				M		黒褐色	黒褐色	
40	T.G.	口縫?	片持	M	V/C/M				M		黒褐色	黒褐色	
41	T.G.	口縫?	片持	M	V/M				N		黒褐色	黒褐色	
42	T.G.	口縫?	片持	M	L.R./C/M				M		黒褐色	黒褐色	
43	T.G.	口縫?	片持	M	R.L.多角				M		黒褐色	黒褐色	
44	T.G.	口縫?	片持	M	L.R./C/M				M		黒褐色	黒褐色	
45	T.G.	口縫	片持	M	R.C/M				M		黒褐色	黒褐色	
46	T.G.	口縫	片持	M	V/C/M				M		黒褐色	黒褐色	
47	T.G.	口縫	片持	M	L.R./C/M				M		黒褐色	黒褐色	
48	T.G.	口縫	片持	M	M	L.R./C			M		黒褐色	黒褐色	
49	T.G.	口縫	片持	M	C/M	C/M			M		黒褐色	黒褐色	
50	T.G.	口縫	片持	M	V/C/M	V/C/M			M		黒褐色	黒褐色	
51	T.G.	口縫	片持	M	M	L.R.			M		黒褐色	黒褐色	
52	T.G.	口縫	片持	M					M		黒褐色	黒褐色	
53	T.G.	口縫	片持	M					M		黒褐色	黒褐色	
54	T.G.	口縫	片持	M					M		黒褐色	黒褐色	
55	T.G.	口縫	片持	M					M		黒褐色	黒褐色	
56	T.G.	口縫	片持	M					M		黒褐色	黒褐色	

第33図 花泉町高倉貝塚出土土器 (2)



第34図 花泉町高倉貝塚出土土器 (3)



第35図 花泉町高倉貝塚出土土器 (4)

B 5 G では、混貝層直上の貝層 1 より土器片が少量出土している。36は、中期中葉～後半。口縁外面に粘土紐が貼り付けられ、ミガキが行われることで隆起部と沈線部という対比を呈している。渦状の意匠が展開される可能性が高い。37,38は後期前半。38は壺上半部と考えられる。このほか、表土直下付近の攪乱土層中からも土器片が出土している。39,40は後期初頭。40は区画された沈線内に細い撚糸が充填されている。44は38と同一個体である。

B 7 G では、2層及び3層より出土している。上層の2層では、後期初頭から晩期前半に至る土器片が出土する。45,47,51は後期初頭。48は後期前半。49は後期中葉。45は波状口縁を呈する。内外面ともよくミガキがなされる。47,51は、細い撚糸が地文となるもの。50は、口縁部外面に羊歯状の意匠が構成されるもの。沈線によって下書きされ、ミガキによって仕上げられる。下層の3層では、後期初頭のやや大型の土器片が出土している。いずれも深鉢である。

第34図・35図は、表土等より出土した土器片である。ただし、82に代表されるように包含層出土土器と同一個体の資料も多く含まれると考えられる。112は中期中葉、57,58は中期後葉の土器で、表土等出土土器の中でも古い段階のものである。96,98,99,103,104,106は、晩期後葉から終末にかけ

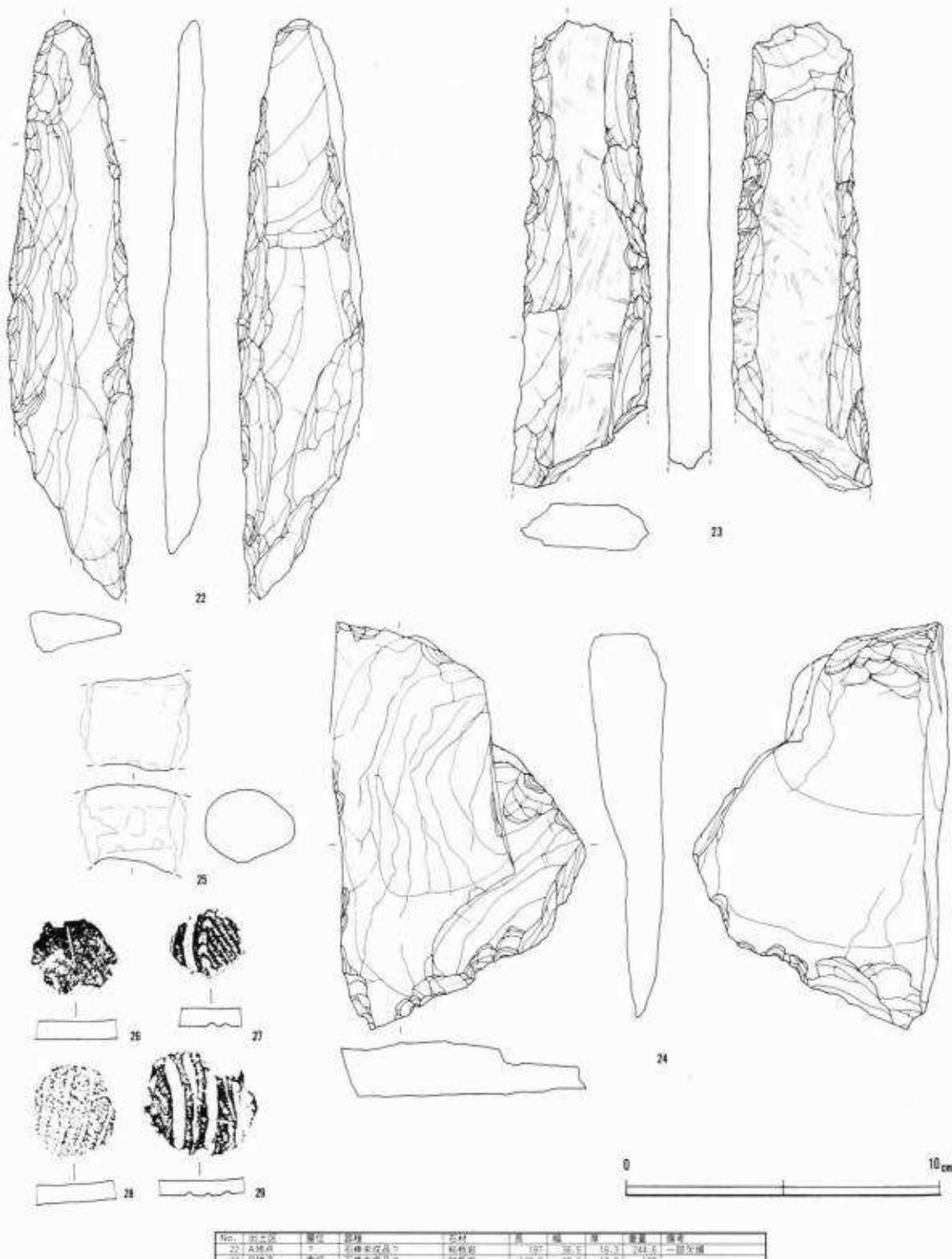
第5表 花泉町高倉貝塚出土土器集計表

B区1 G 2層(混貝)													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
後期 前葉	3	1					11	1					
後期 中葉		4						17					
後期 後葉		1						2					
晩期 前葉	1	1						2					
不明	1	2				48	65	3					
B区1 G 貝層1													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
不明							2				1		
B区1 G 貝層2層													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
不明		1						2					
B区1 G 貝層5													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
不明							1	1					
B区3 G 貝層上面ターニング													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
中期 後葉		1					2						
後期 前葉		1					5	5					
後期 中葉							5	1					
不明		1				4	15	7			1		
B区5 G 1層混貝層直上													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
中期 後葉		1					1						
後期 前葉		1											
後期 中葉							1						
不明		1											
B区7 G 2層													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
後期 前葉								2					
後期 中葉		1						1					
後期 後葉													
不明			1										
B区7 G 3層													
	口縁部				体部					底部			
-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-	200-	-20	20-	50-	100-
後期 前葉							1	1					
後期 後葉								1					
不明											1		



No.	出土区	層位	記号	石種	長	幅	厚	重量	備考
1	古墳内	表層	石錐	碧玉	14	14.2	2.9	0.5	和銅再加工?
2	古墳内	表層	石錐	碧玉	16.5	20.3	4.3	1.3	
3	古墳内	表層	石錐	碧玉	16.5	15.5	3.9	0.5	和銅再加工?
4	古墳内	表層	石錐	碧玉	16.5	15.5	3.9	0.5	和銅再加工?
5	古墳内	表土	石錐	モクスイ	16.5	17.7	4.2	0.5	和銅再加工?
6	古墳内	表土	石錐	モクスイ	16.5	14.5	3.8	0.5	和銅再加工?
7	古墳内	?	石錐	碧玉	17.2	16.7	3.1	2.5	先端から側縁折れ
8	古墳内	表層	石錐	碧玉	20.8	16.2	6.8	0.6	
9	古墳内	表層	石錐	碧玉	26	13.1	6.8	1.3	
10	古墳内	2層	火炎器	碧玉	41	20.4	11.3	13.1	火炎
11	古墳内	表層	火炎器	碧玉	35	26.7	9.4	6.9	
12	古墳内	表層	石錐	碧玉	32	22.2	7	4.1	先端、基部折れ
13	古墳内	?	石錐	碧玉	27.6	16.2	5.7	2.7	先端折れ
14	古墳内	表層	石錐	碧玉	37	40.8	6.2	6	
15	A地内	表層	スクレーパー?	緑石英?	29.3	18.8	10.2	4.2	火炎?
16	古墳内	表層	スクレーパー	碧玉	40.4	25.5	9.2	10.4	
17	古墳内	表層	スクレーパー	碧玉	43.7	26	9.3	6.6	
18	古墳内	表層	ピュース・スクレーパー	碧玉	22.3	22.2	7.8	5.6	
19	古墳内	表層	スクレーパー	碧玉	16.8	21.4	5.2	1.8	
20	A地内	表層	細粒斜長岩質	碧玉	33	21	5.2	2.2	一部折れ
21	B地内	表土	スクレーパー	碧玉	35.6	21.4	7.2	6.9	

第36図 花泉町高倉貝塚出土石器 (1)



第37図 花泉町高倉貝塚出土石器（2）・土製品

けてのもので、現在この貝塚で確認されている土器群の中ではもっとも新しい段階のものである。96、99は小型の壺の肩の部分。流水状の工字文や沈線による矢羽根状の意匠が認められる。98は円筒状の頸部を有する壺。口縁部外面に粘土帯が貼り付けられ、工字状の意匠となる。103は、縄文

第6表 花泉町高倉貝塚出土石器集計表

	頁岩	ギョクズイ	黒曜石	粘板岩	凝灰岩	鈔岩	チャート	安山岩	珪質頁岩	流紋岩	不明・その他
A1G	1										
B1G表土	3	2									
B1G2層	5		1								
B2G表土			1								
B3G貝層上面		2	1								
B5G表土	2	3	1								
B5G 1層		1									
B7G表土	1										
B7G2層		1									
B7G 3層	1										
G	1		1								
G 3-b 2		1									
C3G	1	1									
C7G			2								

原体が斜めに回転されて、横走する条を呈している。

イ 石器：（第36～37図、表6）

二次加工を有している石器について図示している。これらのうち、包含層から出土したものは10の1点のみで、他の資料は表土出土もしくは表面採集資料である。

表土及び包含層から出土した石器類は、34点である。剥片数で頁岩が多いものの、全体の4割程度である。ギョクズイ質の石材及び黒曜石も多用されている。黒曜石は付近に原石が採取できる路頭があることから、高い割合を示すものと考えられる。

石鎌は、9点確認された。頁岩素材のものが多い。有茎のものもあるが（8）少數である。5、7は、素材の剥片剥離面を残したまま、先端部、縁部を加工している。基部・先端部等に折れが目立つ。10、11は、小型の尖頭器状の石器。裏面に素材の主剥離面を残している。13、14は石錐。12は刃部の形成が不完全であるが、形態から石錐として分類した。22、23は、石棒未成品か。剥離と研磨による成形が行われている。石材は粘板岩で、この地方で一般的な素材である。24は石鉤等の製作途上で出てくる剥片か。粘板岩。

ウ 土製品：（第37図）

5点確認されている。25は後期の土偶。右上腕部と推定される。粘土紐を成形したもので、かすかなナデが認められる。26～29は円盤状土製品。27は後期中葉、29は後期前半である。

エ 動物遺存体等

高倉貝塚ではA・B・C 3箇所の調査区の内B区で貝層が確認され、18層に分層された。各層からサンプリングされ、5mmと1mmメッシュの水洗フルイにかけている。

出土している動物遺存体はフナ属・ギバチ、イシガイ、スマガイ、オオタニシなどが主体である。

貝類では、巻貝が多くなかでもオオタニシが圧倒的に多い。稚貝も若干出土している。他の巻貝にはマメタニシ・イボカワニナ・タマガイ科がごく少数認められる。また、殻頂部は出土していないがアワビの破片が7・9・10・11層の重なった層位で出土している。二枚貝はスマガイ・イシガイの他、アサリやイガイなどの海産貝類も若干出土している。その他海産の貝類として他にヤカドツノガイなどが出土している。

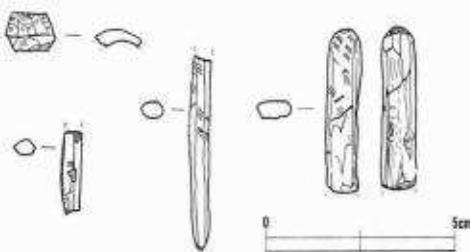
魚類はフナ属・ギバチを主体とする淡水産魚類が出土している。種まで特定できないコイ科は、種同定可能な部位の状況からみてフナ属が圧倒的に多いと思われる。コイは確認されていない。また、5mmメッシュ上では魚骨が確認できない層でも1mmメッシュ上ではすべて魚骨が確認されている。貝層13で出土したサケ科魚類の椎骨は5mm程度と小さく、小形の陸封型のサケ科魚類（ヤマメ・イワナ等）と考えられる。

その他動物遺存体ではシカ・イノシシが若干、ヘビ類の椎骨が貝層4で1点出土している。

魚類表中の略号は次のとおりである。分析対象とした量は表のとおりである。

角骨 · · ang、基後頭骨 · · bao、基鱗骨 · · bap、角舌骨 · · chy、擬鎖骨 · · cle、鳥口骨 · · cra、齒骨 · · den、上舌骨 · · eph、篩骨 · · eth、舌頸骨 · · hyo、間鰓蓋骨 · · ino、主上顎骨 · · max、主鰓蓋骨 · · ope、副蝶形骨 · · para、咽頭骨 · · pha、前上顎骨 · · prem、前鰓蓋骨 · · preo、翼耳骨 · · pto、方骨 · · qua、肩甲骨 · · scap、下鰓蓋骨 · · subop、上擬鎖骨 · · supc、上後頭骨 · · supo、尾舌骨 · · urh、尾部棒狀骨 · · urs、第一椎骨 · · vi、第二椎骨 · · vll、背or臀鱗棘 · · d·asp、腹椎 · · v abd、尾椎 · · v cau、第一背鱗棘 · · mds、第二背鱗棘 · · sds、複合椎骨 · · tpcv、胸鱗棘 · · pec sp、第二担鱗骨 · · s ptrg、第一担鱗骨 · · f ptrg、後側頭骨 · · pot、頸篩鋤骨板 · · pv

第7-1表 花泉町高倉貝塚出土動物遺存体一覧 (1 mmメッシュ 魚類)



第38図 花泉町高倉貝塚出土骨角器類

第7-2表 花泉町高倉貝塚出土動物遺存体一覧

5mmメッシュ

哺乳類

層位/種名	不明
B-1貝層4	指骨2

鳥類

層位/種名	不明
B-1貝層4	破片6

その他

地点・層位	種類・数
B-1貝層4	ヘビ椎椎骨1

魚類

層位/種名	ツナ属	ウグイ	ニゴイ	コイ科	カトヨ モロ モロ モロ	ギンメ ウサギ モロ	ドジョ ウ科	ウナギ	スズキ	不明
B-1貝層3	gymnoph.1, opedel.1, dech.1			hyph.1, s cap.2	dech.右各 1, gen.左2					
	qua左1, syn.左右各2, qua左右各1, opedel.4, 右1, dech.2, dech.1, dech.右各1, 骨盤骨 右1, e11			dech.1, s cap.2	qua右1, de 右2					
B-1貝層4		dech.1		qua左各 1, e. shd4, v caul		qua右1, de 右2		dech.1		
B-1貝層5	anop.右1, pta左1			ura1						
B-1貝層6	pto左1, vata左1			e. shd1, v caul		era.左1, de 右1				
B-1貝層9	pto左1, dech.1			v. caud1						
B-1貝層10	ope左.不等1			qua.5.4						
	imo.右1, qua左右各1, ope左右各1, vata右 1, dech.右各1, dech. 左各1	opedel. 1		e. distl., v caul	super.1, hya 1, opedel.3, dech.2, pte sp.5.1			val.12	qua右1	
B-1貝層13										

巻貝

層位/種名	オオタニン	イボカワニナ	タマガイ科	藤原貝類	その他
B-1貝層3	1				
B-1貝層4	5				
B-1貝層5	破片				
B-1貝層6	2				
B-1貝層13	11				
B-1貝層15-18	6	1			

二枚貝

層位/種名	スマガイ	イシガイ	アサリ	不明
B-1貝層4				左1
B-1貝層5	破片	右1		
B-1貝層6	破片	破片		
B-1貝層9	破片	破片		
B-1貝層13		左1		
B-1貝層15-18	左2, 右5	左1		

1mmメッシュ

哺乳類

地点・層位	種類・数
B-1貝層5	ヤカドツノガイ1
B-1貝層6	ウニ綱 硬板破片1

その他

層位/種名	不明
B-1貝層13	大脚骨右1

巻貝

層位/種名	オオタニン	オオタニン種目	マダラニン	その他
B-1貝層1	1			
B-1貝層2	5			
B-1貝層3	8			
B-1貝層4	13	1		
B-1貝層5	9			
B-1貝層6	4			
B-1貝層7	3			アワビ破片
B-1貝層8	3			
B-1貝層9	10			アワビ破片
B-1貝層10	6	1		アワビ破片
B-1貝層11	12		3	アワビ破片
B-1貝層12	4			
B-1貝層13	6	1		
B-1貝層14	5			
B-1貝層15-18	7	2		

分析量

層位/種名	5mmメッシュ	分析量	1mmメッシュ	分析量	(g)
B-1貝層1		0	-	434.1	68.3
B-1貝層2		0	-	528.4	72.6
B-1貝層3		24.8	24.8		57.4
B-1貝層4		49.3	49.3		58.7
B-1貝層5		15.7	15.7		35.9
B-1貝層6		27.4	27.4		57.4
B-1貝層7		0	-	275.5	53.5
B-1貝層8		0	-	55.7	55.7
B-1貝層9		15.6	15.6		57.7
B-1貝層10		26.6	26.6		53.9
B-1貝層11		0	-	53.7	53.7
B-1貝層12		0	-	64.7	47.9
B-1貝層13		31.7	31.7		41.4
B-1貝層14		0	-	183.8	52
B-1貝層15-18		68.9	68.9		52.7

4 白浜貝塚

調査期日：平成8年11月29～12月1日

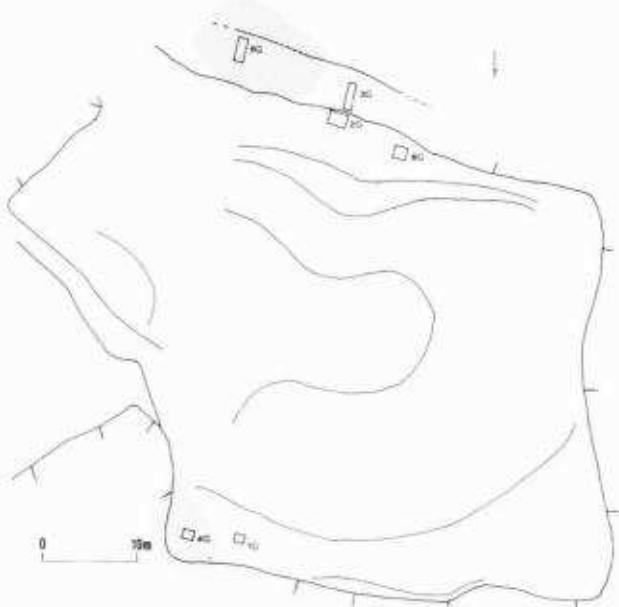
所在地：西磐井郡花泉町涌津字台地内

(1)概要

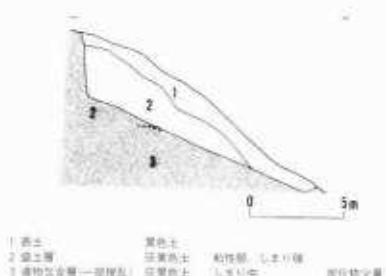
白浜貝塚は縄文時代後期から弥生時代の貝塚で花泉町南部の宮城県境に位置している。南側には追川の支流の夏川が流れ、遺跡はその周囲に形成された沖積地に突き出した舌状の台地の上に立地している。標高は15m前後である。周辺には沖積地を取り巻きながら石崎貝塚、貝鳥貝塚等宮城県北から続く淡水産の魚介類で形成される貝塚が分布する。本格的な調査は過去には行われていない。遺跡は東西にやや長い台地のちょうど突出した部分に広がっており、貝層はその南北の斜面部分に2箇所分布している。現況は主に畑であるが北側斜面の下方は水田になっており、この水田を造成した際に貝層が一部破壊されたようである。



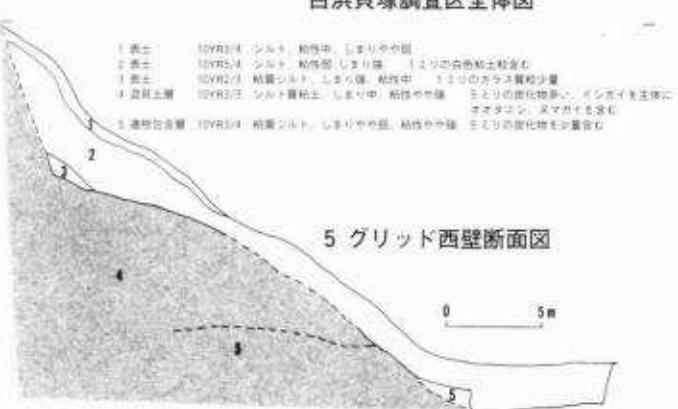
白浜貝塚周辺地形図



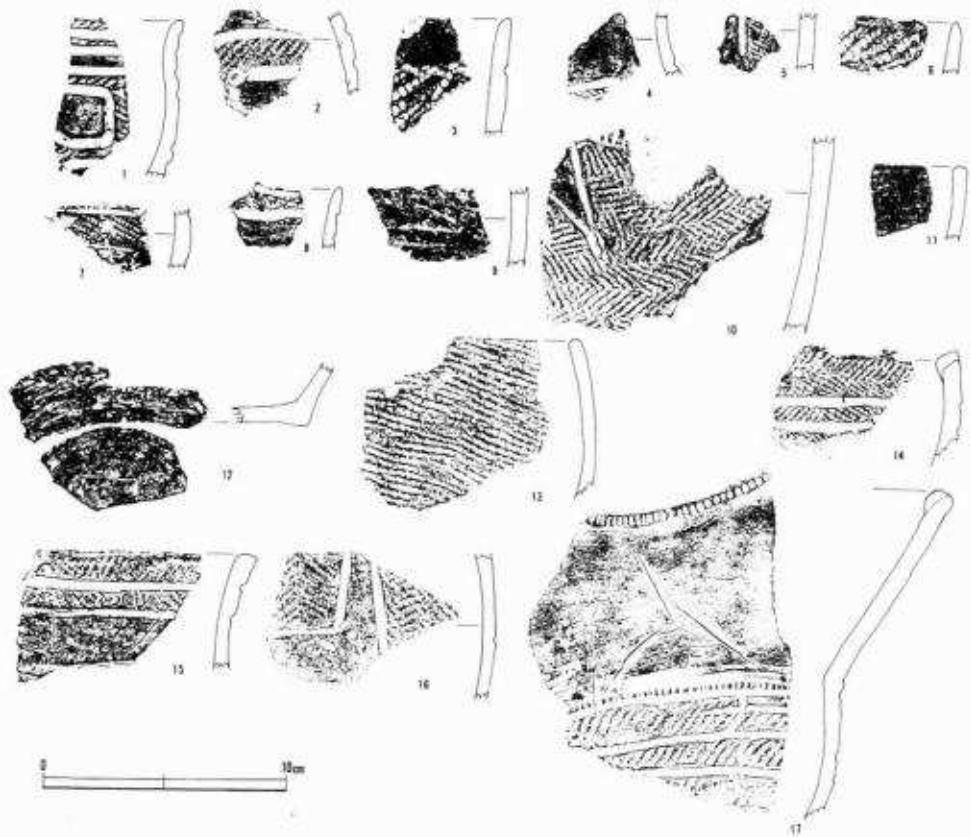
白浜貝塚調査区全体図



3 グリッド西壁断面図



第39図 花泉町白浜貝塚平面図及び層序断面図



No.	地名	層位	片種	口部	口縫跡外観	縫跡	体部上部	体部下部	底面形状	底面	内面	外縫跡	内縫跡	縫跡
1	4G	貝層上部	深鉢	M	J-C/M	J-C/M				M		縫跡有り	縫跡有り	
2	4G	貝層中段	深鉢				L-R-C/M			M		縫跡有り	縫跡有り	
3	4G	貝層中段	深鉢	M	M		N			N		縫跡有り	縫跡有り	
4	4G	貝層中段	深鉢				J/C/M			M		縫跡有り	縫跡有り	
5	4G	貝層中段	深鉢				R-I-C/N			M		縫跡有り	縫跡有り	
6	4G	貝層中段	深鉢				S/I			M		縫跡有り	縫跡有り	
7	4G	貝層中段	深鉢				R/I/C			M		縫跡有り	縫跡有り	
8	4G	貝層中段	深鉢				R/I/C			M		縫跡有り	縫跡有り	
9	4G	貝層中段	深鉢	M	M	LR多筋J-C/M			M		縫跡有り	縫跡有り		
10	4G	貝層中段	深鉢				N			M		縫跡有り	縫跡有り	
11	4G	貝層中段	深鉢				L-R-A-L-C/M			M	(無)	縫跡有り	縫跡有り	縫跡有り
12	4G	貝層上部	深鉢							M		縫跡有り	縫跡有り	
13	4G	貝層上部	深鉢	M	R/I	R/I				M		縫跡有り	縫跡有り	
14	4G	貝層中段	深鉢	M	R/L-B-R/C					M		縫跡有り	縫跡有り	
15	4G	貝層中段	深鉢	M	R/L-B-R/C					M		縫跡有り	縫跡有り	
16	4G	貝層中段	深鉢	M	R/L-B-R/C-M					M		縫跡有り	縫跡有り	
17	4G	貝層中段	深鉢	M	C/M	S-R-C-M				M		縫跡有り	縫跡有り	縫跡有り

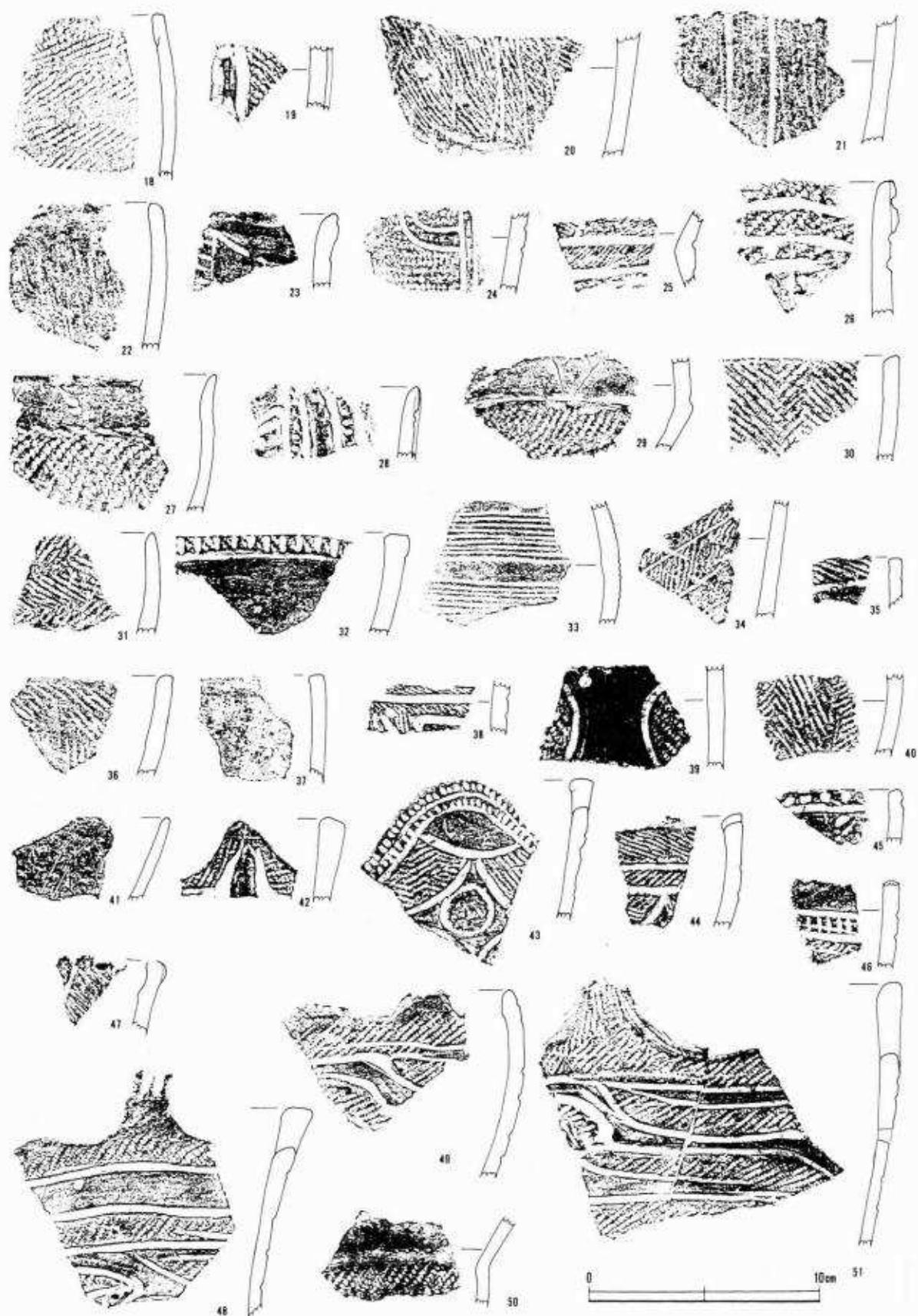
第40図 花泉町白浜貝塚出土土器 (1)

今回の調査では南北両斜面に6箇所のトレンチを設定しているほか、現況地形の測量を行なっている。トレンチを入れた範囲は南北2箇所に分かれ、北側には2・3・5・6Gの4箇所のトレンチが設定されている。2・6Gは斜面の肩の部分に、3・5Gが斜面部分になっている。この内5Gで縄文時代後期の良好な貝層が確認されている。この貝層は斜面の傾斜に沿って水田の下に深く延びており、水田造成の際の貝層の破壊は大きなものではなかった可能性がある。面的にも長軸が12m程度と規模が大きい。北側の他の調査区では貝層は確認されていないが遺物は出土しており、遺物包含層は貝層を中心に含む形で北斜面に大きく広っている。南側では1・4Gの2箇所が設定され、4Gで貝層が確認されている。これらの貝層は規模も小さく残りもあまりよくない。

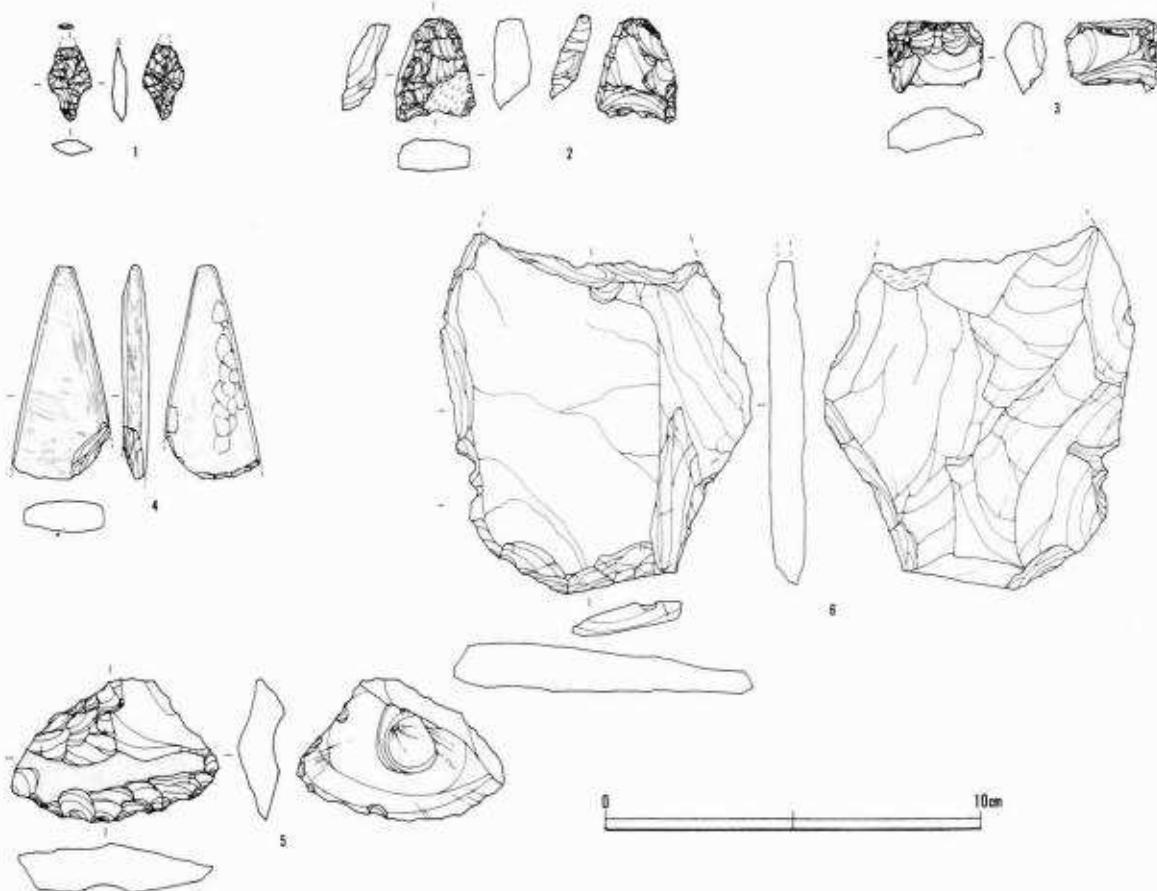
(2) 出土遺物

ア 土器；(第40,41図、第8表)

今回の調査で出土した土器は、小整理箱1箱である。それらのほとんどは貝層が確認された4G



第41図 花泉町白浜貝塚出土土器 (2)



No.	出土地	層位	器種	形材	長	幅	厚	重量	備考
1-3G	表土	石器	破石器	破石器	19.7	10.7	4.4	0.7	先端鋒利
2-2G	表土	貼り面縦縫切片	破石器	破石器	26.8	27.1	3.4	0.11	表面縫隙へ斜形接觸
3-3G	表土	貼り面縦縫切片	破石器	破石器	27.1	25.5	3.7	0.11	表面縫隙へ斜形接觸
4-2G	表土	スクリーナー	破石器	破石器	25.5	17.2	3.2	0.11	前刃直角
5-2G	表土	整削石器	破石器	破石器	25.5	8.3	10.6	0.11	前刃直角
5-1G	表土	石器	破石器	破石器	26.2	11.1	10.7	0.11	刃部不規則

第42図 花泉町白浜貝塚出土石器

及び5 Gで出土しているが、一部3 G遺物包含層中から出土したものもある。土器片の所属時期を明確にできるものは表土中のものを除けば後期前半から中葉のものがほとんどである。

18~37は3 G出土土器である。20~24.28は、縄文後期初頭である。20,21,22は、主に縦方向の撚糸文が地文として施され、その後細い工具によって沈線がひかれる。器面には、胎土に混和される砂粒が浮き出ている。23,28は、口縁部外面に4単位の隆帯縦区画が粘土紐の貼り付けによって行われる。縦の隆带上には、連続する刻みが見られ、さらにその両側には区画に用いられた沈線がそのまま残されることもある。隆帯間は弧状の沈線により連結される。内外面ともよくミガキがなされる。29~33は後期中葉の土器群。短い縄文原体を利用した羽状の意匠が特徴的である。32は、広口壺の口縁部。口縁の肥厚は外面への粘土紐貼り付けによって行われる。ミガキが顕著である。33は壺体部片。多条の沈線が、線間を浮き立たせるように施文される。無文部分はミガキがなされる。35は、晩期初頭か。緩やかな連続する波状口縁の深鉢となる。

4 Gでは、混貝土層の検出面で比較的多量に土器片が出土している。1～5、8は後期前半。1、2、4はやや太い沈線によって区画されて磨消縄文が表現される。3は口縁部外面がミガかれる深鉢。

5 Gでは、貝層の上部・中部・下部それぞれより少量土器片が出土している。出土の位置関係による土器の型式差は明らかではない。いずれも後期中葉加曾利B式期に属する。12は深鉢もしくは鉢の底部で、ケズリが行われたのちミガキ調整がなされるが、ケズリの痕跡を残している。14はやや新しい様相を持つ深鉢。肥厚した口縁となる。42～44、48、49、51に見られるように、5 G表土から出土した土器は、後期末葉の時期のものを含んでいる。

イ 石器；（第42図、第9表）

表土中出土を含め、18点の石器類が出土している。3 G、4 G、5 Gから出土する。二次加工を有している石器は6点である。

石材は頁岩及び黒曜石が小型の剥片石器に多用される。4 G混貝土層検出面上では、黒曜石のみ4点出土している。

1は、有茎の石鏸。2、3は折れ面を有する石器であるが、2は折り面上から連続する調整が加えられる。4は蛇紋岩製の小型の石斧。この地方では一般的な素材である。6は石鏸の一部か。刃部が不明瞭である。粘板岩製。

ウ 動物遺存体等；（第10表）

白浜貝塚では南北2箇所の貝層があり、5 G、4 Gで貝層が検出されている。貝層自体は掘り下げていないが、5 Gではビニール袋で2袋サンプリングし、5 mmと1 mmの水洗フルイにかけている。フルイ後の重量と分析対象とした量は表のとおりである。4 Gでも表土等から若干の動物遺存体が

第8表 花泉町白浜貝塚出土土器集計表

4 G 混貝土層検出面														
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 前葉		3	1					4						
不明	2	2					19	30	2					
時期	5 G 貝層上面													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉		1	1											1
不明								1	1					
時期	5 G 貝層最上部													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉										1				
不明		1						6						
時期	5 G 貝層上部													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉		1												
不明								1	1					
時期	5 G 貝層下部													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉			1						1					
不明														
時期	5 G 貝層底													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉				1					1					
不明														
時期	5 G 貝層中													
時期	口縁部	20～	50～	100～	200～	体部	20～	50～	100～	200～	底部	20～	50～	100～
後期 中葉			1						1					
不明										1				

第9表 花泉町白浜貝塚出土石器集計表

	青 岩	ギヨクスイ	黒曜石	粘板岩	凝灰岩	破 岩	チャート	安山岩	珪質頁岩	流紋岩	不明・その他
3G表土	1	2			1						
4G表土			1	2							
4G混貝土層検出面					4						
5G表土		4									
5G貝層最上部					1						
5G貝層中	1										

確認されている。

4 G の貝層は北側にくらべ規模が小さく、貝や骨類の混入の割合も低い。イシガイやイノシシなどが出土している。

5 G の貝層は南側にくらべ規模が大きく骨や貝類が多く含まれている。水田造成による破壊が一部に見られるが、かなりの部分が破壊から免れたと思われる。貝層は遺跡の北側の斜面から水田の下にもぐってさらに数m延びており、厚さも斜面に直交して数十cm程度は少なくとも見込まれる。貝層の主体となっている貝はオオタニシ、イシガイ、スマガイで、特にオオタニシが多い。魚類は比較的少ないが、フナ属、キバチ、ウナギ、ドジョウ科などが出土している。種まで確認できた部位から見て表中でコイ科としたものの多くはフナ属と推定される。

その他には哺乳類でイノシシの側頭骨鼓室部が出土している。

第10表 花泉町白浜貝塚出土動物遺存体一覧

5 mmメッシュ

哺乳類

層位／種名	シカ	イノシシ	層位／種名	フナ属	ウナギ	不明
4G表土		中手骨1	4G		尾椎1	
5G		頭頂骨鼓室部 右1	5G	1. 第一椎骨 1		

二枚貝

巻貝

層位／種名	スマガイ	イシガイ	層位／種名	オオタニシ
4G表土		破片	5G	12
5G	破片	左3		

1 mmメッシュ

巻貝

層位／種名	オオタニシ	マメタニシ	カワニナ	ホホカワニナ	テマガイ科	陸系貝類
5G	12					

魚類

層位／種名	フナ属	コイ科	キバチ	ドジョウ科	不明
5G	角骨左1, 5. 尾椎4		尾椎1	腹椎1	腹椎1

分析量

(g)

層位／種名	5 mmメッシュ	分析量	1 mmメッシュ	分析量
4G	—	—	—	—
5G	102.4	102.4	402.2	70.4

5 石崎貝塚

調査期日：平成8年11月29～12月1日

所在地：西磐井郡花泉町永井字鴻ノ巣地内

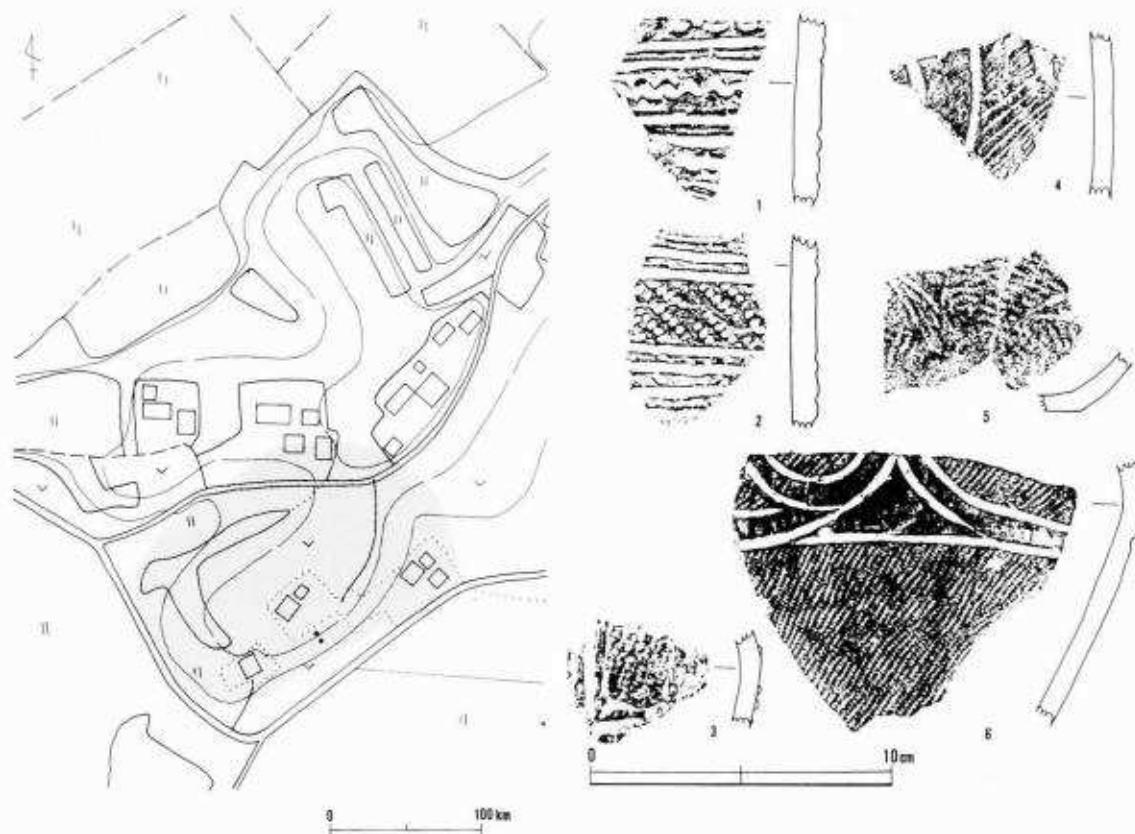
(1)概要

石崎貝塚は、花泉町の南部にあり、宮城県との境になっている夏川によって形成された沖積地に張り出した舌状の台地上に立地している。遺跡の現況は畠・宅地などになっており一部は削平され、水田が造成されている。遺跡の標高は15m前後である。

今回の調査では東側斜面にある宅地前の小さな畠に試掘坑を2箇所設定している。この畠に遺物が散布しておりこの斜面に遺物包含層が形成されている。調査の結果、縄文中期の土器等が出土しているが、明瞭な貝層はこの場所では確認されず、動物遺存体も出土していない。

(2)出土遺物

土器：全体で10点余り出土した。いずれも擾乱土層中からのものである。1～3は縄文中期中葉。1、2は黄褐色を呈し、内面ミガキ調整の土器。縄文施文後に、沈線により意匠が描かれる。3は深鉢の口縁部外面。縄文施文後、沈線で区画され、細い粘土紐が貼り付けられる。4、5は後期の土器。5は底部径の小さい土器で壺と考えられる。6は晩期初頭の壺。外面の無文部及び内面はミガキが行われる。縄文施文後、沈線で区画する。



第43図 花泉町石崎貝塚平面図及び出土土器

6 堀内机遺跡

調査期日：平成9年9月27～28日

所在地：下閉伊郡普代村堀内机地内

(1)概要

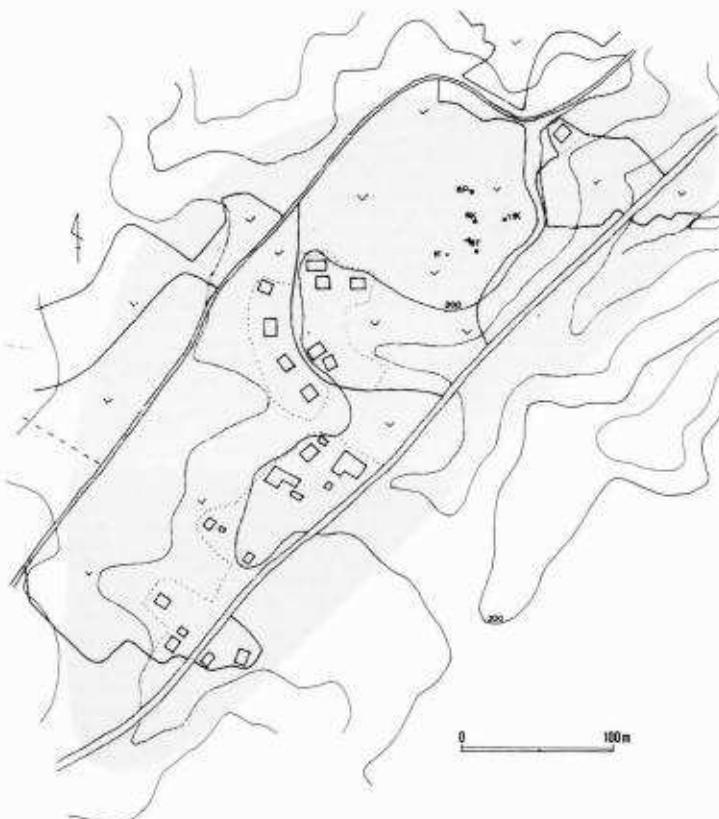
遺跡は太平洋に面した海岸段丘上に立地する。現海岸線から約3kmの距離にある。西側北上山系から太平洋に注ぐ中小の河川は、この付近の海岸段丘を深く開析し、舌状もしくは尾根状の張り出しを形成している。海岸線に沿って国道45号が南北に走るが、それより西側に向けて段丘斜面をほぼ登り切ったところに遺跡が所在する。標高は約200m。すぐ北側の谷は安家川が流れ、その対岸は野田村である。この地理的条件などから、行政区上は下閉伊郡であるが、普代村については九戸地区の貝塚調査員が担当している。

この遺跡で貝層の所在が報告されたのは、10年ほど前である（文献320）。この中で、報告者はチヂミボラ、レイシ、ユキノカサガイ、ハマグリ、ウバガイ、クボガイ、マガキ等について写真とともに紹介している。この資料を元に佐々木・千葉両調査員が現地踏査を重ねた。しかしながら、表面調査においては貝層の分布を確認することができず、貝塚としての認定に課題を残すこととなった。

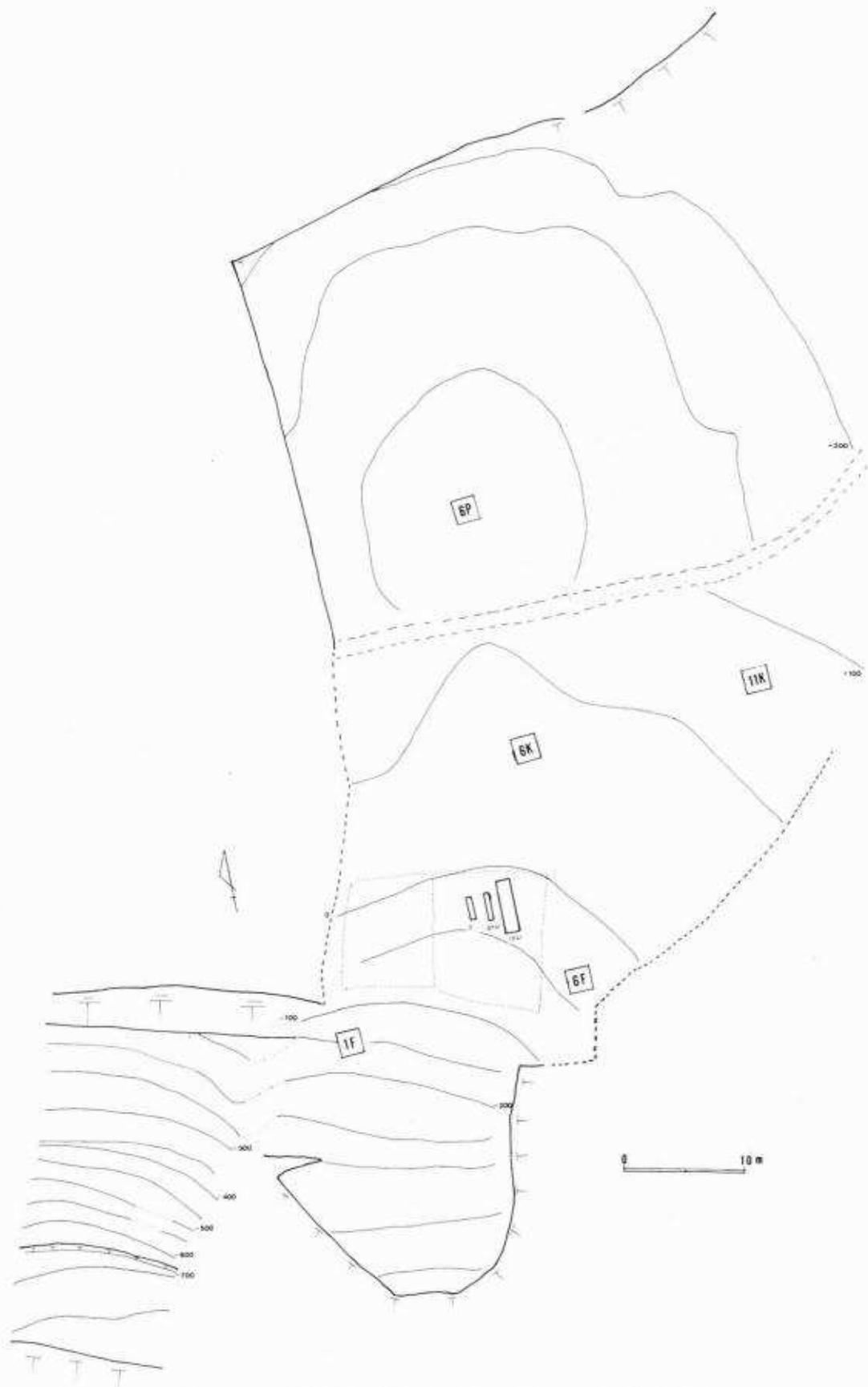
同時に、3カ年間の内容確認調査において、北部陸中海岸地域における合同調査を行っていなかったこと、また、久慈市二子貝塚や野田村根井貝塚などを除き、九戸方面の縄文時代貝塚の実態が不明確であることなどから、平成9年度において野外合同調査の対象とした。

遺跡の所在する海岸段丘は、約200mの幅を持ち400mの長さを持って北東方向に向かっている。南東側斜面から沢筋にかけては宅地化が進行し、遺跡の遺存状況は良くないものと推定される。また、最上部の平坦地についても畑地造成により多少地形が改変されている。さらに、遺跡を縦断する農道が最近改良されている。

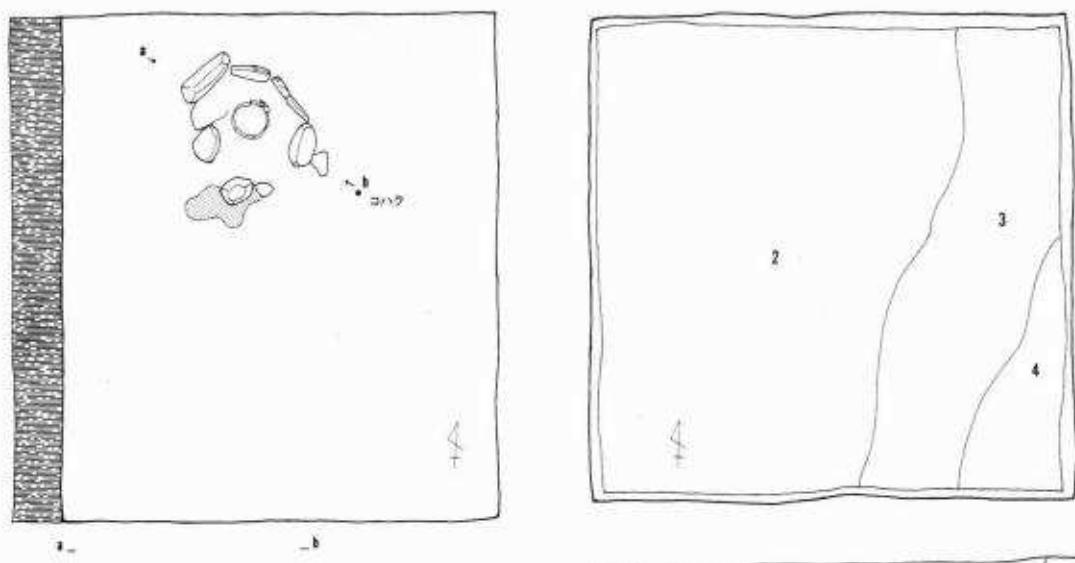
遺跡全体の表面踏査の結果、最も遺物が集中して採集できるのは、南東斜面側の畑地である。この付近では傾斜がやや急であることから表土の流出が進み、包含層等が露出して遺物が多量に散布している。また、この上部平坦地は牧草地及び畑地として利用されている。畑地部分では遺物が採集できるものの、量的には斜面ほどではない。牧草地は重機等により造成されたと考えられ、平坦地の北東隅には、1mをこえる段差が形成されている。この付近のほか、



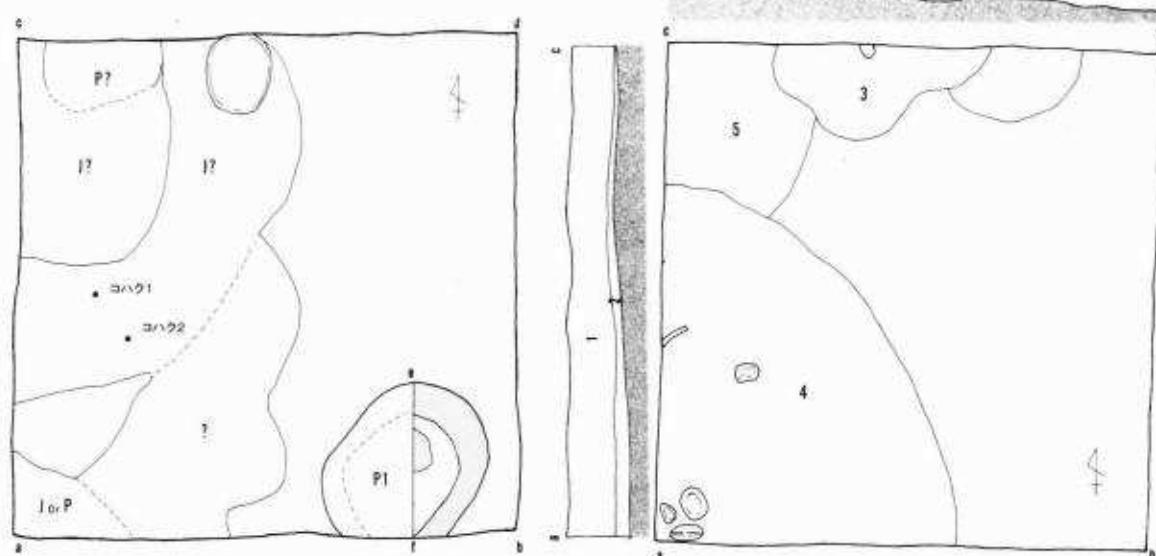
第44図 普代村堀内机遺跡周辺地形図



第45図 普代村堀内遺跡発掘区位置図及び地形測量図



6 K グリッド(上)、1 F グリッド(右上)



6 F グリッド(上)、11 K グリッド(右上)

第46図 普代村堀内机遺跡遺構等検出状況及び層序断面図 (1)

南西側に位置する神社付近でも集中して遺物が採集できるが、地点ごとの時期差等については検討が十分になされていない。

合同調査では、試掘の対象を北東側牧草地及び畑地の平坦な部分とした。さらに、地形の改変状況を伺うため、平板による地形測量を実施している。

牧草地に2m四方の試掘グリッドを5箇所設定した。そのうち1箇所（6P）は、中央を南西→北東方向に走る地境の植採の北側に設定した。

南東部斜面に最も近く設定した1Fグリッドでは、縄文前期前半から中葉にかけての土器群が1~3層に分層された遺物包含層より出土する。表土はほとんど流出し、上位の包含層が徐々に腐食が進み、新たな表土として形成されようとしている。旧地形は現地形同様に西側に向かって傾斜し、包含層もその傾斜にしたがって堆積している。

1Fグリッドより東側20mに設定した6Fグリッドでは、表土下に遺物包含層もしくは遺構埋土と考えられる焼土粒・炭化物粒を多量に含むやや腐食の進んだローム質の層が確認された（2層）。遺構埋土と考えた場合には、少なくとも3基以上の住居跡もしくは土坑の重複としてとらえる必要がある。この層中で、縄文前期及び中期の土器片等、コハクが2点が出土している。また、地山面では長径60cm程度の楕円の土坑が1基検出され、半蔵を行った。壁面が焼けて赤化し、焼土状を呈する。埋土は単層であるが、焼土・炭化物粒を多量に含んでいる。竪穴住居跡に伴う炉跡と考えることも可能である。同じ面で、偏平な河原石を検出した。

6Fグリッドの20m北側に6Kグリッドを設定した。この調査区では、表土を除去したところ長軸60cm程度、短軸50cm程度の石組炉が検出された。その中央部には口径15cm前後の深鉢が、ごく小さな掘り込みで埋設されている。炉跡検出面がほぼ住居跡床面と考えられるが、付近でコハクが1点出土したものの、貼り床や柱穴など付属する施設については確認できなかった。出土土器から、縄文前期後葉と考えられる。

その東側20m地点に11Kグリッドを設定した。この調査区では、遺物包含層が表土下に斜面に流れるように地山上で確認されている。この包含層は最低3層あり、北側壁面に沿って85cmの長さで確認された層は炭化物及び粘土ブロックを含んでいる。また、南東隅で確認されたより広い包含層は、炭化物を比較的多量に含み、親指大の粘土ブロックを混じている。これらの層はいずれもごく浅いものであることから、調査の段階では遺構とは考えなかった。ただし、遺構検出面がかなりの程度削平されているような場合では、遺構の最下部を調査した可能性も有している。このほか、この調査区では、風化した花崗岩礫がやや多く見られた。包含層の時期は、前期後葉と考えられる。

6Kグリッドの北側20m地点に6Pグリッドを設定した。この調査区では表土が厚く、遺物包含層もしくは遺構面まで約30cmの深さがある。この面では少なくとも3基の遺構が重複していると考えられる（P1, 2, 3）。西側をさらに10cmほど掘り下げ、遺構の平面を十分に確認するよう努めた。その結果、P2とした土坑状の遺構は、まもなく床面となり地山が確認された。P1については竪穴住居跡の可能性もある。これらの遺構埋土中より、縄文中期前半から中葉の土器片が出土している。

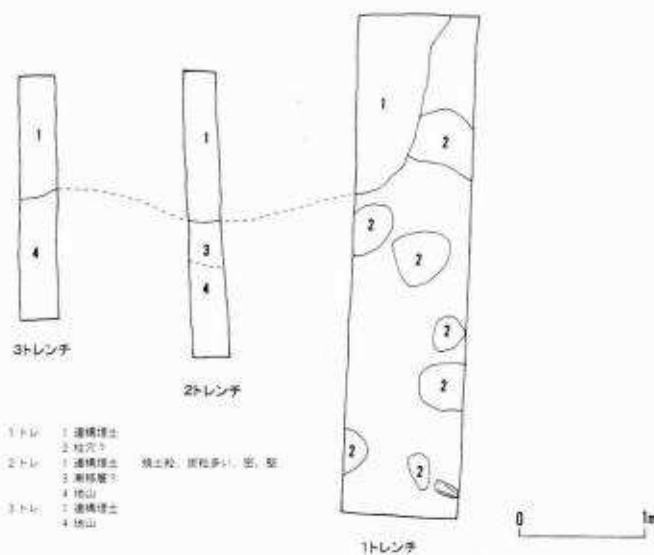
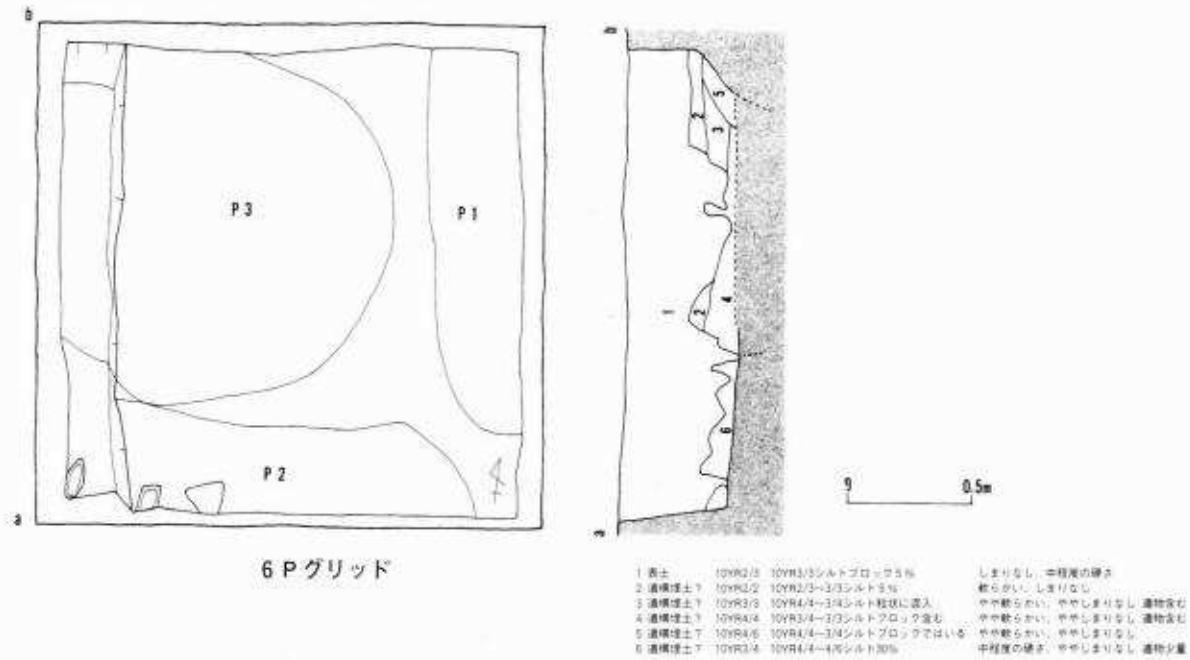
これらのグリッドのほか、6Fグリッドと6Kグリッドの中間付近に、任意に1~3のトレンチを設定し、遺構の確認を行った。これらのトレンチでは6Fグリッド同様に遺構が複雑に重複している状況が観察され、1トレンチでは、竪穴住居跡に伴う可能性の高い柱穴列を確認している。さらに、焼土粒・炭化物粒を含む層が地山上面で広く検出されていることから、遺構数は増加するものと考えられる。

以上の今回の試掘調査においては、この遺跡（北東側平坦部）が縄文前期前半から中期中葉ごろまで大規模に形成され続けたことが明らかとなった。しかし、当初目的とした貝層の有無については、不明確なまま課題として残される結果となった。

（2）出土遺物

ア 土器：（第49、50図、表9）

出土した土器は、全体で整理箱3箱である。この中には、表面採集で得られた資料も含まれてい

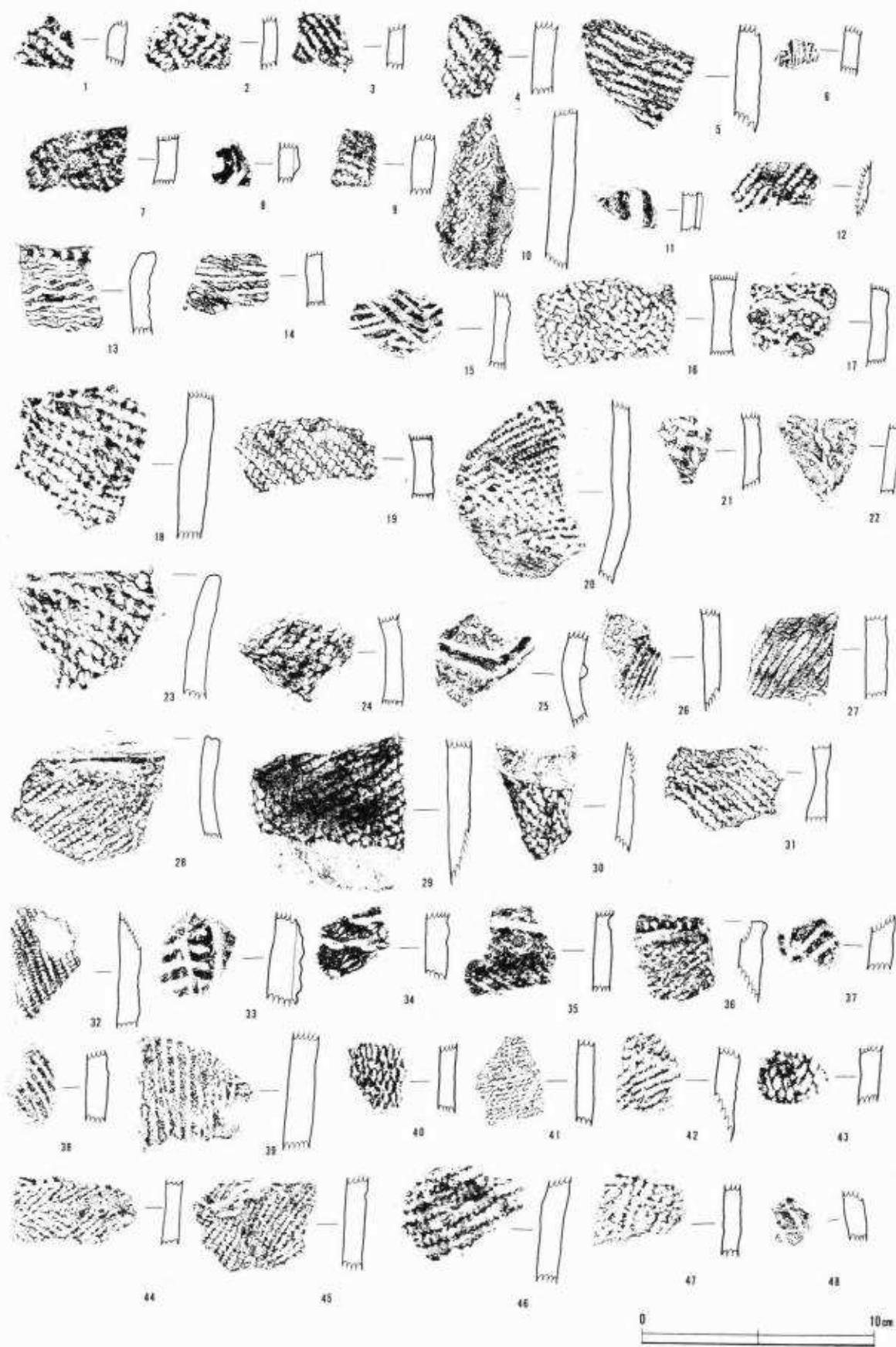


第47図 普代村堀内機遺跡遺構等検出状況及び層序断面図（2）

る。13-32は、1Fより出土している。13,14は口縁部外面に不整燃系文が施文される。胎土中に植物繊維が少量含まれる。25は、前期中葉。縄文施文の上に、粘土紐が貼り付けられている。33-48は6F出土。49-51は6K出土。52-54は6P2層。55-58は11K。以下は、表面採集等。68-73のような円筒上層系土器群に加え、75,76のような大木系の土器群が出土する。81,82は晩期の土器片。

イ 石器：（第51,52図、表10）

表面採集資料を除いた石器の出土数は80点である。このうち、17点には二次加工が認められる。さらに、表面採集により10点の二次加工を持つ石器を得ている。

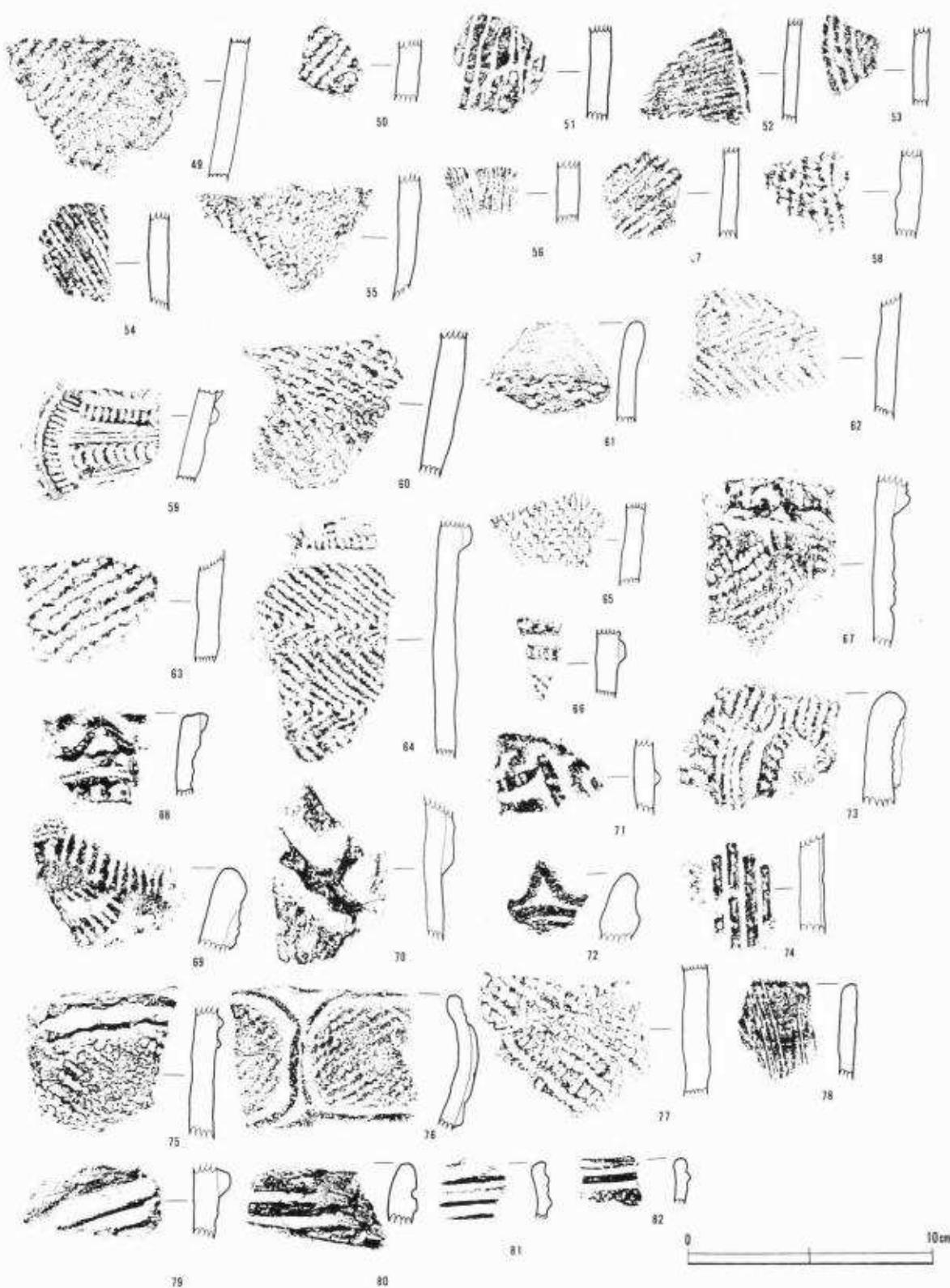


第48図 普代村堀内机遺跡出土土器 (1)

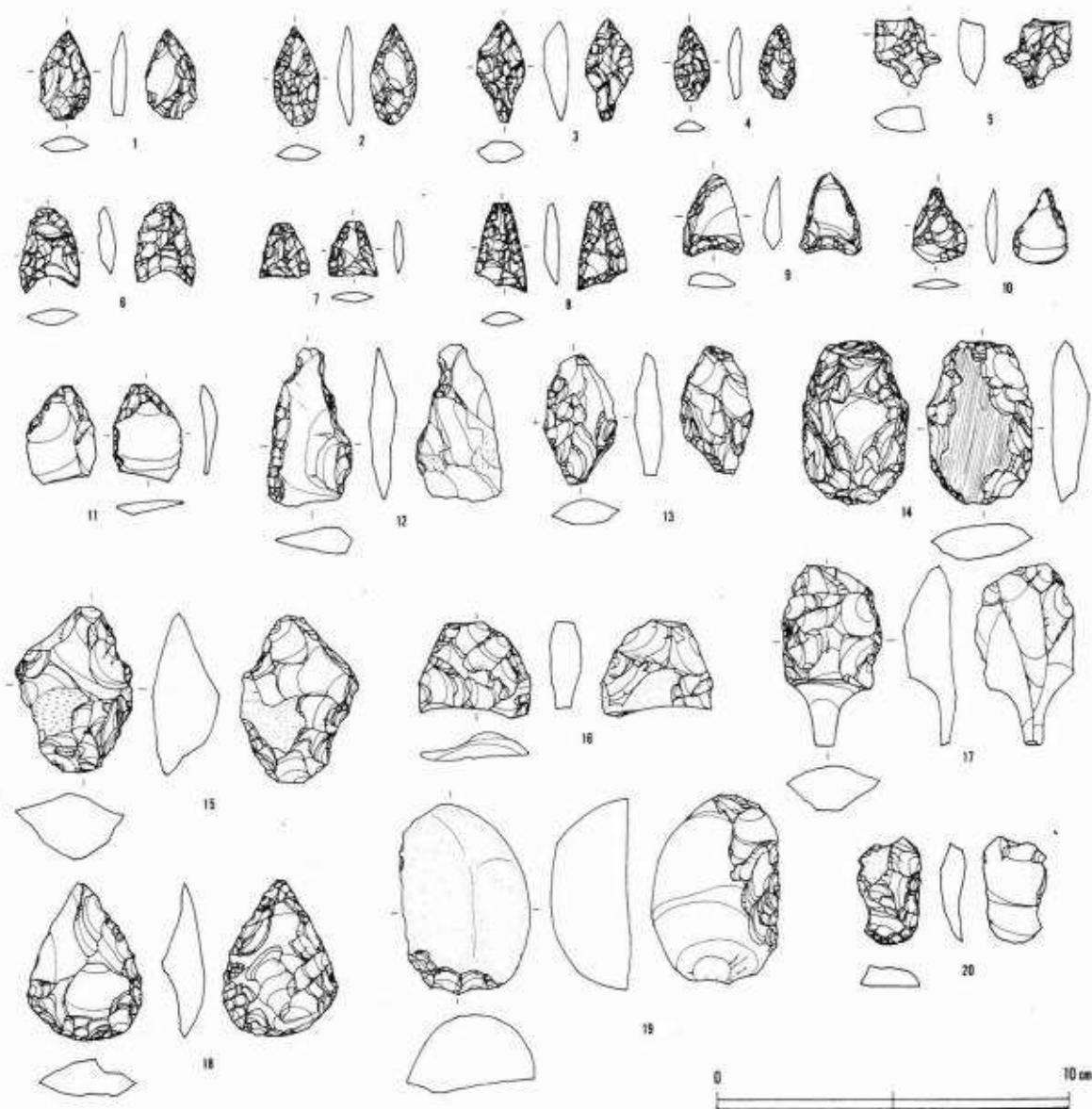
No.	地区	層位	器種	口部	口縁部外側	縁部	体部上半	体部下半	底部付近	底部	内面	外面色調	内面色調	備考
1	1号住居跡	埋土	深鉢			RL?				?	明褐色	暗黃褐色		
2	1号住居跡	埋土	深鉢			LR多条?				N	赤褐色	暗褐色	胎土織維	
3	1号住居跡	埋土	深鉢			LR				?	暗褐色	褐色		
4	1号住居跡	埋土	深鉢						RL多条?	N	明褐色	暗褐色	胎土織維	
5	1号住居跡	床面直上	深鉢			RL				M?	暗黃褐色	明褐色		
6	1号住居跡	床面直上	深鉢			R				M	暗赤褐色	暗赤褐色		
7	6P	2P埋土	深鉢					?		?	暗黃褐色	暗黃褐色		
8	6P	3P埋土	深鉢			C/H				M	黃褐色	明褐色		
9	6P	3P埋土	深鉢			RL?				?	暗黃褐色	暗黃褐色		
10	6F	焼土P	深鉢			RL?				M?	暗黃褐色	暗褐色		
11	6F	3P埋土	深鉢			C/H				?	暗黃褐色	明褐色		
12	6P	3P埋土	深鉢			RL				剥落	暗黃褐色			

第11表 普代村堀内機遺跡出土土器集計表

1 F																
時期	1 F															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 前・中葉			4	2				15	74	17				4	2	
不明																
時期	6 F															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 前・中葉	1	4	1					1	14	6						
中期 前葉	1	1						1	1							
中期 中葉		2							1							
不明								67	137					1	4	2
時期	6 F 焼土P															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 後葉										1						
不明																
時期	6 K 埋土															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 葦・中葉								8	19	2					1	
不明																
時期	1号住居6床面直上															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 葦・中葉								20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
不明																
時期	1号住居埋土															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 後葉								20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
不明																
時期	6 P 2号															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
中期 中葉								20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
不明																
時期	6 P 1号															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
100~	不明									3						
時期	6 PZP															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
中期 前葉								20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
不明														1		
時期	6 P 3P															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
中期 中葉								20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
不明																
時期	11K 1層															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 前・中葉	1								9	1						
前期 後葉									1	1						
不明									3	19	1			1	1	
時期	11K 2層															
	口縁部	~20	20~	50~	100~	200~	体部	-20	20~	50~	100~	200~	-20	20~	50~	100~
前期 後葉	1								9	14	7					
中期 前葉	1									1						
不明																

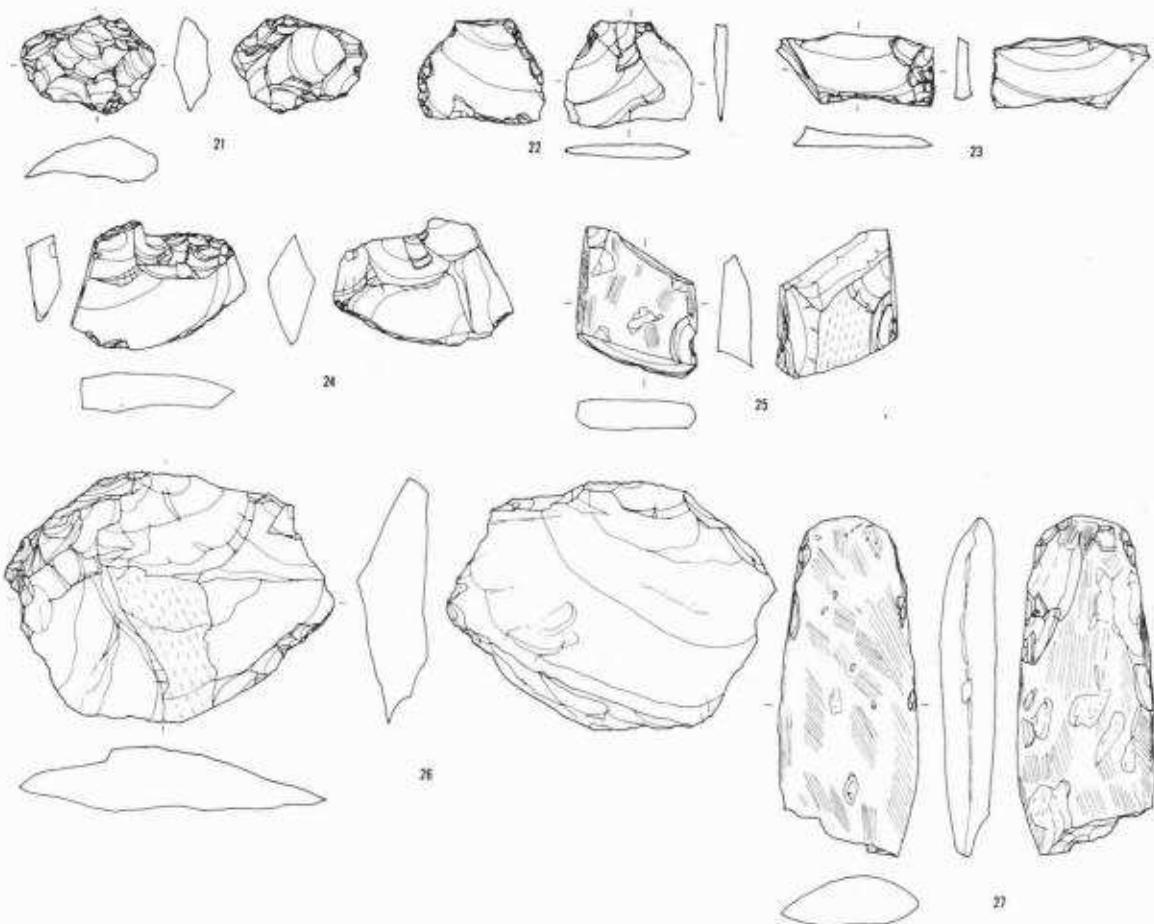


第49図 普代村堀内机遺跡出土土器 (2)



No.	出土区	層位	器種	地村	地	幅	厚	重量	備考
1	B-P-3 PH	埋土	石鏟	西前	24.6	14.2	4.2	1.7	墨軒丸
2	G93-03	表保	石鏟	西前	25.4	13.2	4.7	1.7	
3	G93-04	表保	石鏟	西前	25.6	13.0	6.1	2.2	
4	B-F	石鏟	石鏟	佐賀森川	25.8	10.8	3.8	0.2	墨軒丸
5	B-F	石鏟	石鏟	西前	17.2	10.2	2.5	2.3	打丸
6	G93-05	表保	石鏟	チード	25	16.2	3.4	1.8	毛邊壓凹形
7	G93-05	表保	石鏟	西前	25.2	16.2	3.7	1.7	毛邊壓凹形
8	G93-05	表保	石鏟	西前	24.2	16.7	3.7	1.7	毛邊壓凹形
9	K11	二の段	石鏟	チード	25.2	16.4	4.2	1.7	
10	G93-06	表保	石鏟	西前	25.6	15.2	2.8	0.7	
11	G93-06	表保	石鏟	西前	29	19.6	4.8	0.2	光面研丸
12	K11	2層	石鏟	西前	44.6	23.9	8.1	6.0	
13	I-F	上地層	石鏟	西前	35.7	20.6	7.3	5.4	
14	I-F	上地層	石鏟	西前	45.5	31	15.4	17.5	
15	I-F	上地層	石鏟	西前	47	33.2	15.3	24.4	
16	G93-06	表保	石鏟?	西前	26	21.8	5.3	8.5	
17	G93-06	表保	石鏟?	西前	52	28.7	13.6	16.6	削り留め
18	I-F	上地層	石鏟	西前	44.5	33	12.9	16.2	
19	I-F	上地層石器?	石鏟	西前	53.4	35.8	21.4	50.1	
20	I-F	上地層	石鏟?	西前	30.7	18.2	3	5.2	

第50図 普代村堀内机遺跡出土石器 (1)



No.	主生区	層位	器種	石材	長	幅	厚	重量	備考
20	ヒニス・スクエア		石刀	頁岩	25.6	5.8	11.2	3.2	
21	6P	6P-1層	細長刮削器	頁岩	27.5	34.3	2.5	4.3	打削面持利
22	6P	6P-1層	細長刮削器	頁岩	18.7	42.6	2.7	4.6	西端折れ
23	6P	6P-1層	刮削器	頁岩	35.6	45.2	7.6	20	
24	6P	6P-1層	刮削器	頁岩	30.0	41.2	9.6	17.9	
25	6P	6P-1層	刮削器	頁岩	38.0	58.2	20	101.4	
26	6P	6P-1層	石刀	頁岩	30.0	36.5	15	75.0	

第51図 普代村堀内机遺跡出土石器 (2)

第12表 普代村堀内机遺跡出土石器集計表

	頁岩	キヨクズイ	黒曜石	粘板岩	凝灰岩	砂岩	チャート	安山岩	珪質頁岩	花崗岩	不明・その他
1F	6								1		
6F	31	1				1		2	1	5	6
6K	5					1					
6P-1層	1									1	
6P-2層	4					1		1			1
6P-3層	1										
6P-2P	1										
K11-1層	3							1			1
堅穴住居跡	4										

石材は頁岩、珪質頁岩が主で、小型の剥片石器の素材となっている。わずかにチャートや安山岩系の石材も認められる。

特徴的な石器のみ略述する。12は石匙であるが、ノッチが不十分でつまみ部がわずかに認められる。刃部も一側縁のみである。14は小型の石窓状の石器である。片面に原礫面を残すが、研磨されている。19は、打割した小型の礫を素材とした削器もしくは石核。26は、盤状の剥片の端部に、不連続な細部調整を行っている。



1 粕沢貝塚貝塚近景（東から）



2 粕沢貝塚貝塚近景（南から）



3 1グリッド北壁断面



4 2グリッド北壁断面



5 3グリッド北壁断面



6 4グリッド北壁断面



7 5グリッド北壁断面

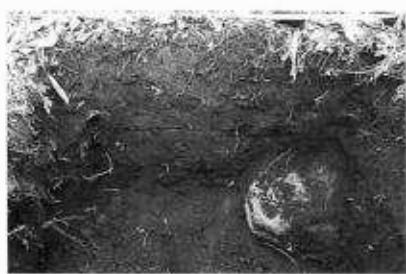


8 6グリッド北壁断面



9 7グリッド北壁断面

写真図版 1 陸前高田市粕沢貝塚調査状況



10 9 グリッド北壁断面



11 10 グリッド北壁断面



12 9 グリッド調査風景



13 6 グリッド動物骨出土状況



14 大陽台貝塚近景（南から）



15 大陽台貝塚近景（北から）



16 地形測量作業風景



17 昭和51年度調査区（北から）

写真図版2 陸前高田市鰯沢貝塚（上）、大陽台貝塚（下）調査状況



18 高倉貝塚遠景（北から）



19 高倉貝塚近景（南から）



20 高倉貝塚近景



21 B地点調査風景



22 B地点1 G貝層4検出状況



23 B地点1 G貝層4検出状況（近景）



24 B地点1 G貝層12検出状況



25 B地点1 G貝層12検出状況（近景）

写真図版 3 花泉町高倉貝塚調査状況



26 高倉貝塚B地点3 G断面（西から）



27 高倉貝塚B地点7 G断面（西から）



28 高倉貝塚B地点Gトレンチ断面（西から）



29 白浜貝塚遠景（南から）



30 白浜貝塚近景



31 白浜貝塚No. 4 グリッド全景



32 白浜貝塚No. 4 グリッド南壁断面

写真図版4 花泉町高倉貝塚（上）、白浜貝塚（下）調査状況



33 No. 5 トレンチ作業風景



34 No. 5 トレンチ作業風景



35 No. 5 トレンチ断面



36 No. 5 トレンチ動物骨出土状況



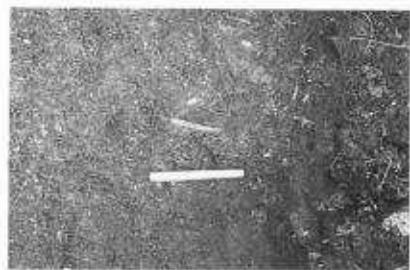
37 No. 3 トレンチ断面



38 No. 3 トレンチ調査状況（北から）



39 No. 5 トレンチ西壁断面



40 No. 5 トレンチ動物骨出土状況

写真図版 5 花泉町白浜貝塚調査状況



41 遺跡遠景



42 遺跡近景・調査風景



43 1号住居跡検出状況（6Kグリッド）



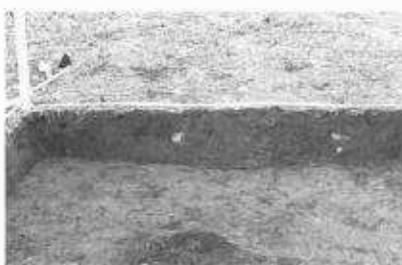
44 1号住居跡炉跡検出状況（上から）



45 1号住居跡炉跡検出状況（西から）



46 1Fグリッド表土除去遺構検出状況



47 1Fグリッド断面（西から）



48 6Fグリッド表土除去遺構検出状況

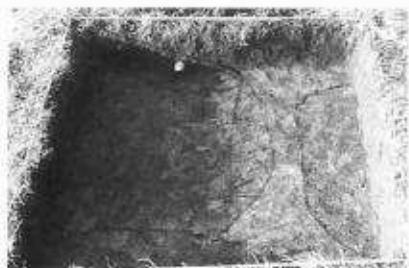


49 6Fグリッド内土坑埋土断面

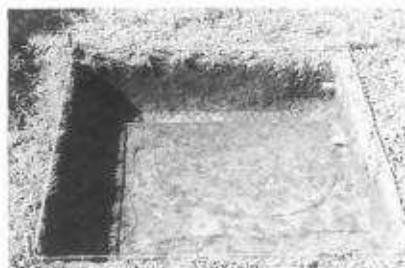


50 11Kグリッド表土除去遺構検出状況

写真図版 6 普代村堀内机遺跡調査状況



51 6Pグリッド表土除去遺構検出状況（南から）

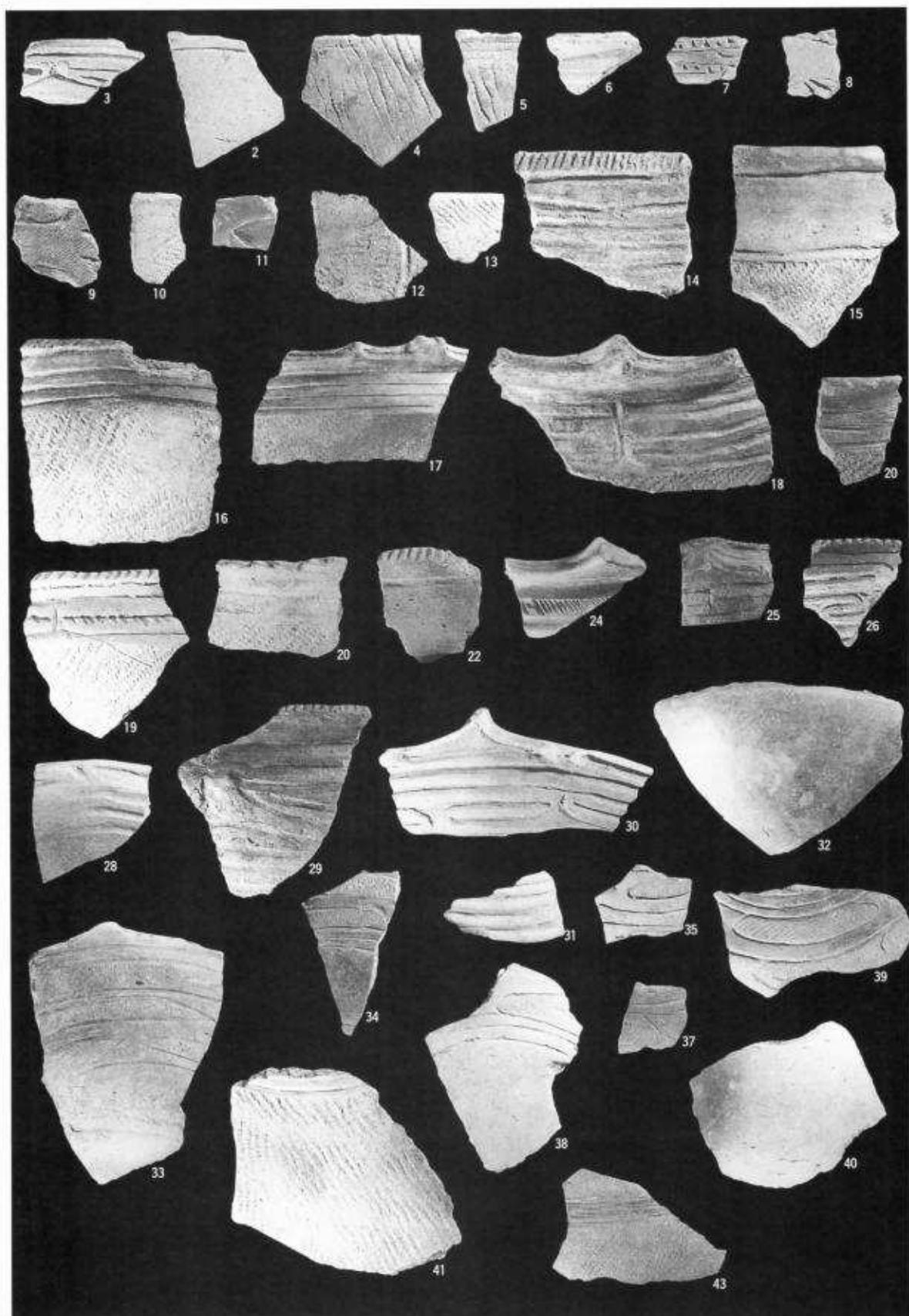


52 6Pグリッド表土除去遺構検出状況（東から）



53 1トレンチ表土除去遺構検出状況（南から）

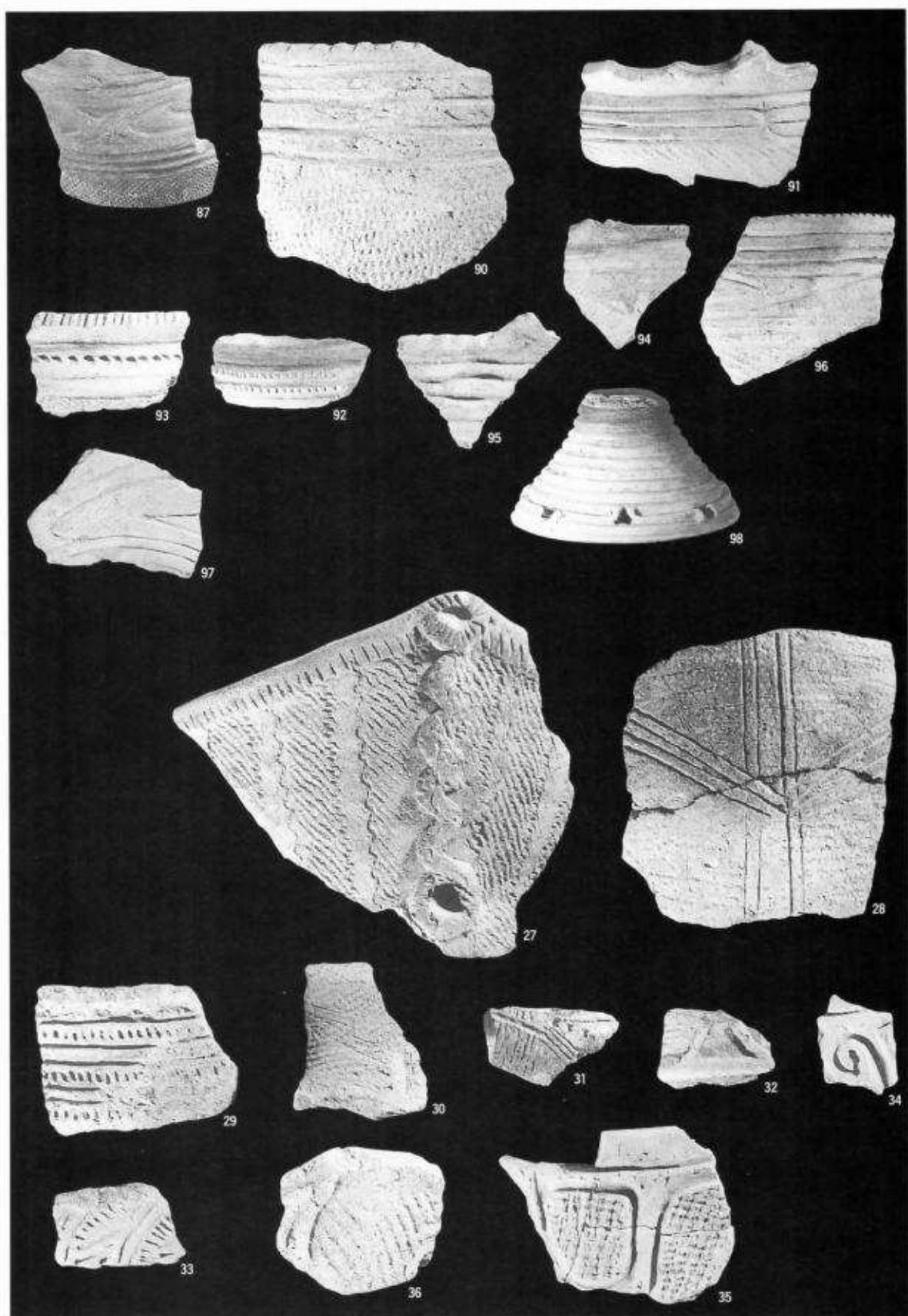
写真図版7 普代村堀内机遺跡調査状況（2）



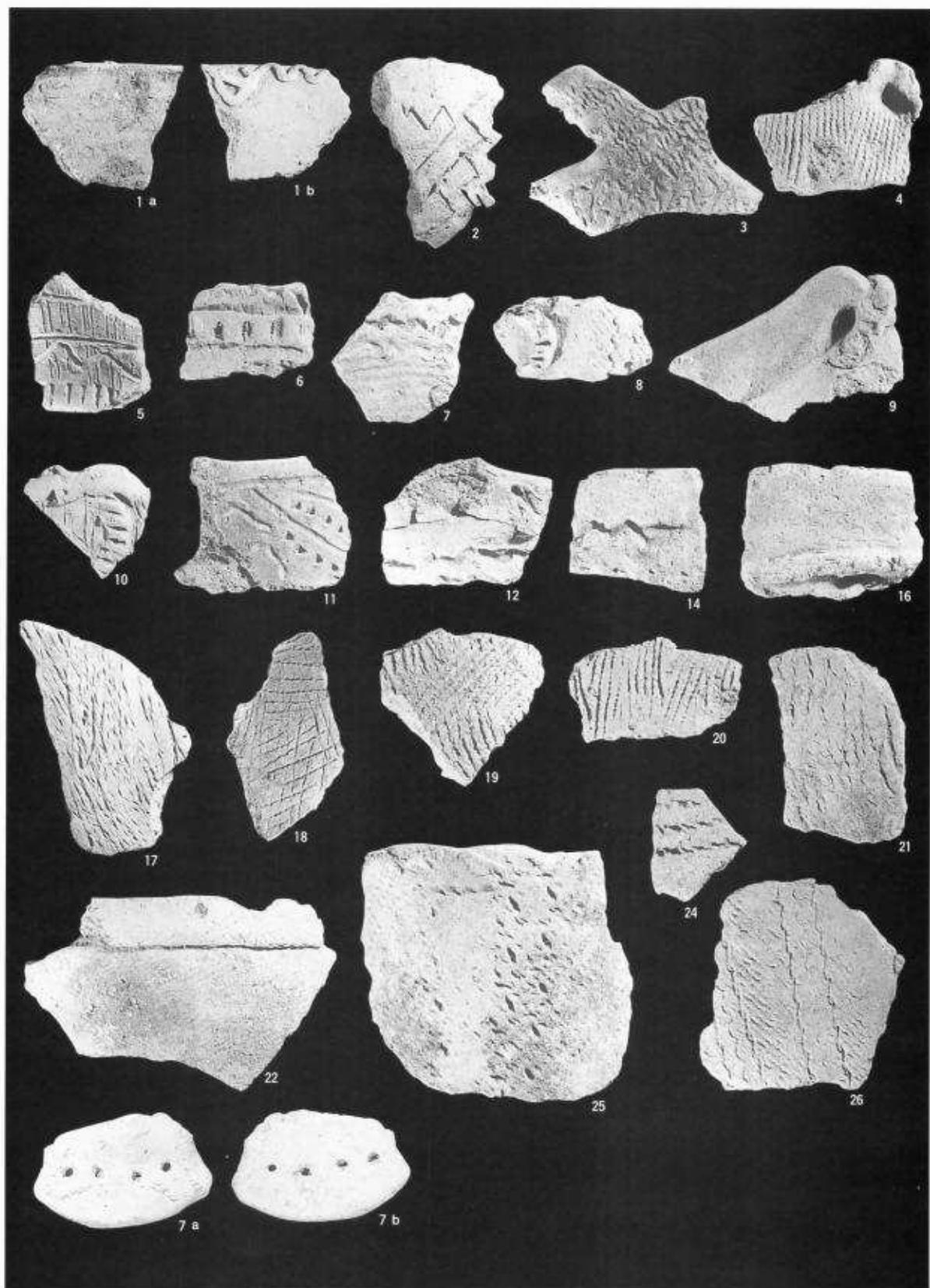
写真図版 8 陸前高田市鰺沢貝塚出土土器 (1)



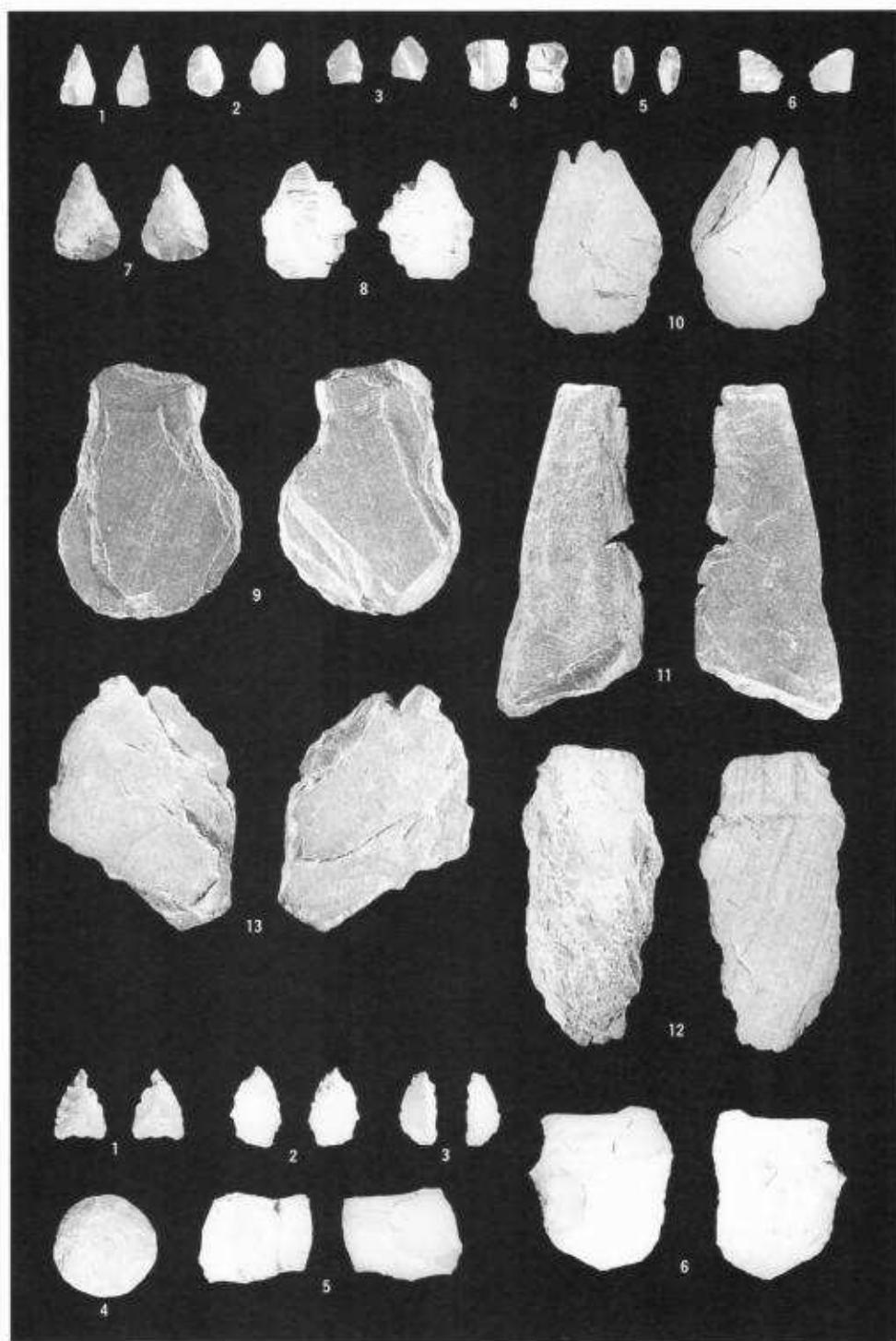
写真図版 9 陸前高田市糸沢貝塚出土土器（2）



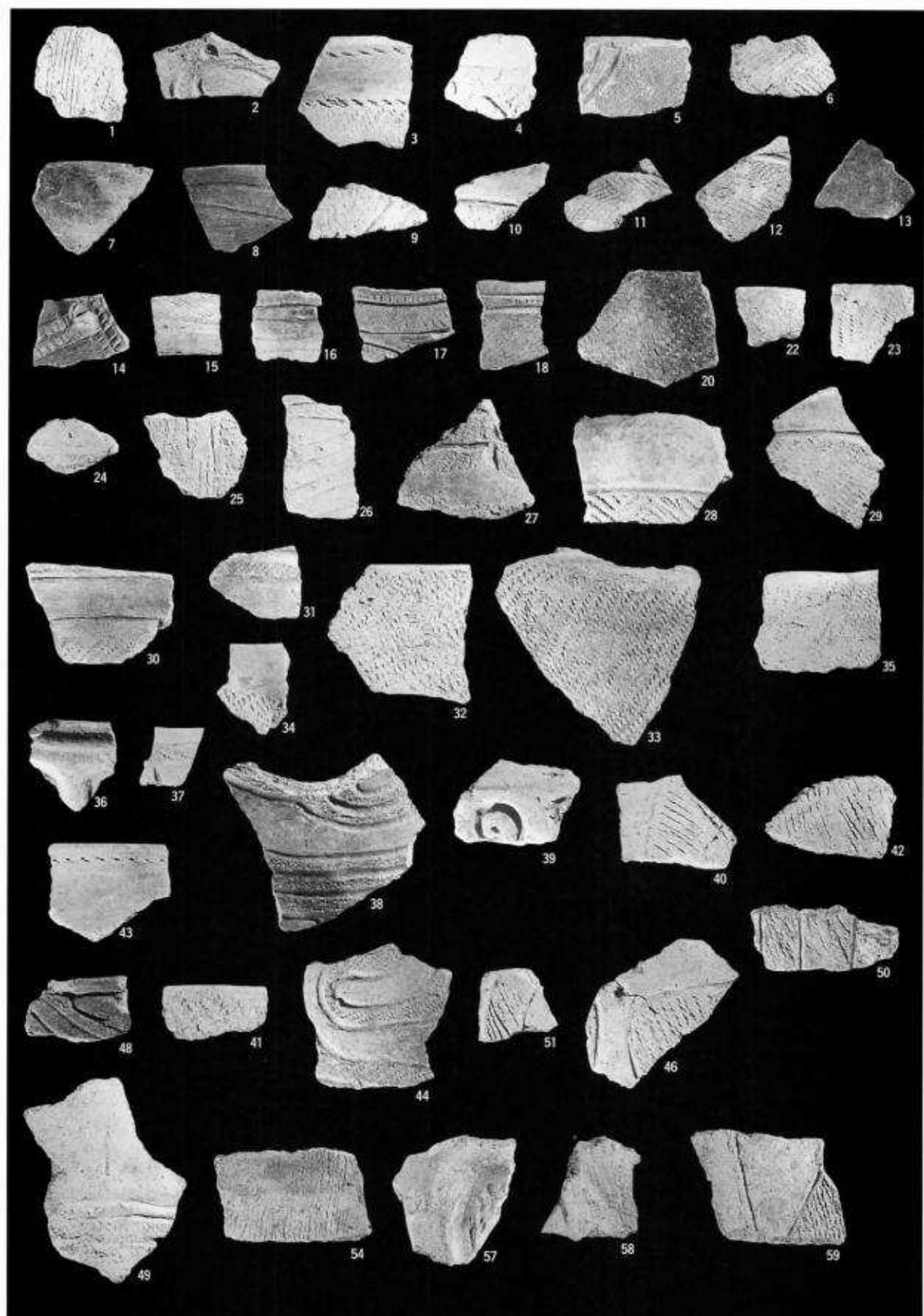
写真図版10 陸前高田市糀沢貝塚出土土器（3）（上）、同市大陽台貝塚出土土器（下）



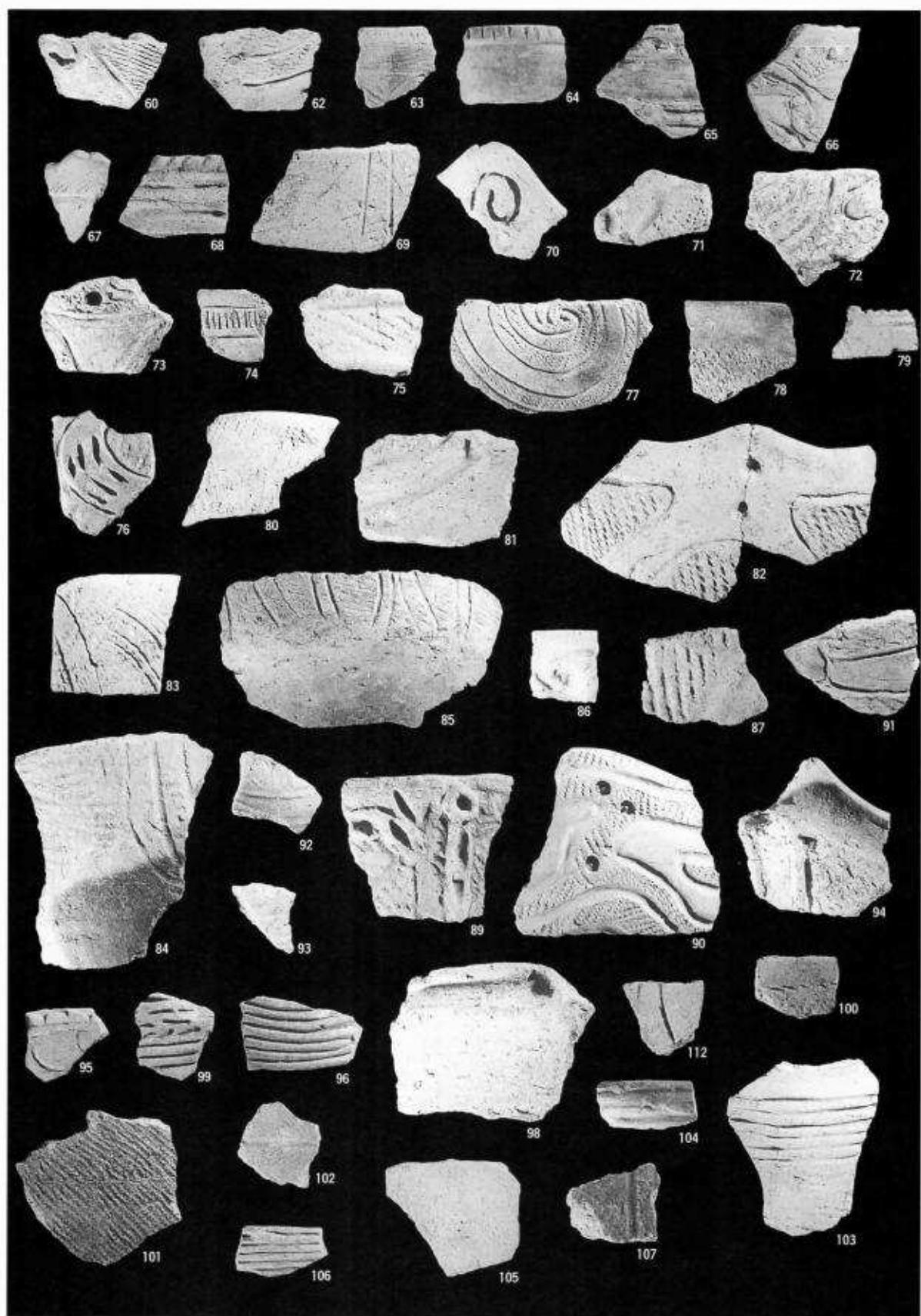
写真図版11 陸前高田市大陽台貝塚出土土器（2）



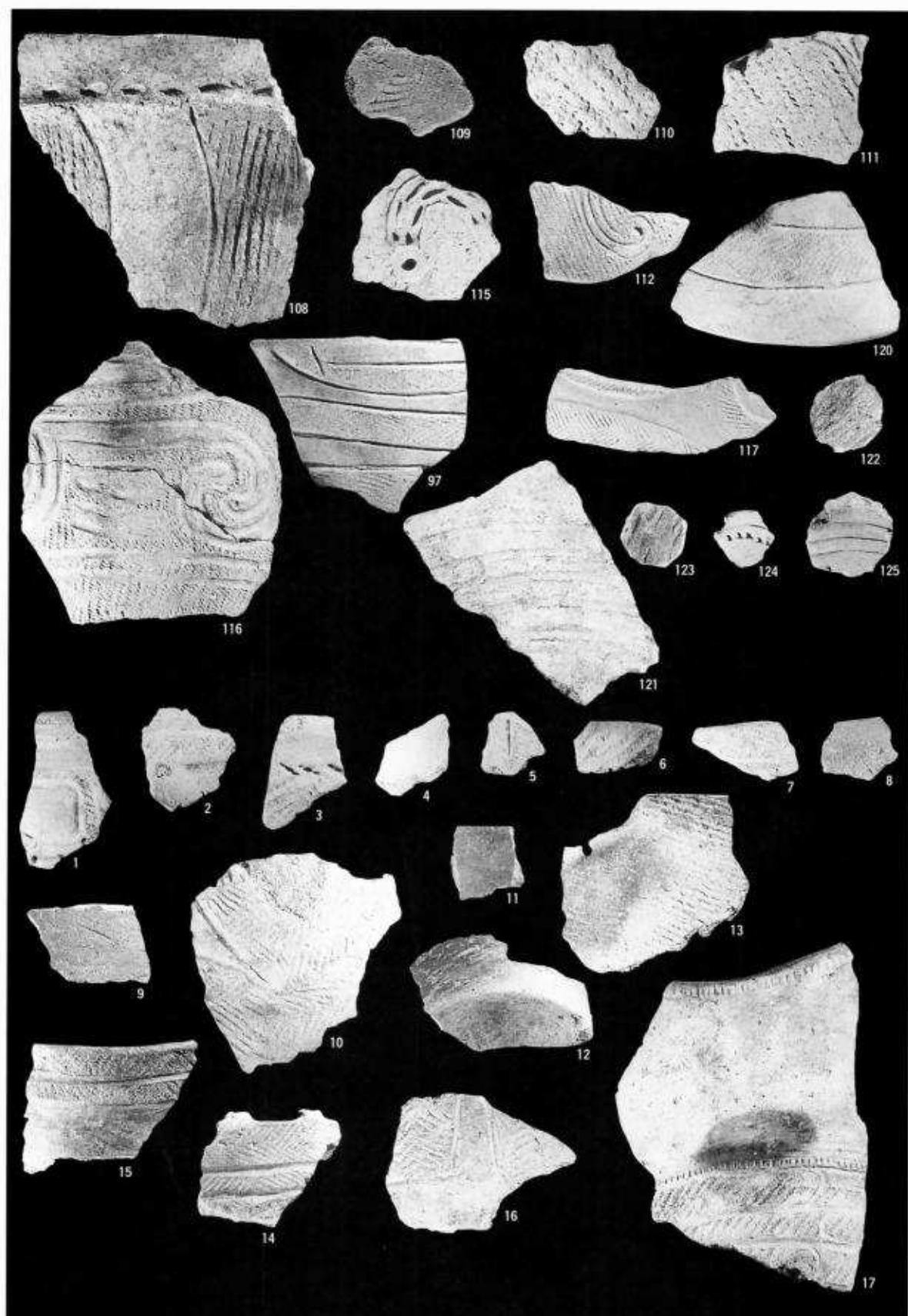
写真図版12 陸前高田市猿沢貝塚出土石器（上）、同市大陽台貝塚出土石器（下）



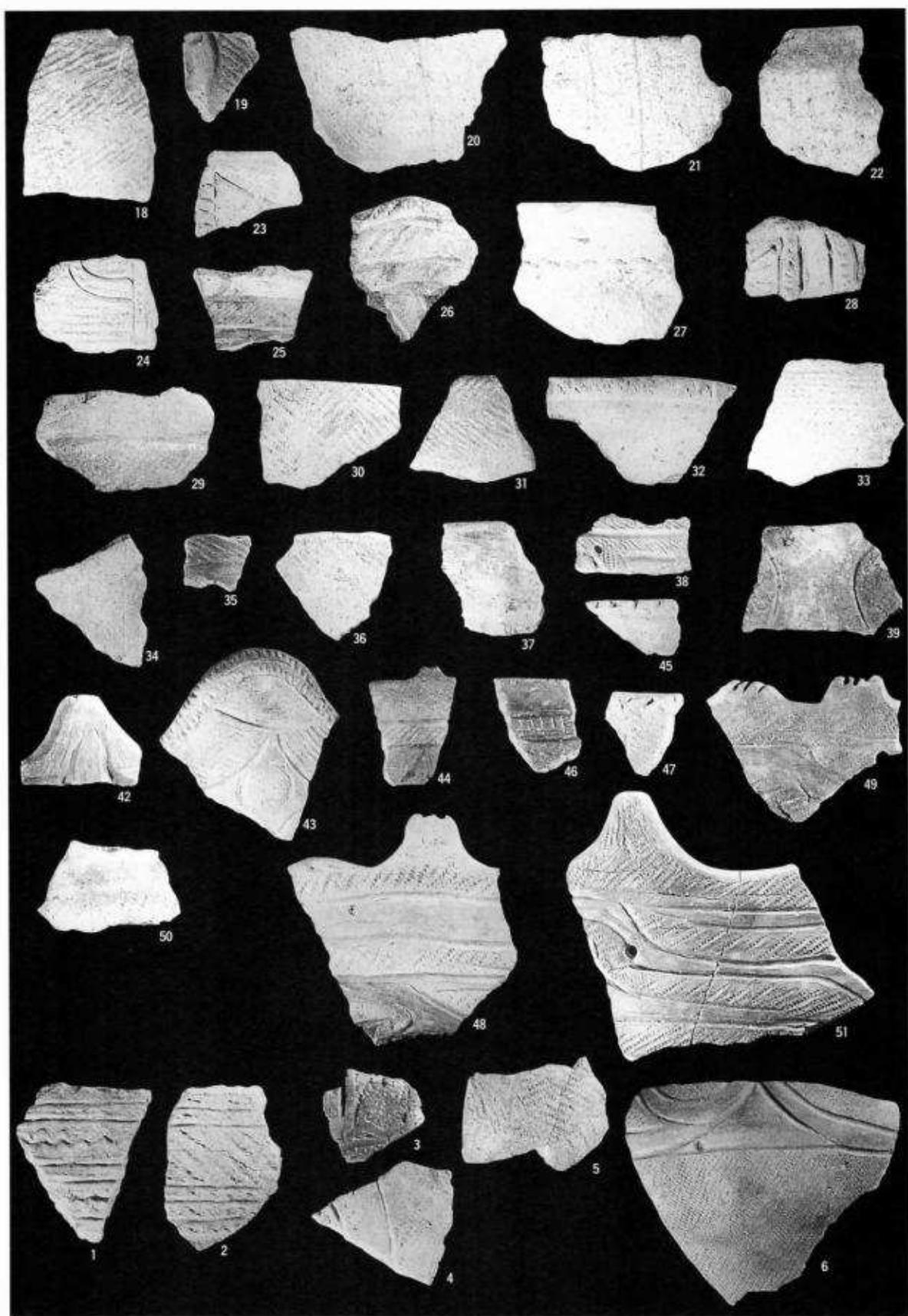
写真図版13 花泉町高倉貝塚出土土器 (1)



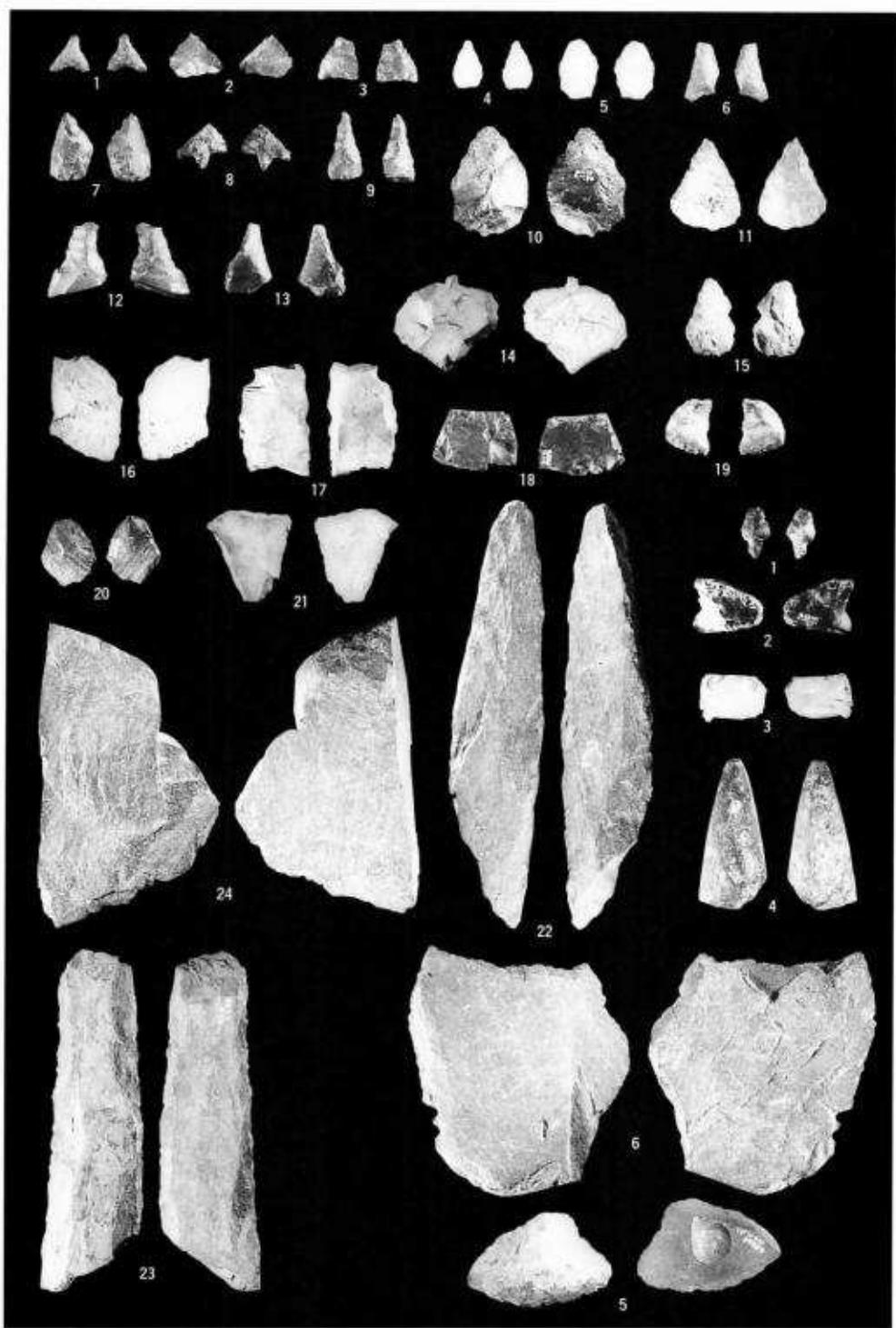
写真図版14 花泉町高倉貝塚出土土器（2）



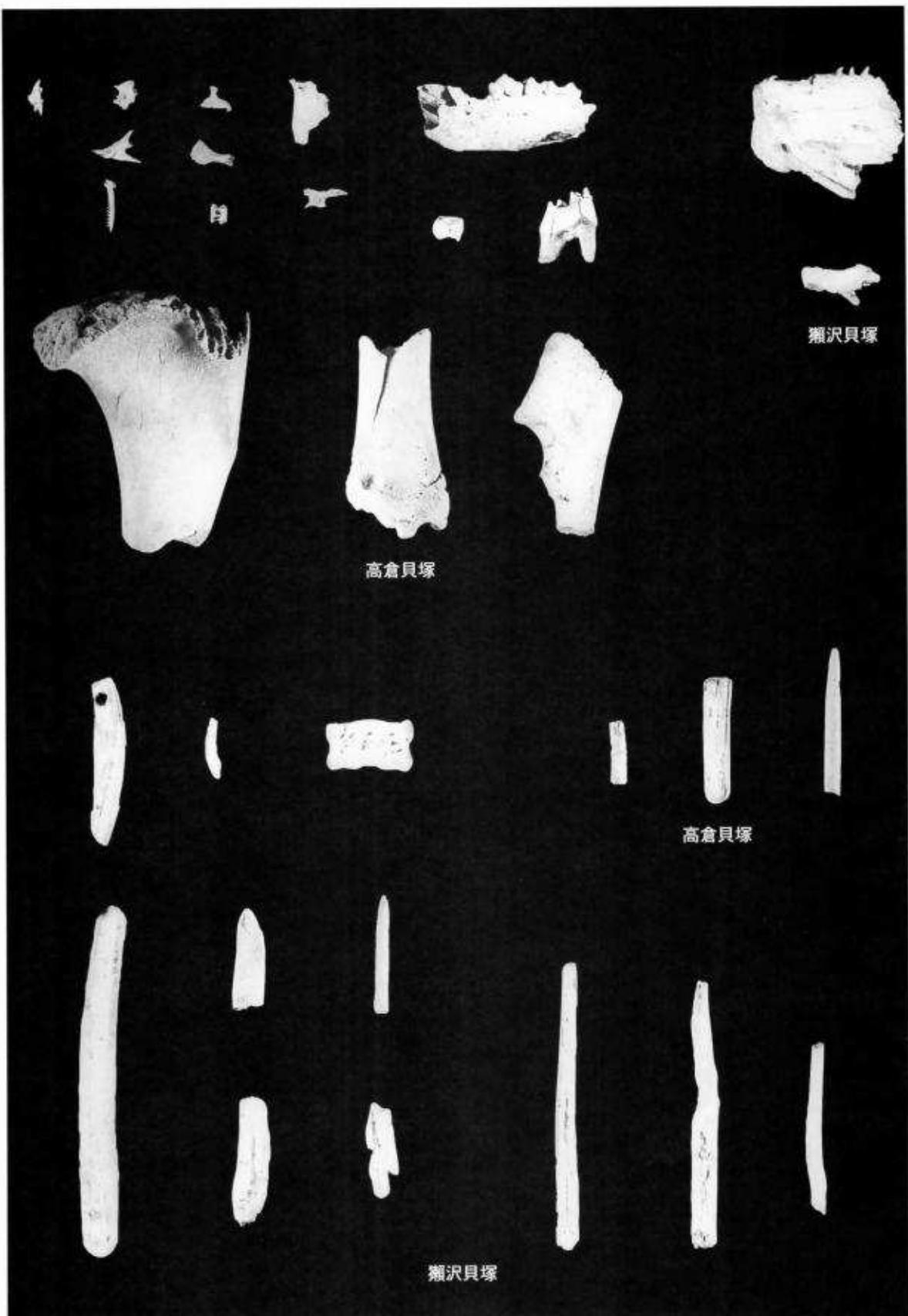
写真図版15 花泉町高倉貝塚出土土器（3）・土製品、同町白浜貝塚出土土器



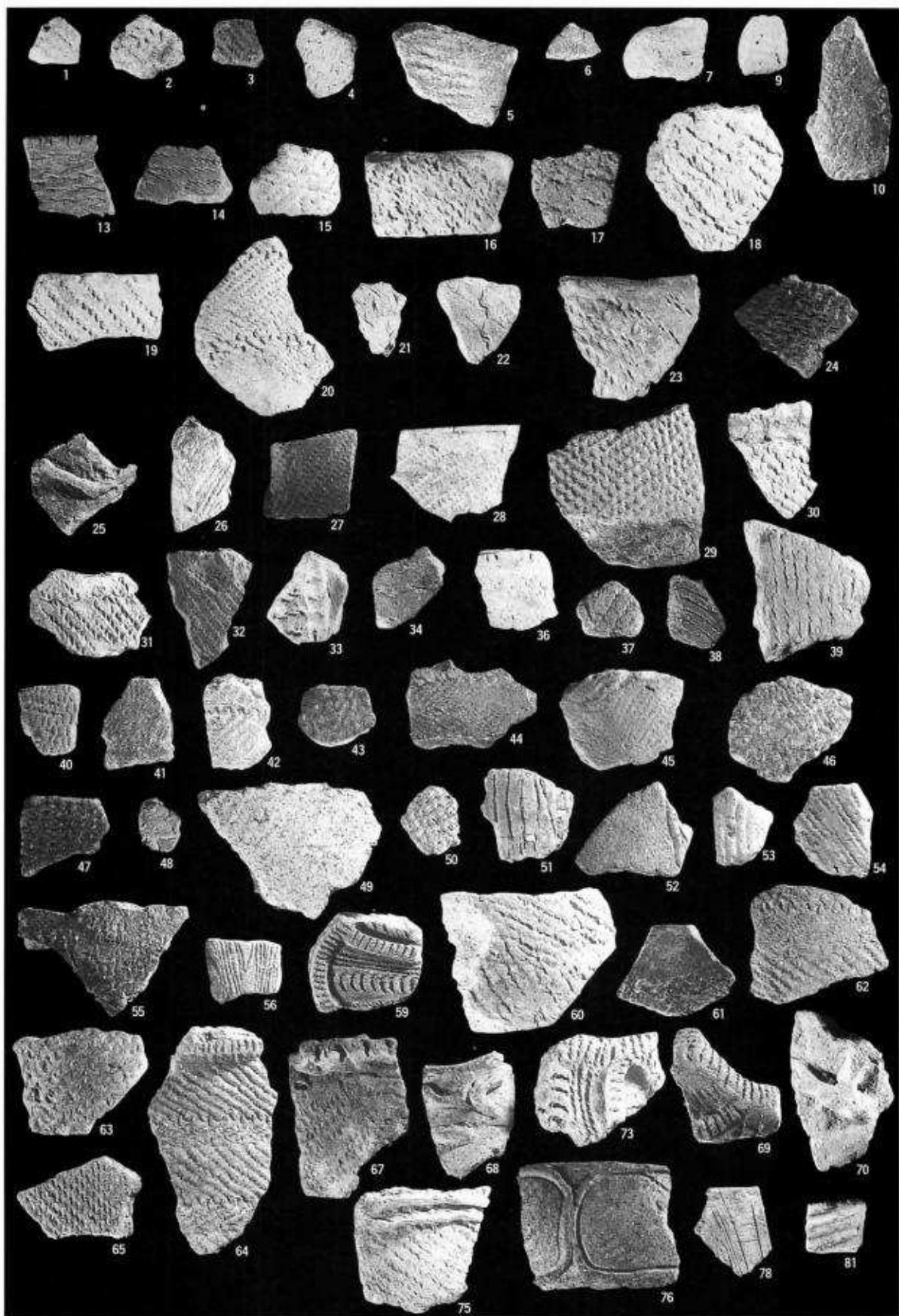
写真図版16 花泉町白浜貝塚出土土器（2）（上）、同町石崎貝塚出土土器（下）



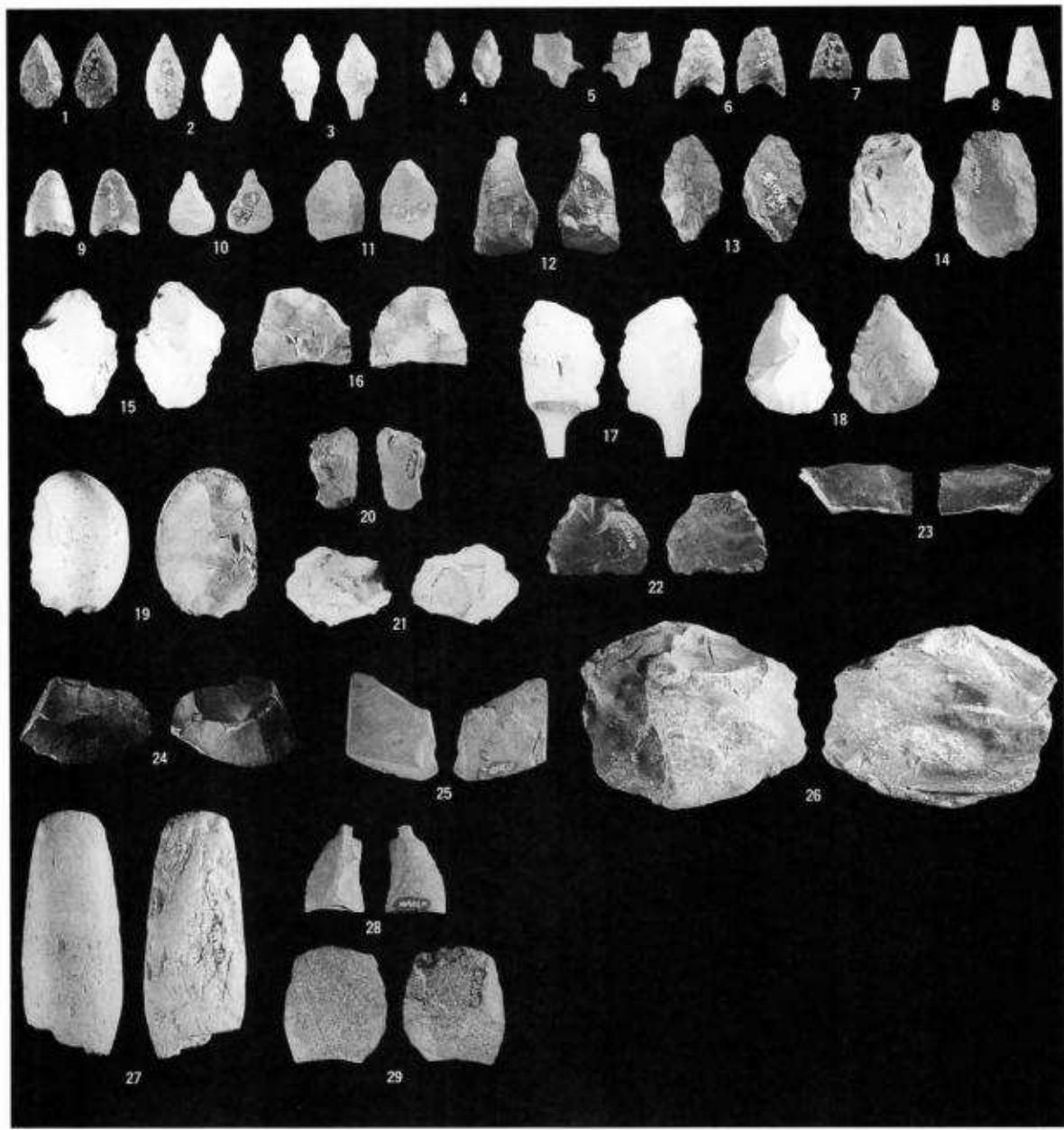
写真図版17 花泉町高倉貝塚出土石器、同町白浜貝塚出土石器（右下）



写真図版18 動物遺存体・骨角器類



写真図版19 普代村堀内机遺跡出土土器



写真図版20 普代村堀内遺跡出土石器

文 献 一 覧

No.	著 者	刊行年	論 文 名・書 名	雑 誌 名	巻 数	号 数	発 行 所
1	神田孝平	1887	楓洞昌吉報告	東京人類学会雑誌	2	11	東京人類学会
2	鈴村孝三郎	1893	岩手縣(下)古墳及石器時代の遺跡	東京人類学会雑誌	9	91	東京人類学会
3	鳥羽源藏	1894	陸前國氣仙郡ノ石器時代遺跡	東京人類学会雑誌	12	129	東京人類学会
4	辻藤金太郎	1897	岩手縣下石器土器出所地名	考古学会雑誌	10	429	考古学会
5	田中正太郎・林若吉	1897	日本石器時代人民遺物発見地名表 第1版				東京帝國大學
6	鳥羽源藏	1898	岩手縣氣仙郡に於ける石器期人種の遺跡	博物學雑誌	3	40	動物標本社
7	野中完一	1898	日本石器時代人民遺物発見地名表 第2版				東京帝國大學
8	八木慶三郎	1899	東北地方に於ける人類學的旅行	東京人類学会雑誌	15	163	東京人類学会
9	八木慶三郎	1899	貝塚窓見の發見	東京人類学会雑誌	15	163	東京人類学会
10	鳥羽源藏	1900	陸前國氣仙郡小友村発見の遺物に就て	東京人類学会雑誌	15	168	東京人類学会
11	野中完一	1901	日本石器時代人民遺物発見地名表 第3版				東京帝國大學
12	野中完一	1904	石器時代遺物発見地名表	東京人類学会雑誌	20	230	東京人類学会
13	坪井正五郎	1905	日本に於ける貝塚の數	東京人類学会雑誌	21	237	東京人類学会
14	柴田常惠	1906	東北地方踏査概要	東京人類学会雑誌	21	243	東京人類学会
15	鳥羽源藏	1910	気仙郡史 前住種族				
16	岸上謙吉	1911	Prehistoric Fishing in Japan	東京帝國大學農科大學紀要	2	7	東京帝國大學
17	中鶴吉兵衛	1912	先史遺物誌				
18	柴田常惠	1915	日本石器時代人民遺物発見地名表 第4版				東京帝國大學
19	嵯峨一郎	1917	気仙郡伊豫の介類	動物學雑誌	29	344	日本動物學會
20	松本彦七郎	1917	介塚の塚及廻に各二型あり	動物學雑誌	29	359	日本動物學會
21	松本彦七郎	1917	氣仙郡大骨	動物學雑誌	29	342	日本動物學會
22	松本彦七郎	1917	子の新石器時代鍬	動物學雑誌	29	342	日本動物學會
23	松本彦七郎	1917	櫛沢介塚の塚及廻	動物學雑誌	29	343	日本動物學會
24	松本彦七郎	1917	介塚の大の二型あり	動物學雑誌	29	344	日本動物學會
25	松本彦七郎	1917	気仙郡集落の人骨	動物學雑誌	29	344	日本動物學會
26	松本彦七郎	1917	櫛沢古人類は津雲人種か	動物學雑誌	29	345	日本動物學會
27	大野雪外	1918	骨器の形式分類	人類學雑誌	33	3	東京人類學會
28	笠井新也	1918	陸前國常見の石器時代墳墓に就て	考古學雑誌	9	65	考古學會
29	小金井良精	1918	日本石器時代人に上天瘤を残さる風習ありしことに就て	人類學雑誌	33	2	東京人類學會
30	松本彦七郎	1918	日本の新石器時代	現代之科學	6	2	現代之科學社
31	小金井良精	1919	日本石器時代人の歯牙を変形する風習に就いて	人類學雑誌	34	11, 12	東京人類學會
32	長谷部言人	1919	石器時代人の拔歯に就いて (1)	人類學雑誌	34	11, 12	東京人類學會
33	長谷部言人	1919	陸前國細道上ノ山賀塚の環状列石	人類學雑誌	34	5	東京人類學會
34	長谷部言人	1919	上都外切齒を有する貝塚頭蓋	人類學雑誌	34	8	東京人類學會
35	長谷部言人	1919	陸前國近城郡多賀城村大代橋本園貝塚	人類學雑誌	34	37	東京人類學會
36	長谷部言人	1919	石器時代住民と現代日本人	歷史地理	35	2	歷史地理學會
37	長谷部言人・鳥羽源藏	1919	陸前國氣仙郡木崎村繩津上ノ山貝塚の貝類	人類學雑誌	34	5	東京人類學會
38	長谷部言人・鳥羽源藏	1919	陸前國氣仙郡木崎村繩津日塚発見貝類 追加	人類學雑誌	34	8	東京人類學會
39	早坂一郎	1919	宮戸島史住民遺跡概報	現代之科學	7	1	現代之科學社
40	松本彦七郎	1919	宮戸島史及氣仙郡櫛沢介塚の土器等土器模様論	現代之科學	7	5, 6	現代之科學社
41	大串菊太郎	1920	津雲貝塚及石器時代遺跡に対する二三の私見	民族と歴史	3	4	
42	小金井良精	1920	日本石器時代の走き人骨に就て	人類學雑誌	35	11, 12	東京人類學會
43	松本彦七郎	1920	二三石器時代遺跡に於ける拔歯風習の有無及様式に就て (1)	人類學雑誌	35	3, 4	東京人類學會
44	松本彦七郎	1921	宮戸島史及氣仙郡櫛沢介塚の石器	現代之科學	9	2	現代之科學社
45	鳥羽源藏	1922	氣仙郡の海岸に古代人骨を掘る	考古學雑誌	13	1	考古學會
46	松本彦七郎	1922	二三石器時代遺跡に於ける拔歯風習の有無及様式に就て (2)	人類學雑誌	37	8	東京人類學會
47	小金井良精	1923	日本石器時代の埋葬状態	人類學雑誌	38	1	東京人類學會
48	長谷部言人	1923	ニユーカレドニヤ人の環状列石	人類學雑誌	38	4	東京人類學會
49	長谷部言人	1923	石器時代人の拔歯に就いて 第二	人類學雑誌	38	6	東京人類學會

No	著者	刊行年	論文名・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
50	小田島林郎	1924	新聞記事「氣仙の史跡踏査」	岩手日報			岩手日報
51	鳥羽源藏	1924	新聞記事「史前の日本を語る貝塚の遺物」	岩手日報			岩手日報
52	直良信夫	1924	日本石器時代の貝器	歴史地理	44	241	歴史地理学会
53	長谷部言人	1924	石器時代人に外縁骨盤の見らること	人類学雑誌	39	1	東京人類学会
54	長谷部言人	1925	陸前名取郡増田経坂出土鹿角製刀器具について	人類学雑誌	39	141	東京人類学会
55	大山柏	1925	岩手県に於ける石器時代の道路	人類学雑誌	40	12	東京人類学会
56	大山柏・八幡一郎	1925	岩手県南部石器時代遺跡調査旅行	人類学雑誌	40	10	東京人類学会
57	小金井良精	1925	岩手県に於ける石器時代の道路	人類学雑誌	40	12	東京人類学会
58	杉山寿栄男	1925	考古図集				考古学会
59	長谷部言人	1925	石器時代の横大洞貝塚を発掘して	考古学雑誌	15	12	考古学会
60	長谷部言人	1925	日本石器時代家火に就て	人類学雑誌	40	1	東京人類学会
61	長谷部言人	1925	石器時代の野猪に就て	人類学雑誌	40	2	東京人類学会
62	長谷部言人	1925	日本石器時代の家火に就いて(2)	人類学雑誌	40	3	東京人類学会
63	長谷部言人	1925	陸前気仙郡大船渡湾付近の石器時代人に外縁骨盤多し	人類学雑誌	40	9	東京人類学会
64	長谷部言人	1925	陸前大洞貝塚発掘調査所見	人類学雑誌	40	10	東京人類学会
65	長谷部言人	1925	骨角ヒ	人類学雑誌	40	11	東京人類学会
66	長谷部言人	1925	下北稚柳貝塚の猿下顎骨	人類学雑誌	40	12	東京人類学会
67	長谷部言人	1925	岩手県に於ける石器時代の道路	人類学雑誌	40	12	東京人類学会
68	宮本博人	1925	津蓋貝塚人の拔歯風習に就いて	人類学雑誌	40	5	東京人類学会
69	八幡一郎	1925	磐城国小川貝塚発見の骨角器	人類学雑誌	40	9	東京人類学会
70	八幡一郎	1925	岩手県に於ける石器時代の遺跡	人類学雑誌	40	12	東京人類学会
71	小田島林郎	1926	岩手考古図集				岩手県教育会江刺書部会
72	長谷部言人	1926	燕形鉗頭	人類学雑誌	41	3	東京人類学会
73	長谷部言人	1926	燕形鉗頭とキテ	人類学雑誌	41	7	東京人類学会
74	長谷部言人	1926	本輪西貝塚の鹿角製鉗頭	人類学雑誌	41	10	東京人類学会
75	松村原	1926	人類学上より觀なる日本民族	人類学雑誌	41	1	東京人類学会
76	長谷部言人	1927	石器時代の死産児埋葬	人類学雑誌	42	8	東京人類学会
77	著者不詳	1927	岩手県関係考古資料収集目録	東京帝室博物館年報	4		東京帝室博物館
78	中谷浩宇二郎・八幡一郎	1928	日本石器時代遺物発見地名表 第V版				東京帝國大学
79	松本彦七郎	1928	陸前国気仙郡の若干介塚の時代相沿式別	人類学雑誌	43	9	東京人類学会
80	柳田國男	1928	豆手帖から「古物保存」	雪国の春			図書院
81	著者不詳	1929	支那の史料に現れたる我が土代(6)		8		三田史学会
82	山内清男	1930	所謂亀ヶ岡式土器の分布と繩紋式土器の終末について	考古学	1	139	東京考古学会
83	小田島林郎	1931	先史時代より藤末に至る文化流入の経路と普及状態	南部史誌会誌	6		南部史誌会
84	山内清男	1932	日本遠古の文化	エルメン	1	4	図書院
85	長谷部言人	1933	骨角器復元	佐藤学雑誌	5	1	史前学会
86	大塚井	1934	日本石器時代陳設動物質資料	史前学雑誌	6	29	史前学会
87	田沢金吾	1935	貝塚	エルメン	4	477	図書院
88	水野孝昭	1936	岩手県下閉伊郡今村田ノ浜貝塚出土の骨器	獨學		6	立正大学
89	山内清男	1937	日本石器時代に於ける技術風習の系統	先史考古学	1	53	先史考古学会
90	橋口清之	1938	髪針考	上代文化	16	41	國學院大學考古学会
91	八幡一郎	1938	新修日本文化史体系 第1卷 原始文化				誠文堂新光社
92	八幡一郎	1938	先史時代の交易(中)	人類学先史学講座	3		雄山閣
93	甲野勇	1939	所謂洋袋の臼に就て	人類学雑誌	54	41	東京人類学会
94	酒詰仲男	1939	用語解説 大前貝塚	人類学先史学講座	11		雄山閣
95	内田文衛・三森定男	1939	先史時代の東部日本	人類学先史学講座	13		雄山閣
96	橋口清之	1939	日本先史時代人の身体若飾(上)	人類学先史学講座	12		雄山閣
97	橋口清之	1939	日本先史時代人の身体若飾(下)	人類学先史学講座	14		雄山閣
98	三宅宗悦	1940	日本石器時代の埋葬	人類学先史学講座	15		雄山閣
99	甲野勇	1941	燕形鉗頭難解	古代文化	12	5	日本古代文化学会
100	酒詰仲男	1941	貝塚	人類学雑誌	56	5	東京人類学会
101	鈴木尚	1941	下総金山貝塚発見の切痕ある人骨について	人類学雑誌	56	7	東京人類学会

%	著 者	刊行年	論 文 名・書名	雑 誌 名	卷数	号数	発 行 所
102	長谷部晋人	1941	石器時代遺跡出土品第二種	人類学雑誌	56	11	東京人類学会
103	江坂輝弥	1942	岩手県磐島貝塚出土の土製品	古代文化	13	2	日本古代文化学会
104	甲野勇	1942	日本石器時代產鉄針	古代文化	13	3	日本古代文化学会
105	直良信夫	1942	史前遺跡出土の鐵骨子-14	古代文化	12,13		日本古代文化学会
106	長谷部晋人	1942	日本石器時代の猪に就いて	人類学雑誌	57	1	東京人類学会
107	長谷部晋人	1942	石器時代のアナグマ	人類学雑誌	57	2	東京人類学会
108	長谷部晋人	1942	石器時代のタカラガヒ加工	人類学雑誌	57	9	東京人類学会
109	桑山龍基	1943	日本石器時代に於ける鹿角加工技術	民族学研究	1	6	日本民族学会
110	田辺義一	1943	日本石器時代の朱に就いて	人類学雑誌	58	453	東京人類学会
111	長谷部晋人	1943	安陽古墳出土家火葬残に就て	人類学雑誌	58	367	東京人類学会
112	長谷部晋人	1943	日本石器時代家火とシカホール	人類学雑誌	58	427	東京人類学会
113	酒井伸男	1948	貝塚の話				昭文書院
114	森木博	1948	大船渡湾奥貝塚発掘に依る中間報告	岩手史学研究	1		岩手史学会
115	江坂輝弥	1950	北上川流域最奥部貝塚の調査	貝塚	29		土壤会
116	江坂輝弥	1951	縄文式文化について(その6)	歴史評論	5	2	河出書房
117	小林行雄	1951	日本考古学概説				創元社
118	酒井伸男	1951	石器時代のアワビ類	人類学雑誌	62	12	日本人類学会
119	草間幾一・吉田義昭	1953	岩手県を主とする考古学提要				岩手県学校生活協同組合
120	曾原節雄	1953	氣仙貝塚紀行	大洞	2		岩手大学大洞史学会
121	千葉司男	1953	貝取貝塚調査報告	大洞	2		岩手大学大洞史学会
122	江坂輝弥	1954	日本石器時代の文化5	奥羽史談	5	3	奥羽史談会
123	中嶋隆	1954	宮古市附近櫛文層階文化に就いて	岩手史学研究	15	60	岩手史学会
124	中嶋隆	1954	岩手縣に於ける貝塚とその貯藏について	岩手史学研究	17		岩手史学会
125	東登	1955	気仙地方先史時代の遺跡	社教シリーズ	6		大船渡市教育委員会
126	越口清之	1955	鹿島考	國學院雑誌	56	2	國學院大學
127	吉田義昭	1955	注目土器	奥羽史談	6	1	奥羽史談会
128	東登	1956	陸前高田の大昔				陸前高田市教育委員会
129	東登	1956	気仙地方の先史時代遺跡の分布略報	古代		21,22	聖稲田大学
130	江坂輝弥	1956	考古だより(南崎町大洞貝塚)	貝塚	52		平井尚志
131	江坂輝弥	1956	大洞貝塚	社教シリーズ		7	大船渡市教育委員会
132	江坂輝弥	1956	岩手県大船渡市赤崎町大洞貝塚の調査	日本考古学協会第17回総会研究発表要旨		6	日本考古学協会
133	森木博	1956	考古だより(花巻巣鳥貝塚)	貝塚	59		平井尚志
134	西村正衛	1956	岩手県大船渡市清水及び長谷堂貝塚	日本考古学協会第17回総会研究発表要旨		6	日本考古学協会
135	吉田義昭	1956	大船渡市大洞貝塚の発掘	奥羽史談	6	4	奥羽史談会
136	吉田義昭	1956	岩手県開拓考古学文献目録	岩手県先史文化資料総覧目			吉田義昭
137	江坂輝弥	1957	岩手県大船渡市清水貝塚	日本考古学年報	5		日本考古学協会
138	及川千代松	1957	陸前高田市内に於ける先史時代道路貝塚現況案内				陸前高田道跡保存受講会
139	森木博	1957	考古だより(花巻巣鳥)	貝塚	68		平井尚志
140	西村正衛	1957	考古だより(鮫ノ浦貝塚)	貝塚	65		平井尚志
141	吉田義昭	1957	岩手県貝塚文化頃記	奥羽史談	22		奥羽史談会
142	吉田義昭	1957	岩手県貝塚文化頃記(1)	奥羽史談	23		奥羽史談会
143	東登	1958	氣仙穂文時代の骨角製陶器具考				陸前高田市教育委員会
144	江坂輝弥	1958	日本石器時代における骨角製陶針の研究	史学	31		三田史学会
145	江坂輝弥	1958	岩手県除前高田市門前貝塚	日本考古学年報	7		日本考古学協会
146	坂詰秀一	1958	縄文文化における甕棺葬の基礎的研究	立正大学文学部論叢	9		立正大学文学部
147	直良信夫	1958	花巻の人類遺物	科学読売	10	13	読売新聞社
148	西村正衛	1958	鮫之浦貝塚	社教シリーズ	11		大船渡市教育委員会
149	西村正衛	1958	岩手県大船渡市鮫之浦貝塚	日本考古学協会第21回総会研究発表要旨			日本考古学協会
150	西村正衛・菊地義次・金子昌昌	1958	岩手県大船渡市清水貝塚	古代	29,30		早稲田大学考古学会
151	森本謙七郎・直良信夫ほか	1958	考古だより(花巻金森遺跡)	貝塚	81		平井尚志
152	森本謙七郎・森一・丸井佳寿子	1958	陸中国西脇井郡花巻町金森茎見の解新紀末萬化石床 豪古人類遺跡出土の遺物乃至遺痕	自然科学と博物館	25	7,8	
153	酒井伸男	1959	日本貝塚地名表				土壤会

No	著者	刊行年	論文名・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
154	杉山莊平	1959	回転式鍔頭鍔	貝塚	84		平井尚志
155	直良信夫	1959	岩手県花巻町金森の化石類と人類遺物と考想される骨角器について	第四紀研究	1		日本第四紀学会
156	西村正衛	1959	内陸文化の藝術・繩文中期文化	世界考古学大系	1		平凡社
157	西村正衛	1959	岩手県大船渡市清水貝塚	日本考古学年報	8		日本考古学協会
158	西村正衛	1959	岩手県大船渡市長谷堂貝塚	日本考古学年報	8		日本考古学協会
159	吉田格	1959	満洲文化の展開・繩文後晚期文化	世界考古学大系	1		平凡社
160	吉田義昭	1959	岩手県考古学年譜	岩手県先史文化資料総覧Ⅱ			吉田義昭
161	江坂輝弥	1960	考古通報(大船渡市大洞貝塚)		100		平井尚志
162	草間俊一・吉田義昭	1960	岩手県花巻町鳥貝塚発掘報告	岩手大学学芸学部研究報告	15		岩手大学
163	吉田義昭	1960	門前貝塚・陵前高田市門前貝塚発掘調査報告				盛岡市中央公民館
164	青木松太郎	1961	下閉伊郡田野畠村の古代遺跡	奥羽史談	31		奥羽史談会
165	江坂輝弥	1961	土偶				校舎書房
166	江坂輝弥	1961	岩手県大船渡市大洞貝塚	日本考古学年報	9		日本考古学協会
167	大船渡市教育委員会	1961	大船渡市下船貝塚発掘報告				大船渡市教育委員会
168	草間俊一	1961	岩手県西磐井郡鳥貝塚	日本考古学年報	9		日本考古学協会
169	小岩末治	1960	岩手県史 I 上古編・上代編				岩手県
170	酒井伸男	1961	日本縄文石器時代食料把説				主婦会
171	吉田義昭	1961	大船渡市大洞貝塚の發掘	奥羽史談	6	4	奥羽史談会
172	著者不詳	1961	図版解説 土偶(岩手県除前高田市鰐沢貝塚出土)	東北考古学	2		東北考古学会
173	及川千代松	1962	道路を尋ねて	社教シリーズ	13		大船渡市教育委員会
174	草間俊一	1962	日本原始文化について 1	奥羽史談	33		奥羽史談会
175	草間俊一	1962	日本原始文化について 2	奥羽史談	34		奥羽史談会
176	西村正衛	1962	岩手県大船渡市大洞貝塚	日本考古学年報	11		日本考古学協会
177	松本信広	1962	東北の旅	定本郷田國男集月報	1		筑摩書房
178	吉田義昭・東登	1962	岩手県氣仙沼三陸村宮野貝塚発掘調査報告				三陸村
179	草間俊一	1963	種市村の歴史;種市町内諸遺跡の調査報告				種市町役場
180	並津備洋	1963	岩手県九戸郡川畠家遺跡	日本考古学年報	10		日本考古学協会
181	西村正衛	1963	岩手県大船渡市鰐之浦貝塚	日本考古学年報	10		日本考古学協会
182	草間俊一	1964	岩手県遺跡地名表(埋蔵文化財保護地一覧)				岩手県教育委員会
183	山内清男	1964	日本先史時代概説・参考図版153-163	日本原始美術	1		講談社
184	渡辺誠	1964	椎野氏旧藏品よりみた三陸地方の発達製陶具	立正考古	23		立正考古学会
185	金子浩昌	1965	貝塚と飲食資源	日本の考古学	2		河出書房
186	草間俊一	1965	岩手県の古代住居	奥羽史談	40		奥羽史談会
187	清水潤三	1965	岩手県大船渡市大洞貝塚	日本考古学年報	13		日本考古学協会
188	西村正衛	1965	裸身	日本の考古学	2		河出書房
189	林謙作	1965	縄文文化の発展と地域性・東北	日本の考古学	2		河出書房
190	江坂輝弥	1966	岩手県大船渡市下船貝塚	日本考古学年報	14		日本考古学協会
191	渡辺誠	1966	縄文時代における技術風習の研究	古代学	12	4	古代学議会
192	渡辺誠	1966	縄文文化時代における鉈針の研究	人類学雑誌	74	1	日本人類学会
193	渡辺誠	1966	猪牙製有孔尖頭器の2つの機能	物質文化	7		物質文化研究会
194	大塚和義	1967	縄文時代の要制: 離島形態による分析	史苑	27	3	
195	及川淳	1968	岩手県大洞貝塚・石器骨角器を中心として	考古学ジャーナル	18		ニューサイエンス社
196	金子浩昌	1968	鳥骨を材料とした刺突器	考古学ジャーナル	21		ニューサイエンス社
197	金子浩昌	1968	縄文時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について	仙台清周辺の考古学的研究			宝文堂
198	金子浩昌	1968	縄文文化後期初期における釣針製作の一方法	物質文化	12		物質文化研究会
199	吉田義昭	1968	岩手県下閉伊郡山田町田ノ浜貝塚	日本考古学年報	16		日本考古学協会
200	赤沢威	1969	縄文貝塚竜魚類の体長組成並びにその先史漁撲学的意義	人類学雑誌	77	4	日本人類学会
201	及川淳	1969	大船渡市の主なる貝塚				大船渡市立博物館
202	清野謙次	1969	日本貝塚の研究				岩波書店
203	橋本政助	1969	縄文中期における古代離原話の変遷	古代文化	21	3,4	古代文化協会
204	慶應義塾大学古代学研究室	1969	古代資料集成				慶應義塾大学
205	芝田清吾	1969	大・日本古代家畜史の研究				学術出版社

No	著者	刊行年	論文名・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
206	渡辺誠	1969	縄文墓頭話題について	古代文化	21	9.1	古代文化協会
207	江坂輝弘	1970	縄文時代における火の埋葬骨格	考古学ジャーナル	40		ニューサイエンス社
208	江坂輝弘・吉田義昭・小方保・森本利太郎	1970	宮野貝塚遺跡調査概報―岩手県氣仙郡三陸町				三陸町教育委員会
209	三陸町教育委員会	1970	科学施設と宮野貝塚				三陸町教育委員会
210	陸前高田市立博物館	1970	考古資料(其の一)				陸前高田市立博物館
211	及川南・瀧藤勝博・及川千代松・金子浩昌	1971	岩手県陸前高田市牧田貝塚発掘調査概要				陸前高田市教育委員会
212	大船渡市立博物館	1971	考古資料集				大船渡市立博物館
213	小野寺信吾	1971	岩手県藤沢町の沖積層から産出した貝殻の14C年代	地球科学	25		地学团体研究会
214	草間俊一	1971	岩手県九戸郡広内遺跡	日本考古学年報	19		日本考古学会
215	草間俊一・金子浩昌	1971	貝島貝塚				岩手県文化財愛護協会
216	松浦省一郎	1971	縄文時代の大規模について(1~5)	船橋考古	1		船橋考古学会
217	山内清男ほか	1971	山内清男先生と語る	北奥古代文化	3		北奥古代文化研究会
218	及川南・小野寺信吾・瀧藤勝博	1972	岩手県陸前高田市室の戸貝塚発掘調査概要				陸前高田市教育委員会
219	斎藤和夫	1972	先史通路における釣針研究(2)―岩手県内貝塚出土釣針(単式)の形態学的研究	奥羽史談	38.59		奥羽史談会
220	草間俊一・及川南・高橋信雄	1972	岩手県大船渡市長谷家貝塚―昭和46年度緊急調査報告				岩手県教育委員会
221	渡辺誠	1973	縄文時代の漁業				岸山閣
222	及川南・瀧藤勝博・金子浩昌	1974	岩手県陸前高田市門前貝塚				陸前高田市教育委員会
223	斎藤和夫	1974	先史通路における釣針研究(3)―岩手県内貝塚出土釣針(単式)の形態学的研究	奥羽史談	63		奥羽史談会
224	草間俊一・玉川一郎・斎藤和夫	1974	崎山井天遺跡				大船町教育委員会
225	草間俊一・玉川一郎・斎藤和夫	1974	崎山井天遺跡	日本考古学年報	26		日本考古学会
226	渡辺誠	1974	縄文時代要領の基礎的研究	考古学論叢	2		
227	加藤晋平	1975	岩手県花泉化石床出土の人類遺品	月刊文化財	138		第一法規
228	加藤晋平・鶴丸俊明	1976	花泉下金森遺跡				花泉町教育委員会
229	工藤信一	1976	縄文時代における釣り針の再研究	ふれいく	3		ふれいく同人会
230	直真信夫	1976	釣針				法政大学出版局
231	林謙作	1976	大船渡市清水貝塚発掘調査報				岩手県教育委員会
232	伊東信雄	1977	山内博士東北縄文土器編年版の成立過程	考古学研究	24	3.4	考古学研究会
233	及川南・瀧藤勝博・金子浩昌・牛沢百合子	1977	藤沢貝塚―緊急発掘調査概報				陸前高田市教育委員会
234	林謙作	1977	清水遺跡	日本考古学年報	28		日本考古学会
235	林謙作	1977	宮野貝塚	日本考古学年報	28		日本考古学会
236	石井則孝ほか	1978	シンボジュウム縄文貝塚の謎				新人物往来社
237	江坂輝弘	1978	日本の貝塚研究100年	考古学ジャーナル	144		ニューサイエンス社
238	及川南	1978	大船渡市史土地質・考古編				大船渡市
239	及川南・瀧藤勝博・牛沢百合子	1978	大陽台貝塚				陸前高田市教育委員会
240	渡見雄	1978	鍛型釣針考	考古学雑誌	63	4	日本考古学会
241	遠藤美子・瀧藤萬里	1979	東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型錄				東京大学総合資料館
242	大船渡市教育委員会	1979	長谷堂中井貝塚緊急発掘調査概報				大船渡市教育委員会
243	小田野哲蔵・稻谷常正	1979	吉古市大付遺跡				宮古市教育委員会
244	斎藤強一・ほか	1979	岩手県花泉町花泉遺跡の香角器特に佐々木標本から発見されたソケットについて	日本第四紀学会講演要旨集	8		日本第四紀学会
245	工藤翠樹	1979	研究史日本人種論				吉川弘文館
246	佐藤典邦	1979	岩手県大洞貝塚及び下船渡貝塚採集の骨角器	透光器	12		みちのく考古学研究会
247	相原康二	1980	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(東北道)	岩手県文化財調査報告書	95		岩手県教育委員会
248	安孫子昭二	1980	コブ付土器様式から龜ヶ土器様式への変遷過程	考古風土記	5		鉢木克彦
249	胆沢町	1980	胆沢町史第1巻原始・古代編				胆沢町史刊行会
250	今橋浩一	1980	オモゴタノハ製貝輪の特徴について	古代探査	1		早稲田大学
251	牛沢百合子	1980	縄文貝塚研究史序説	季刊どるめん	24.25		
252	大船渡市教育委員会	1980	先跡頃の浦貝塚・史跡下船渡貝塚保存管理計画書				大船渡市教育委員会
253	金子浩昌	1980	結婚の変遷	歴史公論	54		岸山閣
254	小井川和夫	1980	宮戸島古墳貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器	宮教史学	7		宮城教育大学史学会
255	林謙作	1980	宮野貝塚	日本考古学年報	31		日本考古学会
256	林謙作・山口祐・直々美里・平本嘉助	1980	青音に石器の嵌入を見る宮野貝塚人骨	人類学雑誌	88	2	日本人類学会
257	福田友之	1980	亀ヶ岡文化研究略史	考古風土記	5		鈴木克彦

No	著者名	刊行年	論文名・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
258	藤村東男	1980	大河語式設定に関する二、三の問題	考古集土記	5		鎌本克彦
259	岩手県埋蔵文化財センター	1981	考古遺物資料集 第2集				岩手県埋蔵文化財センター
260	童子浩昌	1981	復元縄文のくらし	アーティ	96		平凡社
261	木下忠	1981	概要 古代の出産習俗				雄山閣
262	佐藤正彦	1981	縄文時代の貝塚				陸前高田市立博物館
263	高橋信雄・小田野哲恵・鶴谷常正	1981	越後考古学の先達(岩手県)	考古学ジャーナル	194		ニューサイエンス社
264	田村忠博ほか	1981	宮古市史(通業・交易編)				宮古市史編纂室
265	百々幸雄・山口敏	1981	古人類研究の事例(東北・北海道)	考古学ジャーナル	197		ニューサイエンス社
266	林謙作	1981	縄文時代の土器	土器大成	4		講談社
267	林謙作・藤浦耳彦	1981	主要遺跡・図版解説	縄文土器大成	4		講談社
268	林謙作・山口敏・百々幸雄・平木嘉助	1981	1980年度発掘の岩手県宮野貝塚出土人骨	人類学雑誌	89	2	日本人類学会
269	林謙作・山口敏・百々幸雄・平木嘉助	1981	宮野貝塚Ⅱ・C地区調査概要				宮野貝塚調査団
270	赤沢威	1982	先史学資料のデータベース作成				東京大学総合資料館
271	安孫子昭二	1982	アスファルト	縄文文化の研究	8		雄山閣
272	岸沢長介	1982	考古学資料図録				東北大字文学部
273	高橋信雄・小田野哲恵・鶴谷常正	1982	岩手の土器				岩手県立博物館
274	春成秀爾	1982	縄文社会論	縄文文化の研究	8		雄山閣
275	赤沢威	1983	採集狩猟民の考古学:その生態学的アプローチ				海鳴社
276	江坂輝弥	1983	化石の知識 貝塚の真	考古学シリーズ	9		東京美術
277	及川潤	1983	気仙地方の縄文貝塚	陸前高田市郷土資料	2		陸前高田市郷土史研究会
278	金子浩昌	1983	貝塚対象と技術	縄文文化の研究	2		雄山閣
279	鶴谷常正	1983	岩手県における縄文時代前期土器群の成立	岩手県立博物館研究報告	1		岩手県立博物館
280	後藤明	1983	釣針	縄文文化の研究	7		雄山閣
281	武田将男ほか	1983	宮古市遺跡分布調査報告書 I				宮古市教育委員会
282	馬旦顕一	1983	開墾式回転説	縄文文化の研究	7		雄山閣
283	山口敏	1983	岩手県花泉町磐島(具鳥)貝塚出土縄文時代人骨の体形体格について	国立科学博物館専報	16		国立科学博物館
284	鶴谷誠	1983	縄文時代の亮棺	考古学ジャーナル	208		ニューサイエンス社
285	及川潤	1984	岩手の貝塚北と南	馬羽史談	76		馬羽史談会
286	大船渡市教育委員会	1984	史跡めぐり(下船渡貝塚)	わらびで	19		岩手県立埋蔵文化財センター
287	小田野哲恵・川村和子	1984	岸上謙吉:日本先史時代の漁撈(I)	岩手県立博物館研究報告	2		岩手県立博物館
288	小田野哲恵・高橋信雄・鶴谷常正	1984	岩手県野田村・根井貝塚の調査	考古学ジャーナル	231		ニューサイエンス社
289	金子浩昌	1984	貝塚歯骨の知識人と動物とのかかわり	考古学シリーズ	10		東京美術
290	佐々木和久	1984	久慈市の大連光禪土偶と城崎御玉塚の工所址	九戸文化	1		九戸文化研究会
291	高橋信雄・小田野哲恵・鶴谷常正	1984	縄文の風景				岩手県立博物館
292	山口敏	1984	岩手県花泉町磐島(具鳥)貝塚出土縄文時代人骨の体形体格	人類学雑誌	92	2	日本人類学会
293	岩手県埋蔵文化財センター	1985	岩手の道路				岩手県埋蔵文化財センター
294	岩手県埋蔵文化財センター	1985	考古遺物資料集 第6集				岩手県埋蔵文化財センター
295	及川潤	1985	田野野村史 I				田野野村
296	大船渡市教育委員会	1985	史跡めぐり(朝ノ浦貝塚)	わらびで	27		岩手県立埋蔵文化財センター
297	小田野哲恵・川村和子	1985	岸上謙吉:日本先史時代の漁撈(2)	岩手県立博物館研究報告	3		岩手県立博物館
298	鶴谷常正	1985	1920年代の文化財保護運動—岩手県における史跡指定をめぐって	岩手県立博物館研究報告	3		岩手県立博物館
299	森藤邦雄	1985	岩手県九戸郡田村出土の硬玉製品二例	九戸文化	3		九戸文化研究会
300	佐藤正彦・瀬生琢磨・佐々木敬朗・石田篤・西本豊弘・吉田功	1985	中沢貝塚発掘調査概報 I				陸前高田市教育委員会
301	佐藤正彦・佐々木敬朗	1985	貝塚貝塚発掘調査概報				陸前高田市教育委員会
302	高橋富雄 編	1985	角川日本地名大辞典 I 岩手県				角川書店
303	武田将男	1985	金糸韁跡				宮古市教育委員会
304	春成秀爾	1985	鉛と蜜—直鉛剝離の研究	国立磐梯民俗博物館研究報告	7		国立歴史民俗博物館
305	藤村東男	1985	岩手県大湊貝塚	探訪縄文の遺跡・東日本編			柏書房
306	南代民義・千葉啓義	1985	大戸遺跡名録調査報告書				久慈市教育委員会
307	石川長喜・鶴見洋一	1986	五戸 I 遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋文センター	97		岩手県文化振興事業団
308	岩手県教育委員会	1986	岩手県埋蔵文化財収載地一覧				岩手県教育委員会

No	著者	刊行年	論文名・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
309	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986	考古遺物資料集 第7集				岩手県文化振興事業団
310	岩手県立博物館	1986	岩手の貝塚				岩手県立博物館
311	岩手県立博物館	1986	根井貝塚	わらびて	28		岩手県立埋蔵文化財センター
312	岩手県立博物館	1986	岩手の貝塚展の開催からー中島古民衝とその周辺	わらびて	31		岩手県立埋蔵文化財センター
313	上野猛	1986	中谷地・高田遺跡報告書				宮古市教育委員会
314	金子浩昌・忍沢成規	1986	骨角器の研究 縦文編2				慶友社
315	金野良一	1986	出土品を語る・網ノ浦貝塚貝層断面	いわて文化財	96		岩手県文化財愛護協会
316	熊谷常正	1986	出土品を語る・燕形鉈頭	いわて文化財	95		岩手県文化財愛護協会
317	佐藤正彦	1986	岩手県中沢貝塚	日本考古学年報	36		日本考古学協会
318	佐藤正彦・喜生琢磨・喜々木義明・吉田功	1986	中沢貝塚発掘調査概報2				陸前高田市教育委員会
319	茂原信生	1986	長谷部宮大博士收集大科動物資料カタログ				東京大学総合資料館
320	新田康夫	1986	下閉伊郡代村の遺跡分布序論	九戸文化	4		九戸文化研究会
321	林謙作	1986	亀ヶ岡と逸賀川	日本考古学	5		岩波書店
322	及川海・金子浩昌・丹羽百合子ほか	1987	岩手県大船渡市船の浦貝塚	大船渡市立博物館調査研究報告			大船渡市立博物館
323	鍛田祐二	1987	青古市磯崎製糸森貝塚出土の資料ー自然遺物及び骨角器を中心として	宮古地方史研究	4		宮古地方史研究会
324	鶴谷常正・高橋信雄・小田野哲惠	1987	岩手県野田村根井貝塚発掘調査報告書	岩手県立博物館調査研究報告	3		岩手県立博物館
325	佐藤正彦・喜生琢磨・喜々木義	1987	中沢貝塚発掘調査概報3				陸前高田市教育委員会
326	高橋憲太郎	1987	崎山遺跡群I				宮古市教育委員会
327	立石栄徳	1987	漁村の考古学ーさかなをとる				漁市博物館
328	花巻町教育委員会	1987	史跡めぐり(貝鳥貝塚)	わらびて	32		岩手県立埋蔵文化財センター
329	面代民義・千葉啓藏	1987	大尻遺跡発掘調査報告書				久慈市教育委員会
330	陸前高田市教育委員会	1987	史跡めぐり(中沢貝塚)	わらびて	33		岩手県立埋蔵文化財センター
331	喜生琢磨・佐藤正彦・喜々木義	1988	中沢貝塚発掘調査概報4				陸前高田市教育委員会
332	国立科学博物館	1988	日本人はどこから来たか:日本人の起源展				国立科学博物館
333	高橋憲太郎	1988	崎山遺跡群II				宮古市教育委員会
334	高橋憲太郎	1990	崎山遺跡群IV				宮古市教育委員会
335	高橋憲太郎	1988	宮古地方の貝塚について	いわて文化財	107		岩手県文化財愛護協会
336	ハナイズミモリウシ研究会	1988	大古の花束				地域文化研究会
337	三浦謙一・佐藤嘉弘	1988	平沢I遺跡発掘調査報告書				岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
338	飯塚博和	1989	『亀ヶ岡式精製土器の文様帯を示す複型印』覚書	土曜考古	13		土曜考古学会
339	佐々木嘉直	1989	源流遺跡発掘調査報告書				岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
340	佐藤正彦	1989	国指定史跡・中沢貝塚	いわて文化財	114		岩手県文化財愛護協会
341	高橋憲太郎	1989	崎山遺跡群III				宮古市教育委員会
342	高橋与右エ門・酒井宗季	1989	夏本遺跡発掘調査報告書				岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
343	花石公夫・佐々木篤	1989	大槌町内遺跡分布調査報告書1				大槌町教育委員会
344	及川海	1990	三陸町史第1巻自然・考古編				三陸町
345	藤田祐二・森谷義信・高橋憲太郎	1990	黒ヶ崎山貝塚				宮古市教育委員会
346	金野良一	1990	どうじや森遺跡	いわて文化財	120		岩手県文化財愛護協会
347	佐々木輝	1990	大槌町内遺跡分布調査報告書2				大槌町教育委員会
348	高橋憲太郎・鍛田祐二	1990	磯島原山遺跡昭和63年度発掘調査報告書				宮古市教育委員会
349	千葉啓藏	1990	久慈市内遺跡詳細分布調査報告書1				久慈市教育委員会
350	千葉啓藏	1990	豊堤沢遺跡発掘調査現地説明会資料				久慈市教育委員会
351	森薗政南 輯	1990	日本歴史地名大系3 岩手県の地名				平凡社
352	山口敏	1990	岩手県花泉町蝦島(貝鳥)貝塚出土縦文人骨の手骨	国立科学博物館研究報告D類	16		国立科学博物館
353	小田野哲恵・高橋義介ほか	1991	上村貝塚発掘調査報告				岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
354	金野良一	1991	気仙の遺跡ー大船渡市・三陸町の各遺跡の出土品				大船渡市立博物館
355	佐藤正彦	1991	門前貝塚発掘調査概報				陸前高田市教育委員会
356	佐藤正彦	1991	門前貝塚	いわて文化財	121		岩手県文化財愛護協会
357	佐藤正彦	1991	陸前高田市門前貝塚	第6回岩手考古学会研究大会発表資料			岩手考古学会
358	須藤隆	1991	東北地方における縦文時代貝塚研究	国立歴史民族博物館研究報告	29		国立歴史民族博物館
359	高橋憲太郎・鍛田祐二・到裕豊	1991	崎山遺跡群V				宮古市教育委員会
360	田頭康之	1991	岩泉町内遺跡分布調査報告書上(小川・安家地区)				岩泉町教育委員会

No.	著者	発行年	論文集・書名	雑誌名	巻数	号数	発行所
361	千葉裕哉	1991	久慈市二子貝塚	第6回岩手考古学会研究大会発表資料			岩手考古学会
362	三留孝	1991	釜石市埋蔵文化財分布調査報告書				釜石市教育委員会
363	阿部豊	1992	黒森町土遺跡				宮古市教育委員会
364	金子浩昌	1992	日本考古学における動物遺存体研究史―動物との関わりに見る日本列島の文化形成	国立歴史民族博物館研究報告	42		国立歴史民族博物館
365	鎌田祐二	1992	大村遺跡				宮古市教育委員会
366	鎌田祐二	1992	金沢Ⅰ遺跡・大村遺跡				宮古市教育委員会
367	帝華邦雄	1992	野田村誌				野田村
368	佐藤正彦	1992	門前貝塚				陸前高田市教育委員会
369	須藤隆	1992	東北地方における晩期縄文土器の成立過程	東北文化論のための先史学 歴史学論集			加藤先生謹賀記念会
370	高橋憲太郎	1992	相越Ⅰ遺跡・茅野Ⅱ遺跡				宮古市教育委員会
371	高橋憲太郎	1992	岐阜遺跡群Ⅳ				宮古市教育委員会
372	田舎康之	1992	岩泉町内遺跡分布調査報告書2(小本・有若地区)				岩泉町教育委員会
373	千葉啓哉	1992	岩手県二子貝塚	季刊考古学	41		雄山閣
374	渡辺誠	1992	岩手県宮古市大村貝塚のセミ形骨製品	考古学ジャーナル	351		ニューサイエンス社
375	渡辺誠	1992	岩手県宮古市大村貝塚のセミ形骨製品	史報	3		
376	岩手県立博物館	1993	じょうもん発信				岩手県文化振興事業団
377	岩手県立博物館	1993	亀・岡文化の北と南				岩手県文化振興事業団
378	遠藤勝博・福谷英男・ 佐藤正彦	1994	陸前高田市史・考古編				陸前高田市
379	及川清	1993	三陸の貝塚研究を考える	第10回岩手考古学会研究大会発表資料			岩手考古学会
380	須藤隆・津島知弘	1993	亀・岡文化終末の研究	考古学ジャーナル	368		ニューサイエンス社
381	高橋憲太郎	1993	崎山遺跡群Ⅲ				宮古市教育委員会
382	高橋憲太郎	1993	岩手県宮古市崎山貝塚	考古学ジャーナル	364		ニューサイエンス社
383	高橋憲太郎	1993	宮古市崎山貝塚	第10回岩手考古学会研究大会発表資料			岩手考古学会
384	千葉啓哉	1993	二子貝塚				久慈市教育委員会
385	大竹憲治	1994	四足鏡について	考古学ジャーナル	383		ニューサイエンス社
386	小田野哲志	1994	大器式土器・大洞貝塚	縄文時代研究事典			東京堂出版
387	鎌田祐二	1994	三陸北部の骨角器	考古学ジャーナル	383		ニューサイエンス社
388	寺池繁一	1994	岩手県花巻町花泉遺跡出土の骨角器	岩手県埋蔵文化センター紀要	14		岩手県文化振興事業団埋蔵文化セ ンター
389	佐藤正彦ほか	1994	岩手県南部の骨角器	考古学ジャーナル	383		ニューサイエンス社
390	菅原修	1994	岩手町町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ(秋濱Ⅱ遺跡)	岩手町埋蔵報告書	2		岩手町教育委員会
391	高橋憲太郎	1994	岐阜遺跡群Ⅳ				宮古市教育委員会
392	岩手県立博物館	1995	岩手県立博物館収蔵資料目録 考古編(小田島根原コレクション)				岩手県文化振興事業団
393	大塚哲也・板井清彦・ 鈴木公義	1995	日本古代遺跡辞典				吉川弘文館
394	高橋憲太郎・三浦千祐	1995	宮古市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ				宮古市教育委員会
395	高橋憲太郎ほか	1995	崎山貝塚総合調査報告書				宮古市教育委員会
396	寺澤昇・高橋憲太郎・ 鎌田祐二・阿澄喜	1995	磯御殿山遺跡発掘調査報告書				宮古市教育委員会
397	渡辺誠	1995	東北地方における一王寺型(開窓式)墓葬式題につ いて				みちのく図書・菅原文也先生 遺稿記念論集
398	磯前繁一・赤沼威	1996	東京大学総合研究資源施設埋蔵文化時代土偶・その他 土製品カタログ				百葉社
399	熊谷賢	1996	三陸町宮野貝塚部土野獣の姿を残すイシシの頭骨 について	陸前高田市立博物館紀要	1		陸前高田市立博物館
400	国際科学博物館	1996	ピカントロゴス編				国際科学博物館
401	佐々木清文・高橋哲也・ 高橋英樹	1996	山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書				岩手県文化振興事業団埋蔵文化 財センター
402	佐々木務・村上拓	1996	牧田貝塚発掘調査報告書				岩手県文化振興事業団埋蔵文化 財センター
403	佐藤正彦	1996	名古屋氏取束の骨角製釣針	陸前高田市立博物館紀要	1		陸前高田市立博物館
404	田舎康之	1996	茂師貝塚				岩泉町教育委員会
405	東京国立博物館	1996	東京国立博物館園庭日録: 縄文遺物篇(土偶・土製 品)				中央公論美術出版社
406	東北歴史資料館	1996	東北地方の土偶				東北歴史資料館
407	藤村正男	1996	大洞式土器	日本土器年鑑			雄山閣
408	金野良一	1997	大洞貝塚-平成6・7・8年度調査認定充紙報	岩手考古学会研究大会発表 資料			岩手考古学会
409	金野良一	1997	岩手県大朝復古大洞貝塚発掘調査の概要	岩手考古学会研究大会発表 資料			岩手考古学会
410	藤原節代	1997	岩手の貝塚	東洋大学付属大理参考部発表論 文集			大理大学出版部
411	松本淳七郎・森一・丸井桂 寿子・尾崎博	1992	金森及び湯尻泥灰層の研究	国立科学博物館	16	2	国立科学博物館

岩手県文化財調査報告第102集

岩手の貝塚

— 岩手県内重要遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ —

発行年月日 平成10年3月31日

発 行 岩手県教育委員会
020-8570 盛岡市内丸10-1

編 集 岩手県教育委員会事務局文化課

印 刷 川鶴印刷株式会社
